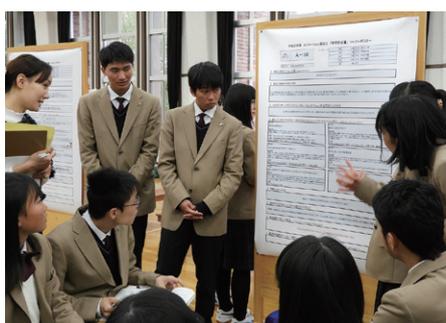
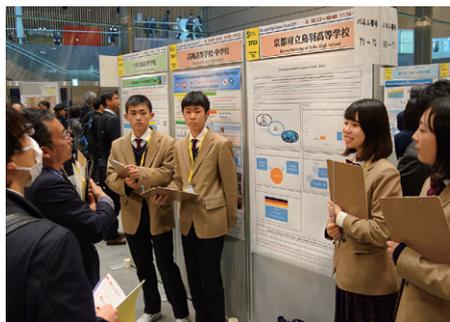


平成27年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究報告書
〈第5年次〉



令和2年3月



京都府立鳥羽高等学校

令和元年度 京都府立鳥羽高等学校 ～ S G Hのあゆみ～

研究開発単位Ⅰ：総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」



京都文化博物館の村野正景・西山剛学芸員による
「文化財=かちづくり」ワークショップ



福知山公立大学の杉岡秀紀准教授による
フィールドワーク&ワークショップ入門



京都光華女子大学の乾明紀准教授による
チーム・ビルディング等ワークショップ



京都府立図書館レファレンスにて文献調査の手法を学ぶ

総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」



大阪大学の進藤修一教授と柿澤寿信講師による
ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」



S G H事業研究発表会
「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション

総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」

鳥羽グローバル・サミット



SDGsの達成に向けて、海外の大学生と英語でディスカッションし、提言発表



海外の大学生とSDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」について協働研究

研究開発単位Ⅱ：グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目群

「グローバル・コミュニケーションⅠ」



NUS、復旦大学の大学生へ
京都の伝統・文化を英語で発信

「グローバル・コミュニケーションⅡ」



鳥羽高校生徒チームと海外の大学生が
英語ディベートの演習

「ソーシャル・インテリジェンス」



「イノベーション探究」との横断的な取組として
「京の智」のデータ分析を実施

「京都の風土・世界の風土」



国立民族学博物館におけるフィールドワーク

研究開発単位Ⅲ：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

海外インターンシップ（上海）



上海市嘉定一中を訪問し、京都の伝統・文化を英語で発表

海外インターンシップ（韓国）



国立中央博物館において韓国の歴史や伝統・文化を調査

海外インターンシップ（台湾）



台北市内で課題研究フィールドワーク

海外インターンシップ（シンガポール）



ホリバ・インスツルメンツにおける就業体験

研究開発単位Ⅳ：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育の研究開発

全国高校生フォーラム



アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生、全国のSGH校等の生徒と課題研究のポスター発表

SGU連携（立命館大学）



SGU立命館大学において、課題研究発表会に向けた宿泊研修を実施



京都府立鳥羽高等学校SGH概要

ソーシャル・イノベーションで挑むグローバル・リーダーの育成 ～育む5つの力 価値創造力・協働力・突破力・寛容力・寛容力・教養力～



課題研究『ソーシャル・イノベーション』

主題

総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等を通して、「京」の
智恵を再発見し、グローバル・イシューに挑む新しい価値を創造する。

領域



生徒の主體的な学び

イノベーション探究
ⅠⅡⅢの展開

多様で実践的な学び

グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目

- グローバル・コミュニケーション**
 - 英語で身につける戦略的スキルと多文化対話力（全学年）
 - ソーシャル・インテリジェンス**
 - ICTスキルと社会的リテラシーの向上
 - 京都の風土・世界の風土**
 - 多角的にとらえる文化の多様性と複合性
- 新しい視座と高い言語能力を確立する戦略
- 京都府海外サテライト校留学**
 - 英語圏に設置した中等教育機関での中期留学を単位認定
 - 海外インターンシップ**
 - 連携企業と短期雇用契約を結び海外事業所等でインターンシップ
 - 海外勤務者帰国子女特別入学選抜**
 - グローバルマインドをさらに伸ばす環境と実践

SGU

- ・京都大学
- ・京都工芸繊維大学
- ・大阪大学
- ・立命館大学

学術機関

- ・京都教育大学
- ・京都府立大学
- ・龍谷大学
- ・京都府立図書館
- ・京都府立総合資料館
- ・けいはんなオープンイノベーションセンター
- ・京都文化博物館

伝統・文化

- ・冷泉家時雨亭文庫
- ・裏千家
- ・未生流笹岡
- ・山ばな平八茶屋
- ・亀屋陸奥
- ・岡墨光堂

海外教育機関

- ・シンガポール国立大学
- ・タイ国立コンケン大学
- ・台南第一高級中学
- ・上海体育学院
- ・上海体育運動技術学院
- ・京都府海外サテライト校

企業・団体

- ・稲盛財団
- ・堀場製作所
- ・片岡製作所
- ・カルピス株式会社
- ・日本スポーツ振興センター
- ・国立スポーツ科学センター
- ・JICA関西

SGH

- ・京都府立嵯峨野高等学校
- ・名城大学附属高等学校

グローバルネットワーク京都校

- ・京都府立高等学校 7校

リベラルアーツ教育

「鳥羽の学びネットワーク」～学びの質・深まりを強化～

はじめに

京都府立鳥羽高等学校長 山埜 茂彦

平成 27 年度にスーパーグローバルハイスクールに指定していただいて以来、本校が 5 年間進めてまいりました研究開発がまもなく完了しようとしています。日本全国に多数存在する公立高等学校の一枚としてどのようなことができるのか、指導方法、教材、課題研究へのアプローチなどについて、大学・企業・文化団体・国際機関に多角的な視点から御助言と全面的な御協力をいただき、試行錯誤を重ねながら取り組んでまいりました。

大学・機関連携では、高校の学びの彼方にある学術研究を知る機会を、企業連携では、ビジネスの最前線と社会貢献への使命感を垣間見る機会を、伝統文化に関する学習では、歴史を生き抜き今もあざやかに息づく心情や知恵に触れる機会を与えていただきました。鳥羽の学びネットワークのすべてがかけがえのない教育財産であり、グローバル人材育成という大きなねらいを共有しつつ、学校教育を的確に補完し厚みをつけていただきました。

予期せぬことや、机上の計画が実施段階では通用しないこともありましたが、初めての試みであっても、そこには教員とともに海外に出向いたり、フィールドワークや課題研究に取り組んだ生徒がいました。各年度の活動に懸命に、また楽しみながら取り組み、そこから学び取る生徒たちがいたからこそ、やり遂げることができた研究開発でした。

価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力の 5 つの力を育む取組として、専門学科の設置、海外インターンシップの定着と単位認定、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」における課題研究の枠組み構築、京都府の中期留学事業の活用、遠隔授業を活用した探究の試行など、一定の成果も見られました。その一方で、最後の運営指導委員会では、常に大きな視野をもって、高い専門的観点から計画の進捗を見守り、御指導、御助言いただいてきた委員方から、総括の問いかけをいただきました。「探究学習の裾野は広がったが、深さはどうか?」「英語教育にまだ足りない部分は何か?」「異文化への exposure の今後の在り方は?」「企業連携をさらに進めるにはどのような連携があり得るか?」。

学校は、取組の浸透、指導力の高まり、学びの質、グローバルでイノベティブな人材育成、生徒と教員の変容といったことに、今後も敏感であり続け、不断に追究していく必要があります。また、新学習指導要領をふまえた高等学校教育が本格的に始動するにあたり、私たちは志を同じくする全国の高校や各種機関の方々と協働して人づくりに取り組み、発信していくことが求められています。

本事業の研究開発を機に誕生した専門学科グローバル科の第 1 期生も卒業の時期を迎えました。令和 2 年度入学生からは、普通科・専門学科ともに単位制を導入し、新たに文理融合した教育課程を編成し、特長ある科目を取り入れてまいります。5 年におよぶ研究開発の期間を生徒、教職員がともに可能性を追究し、様々なことに挑み、これまでにない視点、視界、視座を持てるようになりました。このような機会を与えていただきました文部科学省の皆様、管理機関の京都府教育委員会の皆様、そして、この間、支えていただき、御協力いただきましたすべての方々に厚く感謝申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

目次

令和元年度スーパーグローバルハイスクール研究報告書

1 令和元年度SGH研究開発完了報告書（別紙様式3）	1
2 鳥羽高校SGH事業の概要	
(1) 学校の概要.....	24
(2) 構想調書の概要.....	25
(3) 5ヵ年研究開発計画・評価計画.....	27
(4) 研究開発組織の概要	
ア 運営指導委員.....	30
イ 校内組織.....	30
(5) 校内組織図・各グループの実施内容一覧.....	31
(6) 年間事業計画.....	32
(7) 仮説を検証するための指標.....	35
(8) 教職員アンケート結果.....	36
3 具体的な活動内容	
(1) 研究開発単位Ⅰ：総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」	
ア 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」（総合的な探究の時間・1年・1単位）	37
イ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」（総合的な学習の時間・2年・1単位）	41
ウ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」（総合的な学習の時間・3年・1単位）	47
(2) 研究開発単位Ⅱ：グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目群	
ア 「グローバル・コミュニケーションⅠ」（学校設定科目・1年・3単位）	49
イ 「グローバル・コミュニケーションⅡ」（学校設定科目・2年・3単位）	55
ウ 「グローバル・コミュニケーションⅢ」（学校設定科目・3年・2単位）	61
エ 「ソーシャル・インテリジェンス」（学校設定科目・1年・2単位）	64
オ 「京都の風土・世界の風土」（学校設定科目・2年・2単位）	68
(3) 研究開発単位Ⅲ：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群	
ア 京都府海外サテライト校留学.....	72
イ 海外インターンシップ	
(ア) 韓国.....	73
(イ) 上海.....	75
(ウ) 台湾.....	77
(エ) 海外研修アンケート.....	79
ウ 海外の高校とのワークショップ	
(ア) 韓国・ハンヨン高校.....	82
(イ) 上海・上海市嘉定一中.....	83
(ウ) 台湾・台中市立台中工業高級中等學校.....	84
(エ) その他.....	85
エ 鳥羽グローバル・サミット.....	86
(4) 研究開発単位Ⅳ：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育の研究開発	
ア アクティブ・ラーニングを取り入れた公開授業・研究授業.....	91
イ 伝統・文化学習.....	92
ウ グローバル思考力コンテスト.....	93
エ SGU連携・大阪大学ワークショップ.....	94
オ SGU連携・立命館大学宿泊研修.....	97

カ	JICA関西ワークショップ	99
キ	高大社連携事業	101
(5) その他の取組		
ア 各種コンテスト参加		
	(ア) 日本政策金融公庫「高校生ビジネスプラン・グランプリ」	102
	(イ) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」	104
イ 外国語教育		
	(ア) 実用英語技能検定（英検）	106
	(イ) GTEC	107
(6) 成果の普及・広報		
	ア 成果の普及・広報の実施状況	108
	イ SGH事業研究発表会	109
	ウ SGH教職員研修	111
	専門学科「グローバル科」・学校設定教科「グローバル」	112
	遠隔教育の推進	114
	第1回SGH運営指導委員会	115
	第2回SGH運営指導委員会	119
	各研究グループの業務名・業務内容・担当者一覧	123
	SGH事業に関する生徒アンケート結果	127
	令和元年度教育課程	136

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 京都市下京区中堂寺命婦町1-10
管理機関名 京都府教育委員会
代表者名 教育長 橋本 幸三 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 京都府立鳥羽高等学校

学校長名 山埜 茂彦

3 研究開発名

ソーシャル・イノベーションで挑むグローバル・リーダーの育成

4 研究開発概要

令和元年度はSGH対象を全校生徒とし、764名から954名へと対象生徒を増やした。

平成30年度までのSGH海外研修の成果を踏まえ、学校設定教科「グローバル」における学校設定科目として「海外インターンシップ」を教育課程内に位置づけ、単位認定を行った。

SGHの取組を踏まえて開講した専門学科「グローバル科」を中心に、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とし、学校設定科目「ソーシャル・インテリジェンス」・「京都の風土・世界の風土」や、「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」との教科横断的な取組を推進した。

本校生とシンガポール国立大学、復旦大学(上海)、SGUである京都大学への留学生等による国際会議「鳥羽グローバル・サミット」を開催し、SDGsの達成に向けた提言を英語で行った。また、SGH指定期間終了後も事業の継続的な実施を可能にするという観点から、課題研究等、SGHでこれまで実践してきた取組を、ICTや遠隔教育システムを活用して実施するための研究を行った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	業務日程 (月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
グローバルネットワーク京都事業 ・グローバルネットワーク京都交流会	→											
府立高校生グローバルチャレンジ事業 ・説明会、オリエンテーション ・エディンバラ語学研修 ・オーストラリア語学研修		—		—	→	→						
府立高校海外サテライト校事業 ・オーストラリア留学											→	→
府立学校スマートスクール推進事業	→											
学習者用タブレット端末実証研究事業	→											
S G H推進委員会	→											
S G H運営指導委員会						—					—	

(2) 実績の説明

グローバル化が進展する中、国際社会で主体的に生きる日本人として、多様な文化を理解し尊重する資質や能力を身に付けるとともに、我が国の伝統と文化を理解し積極的に世界に発信することが重要であることから、本府では、府の教育振興基本計画である「京都府教育振興プランーつながり、創る、京の知恵ー」において、「グローバル化に対応できる人材の育成」を主要な施策の1つと位置付け、外国語によるコミュニケーション能力の育成を図るとともに京都の伝統や文化を学び発信できるよう取組を推進してきた。また、府立高校生の海外留学の促進を図りつつ、留学者や観光客との交流活動など、京都の地の利を活かした取組を進めてきた。

「グローバルネットワーク京都事業」は、探究的・体験的・実践的学習により国際社会に貢献できるリーダーの育成と生徒の社会参画意識の醸成を図るため、平成25年度から京都府が独自に実施している事業である。府立高校のうち9校をグローバルネットワーク京都校に指定し、「持続可能な国際社会への展望」というテーマのもと、論文コンテストやプレゼンテーション発表、ポスターセッション等の取組を行っている。鳥羽高校は、その幹事校として事業の牽引役を担っており、グローバルネットワーク京都校の生徒が課題研究の成果を発表し合う「グローバルネットワーク京都交流会」（参加者400名規模・年1回開催）では、年度当初から企画・立案・運営に携わるなど、教育委員会とS G H校が協働してネットワーク事業の普及に努めた。本交流会においては、大学教員を含む5名の外部有識者を交え、京都府教育振興プランに示した目指す人間像である「歴史と伝統にはぐくまれた京都の知恵をつなぎ、自然、人、社会とつながる人」「積み重ねられた知恵を活用し、新しい価値を創り出して世界に発信する人」の育成を図った。

「府立高校生グローバルチャレンジ事業」は、高校生に高い語学力とコミュニケーション能力を身に付けさせ、異文化理解を促進し豊かな国際感覚を育成することを目的として、高校生の海外留学・海外体験を支援する事業である。本府と友好提携を結んでいる英国エディンバラ市において夏季休暇中に行う3週間程度の語学研修に、鳥羽高校から2年生2名、同じく夏季

休暇中に2週間程度の語学研修を行うオーストラリア語学研修に1年生3名を派遣した。

「府立高校海外サテライト校事業」は、京都府教育委員会とオーストラリア連邦クィーンズランド州教育訓練省との包括協定に基づいて現地で実施する留学事業であり、鳥羽高校から1年生2名、2年生1名をクィーンズランド州教育訓練省の所管する中等教育学校に派遣した。これは2～4ヶ月程度の中期留学を促進するものであり、派遣した生徒たちは、1月下旬から3月下旬にかけて現地の公立の中等教育学校で現地の生徒と同じ授業を受けることになっている。加えて、現地校で学習した内容について、4ヶ月程度の留学については8単位、2ヶ月程度の留学については4単位の単位認定を可能としている。

こうした多様な留学機会等を設けることで、より高い語学力、コミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、国際感覚を育み、異文化理解を体感させることで、国際交流が暮らしの中に根付いた多文化共生社会の実現に寄与する人材の育成を行うとともに、府域におけるグローバル・リーダーの育成を進めた。

また、SGH指定期間終了後の事業の継続的な実施に資することを目的の1つとして、「府立高校スマートスクール推進事業」による鳥羽高校のICT環境整備を行った。本事業では、今後4年間程度ですべての府立高校に電子黒板機能付きプロジェクタ及び指導者用タブレット端末等を整備することとしている。また、生徒用タブレット端末を用いた、生徒の主体的・対話的な学習を促す指導法の研究や生徒用タブレット端末の在り方に関する検討データの取得を目的として、鳥羽高校を含む府立高校2校を「学習用タブレット端末実証研究事業」の指定校として、府におけるICT教育の研究を進めている。これらの事業を活用し、鳥羽高校はSGH事業における研究開発を指定期間終了後も継続的に実施できる体制を構築するとともに、京都府のICT教育の研究開発及び成果普及に取り組んだ。

研究計画の作成や教育課程の編成においては、指導主事等が指導・助言を行い、SGH事業の有効な運用に向け支援を行った。また、これまでの教育課程の研究開発を発展させ、文系・理系に偏らない教育課程を実施するため、令和2年度から鳥羽高校に単位制を導入することとし、従来は2年次から行っていた文系・理系のコース選択を廃止するとともに、STEAM教育に係る科目を設置するなど、鳥羽高校がSGH指定期間終了後も事業の継続的な実施を可能にするための支援を行っている。

管理機関において、京都府教育庁指導部高校教育課長をトップに、SGH推進委員会を組織し、SGH校の校長及び運営指導委員と連携し、事業の有用な発展と実践を指導、管理してきた。加えて、運営指導委員会において、学識経験者の委員からの指導を受けるとともに、教育委員会からも、研究開発の取組内容に関する指導・助言を行った。

加えて、全府立高校にJETプログラムによる英語指導助手を配置するとともに、チーム・ティーチングで効果的な語学指導を行うために必要な知識及び指導技術等を習得するための研修を行い、外国語教育に係る諸問題に関する研究協議の場を設けることで、英語教育の充実を図ってきた。なお、鳥羽高校には、学校教員採用試験において「スペシャリスト特別選考」区分で採用された、英語を母語とする教員を配置することにより、グローバル人材育成に係る研究開発の推進を支援している。また、教育旅行等で訪日している外国人高校生や外国人観光客、京都に居住する外国人や留学生等と交流することで、多様な文化への理解を促進し豊かな国際感覚を育成する「府立高校生グローバル文化カフェ事業」を実施し、SGH校を含め、京都の地の利を活かした各校の国際交流を推進してきた。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (契約日～令和2年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① イノベーション探究ⅠⅡⅢ	→											
学校設定科目	→											
② 京都府海外サテライト校留学												→
③ 海外インターンシップ						→	→	→	→			
海外の高校・大学とのワークショップ												
④ 運営指導委員会の開催						—					—	
⑤ 成果の公表・普及・成果発表会	→											
⑥ グローバル・リーダー育成推進会議	→											
⑦ 研究開発実施報告書の作成												→

(2) 実績の説明

ア 研究開発の実施規模

1年生全員 322名（グローバル科 80名・普通科 242名）、2年生全員 315名（グローバル科 80名・普通科 235名）、3年生全員 317名（グローバル科 78名・普通科 239名）

イ 研究開発単位Ⅰ：総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」（業務項目①）

(ア) 「イノベーション探究Ⅰ」（1単位）

- ・「京の智」を再発見するために、伝統・文化領域における地域再発見プログラムをとおして課題研究を実施するとともに、「京の智」を発信することにより価値再認識能力を高めた。
- ・立命館大学、福知山公立大学、京都光華女子大学、京都文化博物館、京都府立図書館と連携した取組を行った。立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおいて、課題研究宿泊研修を実施した。
- ・令和2年2月22日（土）に課題研究発表会を行い、校外から指導及び助言を受けた。
- ・成果物として、課題研究校内発表会の発表資料及び生徒間の相互評価を記載した実践報告書を作成した。

(イ) 「イノベーション探究Ⅱ」（1単位）

- ・1年次の地域再発見プログラムで培った地域文化の価値の再発見・発信力を研鑽するために、正義論への入門プログラムである「グローバル・ジャスティスプログラム」を実施した。
- ・グローバル伝統・文化、エリアスタディ、グローバル・サイエンスの3領域から1つを選択させ、賛否両論がある社会課題についてグループ協働で課題研究を実施した。
- ・大学から専門性の高い指導を継続して受けつつ、課題発見から研究発表に至る一連の課題研究を深化させるために大阪大学と連携し、アカデミック・ライティング等の研修を実施した。また、京都大学、福知山公立大学、京都光華女子大学の教授・准教授・TAや、京都大学、京都工芸繊維大学等で学ぶ留学生と連携し、課題研究のワークショップやポスターセッション等を行った。

- ・令和元年11月22日（金）に開催したSGH事業研究発表会において、全国のSGH校、SGHアソシエイト、SGU及び本校1年生等を対象に課題研究内容に関するポスターセッションを英語・日本語で行い、外部評価を受けた。
- ・成果物として、ポスターセッションの資料及び生徒間の相互評価や外部評価をまとめた実践報告書を作成した。
- ・今年度からSGH対象を全校生徒に広げ、普通科における「総合的な探究・学習の時間」において、専門学科「グローバル科」の生徒を対象とした「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」に準じる内容を実施した。

(ウ) 「イノベーション探究Ⅲ」（1単位）

- ・2年次に取り組んだグローバル・イシューに関する課題研究内容について英語論文の作成に取り組み、成果物集を作成した。
- ・令和元年7月10日（水）から14日（日）に開催した「鳥羽グローバル・サミット」において、シンガポール国立大学や復旦大学（上海）の大学生、きょうと留学生ハウスの学生との英語によるディスカッションをとおして研究内容を深め、グローバル・イシューの解決に向けた提言発表を行った。

ウ 研究開発単位Ⅱ：グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目群（業務項目①）

課題分析能力、多文化協働力、英語コミュニケーション能力を向上させるために、課題研究を核とした教科横断的な学校設定科目の学習をとおして、グローバル・コンピテンシーを高める取組を実施した。海外の大学生・高校生、京都在住の留学生TAと計画的・継続的に連携しながら、各授業を行った。

(ア) 「グローバル・コミュニケーションⅠ」（3単位）

英語で表現する力を向上させるために、「イノベーション探究Ⅰ」の伝統・文化領域の課題研究内容についての英語でのプレゼンテーションやディスカッションを行った。

(イ) 「ソーシャル・インテリジェンス」（2単位）

課題研究に関して、ICT機器を用いたデータの収集・分析、結果を解釈する能力を向上させる取組を行った。

(ウ) 「グローバル・コミュニケーションⅡ」（3単位）

「イノベーション探究Ⅱ」のテーマについて英語でディベート等を行い、批判的思考力を育成した。

(エ) 「京都の風土・世界の風土」（2単位）

「イノベーション探究Ⅱ」のグローバル伝統・文化領域と関連し、異なる地域の関係性を見いだす力を身に付けさせた。

(オ) 「グローバル・コミュニケーションⅢ」（2単位）

「イノベーション探究Ⅲ」と関連し、英語論文作成に必要な表現や構成等、アカデミック・ライティングの学習に取り組んだ。

エ 研究開発単位Ⅲ：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

多文化協働力、教養力、多角的視座、英語コミュニケーション能力等を育成するために、国内外における鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動を実施した。

(ア) 京都府海外サテライト校留学（業務項目②）

海外で生活しながら行う多様な学びにより、異文化理解を深め、多面的・多角的な課題分析・解決能力を養う。オーストラリア中期留学へ3名が参加した。

(イ) 海外インターンシップ（業務項目③）

多文化協働力等を育成するために、片岡製作所、堀場製作所、韓国A S T電子、上海石田電子衡器有限公司、般若科技股份有限公司等のグローバル企業と連携し、韓国ソウル、上海、台湾、シンガポールにおいてインターンシップを実施した。

(ウ) 海外の高校とのワークショップ（業務項目③）

様々な価値観や考え方を学ぶことで多角的な視座と多文化協働力を育成するために、上海市嘉定一中、韓国・ハンヨン高校、台中市立台中工業高級中等学校等との協働による課題研究、海外でのフィールドワーク等を行った。

(エ) 海外大学とのワークショップ（業務項目③）

多文化協働力等の育成に加え、海外の大学生から課題研究の手法等を学ぶために、7月に鳥羽グローバル・サミットを開催した。シンガポール国立大学、復旦大学（上海）、きょうと留学生ハウスの学生とともに「イノベーション探究Ⅲ」の課題研究内容に関する提言、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」等における協働学習、KYOTOフィールドワークをとおした「イノベーション探究Ⅲ」の課題研究内容の深化に取り組んだ。12月には国立台湾大学において、伝統・文化領域の課題研究の現地調査や英語による課題研究の成果発表を行った。

オ 研究開発単位Ⅳ：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育の研究開発（業務項目⑤）

(ア) アクティブ・ラーニングの実践

令和元年度は「アクティブ・ラーニングの研究・実践～批判的思考（クリティカル・シンキング）」を学校全体のテーマと定め、1学期に公開授業、2学期に研究授業と公開授業を実施し、各教科内で研究協議を行った。また、令和元年11月22日（金）のSGH事業研究発表会において1・2年生の全授業を公開し、校外よりフィードバックを受け、授業改善に取り組んだ。

(イ) JICA関西ワークショップ

専門的見地を有するJICA職員から指導・助言を受けて課題研究内容を深化させるために、令和元年7月24日（水）に本校にてワークショップを実施し、87名が参加した。

(ウ) 各種コンテストへの参加

課題研究の成果発表と深化を目的として、日本政策金融公庫「高校生ビジネスプラン・グランプリ」に23名、WWL×SGH探究甲子園に7名の生徒の出場が決定した。

(エ) グローバル・思考力コンテスト

資料等の分析能力、批判的思考力、課題解決能力、協働力の育成を目的として、令和2年1月31日（木）に1・2年生全員対象のグループ対抗による課題解決方法を提案するコンテストを実施した。生徒間の相互評価を行うなど、ピア・ラーニングを推進した。

(オ) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」

令和2年2月1日（土）に、グローバル教育を推進する府立高校9校の交流会に幹事校として参加した。SGH台湾海外研修の参加者が課題研究内容について英語でプレゼンテーション、「イノベーション探究Ⅱ」の3グループが課題研究内容についてポスターセッ

ションを行った。

(カ) ユネスコスクール

チャレンジ期間を終了し、加盟申請を継続している。

カ 運営指導委員会の開催（業務項目④）

専門的見地から指導・助言を受け、SGHの研究開発内容を改善するために、第1回を令和元年9月27日（金）、第2回を令和2年1月28日（火）に実施した。指導・助言内容を受け、以後のアクション・プランを作成し、部長会議等をとおして学校全体で情報共有した。

キ 成果の普及・広報・成果発表会（業務項目⑤）

(ア) 中学生を対象としたSGH課題研究ワークショップを令和元年11月9日（土）・12月14日（土）に開催。京都府全域の中学生が参加し、本校生徒がTAとして中学生への課題研究の指導を行った。

(イ) 「イノベーション探究Ⅲ」英語論文集・「イノベーション探究」実践報告書を作成・配布、英語版ホームページを66回・日本語版を69回更新、TOBA SGH NEWSを3回発行、研究発表会等を9回実施（SGH事業研究発表会等）

(ウ) 7月4日（水）に京都府立高校の教職員を対象としたSGH教職員研修を実施。鳥羽の学びネットワークを活用し、京都光華女子大学の乾明紀准教授とともに「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究の指導方法を共有した。

ク グローバル・リーダー育成推進会議（業務項目⑥）

SGH事業を学校体制で行うために、担当副校長、グローバル育成推進部より3名、研究グループ主任等5名、事務部1名が、各グループの研究開発の進捗状況や今後の工程、課題と改善方法について週1回、年間計28回会議を開催した。会議資料は分掌内で供覧するとともに、部長会議・職員会議で情報共有を行った。

ケ 研究開発実施報告書の作成（業務項目⑦）

年度末に研究開発実施報告書を作成した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

<添付資料>目標設定シート（Web アンケートにて回答済）、令和2年度入学生教育課程表（グローバル科・普通科リベラルアーツコース）

(1) 目標の進捗状況

活動指標（アウトプット）については、課題研究に関する国外への研修参加者数が前年度の374名に対して今年度は361名、課題研究に関する連携を行う海外大学・高校数が前年度とほぼ同様に14校、課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）が前年度241回に対して今年度は215回、グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数が前年度270名に対して今年度346名、帰国・外国人生徒の受け入れ者数（留学生も含む）が前年度の10名に対して今年度は9名となった。SGH対象人数の増加に伴い、課題研究に関する国内の研修参加者数も前年度の762名から今年度の918名へと増加した。全体としては5年間SGHの研

究開発を継続した結果、高大連携や課題研究に必要な研修の機会の確保等、グローバル・リーダー育成に向けた研究開発の体制を構築することができた。

成果目標（アウトカム）については、自主的に留学又は海外研修に行く生徒数が前年度の58名に対して今年度は50名とほぼ同数となり、SGHの海外研修に加え、管理機関が主催する海外研修等の自主的な海外研修への参加を今年度も推進することができた。卒業時における英語力がCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合は、前年度末の18.6%に対して今年度の第2回実用英語技能検定終了時点で25.4%と上昇しており、総合的な探究・学習の時間における課題研究内容と関連づけながら4技能をバランスよく学習してきた成果が見られた。

成果普及については、先進校としての研究発表会数を8回行い、TOBA SGH NEWSの年3回の発行に加えて、本校生徒による中学生対象のワークショップを実施するなど、教職員に加えて、生徒が成果普及に取り組む機会を増やした。

（2）成果及び評価

ア 授業アンケート

仮説検証の基礎資料として、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」と4つの学校設定科目において独自作成のルーブリック評価を行うとともに、生徒によるアンケート評価を実施した。グローバル・リーダーとして育む5つの力や、課題研究に必要とされる能力を定量的に評価しつつ、アクティブ・ラーニングへの指導法転換に継続的に取り組んだ。

イ 生徒の変容

全学年を対象として年2回継続実施している「SGH事業に関する生徒アンケート」により、2・3年生については同じ生徒について前年度から今年度の変容を、1年生については今年度内の変容をそれぞれ定量的に評価した。

3年生については前年度と今年度の第2回に実施した結果について「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の肯定的評価を比較すると、3年生全体については全20質問中10項目で上昇が見られ、グローバル・リーダーとして育む5つの力に関する質問11から質問20のうち6項目が上昇した。また、専門学科「グローバル科」生徒については全20質問中12項目で上昇が見られ、グローバル・リーダーとして育む5つの力に関する質問11から質問20のうち8項目で上昇が見られた。研究開発中の教育課程、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」における課題研究を核とした取組が、5つの力の育成に効果的であるという前年度と同様の検証結果となった。

2年生については、前年度と今年度の第2回に実施した結果について「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の肯定的評価を比較すると、全20質問中13項目で数値が上昇した。特に質問12「京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる」が7.1%、次いで質問15「困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる」と質問16「困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる」がともに5.2%上昇するなど、主に価値創造力と突破力について変容が見られた。課題として、質問20「読書や様々な体験をとおして、幅広い教養を身につけようとしている」の肯定的評価が67.7%と育む5つの力の他の項目と比べてやや低かった。これまでの春季休業中における読書指導に加え、総合的な探究・学習の時間において各生徒が取り組む課題研究の先行研究の輪読

会を今年度から実施しており、課題研究に関連付けた文献調査の手法の指導及び読書の習慣化に向けた指導を継続する。

1年生については、今年度の第1回と第2回に実施した結果、第2回は全体としては「4 と思う」と「3 ややと思う」の肯定的評価が下降傾向であったが、グローバル科の生徒については質問 18「自分とは異なる価値観を受け入れることができる」が 8.9%、質問 17「自分とは異なる価値観を持つ人が存在することが理解できる」が 2.5%上昇するなど、特に寛容力を育成することができた。今年度からアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生をグローバル科に受け入れたこともあり、日常的に異なる文化に触れることができる環境を整備した成果である。また、質問 11「京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる」について 6.3%上昇するなど、「イノベーション探究Ⅰ」において京の智の再発見に取り組み、海外の大学生等へ英語で発信する経験等をとおした変容が見られた。質問 5「英語コミュニケーション能力を向上させたい」については、学年全体で 89.5%が肯定的評価をしており、英語の学習意欲を維持することができている。

ウ 教職員の変容

「SGH事業に関する教職員アンケート」を平成 27 年度は年 1 回、平成 28 年度以降は年 2 回、継続的に実施している。10 項目・各 4 点満点の平均値については、前年度末の 3.5 から今年度第 1 回の 3.1 に一旦は下降したものの、今年度第 2 回には 3.4 まで上昇した。特に質問 10「校外向けの発表会や説明会・ホームページ・パンフレット等を用いて、研究成果の普及に積極的に取り組んでいると思う」が 3.7 と最も高く、先進校としての研究発表会や中学生対象の説明会、日本語・英語によるホームページをとおした情報発信、TOBA SGH NEWSの作成及び配布等をとおして、SGHの成果普及を学校全体の取組とすることができた。また、質問 8「地域や学校の特性を生かした鳥羽の学びネットワーク等の取組は、課題研究を中心とした学校全体の取組として効果的に行われている」が 3.5 となるなど、高大連携にグローバル企業や地域企業との連携を加えた高大社連携、京都文化博物館、国立民族学博物館、JICA関西等の学術機関との連携など、社会に開かれた教育課程の研究開発についても学校全体で推進することができた。

エ 仮説の検証

SGH中間評価を受け、PDCAサイクルをさらに機能的にさせるために、運営指導委員会等によるフィードバックを受けつつ、鳥羽高校独自で作成した「仮説を検証するための指標」を用いながら仮説の検証を継続している。なお、検証方法については、独自のルーブリック、生徒への相対的成長実感を問うアンケート、生徒のCEFRレベル、校内・校外からの評価など、多様な方法を取り入れている。

各指標における 4 点満点の A・B 評価については、仮説 1 が 4.00、仮説 2 が 3.33、仮説 3 が 4.00 と前年度同様に高い数値となった。また、A 評価のみを前年度と比較すると、仮説 1 が 2.23 から 2.25、仮説 3 が 2.33 から 2.50 とそれぞれ上昇し、仮説 2 は昨年度と同じ 3.08 となった。

仮説 1 については、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」と学校設定科目の教科横断的取組が効果的に機能しており、特に前年度と比較して、「イノベーション探究Ⅱ」のポスターセッションにおける A 評価が 37.5%から 51.7%に上昇するなど、SGUである大阪大学等と

の連携や運営指導委員による指導・助言をとおした教材開発と指導方法の改善が成果に結び付いた。また、「イノベーション探究Ⅲ」におけるA評価が58.0%から89.5%に上昇するなど、英語論文の作成についての指導が改善された。SGH中間評価を受け、教科横断的な取組をさらに推進したこと、アクティブ・ラーニングを軸とした活動をさらに多く取り入れたことも成果に結び付いた。

仮説2については、前年度と比較して、SGH海外研修参加者の実用英語技能検定準2級以上の取得状況が72.4%から75.4%に上昇するなど、英語を用いた現地調査等の事前学習と外国語学習を効果的に関連付けることができた。また、専門学科「グローバル科」1期生である3年生については、実用英語技能検定準2級以上の取得状況が81.8%に達するなど過去最高となった。海外における課題研究の調査及び海外の大学生等との協働学習や国内における鳥羽グローバル・サミット等に向けた取組と、「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」等における外国語学習を効果的に結び付けて実施した成果である。

仮説3については、前年度と比較して、JICA関西ワークショップのA評価が47.8%から53.3%に上昇するなど、SDGsの達成に向けた意識づけを行うことができた。また、全項目についてA・B評価が4となるなど、鳥羽の学びネットワークと連携しつつ、グローバル社会を俯瞰できる教養力を育成する仕組みを構築することができた。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

ア 教育課程の研究開発

平成27年度から普通科2クラスをSGH対象クラスとし、グローバル・リーダーの育成に資する教育課程等の研究開発を開始した。

1年次については、総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」（1単位）において京の智の再発見を目的とした課題研究を行い、2月には課題研究の発表会を実施した。また、課題研究と関連づけた教科横断的な取組として、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠ」（3単位）において課題研究内容についての英語プレゼンテーションと基礎的な英語ディベートの能力、情報と数学の融合科目である「ソーシャル・インテリジェンス」（2単位）において、ICT活用能力及び統計学を用いた課題分析能力を育成した。

2年次については、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」（1単位）においてグローバル・イシューを題材とした課題研究をグローバル伝統・文化領域、サイエンス領域、グローバル地域研究領域の3領域に分かれて行った。11月にはSGH事業研究発表会において課題研究の中間発表として来校者や本校1年生とのポスターセッションを実施した後、日本語論文の作成に取り組んだ。また、課題研究と関連づけた教科横断的な取組として、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅡ」（3単位）において課題研究内容についての発展的な英語ディベートと基礎的なアカデミック・ライティングの能力、地理と歴史の融合科目である「京都の風土・世界の風土」（2単位）において、身近な地域と世界の風土の関係性を具体的かつグローバルな視点から理解する能力を育成した。

3年次については、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」（1単位）において2年次の「イノベーション探究Ⅱ」における課題研究内容についての英語論文を作成するとともに、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅢ」（2単位）において発展

的なアカデミック・ライティングの能力を育成した。また、毎年7月に開催した鳥羽グローバル・サミットにおいてシンガポール国立大学や復旦大学（上海）等の学生と課題研究内容について英語で議論するなどの協働学習を行い、SDGsの達成に向けた提言を英語で発表した。

平成29年度に専門学科「グローバル科」を設置し、学校設定教科「グローバル」の研究開発を開始した。総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」に加えて、教科「グローバル」や教科「英語」内において既存の学校設定科目の研究開発を継続するとともに、新たに教科「グローバル」に第2外国語（中国語・韓国語・フランス語、1・2年次、各1単位）、「現代文G」（2・3年次、各3単位）、「古典G」（2・3年次、各3単位）、「物理G」（2年次2単位・3年次4単位）、「化学G」（2・3年次、各3単位）、「生物G」（2年次2単位・3年次4単位）等の特色ある学校設定科目を新たに設置し、これまでの普通教科にグローバル・リーダーの育成に向けた探究型学習の要素を取り入れた指導方法について研究開発を行った。

イ 先進的な課題研究の実績を踏まえたグローバル・リーダー育成に資する発展的な実践 (ア) 海外研修

平成27年度から課題研究の現地調査等を目的として、韓国ソウル、上海、台湾においてSGH海外研修を実施した。

韓国ソウル海外研修においては、ハンヨン高校と相互訪問を6年間継続し、伝統家屋の保存問題や伝統的な市場の活性化について協働研究を行った。また、自治体国際化協会ソウル事務所（クリアソウル）において課題研究の成果発表を行い、現地職員とのディスカッションをとおして、課題研究内容を深化させた。

上海海外研修においては、復旦大学及び上海市嘉定一中において課題研究の成果発表や京都の伝統・文化の紹介を英語・中国語で行った。鳥羽グローバル・サミットで来日した復旦大学生と上海市内で合流し、課題研究に関するフィールドワークを協働実施した。また、日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所において、課題研究に関するインタビュー調査を行った。

台湾海外研修においては、国立台湾大学の大学生に課題研究に関するインタビュー調査を実施した。台中市台中工業高級中等学校と相互訪問を6年間継続し、課題研究の成果発表や日本の伝統・文化の紹介を英語で行った。令和元年度は台湾政府が推奨するメディア誘発型観光に焦点を当て、台北と台中においてフィールドワークと現地住民へのインタビュー調査を実施した。その調査内容を踏まえ、台中市にある萬春宮の魅力を発信する動画を作成し、2月1日（土）に開催された京都府教育委員会グローバルネットワーク京都交流会において参加生徒・教員にその魅力を発信するとともに、台湾観光協会大阪事務所と萬春宮の更なる効果的な魅力発信について意見交換を行うなど、PBLを推進した。

選抜された各10名の生徒が参加する韓国ソウル、上海、台湾におけるSGH海外研修に対し、シンガポール海外研修は2年生7クラスが参加する大規模な取組であるが、SGH海外研修において研究開発した課題研究の手法を校内で普及させ、現地大学生とともにフィールドワークを実施するなど、課題研究内容を深化させることができた。

(イ) 国内における課題研究フィールドワーク

「イノベーション探究Ⅰ」の課題研究の一環として、夏季・冬季休業中に京都市内を中心としたフィールドワークを実施し、毎年2月に行われる課題研究発表会において研究成果をプレゼンテーションした。平成28年度のSGH土曜ゼミの参加生徒が京都府北部の観光による地域活性化をテーマとした課題研究の研究成果を英語版パンフレットにまとめ、京都市内の祇園周辺で外国人観光客へ配布するなど、生徒自ら観光客を誘致する活動を行った。

(ウ) 企業連携の推進

平成27年度からSGH海外研修において、株式会社片岡製作所の海外事業所（韓国・上海・台湾）及び株式会社堀場製作所等の海外事業所（シンガポール）においてインターンシップを実施し、グローバル企業と連携したグローバル・リーダー育成プログラムの研究開発を行った。平成29年度末までの研究開発及びその教育効果の検証を踏まえ、平成30年度に学校設定科目「海外インターンシップ」（1単位）を教育課程内に設置し、令和元年度についても研究開発を継続した。

また、国内における企業連携の取組として「グローバル・キャリアパス・プログラム」を実施した。令和元年度については、「古典G」等の授業において株式会社松栄堂と連携し、古典文学作品とその中に出てくる香の意味を考えつつ香文化について学んだ。「京都の風土・世界の風土」の授業においては株式会社岡墨光堂と連携し、日本の文化財を守り伝える装束師の役割と文系・理系を問わずに様々な学問分野の知を集合して行う文化財修理について学んだ。また「物理G」の授業においては株式会社片岡製作所と連携し、日本におけるものづくりの技術的な変遷や最先端のレーザー技術について学んだ。グローバル・リーダーに求められる教養力等を身に付けさせるために、企業と連携しつつ、社会に開かれた教育課程の研究開発を推進した。

(エ) ICTを活用した遠隔教育の推進

SGH指定期間終了後の自走に向けて、SGHの研究開発内容をICTを活用することにより遠隔地間で実施し、時間的・地理的・経済的な制約を超えた取組へと発展させる試みを令和元年度に行った。

NTT西日本に協力いただき、韓国・上海と接続した海外研修の事前学習、タイに滞在中の京都大学の神吉紀世子教授及び京都府立峰山高等学校と接続した「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション、京都市下京区の修徳学区と京都大学及び本校を接続した遠隔フィールドワーク実況中継、京都工芸繊維大学と接続した「生物G」の遠隔授業、大阪大学と接続した「京都の風土・世界の風土」の遠隔授業、クィーンズランド工科大学と接続した「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」の特別講義等を行い、SGHの研究開発内容を、ICT活用をとおして移動のコストをかけずに遠隔地間で実施できるように、実証研究に取り組んだ。

ウ 単位制に基づく新たな教育課程の研究開発

SGH5年間の取組を踏まえて研究開発した単位制に基づく新たな教育課程を、令和2年度から実施する。新たに教科「グローバル」に、①人文・社会領域、②STEAM・社会領域、③言語・文化領域、④リベラルアーツ領域の4領域を設定し、SGHにおける学校設定教

科・科目の内容を深化・発展させ、指定期間終了後についても自走しながらグローバル・リーダーの育成に資する教育課程の研究開発を行う。

(2) 高大接続の状況について

ア 国内における高大連携の状況

(ア) 「イノベーション探究Ⅰ」

年間指導計画に体系的に位置付けて次のワークショップを実施した。

- ・ 京都大学の神吉紀世子教授「『課題研究』と『まちづくり』の間を考える」
- ・ 福知山公立大学の杉岡秀紀准教授「フィールドワーク&ワークショップ入門」及び「聞き手の心に火を付ける！プレゼンテーション術」
- ・ 京都光華女子大学の乾明紀准教授による「チームで課題研究をする前に－Team Building－」
- ・ 京都大学の森純一名誉教授による課題研究の英語による発表に向けた指導

また、立命館大学において課題研究宿泊研修を実施するとともに、1年間の指導に協力いただいた大学の教員を招き、2月に課題研究発表会を実施した。

(イ) 「イノベーション探究Ⅱ」

年間指導計画に体系的に位置づけて次のワークショップを実施した。

- ・ 京都光華女子大学の乾明紀准教授「鳥羽高校の探究活動（課題研究）について」
- ・ 大阪大学の進藤修一教授と柿澤寿信講師「よい研究発表とはどのようなものか」
- ・ 大阪大学の堀一成准教授、坂尻彰宏准教授、進藤修一教授「アカデミック・ライティング講座」

また、1年間の指導に協力いただいた大学の教員を招き、11月に課題研究の中間発表会となるポスターセッションを実施した。

(ウ) 「イノベーション探究Ⅲ」

シンガポール国立大学、復旦大学（上海）、京都で学んでいる「きょうと留学生ハウス」に滞在している留学生や京都府名誉友好大使を務めている留学生とともに、SDGsの達成に向けた提言を英語で発表する鳥羽グローバル・サミットを開催した。

(エ) 教材開発・成果の普及

運営指導委員会での助言を受けつつ、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」の授業担当者が連携する大学の教員とともに、高校3年次まで課題研究の仮説を立て、その深化に使用できる教材・共通フォームを研究開発した。年間指導計画、各授業の実施内容、生徒の成果物を合わせた「イノベーション探究」実践報告書を作成し、全国のSGH校等へ配布し、本校ホームページに掲載するなど、広く成果普及に取り組んだ。

また、協働研究の成果について、大学と連携して発表を行った。京都大学と連携した取組についてはJACET関西紀要、大阪大学と連携した取組については京都大学教育研究フォーラム及び大阪大学全学教育推進機構主催「学問への扉」開設記念シンポジウム「初年次教育の再構築－新しい形の高大接続と大学初年次教育を考える－」、福知山公立大学及び地域企業と連携した取組については高大社連携フューチャーセッション、京都中小企業家同友会高大社連携事業研修事業、高大連携教育フォーラムにてそれぞれ

発表を行った。

イ 海外における高大連携の状況

SGH上海海外研修において、復旦大学を会場とした課題研究のプレゼンテーション及びディスカッション、同大学生との上海市内における課題研究についてのフィールドワークを実施した。SGH台湾海外研修において、国立台湾大学における課題研究のプレゼンテーション及び同大学生へのインタビュー調査を実施した。

なお、大学の単位履修制度については現時点では設置していない。

(3) 生徒の変化について

SGH指定前の平成25年度（全校生徒数1076名）、SGHアソシエイトの指定を受けた平成26年度（全校生徒数1066名）、SGH指定5年次の令和元年度（全校生徒数954名）を比較し、生徒の変化について検証を行った。

ア 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数

平成25年度の125名・平成26年度の147名に対し、令和元年度は363名に増加した。「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とした社会に開かれた教育課程における取組、高大社連携による課題研究をとおして、社会に貢献する意識や自己研鑽に取り組む姿勢を育むことができた。

イ 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数

平成25年度の6名・平成26年度の13名に対し、令和元年度は50名に増加した。SGHの取組において日本で学ぶ留学生やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生等から刺激を受け、自ら留学や海外研修に参加したいという生徒が増加した。

ウ 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合

平成25年度の18.9%・平成26年度の25.6%に対し、令和元年度は42.1%に上昇した。令和元年度に学校設定教科「グローバル」を履修しているグローバル科の生徒については、同質問に対する肯定的な回答がさらに高く、1年生が65.8%、2年生が61.3%、3年生が55.9%となった。また、令和元年度の海外インターンシップに参加した1・2年生30名については肯定的な回答が100%に達した。SGHの課題研究内容についてのグローバル企業や国際機関の職員へのインタビュー調査及びプレゼンテーション、同職員とのディスカッション、海外大学生や海外からの留学生との協働研究を継続した結果、多くの生徒のグローバル・マインドを涵養することができた。特に、実際に海外においてグローバル企業におけるインターンシップに参加し、学校設定科目「海外インターンシップ」（1単位）を修得した生徒の変容が、参加していない生徒に対して大きいことを検証できた。

エ 京都の伝統・文化をグローバル社会に発信するための国際交流に参加した人数

平成25年度の40名、平成26年度の365名に対し、令和元年度は635名に増加した。まず「イノベーション探究Ⅰ」等において京の智の再発見についての課題研究を行い、次に

その内容について「グローバル・コミュニケーションⅠ」等で英語プレゼンテーションを行う教科横断的な取組を継続して実施した。授業内で京都の伝統・文化を英語で発信する能力を育成し、海外研修や国内における鳥羽グローバル・サミット等の場で海外の人々に実際に発信する機会を設けた。特に、令和元年度はフランスのヌヴェール高校生を5日間、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生を第2・3学期に受け入れるなど、校内にしながら国際交流に参加できる環境を整備したことにより、多くの生徒が京都の伝統・文化を海外の人々に発信する経験をすることができた。

オ 卒業時における英語力がCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合

平成25年度の0.4%、平成26年度の0.6%に対し、令和元年度は25.4%に増加した。
4技能をバランスよく学ぶ授業に改善を図り、大幅に取得者を増やすことができた。

(4) 教師の変化について

ア 1人1役による学校全体でのSGH事業の推進・教職員研修

グローバル・リーダー育成推進部の5名を核としつつ、教職員の希望調査に基づき、イノベーション探究研究グループ、グローバル・コンピテンシー育成研究グループ、鳥羽の学びネットワーク研究グループ、リベラルアーツ教育研究グループの4つのうちいずれかの研究グループに全員が所属しつつ、全校体制で5年間SGH事業の研究開発を行った。

また、年に1回、本校教職員と全京都府立高等学校の希望者を対象としたSGH教職員研修を実施し、総合的な探究・学習の時間における課題研究の指導方法について改善及び普及に取り組んできた。

イ 教職員アンケート結果について

SGHの指定を受けた平成27年度に10項目4点満点の教職員アンケートを作成し、平成27年度については1回、以降は年に2回実施しながら教職員の変化を調査するとともに、調査結果を学校全体で共有しながら事業改善に取り組んだ。

平成27年度と令和元年度第2回を比較すると、全平均については4点満点中1.8に対し、令和元年度第2回は3.4に上昇した。

質問3「教育課程の編成は、5つの力（価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力）を育てるのに適切だと思う」については、平成27年度の1.4に対し、令和元年度第2回は3.5へ上昇した。SGHで研究開発してきた教育課程においてどのような力を育成するのかを学校全体で共有しながら取組を進めることができた。

質問6「外国語教育に関する取組は、課題研究との関連性が明確であり、課題研究に取り組むための必要な能力を向上させるために効果的に行われていると思う」については、平成27年度の1.2に対し、令和元年度第2回は3.1に上昇した。SGH指定以前は主に英語科の中でのみ扱っていた外国語教育を、SGH指定以降は総合的な探究・学習の時間と教科横断的な形で行ってきたことにより、全教職員が外国語教育の取組や生徒の外国語による発表を参観する機会が増えたことによる成果である。

質問9「SGHの研究開発について3つの仮説に基づく成果や課題の分析が適切に行われていると思う」については、平成27年度の1.1に対し、令和元年度第2回は3.3に上昇した。SGH指定以前は各教育活動の評価を定量的に十分行えていないことに課題があっ

たが、SGH指定以降は研究開発にあたり3つの仮説を立て、合計31の指標・項目の変容を定量的に評価しつつ各取組の成果と課題を学校全体で共有した。加えて年2回のSGH運営指導委員会において指導・助言を受けながら事業改善を行うPDCAサイクルを機能させながら研究開発を進めてきた成果である。

質問10「校外向けの発表会や説明会・ホームページ・パンフレット等を用いて、研究成果の普及に積極的に取り組んでいると思う」については、平成27年度の1.7に対し、令和元年度第2回は3.7に上昇した。質問10については平成28年度第1回に3.1、同年第2回に3.6に上昇し、令和2年度末まで全て3.5以上で推移した。SGH事業が全国的に注目される中、本校のSGHの取組について学校説明会等において多くの中学生や保護者から質問を受けたり、グローバル教育を推進する他の高校から問い合わせや学校視察の申し出をいただく機会が増え、学校全体でこうした機会において成果普及に取り組んだ結果が教職員の变化に結び付いた。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

ア 授業について

探究型学習の視点を取り入れつつ、主体的・対話的で深い学びを実現するアクティブ・ラーニングを推進し、第1学期に公開授業、第2学期に研究授業及び公開授業を行い、学校全体で授業改善に取り組んだ。毎年11月にSGH事業研究発表会を開催し、運営指導委員及び学術顧問、全国のSGH校・SGHアソシエイト校等の高校教員、大学・企業・国際機関等を対象として、学校設定科目の研究授業や1・2年生全クラスの公開授業を行い、指導・助言を受けた。また、令和元年度には、管理機関から「府立高校スマートスクール事業」の指定を受け、ICTを活用した課題研究やアクティブ・ラーニング型の授業、国内外の高校・大学・国際機関と接続した遠隔授業に取り組んだ。

こうした取組の結果、教職員アンケート質問5「SGHによる取組が、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業となっており、学校全体の授業改善になっていると思う」については、平成27年度の1.9に対し、令和元年度第2回は3.1に上昇した。

イ 保護者について

鳥羽グローバル・サミット等における保護者への授業公開やTOBA SGH NEWS及びホームページをとおした情報発信を保護者に対して行った結果、令和元年度学校評価の保護者アンケート質問14「鳥羽高校はSGHとして国際的視野を持って思考・判断・能力を育成している」について79.0%の保護者が肯定的な回答をした。

ウ 社会に開かれた教育環境の整備について

SGH指定前の平成25年度、SGHアソシエイトの指定を受けた平成26年度、SGH指定5年次の令和元年度を比較し、グローバル教育を推進するために社会に開かれた教育環境を整備できたかについて検証を行った。

課題研究に関して連携を行う海外大学・高校等の数については、平成25年度の0校・平成26年度の5校に対し、令和元年度は14校に増加した。

課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）については、平成25年度が0回・平成26年度が12回に対し、令和元年度は215回に達した。

課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）は、平成25年度の0回、平成26年度の12回に対し、令和元年度は159回に増加した。

また、平成30年度から府内全域の中学生を対象としたSGH課題研究ワークショップを年2回開催し、本校生徒が中学生に対して課題研究の手法を指導する場面を設けた。

5年間のSGHの研究開発をとおして、国内外の大学・企業・国際機関等の鳥羽の学びネットワークとの連携による社会に開かれた教育環境、異なる校種の生徒間で学びあえる教育環境を整備するとともに、こうした環境整備の進め方についてSGH事業研究発表会において他校へ普及を図ることができた。

(6) 課題や問題点について

ア 「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とした教育課程・教育活動について

本校の課題研究の特色として、個人ではなくチーム協働での取組を行っているが、チーム研究の要となるリーダーを中心とした対話が不十分である。チーム研究の型はあるものの、筋のおったストーリー性のある研究にはまだ不十分な面があり、協働力のある研究チームをいかに育成するかが問われている。原点回帰し、グローバル・リーダー育成の意識を再度指導者側が意識する必要がある。

また、課題研究内容について校外のコンテスト等で発表する生徒数がまだ少ない。総合的な探究・学習の時間の年間計画に校外のコンテスト等を入れつつ、各生徒の興味・関心に基づいて応募できるように生徒への情報提供を行う。

イ 外国語学習について

卒業時における英語力がCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合がSGH指定前の0.4%から25.4%に上昇したものの、この25.4%という数値は決して高いとは言えない。令和元年度の生徒アンケート質問5「英語によるコミュニケーション能力を向上させたい」について、3年生の83.1%、2年生の84.0%、1年生の89.5%が肯定的に回答しており、生徒の英語の学習意欲は高い。これまでの課題を改善しつつ、4技能のバランスよい授業を継続するとともに、積極的な4技能検定の受検を学校全体で促す。

ウ 学校体制について

人事異動がある中、継続的に研究開発を行うための情報共有・意識共有に課題がみられた。特に、総合的な探究・学習の時間は複数の教科の教員が担当しており、年度初めの早い時点で課題研究の指導方針・指導方法を共有する必要がある。令和2年度からは、4月に全教職員対象とした総合的な探究・学習の時間の指導についての研修会を実施し、校内での連携をより密にしながら研究開発を継続する。

(7) 今後の持続可能性について

SGH指定期間終了後に自走するために、次の取組を実施する。

ア 管理機関と連携したグローバル教育の推進

京都府教育委員会がグローバル教育の推進を目的として定めている「グローバルネットワーク京都校」9校の幹事校の役割を継続し、毎年2月に行われる「グローバルネットワーク京都交流会」等の機会を活用し、管理機関と連携しながらグローバル・リーダー育成

に向けた研究開発内容の成果普及及び他の府立高校との情報交換等を行う。

また、京都府が英語圏の中等教育機関と連携し、2～4ヶ月程度の中期留学を単位認定する「京都府海外サテライト校留学」への生徒の参加を促すなど、管理機関と連携して研究開発を継続する。

イ 単位制に基づく新たな教育課程の実施

専門学科「グローバル科」及び普通科において、令和2年度から単位制に基づく新たな教育課程を実施する。SGH事業において研究開発した教科「グローバル」に、①人文・社会領域、②STEAM・社会領域、③言語・文化領域、④リベラルアーツ領域の4領域を設定する。総合的な探究の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とした教科横断的な取組を継続しつつ、京都府ならではのSTEAM教育等、高度で先進的な学びを研究開発する。

ウ Society 5.0 に求められるICT教育・遠隔授業等の研究開発

令和元年度に管理機関から指定を受けた「府立高校スマートスクール推進事業」の指定校として取り組んだICT教育の研究開発、ICTを用いた国内外の大学・高校との遠隔授業の研究開発の実績を踏まえ、時間的・地理的・経済的な制約を超えてグローバル・リーダーを育成する仕組み作りを研究開発する。具体的には、SGH事業で構築した国内外の鳥羽の学びネットワークの各機関とICTを用いて接続し、総合的な探究の時間における課題研究に関するインタビュー調査、ディスカッション等の協働学習を実施する。

エ 自走に向けたグローバルな教育環境・学校体制の整備

令和元年度に引き続き、令和2年度についてもアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生1名を受け入れ、校内にしながら多文化協働学習ができる環境を整備する。また、台中市立台中工業高級中等学校の訪問を令和2年度に受け入れる。

海外研修については、2年生を対象としたシンガポール海外研修及び上海海外研修を実施する。さらに、希望者を対象とした韓国、台湾での海外研修及び海外インターシップについては、必要な費用等を勘案しながら、実施を検討している。

また、研究開発をより充実したものにする予算として、ふるさと納税を活用した「京都府母校応援ふるさと事業」による寄附金を活用するとともに、SGHの教育プログラムを受けたグローバル科1期生の卒業生をボランティアのTAとして招いて後輩の課題研究の指導に協力してもらうなど5年間のSGHの取組を活かしつつ持続可能な研究開発体制を整備し、今後も自走しながらグローバル・リーダーの育成に資する教育課程の研究開発に取り組んでいく。

【担当者】

担当課	京都府教育庁指導部高校教育課	TEL	075-414-5859
氏名	星野 詠志	FAX	075-414-5847
職名	指導主事	e-mail	e-hoshino41@pref.kyoto.lg.jp

（別紙）高等学校用
令和2年度入学生（2学級）教育課程

（各学科に共通する教科・科目等）

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
国語	国語総合	4	5			5
	現代文B	4		3	2	5
	古典B	4		2	2	2
	世界史B	4				
	日本史B	4				
	地理B	4				
	現代社会	2				
	倫理	2				
	政治・経済	2				
	数学	数学 I	3			
	数学 II	4				
	数学 III	5				
	数学 A	2				
	数学 B	2				
理科	物理基礎	2		2		0・2
	物理	4				
	化学基礎	2	2			2
	化学	4				
	生物基礎	2	2			2
	生物	4				
	地学基礎	2	2			0・2
	地学	4				
	体育	7～8	3	2	2	7
	保健	2	1	1		2
芸術	音楽 I	2				
	美術 I	2				
	書道 I	2				
	外国語	英語Ⅰ	3			
		英語Ⅱ	4			
		英語Ⅲ	4			
		英語表現Ⅰ	2			
		英語表現Ⅱ	4			
	家庭基礎	2	2			2
	情報	2				
総合的な探究の時間	3～6	1	1	1	3	

（主として専門学科において開設される教科・科目）

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
グローバル	語学・歴史			2		2
	文学・表現				● 5	0・5
	カルチュラル・リテラシー				● 5	0・5
	深層の風土・世界地図			○ 2		0・2
	地域研究			○ 2		0・2
	日本歴史Ⅰ			○ 5		0・5
	世界歴史Ⅰ			○ 5		0・5
	日本歴史Ⅱ				▲ 2	0・2
	世界歴史Ⅱ				▲ 2	0・2
	地理学Ⅰ				● 5	0・5
グローバル・リテラシーⅠ		2			2	
グローバル・リテラシーⅡ				▲ 4	0・4	

高等学校名	鳥羽高等学校	分 校	分 校	課 程	学 科	学校番号
				単位制による 全 日 制	グローバル科	8

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
グローバル	STEAMⅠ		7			7
	STEAMⅡ			7		7
	STEAMⅢ				△ 7	0・7
	数学理論 α				△ 4	0・4
	応用科学				△ 3	0・3
	STEAM物理			○ 2		0・5
	STEAM化学			○ 3		0・6
	STEAM生物			○ 2		0・5
	STEAMⅠ	2				0・2
	STEAMⅡ	2				0・2
	STEAMⅢ	2				0・2
	STEAMⅣ	2				0・2
	総合英語	2				2
	英語理解	3		3	□ 4	3・7
	グローバル・リテラシーⅠ	3				3
グローバル・リテラシーⅡ	2		2		2	
ESAI				□ 2	0・2	
EEI			1		0・1	
ESAII			1		0・1	
EEII				□ 2	0・2	
中国語Ⅰ		1			0・1	
韓国語Ⅰ		1			0・1	
フランス語Ⅰ		1			0・1	
中国語Ⅱ			1		0・1	
韓国語Ⅱ			1		0・1	
フランス語Ⅱ			1		0・1	
言語表現				■ 2	0・2	
文化理解 α				■ 2	0・2	
文化理解 β				■ 2	0・2	
数学理論 β				■ 2	0・2	
STEAMⅣ				■ 1	0・1	
STEAMⅤ				■ 1	0・1	
理数探究				■ 1	0・1	
グローバル・リテラシー				■ 2	0・2	

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
共通教科・科目	単位数合計		13	10	6	29
専門教科	科目単位数合計		20	23	26	69
教科	全員履修科目単位数計		30	22	6	58
	選択履修科目単位数計		3	11	26	40
科目履修単位数計			33	33	32	98
総合的な探究の時間			1	1	1	3
特別活動	ホームルーム活動		1	1	1	3
週当たりの授業時数			35	35	34	104

令和2年度入学生(4学級)教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
国語	国語総合	4	5			5
	国語表現	3				
	現代文A	2				
	現代文B	4	2	2	4	
	古典A	2				
国文学総論	古典B	4	3			5
	国文学総論			●5		0.5
地理	世界史A	2		[2]		0.2
	世界史B	4		[〇.5]		0.5
	日本史A	2		[2]		0.2
	日本史B	4		〇.5]		0.5
	地理A	2				
歴史	地理B	4			●5	0.5
	日本史総論			▲2]		0.2
	世界史総論			▲2]		0.2
公民	現代社会	2	2			2
	倫理	2		▲2		0.2
政治・経済	政治	2		▲2		0.2
	経済	2				
数学	数学I	3	4			4
	数学II	4				
	数学III	5	1	5		6
	数学A	2		△7		0.7
	数学B	2	2			2
数学総論				△4		0.4
理科	科学と人間生活	2				
	物理基礎	2		[2]		0.2
	物理	4		[〇.2]	▲3	0.5
	化学基礎	2				2
	化学	4	2	〇.3	▲3	0.6
	生物基礎	2		[2]		2
	生物	4		[〇.2]	▲3	0.5
	地学基礎	2		[2]		0.2
	地学	4			△3	0.3
	科学総論					
保健体育	体育	7~8	3	2	2	7
	保健	2	1	1		2
芸術	音楽I	2	2			0.2
	音楽II	2		▲2		0.2
	美術I	2	2			0.2
	美術II	2		▲2		0.2
	書道I	2	2		▲2	0.2
書道II	2			▲2	0.2	

高等学校名	分校	課程	学 科	学校番号
鳥羽高等学校	分 校	単位制による 全 日 制	普通科(リベラルアーツコース)	8

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
外国語	英語基礎	2				2
	英語I	3	4			4
	英語II	4				
	英語III	4				
	英語表現I	2	2			2
英語表現II	英語表現II	4		2		2
	英語会話	2				
家庭	家庭基礎	2	2			2
	家庭総合	4				
情報	生活デザイン	4				
	社会と情報 情報の科学	2	2			2
総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	2				2
	総合的な探究の時間	3~6	1	1	1	3

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準 単位数	年			合計 科目数
			1年	2年	3年	
グローバル	英語理解			3	4	7
	英語理解III				〇.2	0.2
	ESA I			1		0.1
	ESA II				〇.2	0.2
	EE I			1		0.1
	EE II				〇.2	0.2
	言語表現				■2	0.2
	文化基礎 ^a				■2	0.2
	文化基礎 ^b				■2	0.2
	数学理論 ^b				■2	0.2
	STEAM ^a				■1	0.1
	STEAM ^b				■1	0.1
理数数学 ^a				■1	0.1	
理数数学 ^b				■2	0.2	

共通教科・科目単位数合計	3.2	2.8	2.4	8.4
専門教科・科目単位数合計	0	4	8	1.2
教科 全員履修科目単位数計	3.0	2.2	1.0	6.2
教科 選択履修科目単位数計	2	1.0	2.2	3.4
科目 履修単位数計	3.2	3.2	3.2	9.6
総合的な探究の時間	1	1	1	3
特別活動 ホームルーム活動	1	1	1	3
週当たりの授業時数	3.4	3.4	3.4	10.2

ふりがな	きょうとふりつとぼこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	京都府立鳥羽高等学校		

令和元年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)									
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)	
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:		43人	185人	230人	295人	363人	972人	
	SGH対象生徒以外:		125人	147人	221人	339人	128人	71人	0人
目標設定の考え方: 生徒が自主的・主体的に取り組めるような課題の意識付けを積極的に行い、90%以上の達成を目指す。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:		24人	31人	60人	58人	50人	324人	
	SGH対象生徒以外:		6人	13人	9人	0人	1人	0人	0人
目標設定の考え方: 留学・海外研修ガイダンスを実施し、より多くの生徒が自主的に留学・海外研修に行く環境を整備する。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:		78%	52%	61%	56.3%	42.1%	95%	
	SGH対象生徒以外:		18.9%	25.6%	44%	36%	42%	43.6%	0%
目標設定の考え方: 海外研修やSGU留学生等との協働学習を通して生徒の意識を高める。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:		5人	4人	2人	7人	3人	108人	
	SGH対象生徒以外:		6人	17人	5人	1人	1人	0人	0人
目標設定の考え方: 参加大会を増やし、HEnDA高校生英語ディベート大会やビジネスプラン・グランプリの入賞を目指す。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:		5.0%	7.8%	8.1%	12.5%	25.4%	95%	
	SGH対象生徒以外:		0.4%	0.6%	2.3%	4.2%	3.8%	6.1%	0%
目標設定の考え方: 英検など外部検定試験の受検を促しつつ、E-learningなど自主的に語学学習に取り組む環境を整備する。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	0人	13人	33人	387人	379人	374人	361人	380人
	目標設定の考え方：28年度から2年生360人全員が海外で課題研究を行い、さらに20人が自主的に別の海外研修に参加する。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	0人	50人	167人	407人	602人	762人	918人	400人
	目標設定の考え方：校外で行われる研修会を積極的に紹介し、その参加を促す環境作りを行う。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	0校	5校	7校	9校	9校	15校	14校	20校
	目標設定の考え方：H28年度からは海外研修を実施し、海外大学や海外パートナー高校との連携をさらに深めていく。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	0回	12回	58回	180回	131回	241回	215回	300回
	目標設定の考え方：SGUとの高大連携をさらに推進し、大学教員、留学生やTAとの課題研究を行う体制を整備する。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	0回	12回	58回	47回	260回	203回	159回	30回
	目標設定の考え方：片岡製作所にて海外インターンシップを実施するなど、「鳥羽の学びネットワーク」との連携を拡充する。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	362人	362人	387人	266人	258人	270人	346人	560人
	目標設定の考え方：現在の取組に加えて、The Global Enterprise Challengeなど国内外の公益性高い大会に出場する。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	8人	11人	7人	6人	9人	10人	9人	30人
	目標設定の考え方：海外帰国子女特別入学者選抜を継続実施すると共に、京都府海外サテライト校から留学生を受け入れる。							
h	先進校としての研究発表回数							
	2回	6回	8回	11回	13回	13回	8回	10回
	目標設定の考え方：SGH、SGU、運営指導委員、中学関係者、保護者、地域などに広く研究成果を発表する。							
i	外国語によるホームページの整備状況							
	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	○	○	○	○	○	○	○
	目標設定の考え方：26年度に外国語のホームページを整備した。国内外への成果普及を英語で継続的に行う。							
j	京都の伝統・文化をグローバル社会に普及することを目的とした国際交流に参加した人数							
	40人	365人	427人	481人	643人	640人	635人	720人
	目標設定の考え方：冷泉家披露、茶道、華道などを通して海外パートナー校と交流し、京都の伝統・文化を世界に発信する。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)			1,080	1,037	1,000	960	954
SGH対象生徒数			120	205	529	764	954
SGH対象外生徒数			960	832	471	196	0

1. 本構想において実現する成果目標の設定(アウトカム)の内訳
b 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数
グローバルチャレンジ事業海外短期留学5人(オーストラリア3人、エディンバラ2人)、京都府教育委員会サテライト校事業留学3人(オーストラリア3人)、日韓高校生交流(派遣)事業2人、SGH海外研修30人(上海10人、韓国10人、台湾10人)、京都府高校生による陝西省訪問プログラム8人、アメリカ留学1人、イギリス留学1人
d 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数
税に関する高校生の作文 京都府租税教育推進連絡協議会長賞1人、京都市下京区・南区租税教育推進協議会長賞1人、第25回京都ときわライオンズクラブ論文コンクール京都ときわライオンズクラブ会長賞1人

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標(アウトプット)の内訳
a 課題研究に関する国外の研修参加者数
グローバルチャレンジ事業海外短期留学5人(オーストラリア3人、エディンバラ2人)、京都府教育委員会サテライト校事業留学3人(オーストラリア3人)、日韓高校生交流(派遣)事業2人、SGH海外研修30人(上海10人、韓国10人、台湾10人)、京都府高校生による陝西省訪問プログラム8人、上海研修40名、シンガポール研修273名
b 課題研究に関する国内の研修参加者数
国立民族博物館フィールドワーク80人、京都文化博物館ワークショップ80人、JICA関西ワークショップ89人、大阪大学ワークショップ160人、福知山公立大学ワークショップ160人、京都光華女子大学ワークショップ239人、京都大学ワークショップ80名、片岡製作所インターンシップ30名
c 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数
セントオーガスティンカレッジ、カリフォルニア大学バークレー校、シンガポール国立大学、復旦大学、ハンヨン高校、ヌヴェール高校、西安交通大学附属中学、西安外国語学校、西安市第三中学校、西安中学校、上海市嘉定一中、ITE college west、台中市立台中工業高級中等學校、国立台湾大学
d 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)
セントオーガスティンカレッジ25、カリフォルニア大学バークレー校2、シンガポール国立大学20、復旦大学10、京都大学3、京都光華女子大学5、大阪大学49、福知山公立大学9、京都工芸繊維大学1、ITE college west3、西北大学40、立命館大学6、台中市立台中工業高級中等學校29、国立台湾大学12、武庫川女子大学1
e 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)
京都文化博物館3、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫4、京都府名誉友好大使11、株式会社日本政策金融公庫2、株式会社片岡製作所13、国立民族学博物館1、JICA関西4、京都中小企業家同友会6、長嶋屋株式会社2、株式会社田中電機製作所3、京都南ロータリークラブ20、京都南ローターアクトクラブ8、独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)4、株式会社韓国片岡10、裏千家7、京都府立図書館3、上海片岡貿易有限公司4、上海石田電子衡器有限公司4、大成印刷紙業株式会社2、HORIBA Instruments (Singapore) Pte Ltd8、Shinobi Sauce Pte Ltd2、IBM Global Services Pte Ltd4、Albirex Singapore PTE LTD2、Leeden National Oxygen Ltd3、JTB Singapore2、Canon Singapore PTE LTD6、小川珈琲株式会社1、株式会社松栄堂2、防衛省自衛隊京都地方協力本部京都募集案内所2、NTT西日本3、台湾片岡股份有限公司7、般若科技股份有限公司4、株式会社岡墨光堂1、未生流笹岡1
f グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数
京都府教育委員会グローバルネットワーク京都論文コンテスト160人、第7回高校生ビジネスプラン・グランプリ23人、税に関する高校生の作文40人、環境保全高校生論文40人、SGH全国高校生フォーラム4人、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト79名
g 帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む)
海外帰国子女特別入学選抜7人、留学生2人
h 先進校としての研究発表回数
グローバル科説明会1回、学校説明会3回、SGH事業研究発表会1回、SGH全国高校生フォーラム1回、京都府教育委員会グローバルネットワーク京都交流会1回、イノベーション探究 I 課題研究発表会1回
i 外国語によるホームページの整備状況
平成26年度から外国語によるホームページを開設
j 京都の伝統・文化をグローバル社会に普及することを目的とした国際交流に参加した人数
1年生320人(グローバルカフェ、華道パフォーマンス等) 2年生315人(グローバルカフェ、海外研修等)

2 鳥羽高校SGH事業の概要

(1) 学校の概要

1 学校名・校長名

- (1) 学校名 京都府立鳥羽高等学校
 (2) 校長名 山埜 茂彦

2 所在地・電話番号・FAX番号・URL

- (1) 所在地 京都市南区西九条大国町1
 (2) 電話番号 075-672-6788
 (3) FAX番号 075-691-7448
 (4) URL <http://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/>

3 課程・学科・学年別生徒数・学級数及び教職員数

- (1) 課程・学科・学年別生徒数・学級数（令和元年5月1日現在）

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	242	6	235	6	239	6	716	18
	グローバル科	80	2	80	2	78	2	238	6

- (2) 学科・専攻・コース

学年	普通科			専門学科
1年	スポーツ総合専攻	文科スポーツ コース	理数人文 コース	グローバル科
2年	スポーツ総合専攻	文科スポーツ コース	理数人文 コース	グローバル科
3年	スポーツ総合専攻	文科スポーツ コース	理数人文 コース	グローバル科

- (3) 教職員数（令和元年5月1日現在）

職名	校長	副校長	事務長	教諭	講師	養護教諭	事務職員	学校図書館司書	実習助手	技術職員	計	カウンセラー 校医・校歯科医	校薬剤師	非常勤職員
計	1	2	1	67		2	5	1	2	3	84	7		14

(2) 構想調書の概要

指定期間	ふりがな	きょうとふりつとばこうとうがっこう				②所在都道府県	京都府
27～31	① 学校名	京都府立鳥羽高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	1年 362人	2年 353人
普通科	362	353	351		1066	3年 351人	
⑥研究開発構想名	ソーシャル・イノベーションで挑むグローバル・リーダーの育成						
⑦研究開発の概要	リベラルアーツ教育を基軸に、国内外の学術機関や企業等と連携した鳥羽の学びネットワークを活用して、グローバル・イシューに挑む新しい価値創造を目指す課題研究「ソーシャル・イノベーション」により、価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を備えたグローバル・リーダーを育成する教育システムを研究開発する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p><目的> 未来を見ずえた新たな価値を創り出す価値創造力、異文化コミュニケーションを通じて課題に取り組む協働力、困難な課題と向き合い解決する突破力、多様な価値観を尊重する寛容力、幅広い見識を持ち広い視野で社会を俯瞰する教養力を備え、持続可能な豊かな社会を創造することに貢献するグローバル・リーダーを育成する。</p> <p><目標></p> <p>① 京都や世界の智慧を多面的に考察し、再認識して新たな価値を創造し発信する。 ② 異なる文化背景を持つ人々と課題解決に向けて、主体的・協働的に取り組む。 ③ オープンエンドの問いを多角的にとらえ、解決の糸口を見いだす。 ④ 多文化社会において価値観の違いを理解し、共生できる能力を身につける。 ⑤ 地球規模で考え、行動するための基盤となる豊かな教養を身につける。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校は明治33年に創立された旧制京都第二中学校の伝統を継承する普通科の公立高校であり、冷泉家時雨亭文庫常務理事冷泉貴実子氏による和歌の作成・披講の指導や、論理的思考力を育成する独自の思考力コンテストを実施している。また、SGHアソシエイト校として、グローバル人材育成を目指して、生徒の海外派遣及び他国からの高校生受入れや、積極的な社会参画を促すシティズンシップ教育を推進している。その一方で、武道・スポーツ活動が盛んで、健康・スポーツ領域に関する生徒の意識が高い。これらが、自律する人間を育成する「鳥羽式文武両道」として府民から高い評価を得ている。しかし、現状では、これらの取組は対象や活動規模が限定したものとなっている。これを克服し、より大きな視野で活躍するグローバル・リーダーの育成を目指し、次の仮説に基づく研究開発を行う。</p> <p>仮説1：総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」及び学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」等は、課題の発見・分析能力、多文化協働による主体的な課題解決能力を高める手段として有効である。</p> <p>仮説2：京都府海外サテライト校への中期留学等の方策は、新しい視座と高い言語能力を確立する上で有効である。</p> <p>仮説3：鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育は、広い視野でグローバル社会を俯瞰できる教養力を育成するために有効である。</p>					

		<p>(3) 成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバル・サミットを平成 29 年度より実施。英語による課題研究発表、論文集作成。 ・文部科学省 S G H ホームページ、本校ホームページ、京都府教育委員会主催「グローバルネットワーク京都交流会」にて発表。
⑧-2 課題研究		<p>(1) 課題研究内容</p> <p>S G H アソシエイト校として、鳥羽の学びネットワークと連携・推進してきた多様で高度な教育活動を活用し、教科科目を体系化するリベラルアーツ教育を基軸とし、グローバル・コンピテンシーを高める教科横断の科目や、海外インターンシップなどの戦略的手法による多様で実践的な学びを、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とする生徒の主体的な学びに一体化させつつ、目標を達成する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>＜実施方法＞</p> <p>1 年次：グローバル・コンピテンシーの基礎の習得</p> <p>「イノベーション探究Ⅰ」における京都フィールドワーク（伝統・文化領域、健康・スポーツ領域）、京都や世界の智慧の再認識、生徒の研究課題発見。「グローバル・コミュニケーションⅠ」における発展的英語運用能力、「ソーシャル・インテリジェンス」における I C T 活用スキル並びに統計学等を用いた分析手法の習得。希望者対象の海外インターンシップ（ソウル・台湾・上海・シンガポール）。</p> <p>2 年次：批判的思考力と多文化対話力の獲得</p> <p>「イノベーション探究Ⅱ」における多文化協働 P B L（シンガポール国立大学、海外パートナー高校）、海外フィールドワーク、生徒の研究課題の仮説検証。「グローバル・コミュニケーションⅡ」における批判的思考力及び多文化対話力の習得。「京都の風土・世界の風土」における文化の多様性と複合性の理解。京都府海外サテライト校への中期留学。シンガポール・マレーシアにおける海外研修。希望者対象の海外インターンシップ（ソウル・台湾・上海・シンガポール）。</p> <p>3 年次：グローバル・サミットにおける新たな価値提言</p> <p>「イノベーション探究Ⅲ」における価値創造（地域研究領域）、鳥羽の学びネットワークと連携したグローバル・サミットにおける提言。「グローバル・コミュニケーションⅢ」における英語論文の作成及びプレゼンテーション。</p> <p>＜検証評価＞</p> <p>検証評価については、運営指導委員会並びに、S G U やグローバル企業などからなる鳥羽の学びネットワーク等から積極的に外部評価を受けることを予定している。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28 年度より京都府海外サテライト校への中期留学を単位認定 ・「ソーシャル・インテリジェンス」による、「情報」の代替 ・「京都の風土・世界の風土」による、「地理歴史」の代替
⑧-3 上記以外		<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <p>国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育課程の研究</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等</p> <p>なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</p> <p>海外帰国子女特別入学者選抜の継続実施</p> <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入）</p> <p>なし</p>
⑨その他特記事項		<ul style="list-style-type: none"> ・京都府教育委員会指定「グローバルネットワーク京都」幹事校

(3) 5 年研究開発計画・評価計画

1 第1年次（平成27年度）

初年度の重点として「グローバル・リーダー育成推進部」を軸とした校内組織を立ち上げ、研究開発対象である1年生に対する教育活動を開始する。「イノベーション探究Ⅰ」「グローバル・コミュニケーションⅠ」「ソーシャル・インテリジェンス」の3つの科目等の教育課程及び関連教育活動の研究開発を着実に実施する。

ア 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅰ」等の研究開発

①「イノベーション探究Ⅰ」

課題研究ワークショップ（SGUと連携）、成果発表会

②学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠ」

③学校設定科目「ソーシャル・インテリジェンス」

④SGU等鳥羽の学びネットワークと連携した課題研究実施の詳細な日程等を調整

イ 課題設定・解決能力と実践的教養力の育成と指導法の蓄積

①海外パートナー校生徒との課題研究（鳥羽高校会場、パートナー校会場）

国立台南第一高級中学・吉林第一中学校・ハンヨン高等学校との協働研究、新規パートナー校開拓

②海外インターンシップ

株式会社片岡製作所等と連携し、ソウル・台湾・上海・シンガポールで実施

③海外大学学生とのワークショップ

NUS（シンガポール国立大学）日本研究会との課題研究ワークショップ

H-Lab・嵯峨野高校・鳥羽高校によるSGH夏季グローバルワークショップ

④ユネスコスクールの申請準備

⑤実践的英語コミュニケーション能力の向上に向けた各種英語検定の積極的な活用

ウ 鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動の推進

①「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」「ソーシャル・インテリジェンス」「京都の風土・世界の風土」におけるTA（大学生・大学院生）募集、選考、決定事務

②鳥羽の学びネットワークと協力して京都フィールドワークを実施

エ 海外勤務者帰国子女特別入学者選抜、外国人教員の採用

海外勤務者帰国子女特別入学者選抜の継続実施 帰国・外国人教員の選考及び採用事務

オ 評価計画

教職員の自己点検・評価に加えて、鳥羽の学びネットワーク、運営指導委員、学校評議員、保護者等のアンケートにより積極的に外部評価を取り入れる。

2 第2年次（平成28年度）

第1年次の教育活動に関する評価を踏まえて、改善を加えながら「イノベーション探究Ⅱ」の研究開発を着実に実施する。申請段階の計画に第1年次の実施内容・評価を合わせて、課題研究を行う体制を整備する。また、SGHコースの専門性を高める取組を行う。

ア 「イノベーション探究Ⅱ」等の研究開発

①総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」、「ソーシャル・インテリジェンス」、「京都の風土・世界の風土」の着実な実施

②SGU等鳥羽の学びネットワークとの継続的な連携の定着

③「イノベーション探究ⅠⅡ」成果発表会

イ 課題設定・解決能力と実践的教養力の育成と指導法の蓄積

第1年次に計画しているイ①～⑤の継続とともに、以下の⑥を計画する。

⑥2年生全員を対象とした海外研修をシンガポール・マレーシア、上海にて実施

ウ 鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動の推進

①外国人TA（大学生・大学院生）の募集・運用システムの定着

②鳥羽の学びネットワークと連携し京都フィールドワークを実施 実施方法、内容の改善

エ 海外勤務者帰国子女特別入学者選抜、外国人教員の採用

- ①海外勤務者帰国子女特別入学者選抜の継続実施 多言語教育活動の充実
- ②第1年次に引き続き、帰国・外国人教員を採用 課題研究の英語による指導を依頼する。

オ 評価計画

教職員の自己点検・自己評価に加えて、鳥羽の学びネットワーク、運営指導委員、学校評議員、保護者等のアンケートにより積極的に外部評価を取り入れる。

3 第3年次（平成29年度）

3年間の研究開発の成果として中間評価を実施する。課題研究「ソーシャル・イノベーション」に関する英語論文を作成し、鳥羽グローバル・サミットを実施し、英語によるプレゼンテーション、ディスカッションを行う。2年間の研究開発を踏まえ、1年生全員をSGH対象に広げるとともに、SGHコースの専門性をさらに高める取組を行う。

ア 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」等の研究開発

①「イノベーション探究Ⅲ」、「グローバル・コミュニケーションⅢ」の着実な実施とともに、第1年次と第2年次の実施内容について検証・評価を行う。課題研究内容について7月に行われる鳥羽グローバル・サミットにおいて発表するとともに、英語論文の作成に取り組む。SGU等国際化を推進する大学へのSGH入試やAO入試においても取組が活かせるように、高大接続を見据えて高校3年間をとおした課題研究ができる教育活動を行う。

②鳥羽グローバル・サミット

「イノベーション探究Ⅲ」における課題研究の成果について、英語によるポスター発表、プレゼンテーション、ディスカッションを行う。生徒・保護者・SGH校・海外のパートナー校・鳥羽の学びネットワーク等に幅広く公開し、研究開発内容の普及を行う。

③「鳥羽SGH成果発表会」

3年間の課題研究について作成した英語論文を冊子化し、研究発表及びプレゼンテーションを行う。生徒・保護者・SGH校・海外パートナー校・鳥羽の学びネットワーク等に幅広く公開し、研究開発内容の普及を行う。

④多文化対話力の向上に向けた各種英語検定等の積極的な活用

イ 課題設定・解決能力と実践的教養力の育成と指導法の蓄積

第2年次に計画しているイ①～③及び⑤⑥の継続とともに、④について以下のように計画する。

④ユネスコスクールとして、世界中のユネスコスクールと連携しながら課題研究を実施

ウ 鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動の推進

①外国人TA（大学生・大学院生）支援による課題研究の実施

②鳥羽の学びネットワークと協力して京都フィールドワークを実施 実施方法、内容の改善

エ 海外勤務者帰国子女特別入学者選抜、外国人教員の採用

- ①海外勤務者帰国子女特別入学者選抜の継続実施 多言語教育活動の充実
- ②第2年次に引き続き、帰国・外国人教員を採用 課題研究の英語による指導を依頼する。

オ 評価計画

課題研究に3年間取り組んだ生徒の変容やこれまでの取組について中間まとめを作成するとともに、教員・保護者・学校・大学・企業・国際機関等の変容についても同様に評価の中間まとめを作成し、第4・5年次の研究開発内容の改善につなげる。

4 第4年次（平成30年度）

第3年次の中間評価をふまえ、グローバル・リーダー育成指導法に関する研究開発の普及とその指導を行うことのできる教員の資質向上に向けたガイドラインの作成を行う。また、研究指定最終年度である第5年次に向けて再検討が必要な箇所について改善し、研究開発の課題を整理する。

1・2年生全員にSGH対象を広げるとともに、SGHコースの専門性をさらに高める取組を行う。

ア 「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等の研究開発

①「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等の着実な実施とともに、第1・2年次に行われる研究開発科目等の教育課程上の配置、つながりについて検証・評価を行う。また、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」とおした課題研究の在り方について、その継続性や教育効果について検証を行う。

②鳥羽グローバル・サミット

「イノベーション探究Ⅲ」におけるこれまでの課題研究の成果について、英語によるポスター発表、プレゼンテーション、ディスカッションを行う。生徒・保護者・鳥羽の学びネットワーク等に幅広く公開し、研究開発内容の普及を行う。

③鳥羽SGH成果発表会

3年間の課題研究について作成した英語論文を冊子化し、研究発表及びプレゼンテーションをおし、生徒・保護者・鳥羽の学びネットワーク等に広く公開し、成果を普及する。

イ 課題設定・解決能力と実践的教養力の育成と指導法の蓄積

第3年次に計画しているイ①～⑥を継続する。

ウ 鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動の推進

①外国人TA（大学生・大学院生）の支援による課題研究の実施

②鳥羽の学びネットワークと協力し京都フィールドワークを実施 実施方法、内容を改善

エ 海外勤務者帰国子女特別入学者選抜、外国人教員の採用

①海外勤務者帰国子女特別入学者選抜の継続実施 多言語教育活動の充実

②第3年次に引き続き、帰国・外国人教員を採用 課題研究の英語による指導を依頼する。

オ 教職員対象課題研究ワークショップ、研究成果報告会

研究開発内容・手法の普及を目的として、教職員対象の課題研究ワークショップを実施し、実際に課題研究の手法を体験しながら広く成果の普及をはかる。また、SGU等鳥羽の学びネットワークから講師を招き、パネルディスカッションをおして研究成果の検証を行う。

カ 評価計画

第3年次に行った中間評価を踏まえた検討項目について、適切な改善・修正がなされているかを評価する。生徒の変容のみならず、教員・保護者・鳥羽の学びネットワークの変容についても可能な限り数値的なデータを収集する。また、第3年次末に卒業した生徒への追跡調査を開始し、グローバル・リーダーとしての資質を育てることができたかについて継続的な評価を実施する。

5 第5年次（令和元年度）

グローバル・リーダーを育成する指導・評価方法のまとめと公表を行うとともに、第4年次に整理した研究開発の課題について、これまでの取組を踏まえた新たな発展的研究開発を実施する。全校生徒をSGH対象とし、学校全体でグローバル・リーダーを育成する体制を確立する。

ア 総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等の研究開発

第4年次に計画したア①～③について、PDCAサイクルの検討を行い、第5年次につなげる。

イ 課題設定・解決能力と実践的教養力の育成と指導法の蓄積

第4年次に計画しているイ①～⑥を継続する。

ウ 鳥羽の学びネットワークと連携した教育活動の推進

①外国人TA（大学生・大学院生）の支援による課題研究の実施

②鳥羽の学びネットワークと協力し京都フィールドワークを実施 実施方法、内容の改善

エ 海外勤務者帰国子女特別入学者選抜、外国人教員の採用

①海外勤務者帰国子女特別入学者選抜の継続実施 多言語教育活動の充実

②第4年次に引き続き、帰国・外国人教員を採用 課題研究の英語による指導を依頼する。

オ 教職員対象課題研究ワークショップ、研究成果報告会

研究開発内容・手法の普及を目的として、教職員対象の課題研究ワークショップを実施し、実際に課題研究の手法を体験しながら広く成果の普及をはかる。また、SGU等鳥羽の学びネットワークから講師を招き、パネルディスカッションをおして研究成果の検証を行う。

カ 評価計画

これまでの研究開発内容に関する最終検証・総括的評価を行う。単なる実践報告ではなく、具体的な成果と課題について、本校が連携するSGU・運営指導委員等から専門的見地に基づく評価を受け、今後発展的に研究を進める内容についても同様に明らかにする。

(4) 研究開発組織の概要

ア 運営指導委員

専門的見地から指導・助言を行う運営指導委員を4名に依頼した。年2回運営指導委員会を実施し、指導・助言を受けてSGH事業の取組を改善した。

運営指導委員長	三谷 宏治 氏	K. I. T. 虎ノ門大学院 教授
運営指導委員	北尾 哲郎 氏	日東薬品工業株式会社 代表取締役社長
運営指導委員	スティーブン ハーダー 氏	京都ノートルダム女子大学 准教授
運営指導委員	内藤 義弘 氏	京都府国際センター 常務理事

イ 校内組織

グローバル・リーダー育成推進部を5名とし、企画、運営、広報等を担当することとした。

前年度と同様に、教職員の希望調査に基づき、4つの研究グループを編成し、教職員はいずれかの研究グループに所属することで学校体制を整え、研究開発を進めた。

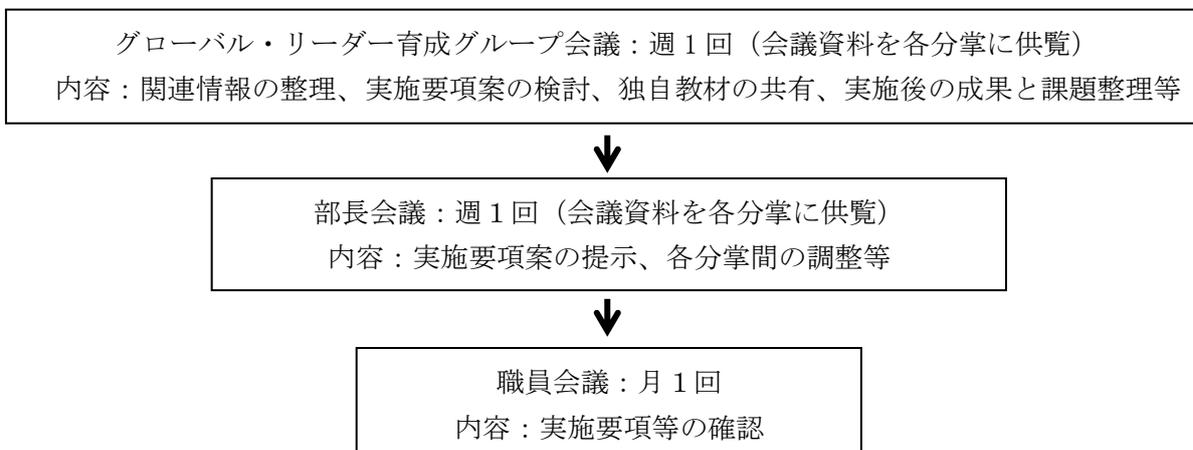
担当副校長、グローバル育成推進部、各研究グループの主任・副主任、事務部の10名が、週1回（年間28回）グローバル・リーダー育成グループ会議を開催し、各グループの研究開発の進捗状況や今後の工程、課題と改善方法等について議論しながら、着実に第5年次の計画を実施した。

会議資料を各学年・分掌内で供覧し、全教職員が情報を共有できるようにした。研究グループごとの会議を年に1回、職員会議後に実施するとともに、必要に応じてグループ内で連携しながら事業を進めた。

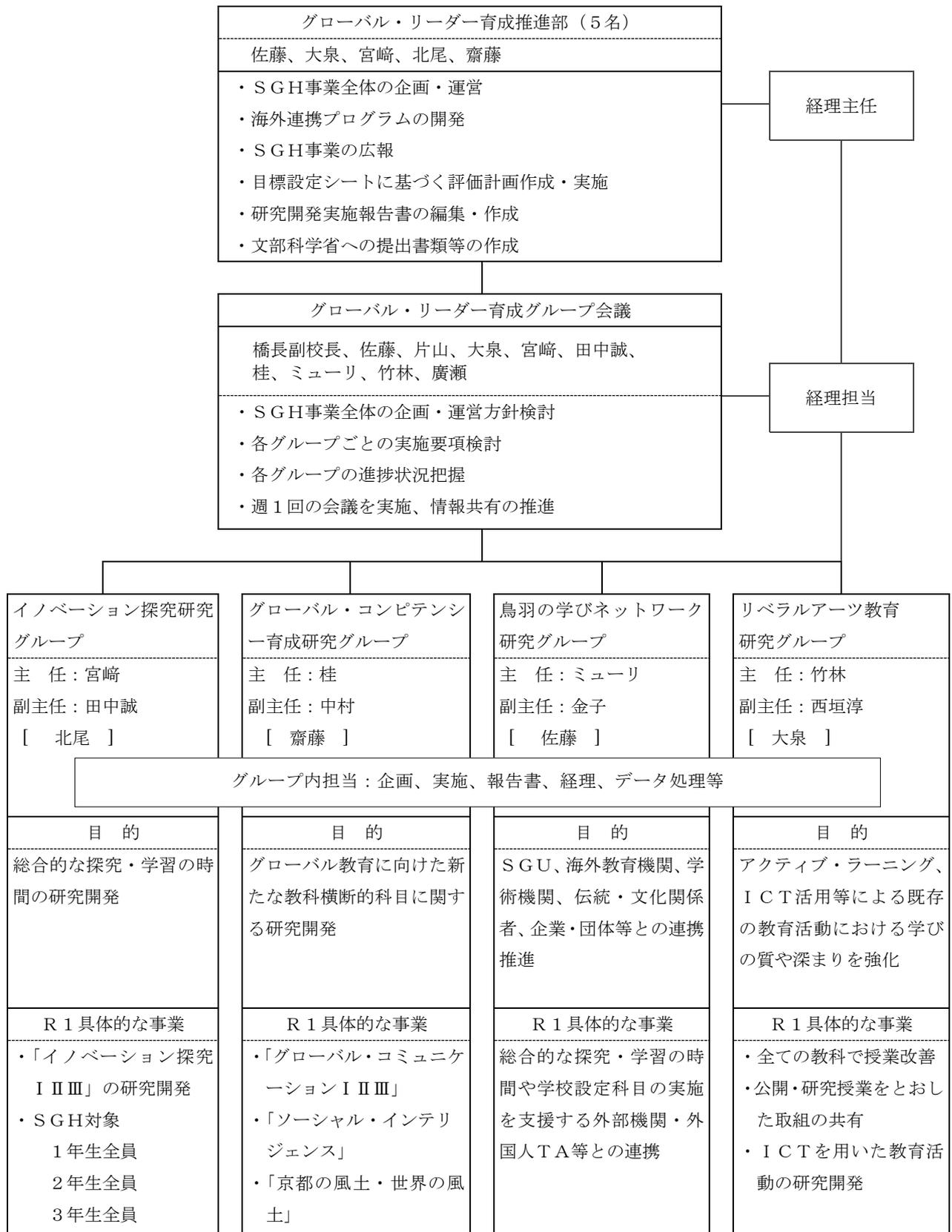
各グループの連携については、各グループの実施内容一覧を年度当初より教職員全員で共有し、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等における課題研究と学校設定科目及び普通科目が横断的になるよう考慮した。また、課題研究を核として、海外研修、各種行事、グローバル思考力コンテスト等と関連を深める取組を行った。

SGH研究開発1年次の平成27年度から、京都府公立学校教員採用選考試験スペシャリスト特別選考により採用された高い専門性や幅広い知見のある外国人教員1名を配置し、「イノベーション探究Ⅲ」、「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」、海外研修等の指導を、英語指導助手1名とともにしている。

【会議の流れ】



(5) 校内組織図・各グループの実施内容一覧



第1学年

(6) 令和元年度第1学年グローバル科SGH年間事業計画

月	学校行事	イノベーション探究研究グループ	グローバル・コンピテンシー育成研究グループ		リベラル アーツ教育 研究グルー プ	グローバル・リーダー育成推進部 イノベーション探究研究グループ 鳥羽の学びネットワーク研究グループ リベラルアーツ教育研究グループ				
		総合的な探究の時間 「イノベーション探究Ⅰ」	学校設定科目 「ソーシャル・インテリ ジェンス」	学校設定科目 「グローバル・コミュニ ケーションⅠ」						
4	上	ガイダンス・趣旨説明			Presentation Skills ① Kyoto Topics					
	中	京都イメージの共有	情報社会の問題点		↓					
	下	探究領域別オリエンテーション	情報セキュリティの確保		Presentation Skills ② Presenting Kyoto	GL	SGH海外研修校内募集(韓国)			
5	上	調査方法を知る (京都ならではの葵祭を題材に)	情報社会における法と個人の責任		↓					
	中		↓		Presentation Skills ③ Presentation Structure	GL	SGH海外研修校内募集(上海)			
	下		第1回考査	コンピュータの仕組み		↓				
6	上	京都文化博物館 講義及びワークショップ「資料論」・「地域遺産論」～文化財を創ろう～	情報のデジタル表現		Presentation Skills ④ Effective Pronunciation					
	中		公開授業	インターネットの仕組みと活用		公開授業	D-2	第1回英検(実用英語技能検定)		
	下			情報の表現と伝達		Presentation Skills ⑤ Rehearsal	C-1	政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリ講習Ⅰ		
7	上	第2回考査	「京都フィールドワーク」に向けて ↓ 各種機器の利用	パワーポイント等のソフトウェア利用		教員研修	D-2 GL	第1回GTEC検定日 片岡製作所 京都インターンシップⅠ		
	中	鳥羽グローバル・サミット		↓	Kyoto Presentations			C-1	鳥羽グローバル・サミット[10日(水)～14日(日)]	
	下	夏季休業							C-1 C-1 D-2	JICA関西ワークショップ 政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリ講習Ⅱ 第1回TEAP
8	上	海外研修(韓国)	「京都フィールドワーク」 探究領域は①地域創造 ② 人権 ③文化財 ④教育 ⑤ 産業					GL	SGH海外研修(韓国)	
	中									
	下			統計とデータ活用の基本		Presentation Skills ⑥ Kyoto Research Issues		GL	SGH海外研修校内募集(台湾)	
9	上	れんが祭	既存のデータから、 データを読み取る手法 活用法、まとめ方な どを学ぶ ↓ データ処理と課題解決							
	中	京都光華女子大学 講義及びワークショップ「チームがうまく機能する秘訣を知る」						C-1 D-2	政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリエントリー提出 第2回TEAP	
	下	研究グループ決定			Presentation Skills ⑦ Asking Questions					
10	上	研究グループ別協働探究学習 京都府立図書館レファレンス・学校貸出	アンケート調査から 集計と課題解決の 実践演習 仮説と検証を 実践する ↓ 仮説の検証					GL D-2	第1回SGH運営指導委員会 第2回英検(実用英語技能検定)	
	中	第3回考査			Presentation Skills ⑧ Giving Comments			C-1 GL	ビジネスプラン・グランプリ最終プラン提出 フランス・ヌヴェール高校来校	
	下	海外研修(上海)		福知山公立大学 講義及びワークショップ「聞き手の心に火を付ける!プレゼンテーション術」		Presentation Skills ⑨ Making Suggestions		GL	SGH海外研修(上海)	
11	上		仮説の検証			研究授業				
	中	研究グループ別協働探究学習	「イノベーション探究Ⅰ」において収集したデータの分析、仮説を検証し整理、まとめる		Kyoto Research Presentations & Discussions		D-2	第3回TEAP		
	下	SGH事業研究発表会	SGH事業研究発表会(2年生のポスターセッションにオーディエンス参加)		Debating Skills ① Debate Format		GL	SGH事業研究発表会		
12	上	第4回考査	発表準備				GL D-2	片岡製作所 京都インターンシップⅡ 第2回GTEC検定日		
	中	SGH全国高校生フォーラム			Debating Skills ② Kyoto Debate Topics		GL	SGH全国高校生フォーラム SGH海外研修成果報告会(終業式、韓国・上海)		
	下	海外研修(台湾)	冬季休業 フィールドワーク				GL	SGH海外研修(台湾)		
1	上	立命館大学課題研究宿泊研修			Debating Skills ③ Making Arguments					
	中	グローバル思考力コンテスト	研究グループ別協働探究学習		↓		A D-2	SGU立命館大学 課題研究宿泊研修 グローバル思考力コンテスト		
	下	校内課題研究発表会	校内課題研究発表会		Debating Skills ④ Rebuttals		A D-2	課題研究発表会 第3回英検(実用英語技能検定)		
2	上	グローバルネットワーク京都交流会	まとめ・省察	報告内容を学校HP上に掲載する			GL A	第2回SGH運営指導委員会 グローバルネットワーク京都交流会		
	中									
	下		「イノベーション探究Ⅱ」に向けて	校内で発表						
3	上	学年末考査	まとめ							
	中							GL	SGH海外研修成果報告会(終業式、台湾)	
	下	WWL・SGH×探究甲子園	春季休業 課題図書読書					A	WWL・SGH×探究甲子園	

第2学年

令和元年度第2学年グローバル科SGH年間事業計画

月	学校行事	イノベーション探究研究グループ	グローバル・コンピテンシー育成研究グループ			リベラル アーツ教育 研究グル ープ	グローバル・リーダー育成推進部 イノベーション探究研究グループ 鳥羽の学びネットワーク研究グループ リベラルアーツ教育研究グループ	
		総合的な学習の時間 「イノベーション探究Ⅱ」	学校設定科目 「京都の風土・ 世界の風土」平日	学校設定科目 「京都の風土・ 世界の風土」土曜	学校設定科目 「グローバル・コミュニ ケーションⅡ」			
4	上	春季休業課題図書読書成果発表会	ガイダンス「風土とは」		Advanced Debate ① Introducing Global Issues			
	中	ガイダンス	テーマ①京都の風土物語 地形・気候からみた京都		↓			
	下	研究グループ決定、仮研究 テーマ決定	テーマ②「京都はなぜ千年以上都市であり 続けられるのか？」 ～Sustainable City Kyoto～ 都市発達史(古代・中世・近世・近代以降)		Advanced Debate ② Evidence and Definitions	GL	SGH海外研修校内募集(韓国)	
5	上	京都光華女子大学大学 講 義及びワークショップ 「鳥羽高校の探究活動(課 題研究)について」	テーマ③世界の民族と宗教		Advanced Debate ③ Effective Arguments	GL	SGH海外研修校内募集(上海)	
	中	第1回考査	国立民族学博物館フィールド ワーク	国立民族学博物館 見学 *「イノベーション 探究Ⅱ」と共催	↓			
6	上	大阪大学講義及びワーク ショップ 「よい研究発表とはどのよ うなものか？」	世界の宗教		Advanced Debate ④ Effective Questions			
	中	公開授業	テーマ④「神仏習合って？」		↓	公開授業	D-2	第1回英検(実用英語技能検定)
	下		テーマ⑤「みんなちがって、大変だ！」 ～民族・宗教の違いから～		Advanced Debate ⑤ Debate Practice		GL	政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリ講習Ⅰ
7	上	第2回考査	第2回考査		↓	教員研修	D-2 GL	第1回GTEC検定日 片岡製作所 京都インターンシップⅠ
	中	鳥羽グローバ ル・サミット	風土的差異を踏まえた異文化協働学習 (「鳥羽グローバル・サミット」に向けて)		Global Issues Debate	√	C-1	鳥羽グローバル・サミット[10日(水)～14日(日)]
8	上	海外研修(韓 国)	夏季休業 アカデミック・ライティング研 修に向けて 「調査シート」作成	夏季休業 アカデミック・ライティング研 修 *「イノベーション探究Ⅱ」と共催			C-1 C-1 D-2	JICA関西ワークショップ 政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリ講習Ⅱ 第1回TEAP
	中		経営者インターンシップ				GL	SGH海外研修(韓国)
	下		大阪大学アカデミック・ライ ティング講座(大阪大学豊中 キャンパス)	テーマ⑥「東南アジアの風土をろうう」 (シンガポール研修に向けて)		Advanced Debate ⑥ Advanced Debate Topics		GL
9	上	れんが祭	東南アジアの地誌		↓			
	中	研究グループ研究テーマ確 定			Advanced Debate ⑦ Reconstruction		C-1 D-2	政策金融公庫ビジネスプラン・グランプリエントリー提出 第2回TEAP
10	上	「研究計画書」Ver.2=ポス ター作成	テーマ⑦「日本に難 民がやってきた！さ あ、どうする？」		Advanced Debate ⑧ Effective Rebuttals		GL D-2	第1回SGH運営指導委員会 第2回英検(実用英語技能検定)
	中	第3回考査	難民の定義と歴史的 経緯 難民の現状と各国の 対応 難民受け入れの意義	課題研究 *「イノベーション 探究Ⅱ」と共催	↓		C-1 GL	ビジネスプラン・グランプリ最終プラン提出 フランス・ヌヴェール高校来校
	下	海外研修(上 海)	ポスターセッションリハーサ ル (大阪大学TA)			Advanced Debate ⑨ Effective Closing	研究授業	GL
11	上	シンガポール 海外研修	SGH事業研究発表会		↓			
	中	SGH事業研究 発表会	ポスターセッション振り返り		Academic Writing ① Report Structure	√	D-2 GL A	第3回TEAP SGH事業研究発表会 京都中小企業家同友会高大社連携研修事業
12	上	第4回考査	第4回考査		↓		GL D-2	片岡製作所 京都インターンシップⅡ 第2回GTEC検定日
	中	SGH全国高校 生フォーラム			Academic Writing ② Background Information		GL	SGH全国高校生フォーラム SGH海外研修成果報告会(終業式、韓国・上海)
	下	海外研修(台 湾)	冬季休業	冬季休業			GL	SGH海外研修(台湾)
1	上	「研究ノート」(個人担当分) 作成			↓			
	中	グローバル思 考力コンテスト	「研究ノート」=研究グル ープ論文作成・完成		Academic Writing ③ Hypothesis		D-2	グローバル思考力コンテスト
2	上	グローバルネッ トワーク京都交流会	3年次の選択に分かれての風土学習 世界史講座 日本史講座 地理講座		↓		D-2	第3回英検(実用英語技能検定)
	中				Academic Writing ④ Explaining Results		GL A	第2回SGH運営指導委員会 グローバルネットワーク京都交流会
	下				Academic Writing ⑤ Conclusions			
3	上	学年末考査			↓	まとめ		
	中	春季休業			Spring Vacation Research Report First Drafts		GL	SGH海外研修成果報告会(終業式、台湾)
下	WWL・SGH×探 究甲子園	英語論文作成					A	WWL・SGH×探究甲子園

第3学年

令和元年度第3学年グローバル科SGH年間事業計画

月	学校行事	イノベーション探究研究グループ	グローバル・コンピテンシー 育成研究グループ	リベラル アーツ教 育研究グ ループ	グローバル・リーダー育成推進部 イノベーション探究研究グループ 鳥羽の学びネットワーク研究グループ リベラルアーツ教育研究グループ	
		総合的な学習の時間 「イノベーション探究Ⅲ」	学校設定科目 「グローバル・コミュニケー ションⅢ」			
4	上					
	中	アカデミック・ライティング演習 I期(英語)	Advanced Academic Writing I			
	下					
5	上					
	中					
	下	第1回考査				
6	上					
	中	公開授業		公開授業	D-2	第1回英検(実用英語技能検定)
	下					
7	上	第2回考査		教員研修	D-2	第1回GTEC検定日
	中	鳥羽グローバル・サミット	Global Issues Discussion		C-1	鳥羽グローバル・サミット [10日(水)～14日(日)]
	下				D-2	第1回TEAP
8	上					
	中					
	下	アカデミック・ライティング演習 II期(英語)	Advanced Academic Writing II			
9	上	れんが祭				
	中				D-2	第2回TEAP
	下					
10	上				GL	第1回SGH運営指導委員会
	中	第3回考査			D-2	第2回英検(実用英語技能検定)
	下				GL	フランス・ヌヴェール高校来校
11	上			研究授業		
	中				D-2	第3回TEAP
	下	SGH事業研究 発表会				
12	上	第4回考査			D-2	第2回GTEC検定日
	中					
	下					
1	上					
	中					
	下				D-2	第3回英検(実用英語技能検定)
2	上				GL	第2回SGH運営指導委員会
	中					
	下					
3	上	卒業式		まとめ		
	中					
	下					

(7) 仮説を検証するための指標

目的 未来を見ずえた新たな価値を創り出す価値創造力、異文化コミュニケーションを通じて課題に取り組む協働力、困難な課題と向き合い解決する突破力、多様な価値観を尊重する寛容力、幅広い見識を持ち広い視野で社会を俯瞰する教養力を備え、持続可能な豊かな社会を創造することに貢献するグローバル・リーダーを育成する。

仮説1 総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」及び学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」等は、課題の発見・分析能力、多文化協働による主体的な課題解決能力を高める手段として有効である。

分野	評価規準 (SGH対象生徒に占める割合) 25%未満を1、25%以上を2、50%以上を3、75%以上を4と評価	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度									
		Aのみ		Aのみ		A・B		Aのみ		A・B									
		%	評価																
1 イノベーション探究Ⅰ	校内課題研究発表会でA評価	33.2	2	43.8	2	97.3	4	17.0	1	89.5	4	36.2	2	97.8	4	45.3	2	93.8	4
	授業アンケート各項目「できた」の平均	33.0	2	31.3	2	91.8	4	38.6	2	90.4	4	45.8	2	93.7	4	35.1	2	81.8	4
2 イノベーション探究Ⅱ	ポスターセッションでA評価	—	—	29.9	2	80.8	4	35.1	2	84.2	4	37.5	2	95.8	4	51.7	3	82.5	4
	授業アンケート各項目「できた」の平均	—	—	23.2	1	87.4	4	24.1	1	86.1	4	48.1	2	94.6	4	37.2	2	93.9	4
3 イノベーション探究Ⅲ	英語論文がA評価	—	—	—	—	—	—	27.5	2	93.8	4	58.0	3	100	4	89.5	3	100	4
	授業アンケート各項目「できた」の平均	—	—	—	—	—	—	34.8	2	86.2	4	32.1	2	86.6	4	43.7	2	89.8	4
4 グローバル・コミュニケーションⅠ	授業アンケート各項目「そうである」の平均	23.3	1	17.4	1	80.1	4	33.9	2	86.0	4	48.3	2	94.0	4	49.7	2	94.2	4
	Socratic Seminar でA評価	—	—	26.6	2	87.3	4	24.7	1	80.3	4	36.3	2	88.3	4	71.4	3	92.9	4
5 グローバル・コミュニケーションⅡ	授業アンケート各項目「そうである」の平均	—	—	29.6	2	83.8	4	27.3	2	83.2	4	39.0	2	90.1	4	33.6	2	89.8	4
	授業アンケート各項目「そうである」の平均	—	—	—	—	—	—	43.8	2	87.1	4	31.1	2	86.4	4	40.1	2	95.7	4
7 ソーシャル・インテリジェンス	授業アンケート各項目「あてはまる」の平均	43.7	2	45.5	2	90.8	4	51.2	3	91.7	4	54.5	3	93.0	4	44.5	2	86.8	4
8 京都の風土・世界の風土	授業アンケート各項目「そうである」の平均	—	—	23.3	1	87.1	4	30.3	2	86.3	4	48.1	2	95.1	4	35.7	2	92.1	4
仮説1の総合評価 (4点満点)		1.75		1.70		4.00		1.92		4.00		2.23		4.00		2.25		4.00	

仮説2 京都府海外サテライト校への中期留学等の方策は、新しい視点と高い言語能力を確立する上で有効である。

分野	評価規準 (SGH対象生徒に占める割合) 25%未満を1、25%以上を2、50%以上を3、75%以上を4と評価	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度									
		Aのみ		Aのみ		A・B		Aのみ		A・B									
		%	評価																
1 中期留学	参加者に占める英検準2級以上取得者数	100.0	4	66.7	3	—	3	100.0	4	—	4	100.0	4	—	4				
2 海外研修 (インターンシップを含む)	参加者に占める英検準2級以上取得者数	50.0	3	44.0	2	—	2	65.3	3	—	3	72.4	4	—	4				
	国別アンケート各項目「そうである」の平均	81.5	4	76.6	4	93.1	4	87.9	4	97.6	4	73.8	3	95.2	4				
3 鳥羽グローバル・サミット	参加者アンケート各項目「そうである」の平均	63.3	3	39.6	2	87.6	4	37.4	2	86.1	4	40.3	2	88.5	4				
4 英検	1年生準2級以上の割合 (普通科G・グローバル科)	17.5	1	53.8	3	—	3	63.8	3	—	3	55.0	3	—	3				
	2年生準2級以上の割合 (普通科G・グローバル科)	—	—	26.4	2	—	2	54.4	3	—	3	77.2	4	—	4				
	3年生準2級以上の割合 (普通科G・グローバル科)	—	—	—	—	—	—	31.5	2	—	2	60.5	3	—	3				
5 GTEC	1年生A2以上 (普通科G・グローバル科)	23.8	1	43.8	2	—	2	66.7	3	—	3	98.7	4	—	4				
	2年生A2以上 (普通科G・グローバル科)	—	—	19.2	1	—	1	86.2	4	—	4	100.0	4	—	4				
6 外部模試	1年生A2以上 (普通科G・グローバル科)	26.3	2	29.1	2	—	2	25.3	2	—	2	33.8	2	—	2				
	2年生A2以上 (普通科G・グローバル科)	—	—	10.4	1	—	1	16.9	1	—	1	40.3	2	—	2				
	3年生A2以上 (普通科G・グローバル科)	—	—	—	—	—	—	12.6	2	—	2	33.3	2	—	2				
仮説2の総合評価 (4点満点)		2.57		2.20		2.40		2.75		2.92		3.08		3.33		3.08		3.33	

仮説3 鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育は、広い視野でグローバル社会を俯瞰できる教養力を育成するために有効である。

分野	評価規準 (対象者に占める割合) 25%未満を1、25%以上を2、50%以上を3、75%以上を4と評価	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度									
		Aのみ		Aのみ		A・B		Aのみ		A・B									
		%	評価																
1 JICA関西	参加者アンケート各項目「そうである」の平均	45.2	2	60.0	3	95.3	4	52.8	3	88.3	4	47.8	2	90.5	4				
2 高校生ビジネスプラン・グランプリ	参加者アンケート各項目「そうである」の平均	—	—	55.0	3	96.0	4	60.7	3	98.1	4	67.6	3	93.8	4				
3 グローバル思考力コンテスト	アンケート各項目「そうである」の平均	—	—	31.4	2	85.2	4	38.1	2	88.5	4	46.0	2	87.4	4				
4 生徒アンケート (1月)	Q19、Q20で「そう思う」の平均	42.5	2	46.8	2	81.3	4	39.0	2	79.6	4	34.0	2	79.6	4				
5 教員アンケート (1月)	各項目「思う」の平均	8.3	1	41.5	2	77.8	4	46.5	2	87.9	4	65.3	3	93.7	4				
6 学校経営計画	学習指導領域「十分達成できた」の平均	4.2	1	4.2	1	70.4	3	38.2	2	92.1	4	46.6	2	95.3	4				
仮説3の総合評価 (4点満点)		1.50		2.17		3.83		2.33		4.00		2.33		4.00		2.50		4.00	

■仮説2の4～6については、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」の履修生徒が対象 (専門学科グローバル科は平成29年度開講)

(8) 教職員アンケート結果

- 1 実施時期 平成28年1月実施 (回答数54名)
 平成28年7月実施 (回答数71名) 平成29年2月実施 (回答数68名)
 平成29年7月実施 (回答数81名) 平成30年1月実施 (回答数82名)
 平成30年10月実施 (回答数77名) 平成31年1月実施 (回答数78名)
 令和元年10月実施 (回答数81名) 令和2年1月実施 (回答数78名)

- 2 回答方法 4 思う 3 やや思う 2 やや思わない 1 思わない 0 わからない

質問	内容	H28.1月	H28.7月	H29.2月	H29.7月	H30.1月	H30.10月	H31.1月	R1.10月	R2.1月	前回調査との増減
		平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	平均値	
①	学校全体として体制を整え、組織的に取り組んでいると思いますか。	2.0	2.8	3.2	3.2	3.4	3.4	3.7	3.1	3.4	0.3
②	S G H事業の実施により、御自身の意識の変容がみられましたか。	2.7	2.5	3.0	3.1	3.2	3.4	3.4	3.0	3.2	0.2
③	教育課程の編成は、5つの力を育てるのに適切だと思いますか。 ※育む5つの力…価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力	1.4	2.1	2.9	3.0	3.1	3.4	3.4	3.1	3.5	0.4
④	「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」の取組によって、現代社会に対する関心と深い教養、論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション能力、問題解決能力、行動力を育成していると思いますか。	1.8	2.2	3.1	3.1	3.2	3.4	3.6	3.0	3.5	0.5
⑤	S G Hによる取組が、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業になっており、学校全体の授業改善になっていると思いますか。	1.9	2.3	2.8	3.0	3.1	3.4	3.4	3.0	3.3	0.3
⑥	外国語教育に関する取組は、課題研究との関連性が明確であり、研究課題に取り組むために必要な能力を向上させるための効果的な取組となっていると思いますか。	1.2	1.9	2.5	2.9	2.8	3.2	3.3	2.9	3.1	0.2
⑦	英語等も含めたグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、探究型学習、またフィールドワークや成果発表等のための海外研修等が、課題研究を実施するための効果的な取組となっていると思いますか。	2.3	2.7	3.0	3.2	3.4	3.5	3.6	3.3	3.5	0.2
⑧	地域や学校の特性を生かした鳥羽の学びネットワーク等の取組は、課題研究を中心とした学校全体の取組として効果的に行われていると思いますか。	2.1	2.2	2.8	3.1	3.0	3.4	3.5	3.1	3.5	0.4
⑨	次の3つの仮説に基づく成果や課題の分析が適切に行われていると思いますか。 ① 総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」及び学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」等は、課題の発見・分析能力、多文化協働による主体的な課題解決能力を高める手段として有効である。 ② 京都府海外サテライト校への中期留学等の方策は、新しい視座と高い言語能力を確立する上で有効である。 ③ 鳥羽の学びネットワークを活用したリベラルアーツ教育は、広い視野でのグローバル社会を俯瞰できる教養力を育成するために有効である。	1.1	1.9	3.0	3.1	3.4	3.5	3.4	3.1	3.3	0.2
⑩	校外向けの発表会や説明会・HP・パンフレット等を用いて、研究成果の普及に積極的に取り組んでいると思いますか。	1.7	3.1	3.6	3.6	3.5	3.7	3.8	3.6	3.7	0.1
全平均		1.8	2.4	3.0	3.1	3.2	3.4	3.5	3.1	3.4	0.3

4 質問ごとの評価分布

質問	4 思う 3 やや思う 2 やや思わない 1 思わない 0 わからない				
	4	3	2	1	0
①	42.0	37.0	14.8	3.7	2.5
②	35.8	45.7	7.4	4.9	6.2
③	42.0	43.2	4.9	1.2	8.6
④	48.1	33.3	3.7	1.2	13.6
⑤	39.5	43.2	4.9	2.5	9.9
⑥	40.7	39.5	4.9	1.2	13.6
⑦	55.6	35.8	1.2	0.0	7.4
⑧	44.4	42.0	4.9	0.0	8.6
⑨	46.9	37.0	2.5	3.7	9.9
⑩	65.4	30.9	2.5	0.0	1.2



質問	4 思う 3 やや思う 2 やや思わない 1 思わない 0 わからない				
	4	3	2	1	0
①	55.1	32.1	9.0	1.3	2.6
②	43.6	47.4	2.6	2.6	3.8
③	53.8	42.3	1.3	1.3	1.3
④	61.5	33.3	0.0	1.3	3.8
⑤	44.9	47.4	1.3	2.6	3.8
⑥	44.9	39.7	3.8	0.0	11.5
⑦	62.8	33.3	1.3	0.0	2.6
⑧	55.1	41.0	2.6	0.0	1.3
⑨	55.8	35.1	1.3	1.3	6.5
⑩	79.5	17.9	0.0	1.3	1.3

3 具体的な活動内容

(1) 研究開発単位Ⅰ：総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」

ア 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」（総合的な探究の時間・1年・1単位）

1 ねらい

「イノベーション探究Ⅰ」ー地域再発見プログラムーでは、「京の智」を再発見・発信する過程において、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に探究学習を行い、価値再認識力を高め、課題発見能力・課題分析能力を向上させる。また、「鳥羽の学びネットワーク」を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、「京都フィールドワーク」、またSGUである立命館大学との連携をとおして、探究学習を効果的に進める基本的な研究手法＝「作法」を獲得し、協働的に学ぶ姿勢を獲得する。

地域社会を知ることは民主主義の基本で、課題研究＝主権者教育であるとの認識のもと、次の目標を掲げた。

- 1 対話をとおして「京の智」を再発見し、自己の変容を理解し、他者の気づきを促す。
- 2 ソーシャル・イノベーションの主体者として地域を知りローカルな課題を発見（現状探究）し、グローバルな課題意識を形成する。
- 3 価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を養う。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度、地域性が薄くなりがちで、探究領域については検討の余地があると総括された。つまり研究課題と地域の社会的課題との関連が薄かった。この指摘を受け、「探究領域」という枠を「探究の切り口・視点」と改めた。そして、①地域創造＝まちづくり ②教育＝ひとづくり ③産業＝ものづくり ④文化財＝かちづくり の「4つの切り口・視点」からワークショップを行い、個人の興味・関心に応じて、地域の社会的課題に切り込み、個人のフィールドワークを経てチーム研究へと進んだ。その結果、地域の社会的課題を研究課題として発見することが容易になった。また、書籍の活用が不十分であったとの総括を受け、研究に際して必ず論文にあたることを義務づけた。活用という点では不十分ながらも、論文検索の手法を身に付けたことは、将来を考えると大切な一歩であった。さらに、「イノベーション探究Ⅱ」とのつながりを意識して、次の①～⑤の流れを整理した。①Step1「4つの切り口・視点」からのワークショップにより地域の社会的課題を発見する。②Step2「研究テーマ設定シート」により地域の社会的課題を研究課題化する。③Step3「京都フィールドワーク」により地域の社会的課題に触れる。④Step4「研究計画書」によりチームで役割分担し協働研究を進める。⑤Step5「研究スライド」により発信・提案する。以上の流れにより研究課題発見のプロセスを確立した。今後は、「ソーシャル・インテリジェンス」との連携をより重視し、精緻な情報分析・効果的な情報発信を可能にしたい。

3 概要（実践）

(1) 年間計画

①地域創造＝まちづくり ②教育＝ひとづくり ③産業＝ものづくり ④文化財＝かちづくり の「4つの切り口・視点」から、個人の興味・関心に応じて、地域の社会的課題に切り込み、個人のフィールドワークを経てチーム研究へと進む。各段階で「研究テーマ設定シート」・「研究計画書」・「研究スライド」の各様式にしたがって研究を進めることで、研究手法を身につける。年間概要は表－1のとおりである。

(2) 評価の方法

「京の智」の再発見をとおした課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に探究学習を行ったプロセスを、「研究テーマ設定シート」や「研究計画書」等で指導者が評価したほか、「研究スライド」を用いた校内課題研究発表会においては、「評価票」（表－2）を用いて生徒相互評価及び自己評価、最終的な指導者による評価を行った。

表-1 「イノベーション探究Ⅰ」年間の概要（各回とも2時間連続授業）

段階	学期	回	月日	内容	海外研修	教科横断	連携	
「京の智」に触れてみよう	1学期	1	4月20日(土)	ガイダンス・趣旨説明、「京都」イメージの共有				
		2	4月27日(土)	探究切り口別ワークショップ「①地域創造=まちづくり」 講義及びワークショップ 「『課題研究』と『まちづくり』の間を考える」 京都大学 神吉紀世子教授				
		3	5月11日(土)	探究切り口別ワークショップ「②教育=ひとづくり、③産業=ものづくり」				
		4	5月25日(土)	探究切り口別ワークショップ「④文化財=かちづくり」 講義及びワークショップ 「かちづくり」 京都文化博物館 村野正景・西山剛学芸員				
		5	6月8日(土)	課題研究を知る・仮研究テーマ設定				
		6	6月22日(土)	講義及びワークショップ 「フィールドワーク&ワークショップ入門」 福知山公立大学 杉岡秀紀准教授				
		7	7月6日(土)	「京都フィールドワーク」に向けて				
				7月10日(水)~14日(日)				鳥羽グローバル・サミット
取り入れよう	夏休み			「京都フィールドワーク(夏季)」(個人) 探究切り口:①地域創造=まちづくり ②教育=ひとづくり ③産業=ものづくり ④文化財=かちづくり 探究手法:インタビュー調査、参与観察→想いを聞き出す				
「京の智」を出し合おう	2学期	8	9月14日(土)	研究グループ編成、「京都フィールドワーク」の成果確認 「研究計画書」作成	SGH 韓国研修		高 大 社	
		9	9月21日(土)	講義及びワークショップ 「チームで課題研究をする前に-Team Building-」 京都光華女子大学 乾明紀准教授				
				10月12日(土)	台風のため休業			
		10	10月26日(土)	講義及びワークショップ 「聞き手の心に火を付ける!プレゼンテーション術」 福知山公立大学 杉岡秀紀准教授 (午後)京都府立図書館レファレンス(チーム代表者)	SGH 上海研修			
				11月2日(土)				(午後)2019年度高大社連携研修事業
		11	11月9日(土)	「研究計画書」作成				
				11月22日(金)				SGH事業研究発表会(2年生のポスターセッションにオーディエンス参加)
		12	12月7日(土)	「研究計画書」作成 (午後)遠隔システムを利用した修徳学区レポート				
		13	12月14日(土)	「研究計画書」・「研究スライド」作成				
「京の智」を伝えよう	3学期			探究まとめ 「京都フィールドワーク(冬季)」(研究チーム)…必要に応じて	SGH 台湾研修			
		14	1月11日(土)~12日(日)	「イノベーション探究Ⅰ」課題研究宿泊研修「研究スライド」完成 於:立命館大学びわこくさつキャンパス				
		15	1月25日(土)	発表リハーサル				
		16	2月1日(土)	「グローバルネットワーク京都交流会」(京都府教育委員会主催) 於:京都工芸繊維大学				
		17	2月22日(土)	校内課題研究発表会				
	春休み		3月下旬	春休み課題(課題図書(新書))				

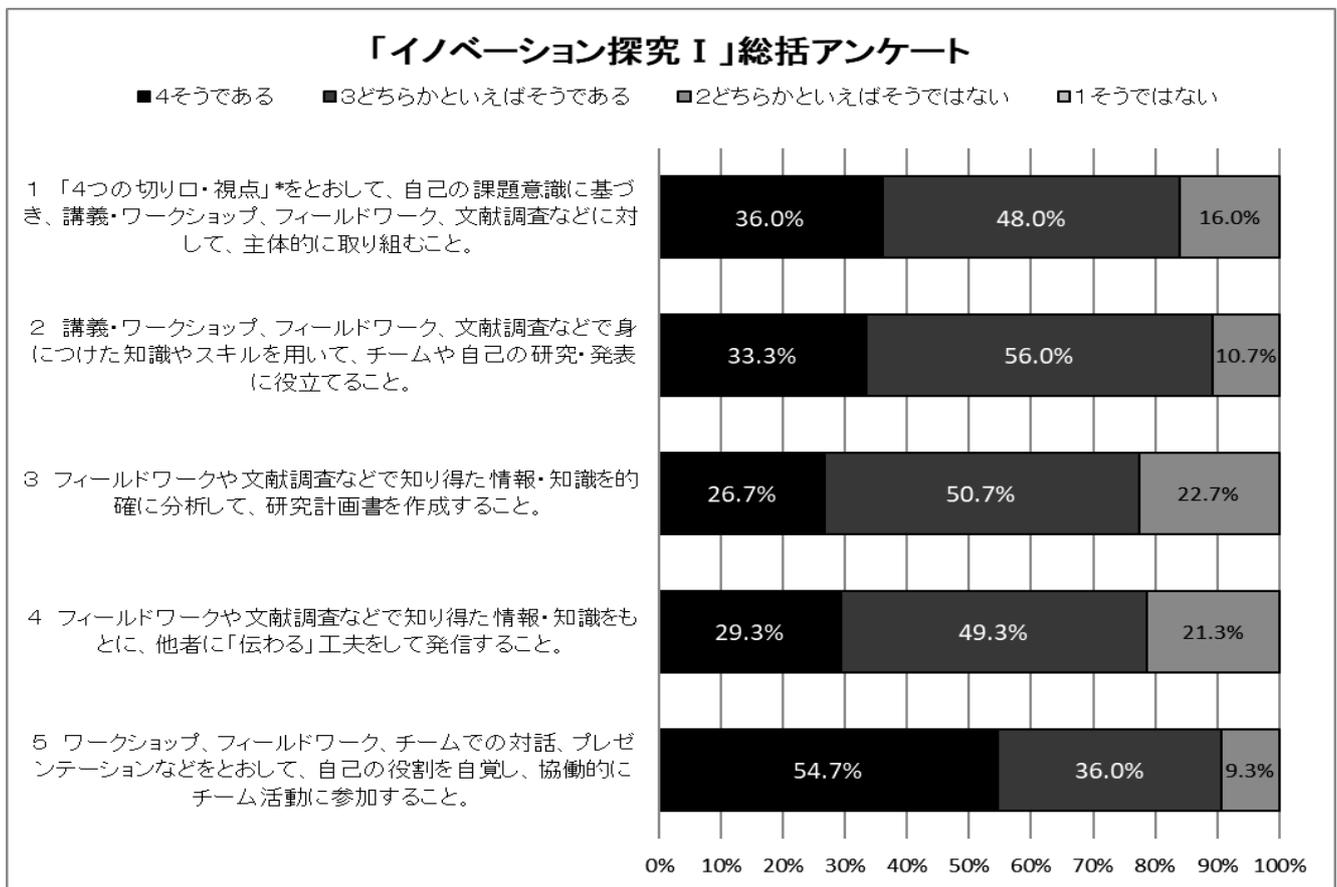
表-2 「イノベーション探究 I」 校内課題研究発表会評価票

令和元年度 イノベーション探究 I 校内課題研究発表会評価票

評価者							令和2年2月22日(土)
発表テーマ		—					
		発見力	分析力・調査力		表現力・協働力		
		研究の動機・課題の背景	リサーチクエスト(RQ)	仮説	提案	研究スライド	発表・質疑応答
関連する「研究計画書」の項目番号		1	4	5	7	全般	全般
評価基準	A: 完璧 (Great)	課題の現状を十分に理解し、「京の智」を再発見し、研究を進めようとしている。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的な問い(RQ)を立てている。	RQに対するオリジナリティのある仮説を立てている。	高校生の視点から、オリジナリティのある複数の提案ができています。	スライドに「伝わる」工夫がなされ、「聞き手の心に火を付ける！」内容である。	グループの全員が発表と質疑応答に参加し、質疑応答によって、参加者の知的好奇心が一層刺激されている。
	B: 合格 (Good)	課題の現状を理解し、「京の智」の再発見に挑み、研究を進めようとしている。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的な問い(RQ)を立てている。	RQに対する仮説を立てている。	高校生の視点から、複数の提案ができています。	スライドに工夫がなされ、聞き手に伝わる内容である。	発表と質疑応答を、グループ内で役割分担して行うことができています。
	C: がんばろう (Needs Work)	課題の現状理解が不十分で、一面的な研究になっている。	研究テーマについて、課題を分析・調査するための具体的な問い(RQ)を立てられていない。	RQに対する仮説を立てられていない。	提案が安易である。	スライドの工夫が不十分で、聞き手にあまり伝わらない。	発表と質疑応答における役割分担があいまいで、一部の人が行っている。
評価記入欄 A~C							
よりよい研究にするための方策							

4 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・リサーチクエスチョン（RQ）が大きすぎると自分たちでは解決に導くのが難しくなるので、焦点を絞って深く明確に調べられるようにしたい。
- ・調べていく中で、テーマやRQを見直してもいいことを覚えた。課題を見つめ直すことも研究の一つだとわかった。
- ・役割分担の大切さを感じた。周りのメンバーと今何をやっているのかを共有する必要があったので、周りを気にする力は確実についたと感じるし、間違えているところがあれば、他のメンバーに伝える力も身についたと思う。
- ・違う考えを持つ人と何度も話し合うことで互いに納得できるようにする力を身につけられた。
- ・相手に伝えるには何が必要かを深く学ぶことができた。福知山公立大学の杉岡秀紀先生によるプレゼンテーションについての授業が活かせた。また、立命館大学のTAによるアドバイスを踏まえてよりよいスライドができた。今後もプレゼンテーションを練習し、表現力を身につけたい。

(3) 分析できる成果

アンケートに際して、より具体的に自分自身を客観視させるため、質問内容を大きく変えない範囲で質問項目にキーワードを入れた。質問5では「4 そうである」の回答が昨年度よりもやや増加している。このことは、本年度「グループ研究」ではなく「チーム研究」をめざして取り組んだ成果であると考えられる。

生徒の感想のとおり、探究活動をとおして、チームでの研究活動をする難しさを実感し、悪戦苦闘しながら乗り越えようとした姿がうかがえる。その中で、リーダーの役割についても考えることができたようである。また、「テーマ設定→RQ設定→調査」の流れが一度のみで終わるのではなく、何度も繰り返す必要があることに気づいた生徒もいる。この繰り返しを「研究計画書」に落とし込むことが次年度の指導者側の課題である。

5 課題

質問1から質問5の全てで、「2 どちらかといえばそうではない」の回答が昨年度よりも増加した。特に質問3と4において、この回答が20%以上となった。調査後の分析や発信に課題意識がある生徒が一定数存在することを示している。今後、この部分に時間をかけるなどの改善が求められる。

地域創造＝まちづくり、教育＝ひとづくり、産業＝ものづくり、文化財＝かちづくりの「4つの切り口・視点」から、地域の社会的課題に切り込み、個人のフィールドワークを経て研究課題を発見し、チーム研究へと進む中で、「京の智」を再発見・再発信する流れは確立した。また、文献調査の指導体制も一定整備できた。しかし、チーム研究の要となるリーダーを中心とした対話が不十分で、チーム研究の型はあるものの、筋のおったストーリー性のある研究にはなっていない感は否めない。協働力のある研究チームをいかに育成するかが問われる段階にきている。原点回帰し、グローバル・リーダー育成の意識を再度指導者側が意識する必要がある。



探究切り口別ワークショップ
「①地域創造＝まちづくり」



探究切り口別ワークショップ
「④文化財＝かちづくり」

イ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」（総合的な学習の時間・2年・1単位）

1 ねらい

1年次の地域再発見プログラムにおいて培った価値の発見・発信力を研磨するため、「グローバル・ジャスティスプログラム」として、公正・正義の視点を持ってグローバル・イシューを発見し、国家・民族・宗教を超えた課題を探究する。

目標は次の4点である。1年次のねらいに「現状探究」を、2年次のねらいに「原因探究」を位置づけている。

- 1 異文化理解・多文化協働を通じて、グローバル・リーダーとして必要な社会性を習得する。
- 2 ソーシャル・イノベーションの主体者としての意識を高める。
- 3 価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を向上させる。
- 4 課題発見や原因探究をとおして、仮説構築力をつける。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

(1) 鳥羽の探究プロセスの完成

昨年度に確立した、次の①～⑤の探究プロセスを今年度も踏襲し、必要に応じて微調整を加えた。

①Step1「研究テーマ（仮）決定シート」を作成し、「ツッコミシート」で仮研究テーマに磨きをかける。②Step2「研究計画書 Ver. 1」を作成し、大阪大学アカデミック・ライティング講座に個人の「調査シート」を持参し、リサーチクエスチョンに磨きをかける。③Step3「研究計画書 Ver. 2 =ポスター」を作成し、ポスターセッションをとおして仮説に磨きをかける。④Step4「研究計画書 Ver. 3 =研究概要」を作成し、課題発見→リサーチクエスチョンの掘り下げ→仮説構築 までの流れを確認する。⑤Step5「研究ノート」を作成し、3年次の「英語論文」へと接続する。

今年度の改善点として、課題研究の質的向上に重点を置いた。①Step1において、昨年度使用していた「先行研究検索シート」に加え、今年度は「先行研究調査シート」を新たに作成し、先行研究論文から「客観的な事実」と「著者の意見」を峻別して情報を収集する活動を行った。

(2) 高大社連携の継続化・深化

これまで本校の課題研究を協働で作りに上げてきた、大学・研究機関・社会教育機関・企業の方々と、今年度も定期的に打合せを行い、昨年度以上に、高大社連携とカリキュラムとの接続が強化された。次年度に向けた構想も本年度内に練り始めることができ、高大社連携を深化することができた。

(3) 「京都の風土・世界の風土」との連携

学校設定科目である「京都の風土・世界の風土」の授業で、グローバル・イシューの考察に資する民族・宗教等の内容や難民問題に関するテーマ学習を昨年度に引き続き実施した。難民問題に関するテーマ学習では、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のパンフレットに書かれた内容を構造的に分析し、課題研究と同じ思考プロセスで考察するワークを行った。課題研究の時間不足を解消するべく、今年度も連携を強化して課題研究の深化に繋げた。

(4) 「グローバル・コミュニケーションⅡ」との連携

学校設定科目である「グローバル・コミュニケーションⅡ」の授業で1学期に、「イノベーション探究Ⅱ」の研究テーマに関連した論題でディベートを継続的に行った。7月の鳥羽グローバル・サミットでは、海外大学生及び留学生がジャッジ役となって生徒のディベートを評価し、英語で論理的に物事を説明する力を磨くことができた。

(5) 「イノベーション探究Ⅲ」との接続

昨年度に引き続き、2年次に作成した「研究ノート」を「英語論文」にする課題を春休みに課した。また、「研究ノート」作成と並行して、「グローバル・コミュニケーションⅡ」で英語でのパラグラフライティングの手法を指導することで、3年次の「英語論文」作成への円滑な接続を図った。

(6) 企業連携の継続化

今年度も京都中小企業家同友会にお世話になり、2つの研究グループが企業研究を行った。8月に経営者インターンシップを実施し、経営者に密着して企業課題について学び、社員の方々とともにディスカッションを行った。11月には「2019年度高大社連携研修事業」（京都中小企業家同友会主催）

に本校生が参加し、研究内容について発表したほか、「学生が考えた！会社が魅力的に見え心惹かれる求人情報とは!？」というテーマで、経営者・大学生とグループ討論を行った。

3 概要（実践）

(1) 年間計画

学期	回	月日	内容	海外研修	教科横断	連携		
1 学期	1	4月20日(土)	春休み課題図書読書成果発表会、ガイダンス(趣旨説明)		グ ロ ー バ ル ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン Ⅱ 京 都 の 風 土 ・ 世 界 の 風 土	高 大 高 大 高 社 高 大 社		
	2	4月27日(土)	研究グループ決定・研究テーマ検討					
	3	5月11日(土)	講義及びワークショップ 「鳥羽高校の探究活動(課題研究)について」 京都光華女子大学 乾明紀准教授					
	4	5月25日(土)	「研究計画書」Ver.1作成					
	5	6月8日(土)	講義及びワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」 大阪大学 進藤修一教授 柿澤寿信講師					
	6	6月22日(土)	「研究計画書」Ver.1作成					
	7	7月6日(土)	国立民族学博物館フィールドワーク ①ワークショップ「人間らしさとは何かー認知革命とピーズー」 人類文明誌研究部 池谷和信教授 ②特別展示・常設展示見学 *「京都の風土・世界の風土」との共催(1~4限)					
		7月10日(水)~14日(日)	鳥羽グローバル・サミット			高 大 社		
夏 休 み		8月初旬	経営者インターンシップ* 関連2グループ参加			高 社		
			大阪大学アカデミック・ライティング講座「調査シート」作成、読書					
		8月20日(火)	大阪大学豊中キャンパス 講義及びワークショップ「アカデミック・ライティング講座」 大阪大学 堀一成准教授 坂尻彰宏准教授 進藤修一教授 大阪大学TA6名			高 大		
2 学 期	8	9月14日(土)	「研究計画書」Ver.2作成	SGH 韓国研修	グ ロ ー バ ル ・ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン Ⅱ 京 都 の 風 土 ・ 世 界 の 風 土	高 大 社		
	9	9月21日(土)						
		10月12日(土)	台風のため休業(2/22へ)					
		11月2日(土)	午後 京都中小企業家同友会高大大社連携研修事業 (会場:京都経済センター)* 関連6グループ参加	SGH 上海研修				
	10	11月9日(土)*1~4限	ポスターセッション最終準備 (ポスター及び原稿修正、想定問答集作成)					
		11月11日(月)~15日(金)	シンガポール研修	シンガポール 研修				
	11	11月22日(金)	SGH事業研究発表会 ポスターセッション(課題研究中間発表) 大阪大学 柿澤寿信講師 金泓謹特任助教 大阪大学TA5名					高 大 社
12	12月7日(土)	「研究計画書」Ver.3作成						
13	12月14日(土)	「研究計画書」Ver.3完成						
冬 休 み			12月22日(日)全国高校生フォーラム(東京国際フォーラム) *代表1グループ参加(英語発表)	SGH 台湾研修				
			「研究ノート」考察部分(個人担当)作成					
3 学 期	14	1月11日(土)	「研究ノート」作成		京 都 の 風 土 ・ 世 界 の 風 土	高 大 社		
	15	1月25日(土)	「研究ノート」作成					
	16	2月1日(土)	「研究ノート」完成 グローバルネットワーク京都交流会(京都工芸繊維大学) ポスターセッション*代表3グループ参加					
	17	2月22日(土)	「研究ノート」合評会 まとめ・省察、「イノベーション探究Ⅲ」に向けて					
		3月21日(土)	WWL・SGH×探究甲子園2020(関西学院大学) ※開催中止 プレゼンテーション(英語発表)*代表1グループ参加 ポスターセッション*代表1グループ参加					
春 休 み			英語論文作成					

(2) 具体的な活動内容

ア 講義及びワークショップ「鳥羽高校の課題研究について」(写真1)

鳥羽高校の課題研究がなぜ仮説構築までを主眼としているかについて理解した後、仮説構築に向けたリサーチクエスチョンの設定を研究グループごとに行った。講師の先生が各グループに直接助言していただいたことで、リサーチクエスチョンの質を向上させることができた。

イ 講義及びワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」(写真2)

①研究目的が明確であること ②思考に分析と論理が含まれていること ③的をしばった調査ができていていること 以上3点がよい研究発表の条件であることが理解できた。ワークショップ中に「主題」・「トピック」・「仮説」について考え、研究グループで設定したリサーチクエスチョンが妥当であるかを検証しながら聴講した。本ワークショップでの学びを踏まえ、リサーチクエスチョンの更新を事後に行った。また、鳥羽高校の課題研究では仮説構築までを主眼としているが、本来の研究では仮説検証が重要であることも理解した。

ウ 国立民族学博物館フィールドワーク(「京都の風土・世界の風土」との共催、写真3)

ビーズを題材として、人類の認知革命について考察するワークショップに参加した。ビーズを身につけることは、共同体の繋がりや諸地域の繋がりを表象するものにもなり得ることを学び、人類文化の普遍性、多様性をふまえ共生する世界をめざして、人類規模・地球規模で考える態度を養った。また、展示見学をとおして、民族・宗教・文化について深く考え、グローバル・イシューを探究する上で前提となる知識を身につけた。

エ 講義及びワークショップ 大阪大学「アカデミック・ライティング講座」(写真4)

①書くために考える ②まねてはいけない! : レポートの注意点 ③パラグラフライティングの3部構成のワークショップを行った。②では、ダメレポート例を読んで、レポートの不備を指摘するワークを行ったが、参加生徒は批判的にレポートを読み、講義者の想定を越える鋭い指摘ができていた。日頃から批判的に物事を捉える姿勢を養えることができていた成果ではないかと考える。また、大学院生のTAからアドバイスを受けながらアカデミック・ライティングの作法や手順を学び、課題研究等を進める技法を身につけた。そして、事前に作成した各自のリサーチクエスチョンに関する「調査シート」をもとに実際にアカデミック・ライティングを行うことで、調査内容やリサーチクエスチョンを深く掘り下げることができた。

オ 高大社連携研修事業(写真5)

課題研究において企業に関係する調査を行う2年生16名が、京都中小企業家同友会主催の「2019年度高大社連携研修事業」に参加した。「学生が考えた! 会社が魅力的に見え心惹かれる求人情報とは!？」というテーマで、企業経営者及び福知山公立大学の学生とグループ討論を行い、本校生徒が発表した。また、本校生は課題研究の発表を行ったほか、インタビュー調査を企業経営者に行うことができ、課題研究の深化に繋がった。各グループの探究内容が机上の空論ではなく、社会情勢をもとに考察された現実的なものになった点で大変有意義であった。

カ SGH事業研究発表会 ポスターセッション(課題研究中間発表)(写真6)

これまでの探究の成果を発信する機会として、ポスターセッション(課題研究中間発表)を実施した。SGH運営指導委員、大学関係者、大阪大学TA、企業関係者、全国SGH校、京都府立高校、京都府名誉友好大使、きょうと留学生ハウスの留学生に参加していただき、多方面から助言を受けた。本校1年生もオーディエンスとして参加し、学年間の交流の機会にもなった。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

(3) 評価の方法

ワークシートやポートフォリオを指導者が評価したほか、ポスターセッション及び研究グループ論文である「研究ノート」については、「観点別評価のためのルーブリック」としてポスターセッション評価票（表-1）、「研究ノート」評価票（表-2）を用いた。なお、SGH事業研究発表会においては来校者に評価していただいたほか、同級生からの評価、下級生からの評価も行い、ピア・ラーニングの視点を持たせた。

表-1 ポスターセッション評価票

令和元年度 イノベーション探究Ⅱ ポスターセッション 評価票

評価者						令和元年11月22日(金)
研究グループ		-				
		発見力	分析力・調査力		表現力・協働力	
		研究の動機・問題の背景	リサーチクエスト(RQ)	現時点での仮説	最終的な研究テーマ	発表と質疑応答
関連するポスターの項目番号		1	2→3→4	5	7	全般
評価基準	A: 完璧 (Great)	現状を十分に理解し、グローバル・イシューに結びつく課題を設定して、多角的に研究を進めようとしている。	研究テーマについて、実態を把握し原因を分析するために、小さな問い(RQ)を立てて調査することをおして、具体的なオリジナリティのある問い(具体化されたRQ)を立てている。	調査内容を分析した上での「因果」あるいは「比較」を含んだオリジナルの仮説になっている。	問い(RQ)や答え(仮説)が明確に読み取れ、説得力がある文章になっている。	グループの全員が発表と質疑応答に参加し、質疑応答によって、参加者の知的好奇心が一層刺激されている。
	B: 合格 (Good)	現状を理解し、グローバル・イシューに結びつく課題を設定して、研究を進めようとしている。	研究テーマについて、実態を把握し原因を分析するために、小さな問い(RQ)を立てて調査することをおして、具体的な問い(具体化されたRQ)を立てている。	調査内容を分析した上での「因果」あるいは「比較」を含んだ仮説になっている。	問い(RQ)や答え(仮説)が読み取れる文章になっている。	発表と質疑応答を、グループ内で役割分担して行うことができる。
	C: がんばろう (Needs Work)	現状の理解が不十分で、一面的な研究になっている。	小さな問い(RQ)を立てて調査することが不十分のため、研究テーマについての理解が深まっていない。	「因果」も「比較」も含まないあいまいな仮説になっている。	問い(RQ)や答え(仮説)が読み取れる文章になっていない。	発表と質疑応答における役割分担があいまいで、一部の人が行っている。
	評価記入欄 A~C				ポスターセッションでは評価しません	
よりよい研究にするための方策						

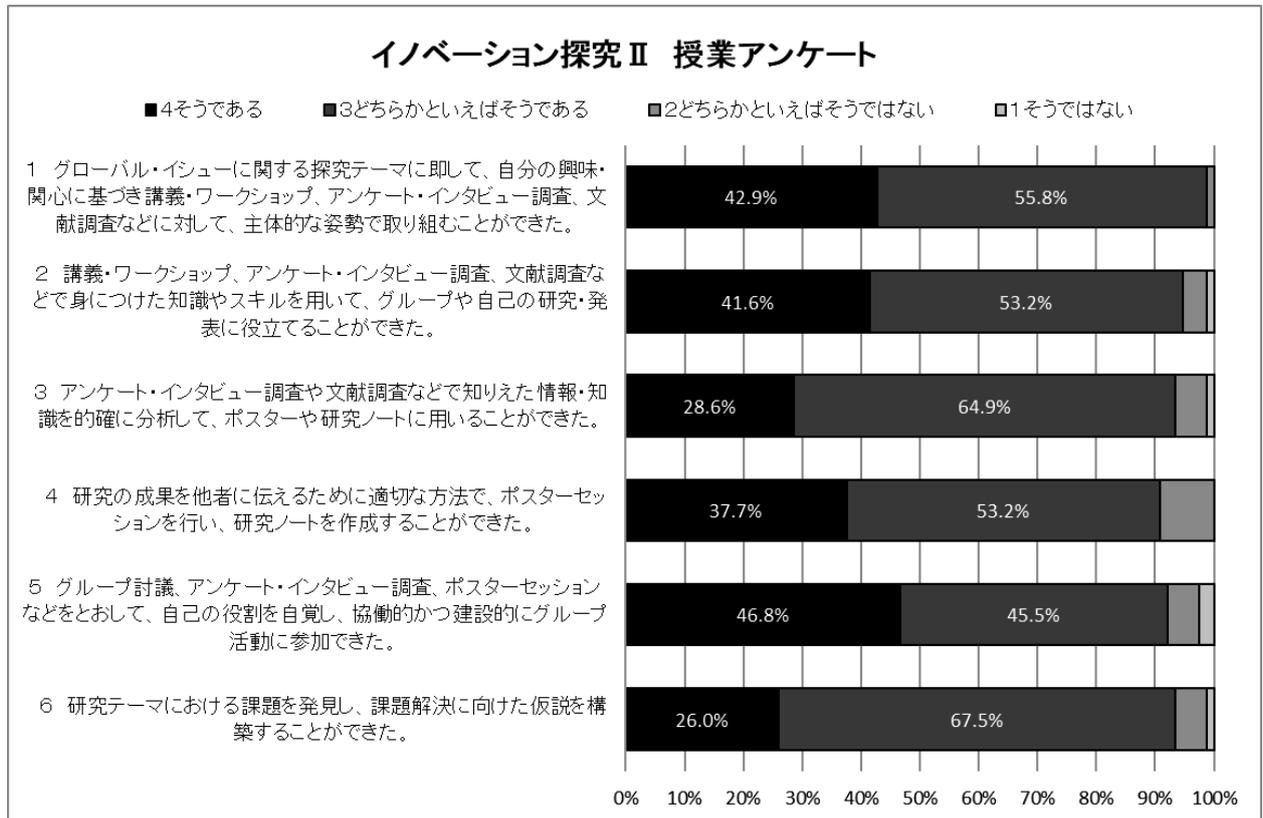
表-2 「研究ノート」評価票

令和元年度 イノベーション探究Ⅱ 観点別評価のためのルーブリック「研究ノート」評価票

対象研究グループ		-						評価者	組 番 氏名
		協働力							
		発見力	分析力・調査力				表現力		
関連する「研究計画書」Ver.3の項目	研究の動機・問題の背景	掘り下げたためのリサーチエクステンション	具体化されたリサーチエクステンション	仮説	仮説検証に向けた展望	参考文献	最終的な研究テーマ		
関連する「研究ノート」の章など	第1章	第2章	第3章	第3章	第3章	参考文献	表題		
評価基準	A: 完璧 (Great)	現状を十分に理解し、グローバルな視点で多角的に研究を進めようとしている。	現状を確認・分析するための適切な問いを立て、根拠に基づき順序立てた検討ができている。	研究テーマについての理解が十分深まった上で問いを立てている。	「因果」あるいは「比較」を含んだ仮説になっていて、因果関係や比較に説得力がある。	調査を踏まえ、仮説検証に向けた展望を根拠に基づいて考察できている。	複数の書籍・論文や公共性の高いデータを含む参考文献を明示している。	問い(RQ)や答え(仮説)が明確に読み取れる論理的な文章になっている。	
	B: 合格 (Good)	現状を理解し、グローバルな視点で研究を進めようとしている。	現状を確認・分析するための適切な問いを立て、検討できている。	研究テーマについての理解が深まった上で問いを立てている。	「因果」あるいは「比較」を含んだ仮説になっている。	仮説検証に向けた展望を示した考察ができている。	書籍・論文を含む参考文献を明示している。	問い(RQ)や答え(仮説)が読み取れる文章になっている。	
	C: がんばろう (Needs Work)	現状の理解が不十分で、一面的な研究になっている。	現状を確認・分析するための適切な問いを立てられていない。	研究テーマについての理解が深まっていない。	「因果」も「比較」も含まない仮説になっている。	仮説検証に向けた展望を示した考察ができている。	参考文献を明示している。	問い(RQ)や答え(仮説)が読み取れる文章になっていない。	
評価記入欄 A~C		第2章 (1) (2) (3) (4) (5) (6)							
文言評価									

4 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・グループで発表練習をしている時は完璧だと思っていたが、たくさんの方々に自分たちの発表を聴いてもらおうと、自分たちの思うように相手に伝えることができないことがあり、伝えることの難しさに気づくことができた。
- ・説得力のある発表をするために何を調べて何を言えばよいのかを考える力がついた。自分の発表内容はリサーチクエスチョンと少しズレていたようにも思うので、話の内容をまとめる力をもっと身につけられるようにしたい。
- ・1年生の時よりもグラフやデータを分析する時の視点が増え、自分が作ったグラフに不備やおかしい所がないかを批判的に見るできるようになった。時には行き詰まることもあったが、それを乗り越えて発表を完成させることができてよかった。
- ・自分たちで調べていく中で、次々に問題が出てきて、それを1つ1つ解決していくと、発表内容が中身のあるものになっていくのを実感することができた。
- ・グループのメンバーで協力して1つのことに取り組んだことで、協働力の大切さが分かった。もっと深いところまで研究できるなと思うところもあったので、大学でもっと深めていきたい。
- ・AIを探究テーマに設定して、AIやIT業界に興味を持つようになり、自分の進路にも影響したので本当にこのテーマで探究して良かったと思う。
- ・自分で考えることが大切だということを知るとともに、考えるために普段の勉強をおろそかにせず知識をつけることも大切だと分かった。
- ・グループでの議論やポスターセッションをとおして、自分が思いつかなかった視点から意見が出ることが多く、自分1人で考えるのではなく、他人の意見を聴くことも大事だと気づいた。

(3) 分析できる成果

アンケート結果より、昨年度に引き続いて、すべての質問に対して肯定的回答が90%を超えた。1年間をとおして、探究活動の意義を伝え続けることができていたと考える。しかしながら、「4そうである」と回答した生徒の割合は、昨年度と比較すると軒並み減少した。特に取り上げたいのが、減少幅が大きかったのが、質問3「アンケート・インタビュー調査や文献調査などで知りえた情報・知識を的確に分析して、ポスターや研究ノートに用いることができた。」である。昨年度は「4そうである」と回答した生徒が約40%いたのに対し、今年度は30%を下回った。個人のリサーチクエスチョンを調査し、それをグループでまとめ1つの形にする作業は容易ではない。主体的に取り組む探究活動に教師がどれだけ指導を加えるかを判断することは難しいが、今回の結果を考えると、生徒の探究のつまずきにもう少し助言を加える必要があったと考える。

5 課題

京都府教育委員会「府立高校スマートスクール推進事業」の指定を受け、タブレットの導入が進んだ結果、調査・研究のためのCAI教室、図書館等の使用についての調整がしやすくなった。また、時間割作成において他教科との調整を行い、計画的に「京都の風土・世界の風土」と連携することにより、課題研究を実施することができた。しかしながら、探究活動が校内全体に普及しており、多くの生徒が探究活動を行うので、今後も継続的にICT環境を調整し、クラスやコースによってICT活用機会の差が生じないようにカリキュラムを設計していく必要がある。

ワークシートや「研究計画書」、「研究ノート」等の様式は、昨年度の形式を踏襲したが、問題なく課題研究を実施することができた。鳥羽高校オリジナルテキスト（デジタル版）が一応の完成を迎えたといってよい。今後は、生徒の実態に応じて微調整をしていき、絶えず質的向上を考えていく。また、教員間で課題研究指導のノウハウを共有していくために、今年度は「イノベーション探究Ⅱ」の担当者間ミーティングを週1回実施し、指導方針を共有して授業に臨んだ。また、各教員が担当する研究グループを決め、「探究ミーティング」を生徒と実施することで、担当者間で連動して指導を行った。その結果、指導体制を充実させることができたが、まだ担当者内の仕組みに留まっているので、校内での組織的な体制へと転化していく必要がある。

ウ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」（総合的な学習の時間・3年・1単位）

1 ねらい

1・2年次の課題研究を総合し、「ユニバーサルプログラム」において、価値の普遍化をはかり、未来を見ずえた新たな価値を創り出す価値創造力を高める。

2 概要（実践）

(1) 年間計画

学期	月	学習内容
1	4	アカデミック・ライティング演習Ⅰ期
	5	↓ 鳥羽グローバル・サミット準備
	6	↓
	7	英語論文完成 鳥羽グローバル・サミット
2 ・ 3		アカデミック・ライティング演習Ⅱ期
		↓

(2) 具体的な活動内容

ア 英語論文作成

3年次当初から英語論文を執筆を開始すると7月に完成させるのにどうしても時間的余裕がなくなるという前年度の反省も踏まえ、春季休業中から英語論文の執筆を義務づけ、できるだけ推敲の時間をとりながら進めていくこととした。論文作成については、ほぼ予定通り進めることができたが、一方でディスカッション等に費やす時間についてはあまり持つことができなかった。しかしながら、グローバル・サミット本番では、生徒たちも研究内容について積極的に発言し、成果は得ることができた。

イ 「鳥羽グローバル・サミット」

シンガポール国立大学、復旦大学（上海）の大学生及び「きょうと留学生ハウス」の留学生とともに、英語によるプレゼンテーション及びディスカッション等とおしてSDGsに係る課題探究を深化させ、提言を発表した。

ウ 連携

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅢ」でのアカデミック・ライティング学習等における探究学習と連携することで、論理的思考力及び英語力の向上を図った。

(3) 評価の方法

英語論文については、日本語論文の研究内容が十分反映され、論理的に文章にまとめられているかについて評価を行った。ディスカッション及びプレゼンテーションについては、生徒相互の評価、海外大学生及び京都で学ぶ留学生の方々からの評価及びフィードバックを受けた。



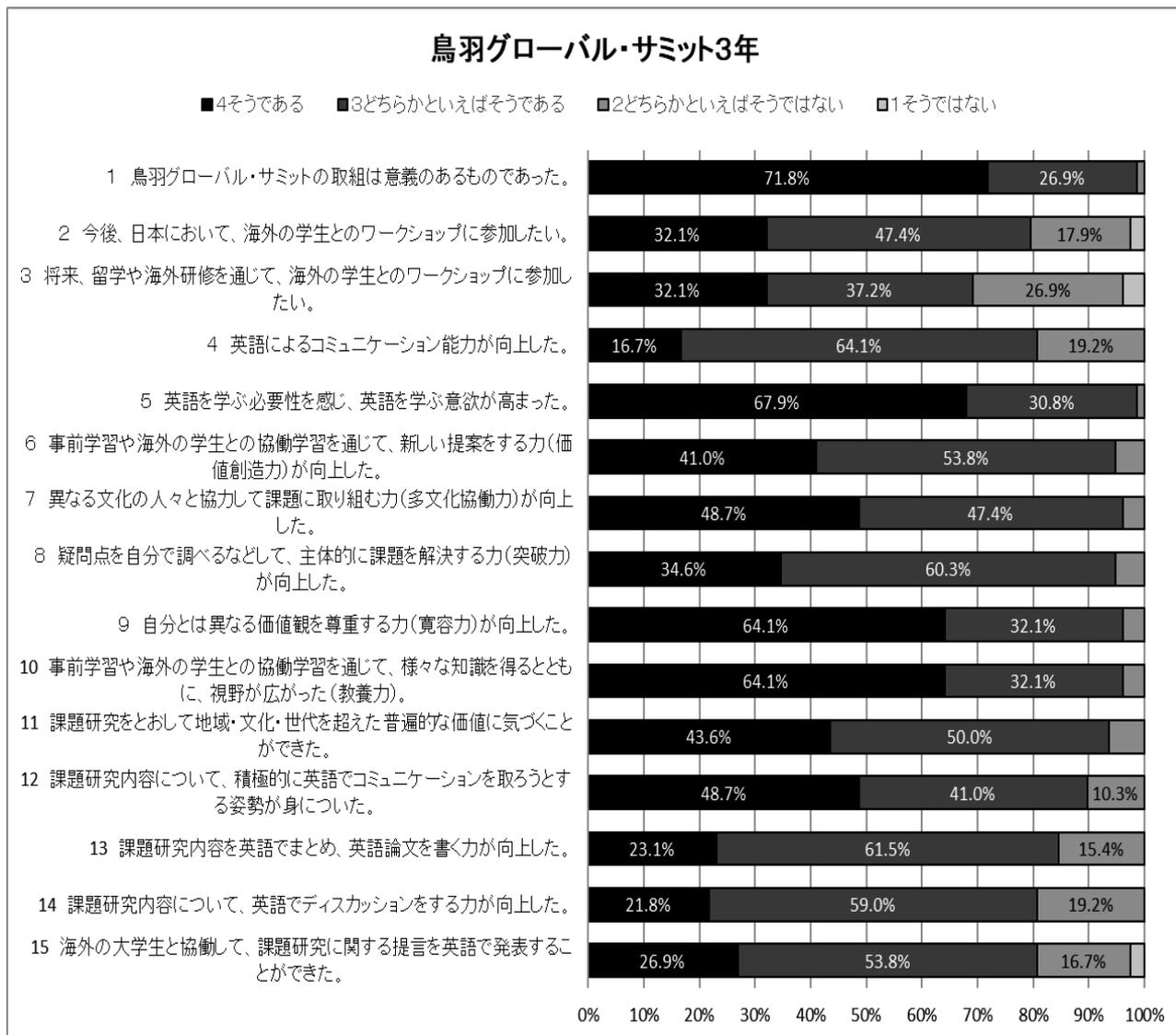
鳥羽グローバル・サミットにおける海外留学生とのディスカッション



SDGsの達成に向けた提言を、海外の大学生とともに英語でプレゼンテーション

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・この3年間で、話す・書く・伝えるという大事な能力を身につけることができた。伝えるだけではなく、どうしたら聞き手が分かりやすいかなど、聞き手の立場に立って考える力がついた。
- ・この3年間で、グループで協働し研究するやり方を学ぶことができた。また、他人と考えを一致させ答えを求める難しさ、逆にうまくいったときのうれしさを感じられた。

(3) 分析できる成果

質問5「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった」について67.9%が「4そうである」、98.7%が肯定的に回答するなど、3年間の課題研究の集大成として、海外のトップ大学の学生と英語で議論し、SDGsの達成に向けた提言を発表する取組をとおして、英語の学習意欲を大きく高めることができた。また、多くの質問で「4そうである」と回答した生徒の割合が昨年度から増加しており、創意工夫を重ねてきた高校生と大学生の協働による国際会議も一定の形ができた。

4 課題

SGH指定終了後の自走に向けて、京都市内の大学で学ぶ留学生、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生を招いた国際会議を管理機関と連携しつつ開催するなど、予算をかけなくとも3年間の課題研究の集大成として成果発表を行うことができる機会を高校生に提供できるように工夫したい。

(2) 研究開発単位Ⅱ：グローバル・コンピテンシーを高める教科横断的科目群

ア 「グローバル・コミュニケーションⅠ」(学校設定科目・1年・3単位)

1 ねらい

グローバル社会における多様性を受け入れる姿勢と多文化対話力を育成する。課題探究内容を効果的に英語でプレゼンテーションする能力を養う。基本的なディベートをとおして批判的思考力を養う。

2 概要(実践)

(1) 年間計画

学期	月	学 習 内 容	評 価 の 観 点
1	4	<文法事項> 時制、助動詞、受動態	時制、助動詞、受動態の用法を正しく理解・習得するとともに、コミュニケーション場面において正確に運用することができる。
	5	<ペア・スピーキング>	与えられたテーマについて相手に意見を伝え、相手が言ったことをまとめることができる。
	6	<プレゼンテーション> Deep Kyoto	ルーブリックを用いて評価する。(資料1)
	7		
2	8	<文法事項> 不定詞、動名詞、分詞、関係詞	不定詞、動名詞、分詞、関係詞の用法を正しく理解・習得するとともに、コミュニケーション場面において正確に運用することができる。
	9		
	10	<パラグラフ・ライティング>	ルーブリックを用いて評価する。(資料2)
	11	<ミニディベート>	身近なテーマについて相手の主張に対して簡単に反論するペア・ディベートができる。
12			
3	1	<文法事項> 比較、仮定法、接続詞	比較、仮定法、接続詞の用法を正しく理解・習得するとともに、コミュニケーション場面において正確に運用することができる。
	2	<ディベート>	ディベートのルールを理解し、説得力のある主張や反論ができる。
	3	チーム・ディベート大会	

(2) 具体的な取組

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅠ」では、「英語表現Ⅰ」の学習内容に加え、総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」の課題研究内容と関連させた様々なテーマについてプレゼンテーションを行い、ペア・スピーキング、パラグラフ・ライティング、ディベートに取り組んだ。

ア 1学期

(ア) ペア・スピーキング

1学期からペアで与えられた異なるテーマについて2分で考え、自分の意見や考えを相手に伝え、相手が別のテーマについて言ったことを理解してまとめて言うペア・ワークをほぼ毎回の授業で行った。話すことに関するやり取りの力が高まった。1年間で約30回行った。

テーマの例: Do you think supermarkets should stay open 24 hours a day?

Do you think students should learn more about giving presentations?

Which do you think is better, traveling by car or by train?

(イ) プレゼンテーション

「鳥羽グローバル・サミット」で来校した海外の大学生に向けてプレゼンテーションを行った。海外ではあまり知られていないが、外国人が関心を持つ京都の文化ー“Deep Kyoto”ーという、総合的な探究の時間「イノベーション探究I」の探究領域に関連させたテーマを設定し、生徒が各自で発表する内容を調べ、iPadを使ってプレゼンテーション資料を作成した。当日は鳥羽高校生6~7名と海外の大学生1名の少人数グループに分かれて発表し、グループディスカッションを実施した。

発表内容の例: There are some lucky taxis in Kyoto.

Kyoto has a torii with three pillars.

Mimurodo Temple is famous for flowers.

イ 2学期

(ア) パラグラフ・ライティング

2学期からパラグラフの構造 (Topic Sentence, Signposts, Concluding Sentence) と論理展開 (理由→補足説明→例え) を学習し、身近なテーマについて60~100語程度のパラグラフ・ライティングに取り組んだ。細かい添削をせずに、ループリックを用いてフィードバックをし、フィードバックで分かったことを次のパラグラフに活かすというプロセスを年間で約10回行い、書ける単語数を増やしながら説得力のある文章を書く力を高めた。

テーマの例: Do you think it is better for students to study alone or in a group?

Which do you think is better, a robot pet or a living pet?

(イ) ミニディベート

ディベートの基本 (主張→反論) を学習し、パラグラフ・ライティングに関連させたテーマについてペアでミニディベートを約3回実施した。相手の主張を理解し、即興的に反論する力を高めた。

テーマの例: Toba High School should use digital textbooks.

The Internet has had a positive effect on society.

ウ 3学期 ディベート

簡単なパラメンタリーディベートのルール、審査の仕方を学習し、3人対3人のチーム・ディベートを行った。ディベート中は、他の生徒によるジャッジを行った。

ディベートテーマ: Kyoto should limit the number of tourists.

We should abolish homework for elementary school students.



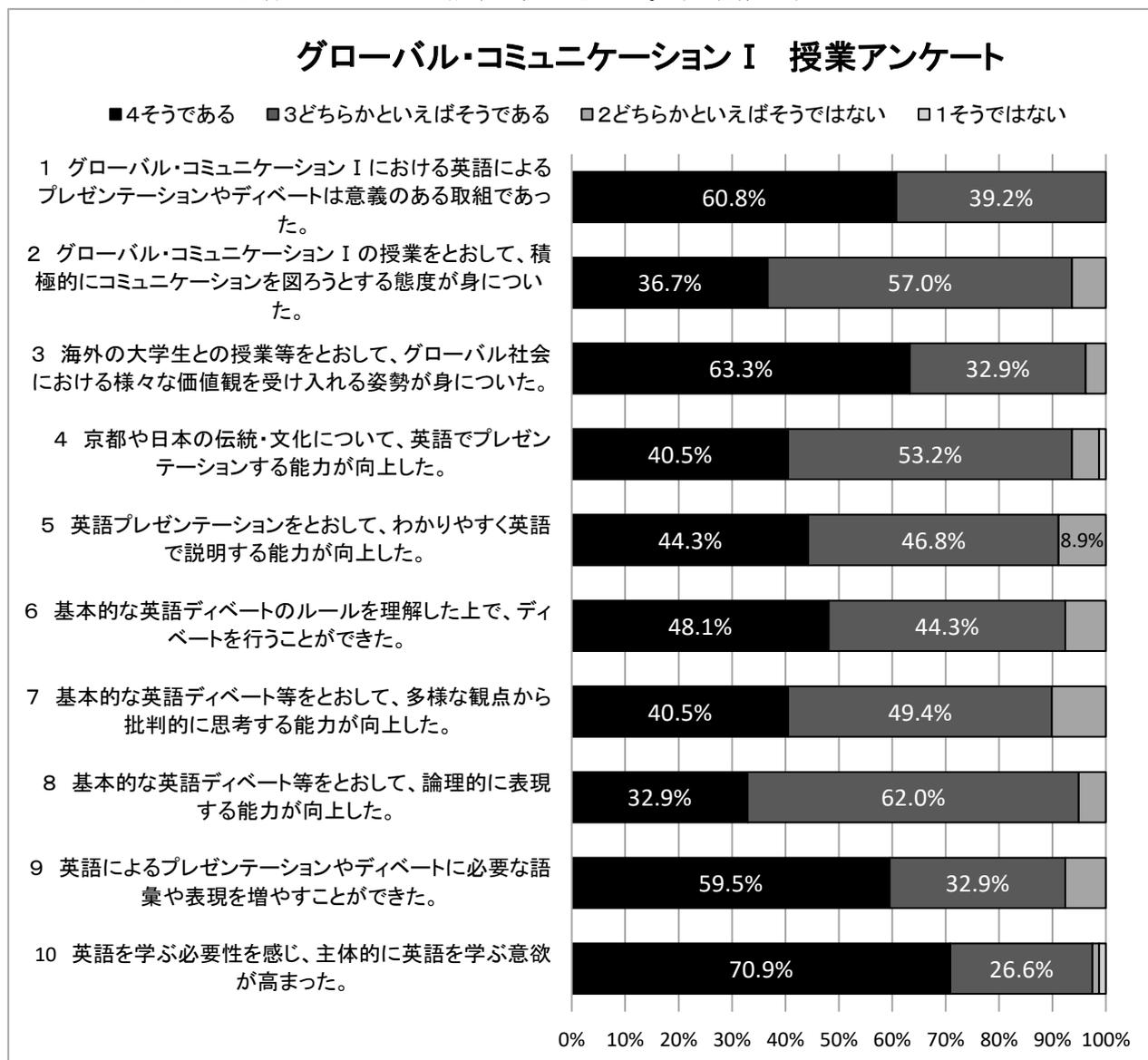
(3) 評価の方法

定期考査、各種テスト、取組状況に加えて、プレゼンテーションとパラグラフ・ライティングについてルーブリックを用いて評価し、総合的に評価した。

3 成果

(1) アンケート結果

1月に実施した授業アンケートの結果は次のとおり。(回答数 79)



(2) 生徒の感想

- ・プレゼンテーションを行うことで、自分の伝えたい事をどんなふうに表示すれば伝わりやすいかを学ぶことができた。さらにそれを英語で行うことで、説明する為の語彙を増やすことができた。ディベートでは、課題発見力、思考力、批判力、そして自分の主張の利点をアピールする方法等、社会で役に立ちそうなスキルをたくさん身につけることができた。長い英文の書き方もこの授業で、ずいぶん上達したと思う。
- ・自分の知識を蓄えるだけでなく、それを発信することをとおして、これまでより英語でコミュニケーションができるようになり、自信につながった。英語力はこれからのグローバル社会において必要とされる力なので、さらに英語でのコミュニケーション力をつけるために、さらに様々な人々と話してみたい。また、基礎となる英単語や文法も必要なので、たくさんの英語に触れて吸収し、自分の考えをしっかりと伝えられるようにしたい。

- ・以前より英語での表現が身につく、パラグラフのまとまりを意識しながら英文が書けるようになった。英語を話す力もつき、実用英語技能検定の際に役立った。
- ・プレゼンテーションやディベートでは、とにかく止まらず、空白の時間を作ってはいけないことを本当に強く感じた。それができるようになるためには、様々なテーマについて自分の意見をしっかり持たなくてはならない。また、話しながら次にどのように議論を展開したり反論するかを常に考えなければならないということを学んだ。ただし、それができるようになるには、まずは母国語である日本語で思考してすばやく反論する力や、自分の考えをわかりやすく伝える英語の語彙力が必要であることもわかった。

(3) 分析できる成果

昨年度と同様に、質問1の回答のとおり、ほぼ全員の生徒が本科目における英語プレゼンテーションや英語ディベートに意義を感じていた。また、質問3「海外の大学生との授業等をとおして、グローバル社会における様々な価値観を受け入れる姿勢が身についた」については、「4そうである」の割合が昨年度の45.0%から今年度は63.3%に、質問9「英語によるプレゼンテーションやディベートに必要な語彙や表現を増やすことができた」が昨年度の42.5%から今年度は59.5%にそれぞれ上昇し、昨年度よりもさらに充実した活動を行うことができた。また、生徒の自由記載・感想に見られるように、話す力と書く力が向上したと感じた生徒が多かった。総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」における課題研究と本授業における英語ディベートや英語プレゼンテーションのテーマを教科横断的に設定することにより、日本語・英語の両言語を用いながら探究学習を進めつつ、表現力を高めることができた。

4 課題

質問7と質問8の「4そうである」の割合が昨年度より下がった。プレゼンテーションに多くの時間を用い、ディベートの取組時間が昨年度より減ったことが原因として考えられるので、総合的な探究の時間とテーマを共有しつつも、次年度の年間指導計画を策定する際に活動の時間配分を工夫する必要がある。

1st Grade Global Summit “Deep Kyoto” Rubric

資料 1

Class () No. ()	Name ()	Topic ()	5 points	4 points	3 points	2 point	1 point	
			I completely understood.	I somewhat understood.	I understood about half.	I understood less than half.	I understood almost nothing.	
			Their voice was loud and clear, and they had good eye contact.	Their voice was fairly loud and clear, and their eye contact was adequate.	Their voice was hard to hear in parts, and/or their eye contact was lacking.	Their voice was very hard to hear, and they mostly failed to make eye contact.	I could not hear them and there was no eye contact.	
			They had a very positive attitude and tried hard to communicate.	They had a fairly positive attitude and made an effort to communicate.	Their attitude was not very positive and their effort to communicate was lacking.	Their attitude was negative and they didn't make much effort to communicate.	They had a bad attitude and made no effort to communicate.	
			It was very surprising and interesting, and completely new. I want to learn more.	It was somewhat surprising and interesting, and I didn't know much about it before.	It was not very surprising and interesting, and/or I already knew about it.	It was hard to be interested in it, and it was already well-known.	It was uninteresting and very common knowledge.	
			Please write some comments:					
			TOTAL:					/20

イ 「グローバル・コミュニケーションⅡ」(学校設定科目・2年・3単位)

1 ねらい

実践的コミュニケーション能力を向上させ、多文化対話力を身につけるとともに、課題研究内容についてのディベートを行うことで、戦略的・批判的思考力を身につける。また、課題研究に関する英語論文作成のために、アカデミック・ライティングの基本的な能力を身につける。

2 概要(実践)

(1) 年間計画

学期	月	学 習 内 容	評 価 の 観 点
1	4	<文法事項> 時制・助動詞・受動態・不定詞・動名詞・分詞・比較・関係詞・仮定法・接続詞・疑問詞・否定	1年次に学習した文法の知識を実践的に活用し、英語コミュニケーション能力を高める。
	5	<スピーキング> テーマに沿った自分の意見を発表するスピーキング活動	情報や自分の意見を正確に伝えることができる。
	6	<ディベート> ディベート学習発展編(主張や反論の仕方)	ディベートにおいて、説得力のある効果的な主張、反論、質問ができる。
	7	鳥羽グローバル・サミットにおける海外の大学生及び留学生とのディベート	
2	8	<文法事項・英語の表現> 特殊構文・名詞・冠詞・代名詞・形容詞・副詞・感情を表す表現・希望、願望/依頼・要請/許可を表す表現	1年次に学習した文法の知識を実践的に活用し、英語コミュニケーション能力を高める。
	9		
	10	<スピーキング> テーマに沿った自分の意見を発表するスピーキング活動	情報や自分の意見を正確に伝えることができる。
	11	<ディベート> パラグラフの構成(Topic Sentence、Supporting Sentences、Concluding Sentence)の書き方を学習	パラグラフの構成を理解し、説得力のあるパラグラフを適切に書くことができる。
3	12		
	1	<英語の表現> 原因、理由/目的/結果を表す表現・忠告、義務/必要/提案、勧誘を表す表現・時間的順序	1年次に学習した文法の知識を実践的に活用し、英語コミュニケーション能力を高める。
	2	<スピーキング> テーマに沿った自分の意見を発表するスピーキング活動	情報や自分の意見を正確に伝えることができる。
	3	<アカデミック・ライティング> ルーブリックを使い、アカデミック・ライティングの実践的な学習	パラグラフの構成を理解し、説得力のあるパラグラフを適切に書くことができる。

(2) 具体的な取組

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅡ」では、「英語表現Ⅱ」の学習内容に加えて、1学期はディベート、2学期からアカデミック・ライティングを学習し、年間をとおして、ほぼ毎回、割り当てられたテーマについてスピーチをする活動を実施した。

ア 1学期前半は「グローバル・コミュニケーションⅠ」で学習した基本的なディベートを発展させ、即興型パラメンタリーディベートの基本ルールを学習し、説得力のある主張の仕方や Point of Information (POI) 質問の仕方を練習した。7月の鳥羽グローバル・サミットでは、「イノベーション探究Ⅱ」の課題研究に関連させた論題について、肯定側チーム(2人または3人)対否定側チーム(2人または3人)のディベートを行い、海外の大学生及び留学生のTAはジャッジとしてそれぞれの役割を果たした。

イ 1学期の後半はディベートの学習をさらに発展させ、定義の仕方や効果的な反論の仕方に取り組んだ。総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」の課題研究に関連させた論題について、立論の発表原稿を書き、また、その立論に対してどのように反論したらよいかを Brainstorming し、各自で反論を考え、発表原稿を作成した。

論題(例) : The problem of declining birthrate in Japan.

The effects of tourism in Japan.

What should we do to prevent floods in Japan?

ウ 2学期と3学期は次年度に総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」で行う英語論文作成のために、アカデミック・ライティングの基本を学習した。パラグラフの構成 (Topic Sentence、Supporting Sentences、Concluding Sentence) を学び、パラグラフ・ライティングにおけるレトリック、つなぎ語、パラフレージングの演習を実施した。3学期のライティング演習では、生徒が書いたパラグラフを生徒間で交換させて、ピア評価をさせた。次に教師によるフィードバックを行い、パラグラフを書き直させた。最後にループリックを使って、書き直したパラグラフを評価した。この3段階のサイクルは3学期で2回行った。春休みの宿題として、英語論文のフォーマットを学び、「イノベーション探究Ⅲ」で行う英語論文のアウトラインを作成した。



鳥羽グローバル・サミットでの
英語ディベート



反論に向けたブレインストーミング



英語論文のアウトライン作成

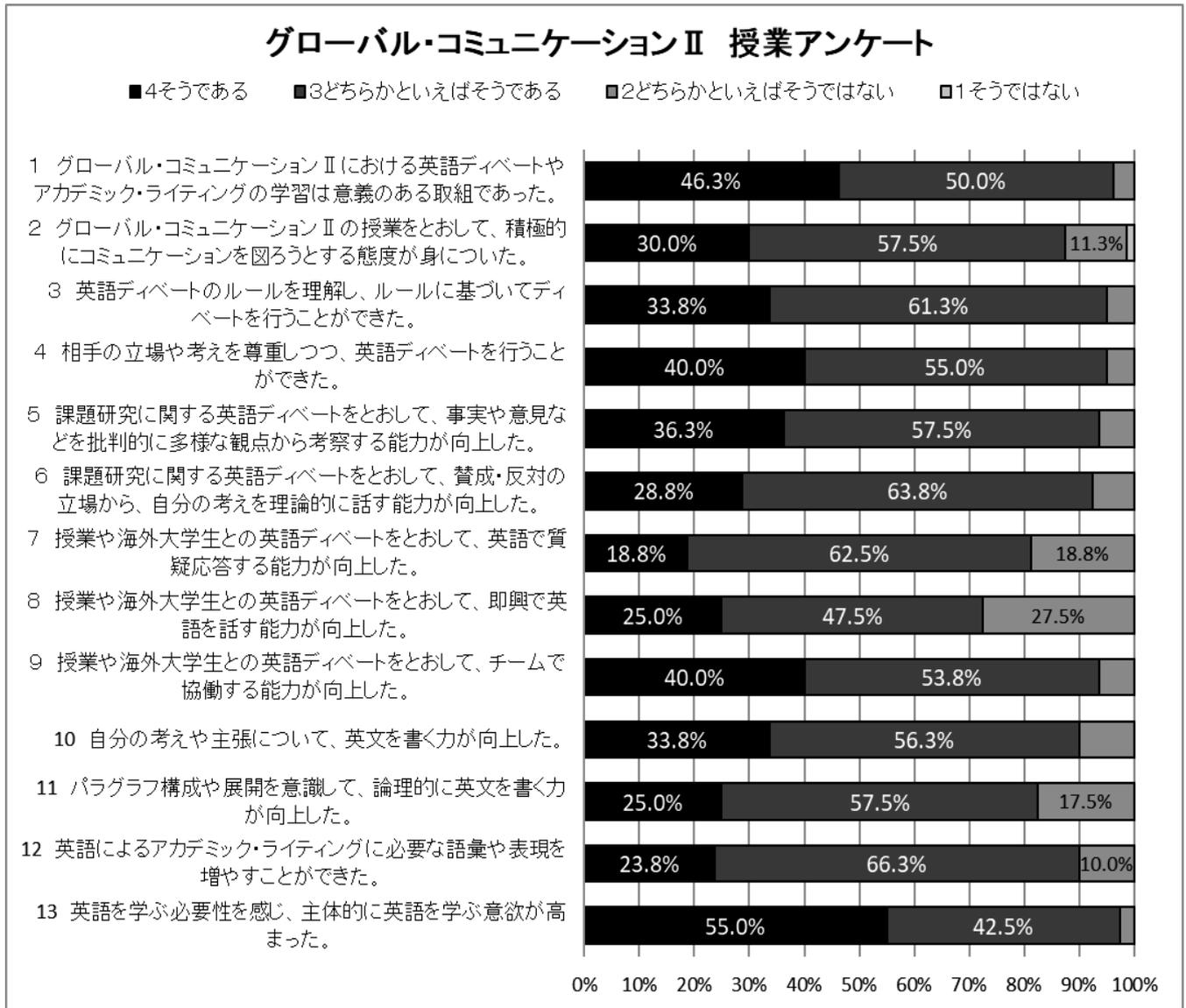
(3) 評価の方法

文法事項や英語の表現について、定期考査で評価を行った。スピーキングやディベートについては、TAからのフィードバックを参考にし、パフォーマンス評価を行った。アカデミック・ライティングについてはピア評価用紙(資料1)とループリック(資料2)を作成し、評価した。

3 成果

1月にアンケートを実施した。(回答数80)

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・ディベートを何回も繰り返していくうちに、どんどんスムーズに話せるようになった。交流もたくさんあり、積極的に英語を話す機会もたくさんあったので、とても有意義な時間が過ごせた。
- ・ディベートでは反対意見を考える活動を積み重ねていくうちに、反論する内容がすぐに出るようになった。
- ・ディベートでは賛成反対の双方の立場で物事を考えなくてはならないので、1つのテーマについて様々な考え方ができるようになった。また、スピーチの構成や説得力のある表現を意識してディベートができたと感じた。
- ・英語を書く力が向上した。アカデミック・ライティングで学んだことを活かして自分の意見や課題研究などで自然な英語を書くなど実践的に使っていきたい。
- ・ディベートとアカデミック・ライティングをとおして、論理的に話の流れを組み立て、自分の意見を相手に主張する方法を学ぶことができた。
- ・「グローバル・コミュニケーションⅡ」での活動をとおして、積極的に英語でコミュニケーションを取るということができるようになった。さらにコミュニケーション能力を伸ばしたい。
- ・言いたいことは頭に浮かんでもそれを英語にする能力が足りないと改めて実感した。

- ・この1年ですごく成長したと感じた。ライティングでは書き方や手順を学び、自分一人でエッセイが書けるようになった。
- ・エッセイを書くことが多かったので、英作文がすらすら書けるようになった。どの接続詞や単語を使ったらいいかなどわかるようになったので、エッセイのレベルが上がったと感じる。
- ・まだまだ知らない単語や表現が多いと感じたので、語彙力をつけたいと感じた。

(3) 分析できる成果

質問1「グローバル・コミュニケーションⅡにおける英語ディベートやアカデミック・ライティングの学習は意義のある取組であった」に「4そうである」と回答した生徒は46.3%と高かった。多くの生徒は自分の意見を発信する機会があり、ディベートやエッセイをとおした効果的なアウトプットができた。また、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」との教科横断的な取組が論理的思考力を向上させたと考える。質問4「相手の立場や考えを尊重しつつ、英語ディベートを行うことができた」は昨年度の39.0%から40.0%に上昇した。聞き手を意識する姿勢が見られ、わかりやすく正確に相手に伝えようとする姿勢が効果的なディベート活動に結びついた。また、質問9「授業や海外学生との英語ディベートをとおして、チームで協働する能力が向上した」が昨年度の40.3%と同様に今年度も40.0%と高く、アクティブ・ラーニングを導入して自由にアウトプットさせた授業における取組が活かされている。語彙力や表現力をつけるために生徒のライティング課題に対してフィードバックするとともに、書くことに重点を置いた文法指導を行うなどの工夫を凝らした結果、質問12「英語によるアカデミック・ライティングに必要な語彙や表現を増やすことができた」に「4そうである」と回答した生徒は昨年の20.8%から23.8%に向上し、改善が見られた。

質問13「英語で学ぶ必要性を感じ、主体的に英語を学ぶ意欲が高まった」について「4そうである」と回答した生徒は昨年度の55.8%に対して今年度は55.0%であり、今年度も昨年度と同様に半数以上の生徒が主体的な英語学習者としての姿勢を身につけることができた。

4 課題

質問7「授業や海外大学生との英語ディベートをとおして、英語で質疑応答する能力が向上した」については、肯定的に回答した生徒が81.3%いたものの、「4そうである」と回答した生徒は18.8%と他の質問と比べて低かった。ディベートにおいて相手に質問をしたり、相手の質問に答えることが難しいと感じる生徒は多く、ディベートを学習する際に質疑応答する能力を向上させる指導を工夫する必要がある。また、質問8「授業や海外大学生との英語ディベートをとおして、即興で英語を話す能力が向上した」では「4そうである」と回答した生徒は25.0%と、質問7と同じく相対的に低い傾向にあるので、「グローバル・コミュニケーションⅢ」においてディベートの機会を設けるなど、引き続き即興で英語を話す能力の育成に取り組む。

<資料 2 > Paragraph Writing Rubric

Writer: Year () Class () No. () Name ()

	<i>Excellent (4 pts.)</i>	<i>Good (3 pts.)</i>	<i>Needs Improvement (2 pts.)</i>	<i>Poor (1 pt.)</i>
Format	Indentation, punctuation, spelling, and capitalization are all correct and the handwriting is clear and easy to read.	The format is mostly correct and the handwriting is mostly easy to read.	There are many errors and/or many parts are unreadable.	The format is mostly incorrect and/or the paragraph is mostly unreadable.
Topic Sentence	The main idea is clearly stated, focused, and makes an argument.	The main idea is clearly stated but is not focused or not argumentative enough.	The main idea is unclear, is not focused, and/or does not make an argument.	The main idea is not stated, not understandable, or there is no topic sentence.
Supporting Sentences	The sentences all support the main idea and give enough details and examples.	The sentences all support the main idea, but are somewhat lacking in details or examples.	Some of the sentences do not support the main idea, and/or are markedly lacking in details or examples.	Most of the sentences do not support the main idea or don't give details or examples.
Concluding Sentence	The main idea is clearly restated, and a warning, prediction, or opinion is added.	The main idea is clearly restated, but a warning, prediction, or opinion is lacking.	The main idea is unclear or different from the main idea stated in the topic sentence.	The main idea is not stated, not understandable, or there is no concluding sentence.
Overall Content	The paragraph is original, interesting, and persuasive.	The paragraph is adequate but not quite original, interesting, or persuasive enough.	The paragraph is definitely not original, interesting, or persuasive enough.	The paragraph is completely unoriginal, uninteresting, and unpersuasive.
Comments:				TOTAL
				/20

ウ 「グローバル・コミュニケーションⅢ」(学校設定科目・3年・2単位)

1 ねらい

グローバル社会における多文化対話力を育成するとともに、課題研究について英語論文を作成し、その内容についてプレゼンテーション、ディスカッションを行う能力を養う。

2 概要(実践)

(1) 年間計画

学期	月	学習内容	評価の観点
1	4	アカデミック・ライティング演習Ⅰ期	テーマに関する情報を収集し、批判的思考力を基にして論理を組み立てられる。 自分の意見を適切な英語で表現し、または主張できる。
	5	↓	
	6	↓	
	7	↓ 鳥羽グローバル・サミット(7月)	
2 ・ 3	8	アカデミック・ライティング演習Ⅱ期	身につけた文法・語法や批判的思考力・表現力を用いて、英語でディスカッションしたり、英語論文が書ける。
	9	↓	
	10	↓	
	11	↓	
	12	↓	
	1	↓	

(2) 具体的な活動内容

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅢ」では、「英語表現Ⅱ」の学習内容に加えて、3年間の課題探究の集大成としての英語論文作成のために必要とされる知識、技能の習得に加え、英語によるプレゼンテーション及びディスカッションに取り組んだ。

ア 1学期には、パラグラフの構成や繋がり、主張の論理的な展開、適切な英語表現の使用等について、英語論文を作成しながら実践的に学習した。

イ 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」と連携し、鳥羽グローバル・サミットにおいて英語論文の内容についての英語によるプレゼンテーションや、海外の大学生や京都に住む外国人留学生とともにディスカッションを行った。

ウ 2学期には、論理的でより高度な英語表現力をさらに身につけるための実践的学習を継続して行った。

<英語論文テーマ>

1 Tradition and Culture

- A proposal for the establishment of a special economic zone to solve child labor problems in Ghana's primary industry
- Discord between Japanese teachers' working hours and their salary due to inappropriate evaluation criteria

2 Area Studies

- Constraints on same-sex marriage in Japan
- Why aren't virtual currencies popular in Japan?
- Is IT education useful to ease discrimination caused by the caste system in India?

3 Science

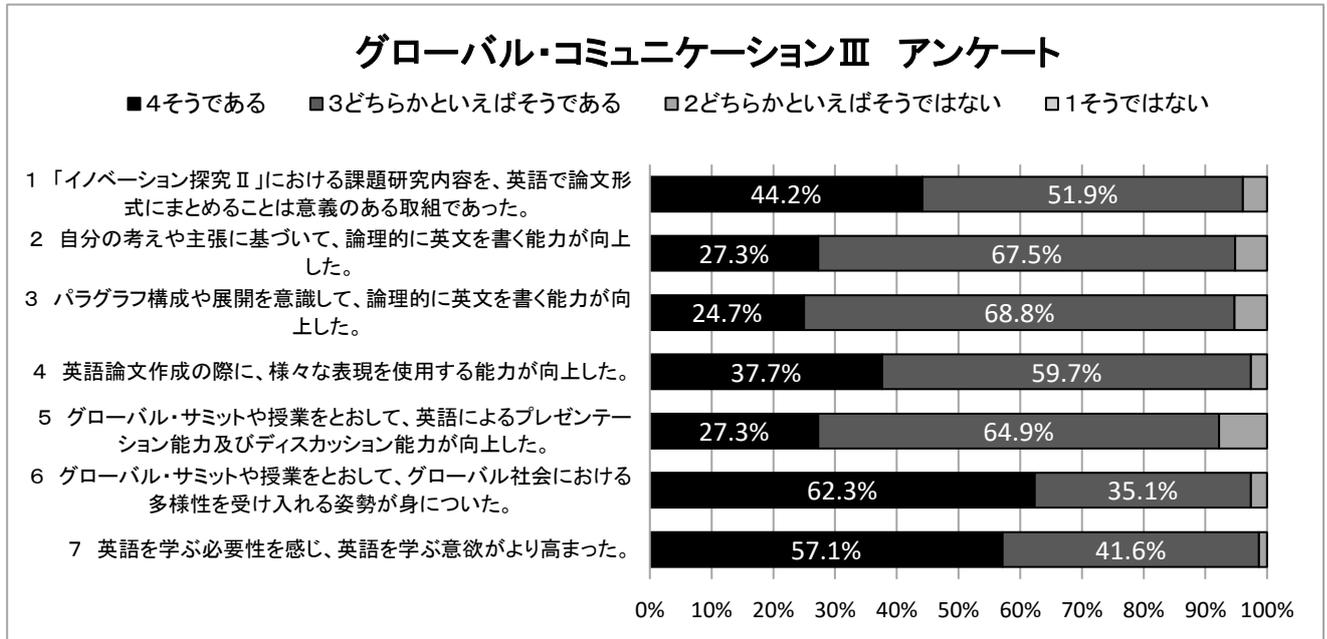
- The harm caused to agriculture, forestry, and fisheries in Japan due to unclear laws about alien species and inadequate protective measures
- Introducing self-driving vehicles to Japan's transportation industry

(3) 評価の方法

「知識・理解」の部分については定期考査で評価を行った。プレゼンテーションについてはルーブリックを作成し評価した。また、生徒による自己評価、他者評価も参考にした。

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- 論文を作成するだけでも大変なのに、それを英語で書くと言われたときは、どうなることかと思ったが、先生方のアドバイスに基づいて、完璧ではないにせよ、英語論文を完成させることができた。語彙力が不足していることや文法の理解が不十分であることに気づいたので、さらに力をつけたい。SGH事業の中でやってきたことは、これまでで言えば、大学教育の先取りだと思う。大学進学後に高校の3年間で学んだことを活かせるようにしたい。
- ディスカッション等で、意見が異なる人々と議論することもあり、自分1人では考えつかなかったことを知ることができたのは、大きな財産だなと思う。一緒に学んだ人々から吸収してきたことを自分の今後に活かしていきたい。
- アカデミック・ライティングなど、自分の意見を主張するための英語の書き方を学べたことで、英検などにおいて自信をもって英語を書けるようになった。特に、私は志望する大学の個別試験が英語のみであり、その中にライティングも含まれるため、とても参考になっている。
- 「グローバル・コミュニケーションⅢ」ではペアで英語を話したり、お互いの英語を聞いたりする機会が多く、自信を持って英語を話せるようになって本当に嬉しい。
- グループ・ディスカッション等、英語を使って活動する機会が多くあったので楽しかった。ライティングの練習はTOEFLなどのテストでも活かすことができた。また、鳥羽グローバル・サミットでは海外の大学生と一緒に学ぶことができ、視野を広げることができた。
- もともと鳥羽高校のグローバル科に入ったときは、英語が得意でもなく、好きでもなかった。しかし、高校での3年間、英語による論文作成、スピーチ、プレゼンテーションやディスカッションなど、様々な取組をとおして英語を勉強する楽しさも知ることができ、なにより入学したころよりもはるかに英語力が向上したかなと思っている。とはいえ、まだまだ流暢には英語を使いこなせないなので、これからも英語を学んでいきたい。

(3) 分析できる成果

昨年度のアンケート結果を比較すると、全質問において「4そうである」の回答が上昇した。特に質問6「グローバル・サミットや授業をとおして、グローバル社会における多様性を受け入れる

姿勢が身についた」が昨年度の38.7%から今年度は62.3%とへ上昇するなど、鳥羽グローバル・サミットに向けて計画的に準備を進めた結果、海外の大学生や京都在住の留学生との協働学習を充実した内容にするとともに、異文化理解及び課題研究についての深い学びを実現できた。

また、質問1「『イノベーション探究Ⅱ』における課題研究内容を英語で論文形式にまとめることは意義のある取組であった」について96.1%、質問7「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲がより高まった」について98.7%が肯定的に回答するなど、総合的な学習の時間における課題研究と本校の学校設定科目との教科横断的な取組をとおして、英語を学ぶ意欲を喚起するとともに、英語を用いて課題研究内容を深めるというねらいを生徒が達成できたと感じていることがわかる。

SGH指定前は、高校生が英語を使ってシンガポール国立大学や上海の復旦大学などの各国トップ大学の学生と議論ができるのか心配もあった。しかしこの心配は杞憂に過ぎず、実際はグローバルな学びの場を提供することによって多くの生徒たちが刺激を受け、主体的に課題研究や英語学習に取り組むなど、大きな変容を感じることができた。

4 課題

質問2「自分の考えや主張に基づいて、論理的に英文を書く能力が向上した」について「4そうである」と回答したのは27.3%、質問5「グローバル・サミットや授業をとおして、英語によるプレゼンテーション能力及びディスカッション能力が向上した」については27.3%と、昨年度から少し上昇したものの、他の質問と比べて上昇の幅が少なかった。課題研究の内容は日本語であっても議論するのが難しい内容であり、さらにそれを英語で表現することには多くの生徒が難しさを感じている。まずは英語によるアカデミック・ライティングのスキルを着実に身につけさせる指導を重点的に行いたい。

エ 「ソーシャル・インテリジェンス」 (学校設定科目・1年・2単位)

1 ねらい

社会の中で情報及び情報技術が果たす役割や影響を理解させ、身の回りのデータの収集と分析、結果の解釈に実践的に取り組み、情報リテラシーと統計リテラシーの育成をめざす。特に統計リテラシーの育成は、実際の問題解決の場で様々なツールを最適な場で利用し、事実に基づく問題解決能力を開発することを目的とする。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度は、それまで課題であった統計資料から課題解決に向けた図表を作成する力を養う指導を行い、また、学習者の発表活動時の資料を Word から Power Point で作成する改善を行った。一方、聴衆にわかりやすい Power Point を用いた発表資料の作成や、データを分析する態度の育成にまでは至らなかった。

今年度は、学習者が質問紙を作成し、調査結果から有意差を考える活動を加えることで、データを分析する態度の育成を試みた。 t 検定、カイ二乗検定を例に仮説検定の指導を行ったところ、約50%の学習者が仮説検定の概念理解に有効な回答を示した。

3 概要 (実践)

(1) 年間計画

学期	月	学 習 内 容	関連教科・科目の内容等※
1	4	A 情報リテラシー 情報と情報社会	情報 「社会と情報」 (1) 情報の活用と表現 (2) 情報通信ネットワークと コミュニケーション (3) 情報社会の課題と情報モラル
	5	個人情報とその保護	
	6	メディアの特徴	
	7	知的財産権と著作物の利用 コンピュータネットワーク インターネットのサービス デジタル化	
2	8	問題解決	情報 「社会と情報」 (4) 望ましい情報社会の構築 総合数学 「数学 I」 (5) データの分析 総合的な探究の時間 「イノベーション探究 I」
	9	B 統計リテラシー 統計とデータ活用の基本	
	10	データの収集と整理	
	11	データ処理と仮説 仮説の検証	
12	発表準備		
3	1	発表準備と発表	総合的な探究の時間 「イノベーション探究 I」
	2		
	3	まとめ	

※(1)～(5)は、学習指導要領における各科目の内容

(2) 具体的な活動内容

学校設定科目「ソーシャル・インテリジェンス」は、「社会と情報」の内容にデータ分析を加え、さらに数学や総合的な探究の時間との教科横断的な取組を行う科目である。

1学期は「社会と情報」の内容を精選し、通常1・2学期をかけて学ぶ内容を圧縮して学んだ。また、6月末からは、表現実習「文化祭ポスター」制作に取り組んだ。

2学期以降は、「社会と情報」の内容を学ぶクラスとは異なる内容の授業展開とした。

ア 問題解決

問題解決の統計的手法の1つである「PPDAC (Problem → Plan → Data → Analysis → Conclusion → Problem → …) サイクル」について学んだ。これは、「課題発見 → 仮説と調査・実験の計画 → データの収集 → 仮説の検証 (データの分析) → 結果の考察とまとめ」と同じであり、課題研究の手順であることを理解した。

イ グラフの基本とデータ分析

円グラフ、棒グラフ、折れ線グラフ、レーダーチャートなどのグラフの特徴学び、Excel を用いて図表を作成した。t 検定とカイ二乗検定を題材に仮説検定の概念を学び、学習者が設定した課題に基づいて質問紙調査を行い、統計的な処理によって有意差を検討した。

単元学習計画と 11 月の S G H 事業研究発表会（写真 1）における研究授業の展開計画は次のとおりである。

(ア) 単元指導計画

評価基準の欄 (関) 関心・意欲・態度 (思) 思考・判断・表現 (技) 技能 (知) 知識・理解

	指導内容	学習活動	評価基準
1～6	【データの分析】 データの整理、データの代表値、データの散らばりと四分位範囲、分散と標準偏差	データの分析の基礎を学ぶ。	各統計量の特徴がわかる (知)。 各統計量の計算ができる (技)。
7～14	【Excel を用いた記述統計実習】 代表値、相関係数、ヒストグラム、散布図、円グラフ、データの加工方法	与えられたデータから図表を作成し、考察を行う。	Excel を用いて、考えているとおりの図表が作成できる (技)。 図表からデータの性質を読み取ろうとする (関)。 図表からデータの性質を考察し、仮説を立てることができる (思)。
15	【Excel を用いた推測統計実習 1】 仮説検定の概略と、t 検定	t 検定から有意差の判定を行う。	仮説検定の意味を理解する (知)。 仮説の設定ができる (知・技)。 P 値を求めることができる (知、技)。
16	【Excel を用いた推測統計実習 2】 カイ二乗検定	カイ二乗検定から有意差の判定を行う。	仮説検定の意味を理解する (知)。 仮説の設定ができる (知・技)。 P 値を求めることができる (知・技)。
17	【調査と分析法のデザイン】	仮説検定ができるデータを収集するアンケート調査項目を作成する。	課題が設定できる (関・思)。 調査項目と分析法が設定できる (思)。
18	【調査結果の分析と考察】	データを加工して、図表を作成したり、仮説検定を行う等して課題にアプローチする。	データを適切に加工できる (技)。 図表からデータの性質が読解できる (思)。 仮説検定を行い有意差が考えられる (思)。
19～	【プレゼンテーション作成方法】	Power Point の使い方を学ぶ。	デザイン、効果、資料の挿入の機能を使って資料を作成できる (技)。
	【イノベーション探究 I の調査結果分析】	調査からデータを加工して、図表を作成して、プレゼンテーションの資料にする。	課題研究の結論を、根拠づける資料が作成できる (思)。
	【プレゼンテーション資料作成】	課題研究の発表に向けてプレゼンテーションシートを作成する。	内容理解が容易なプレゼンテーションシートが作成できる (思・技)。

(イ) 研究授業の展開計画

評価の観点 (関) 関心・意欲・態度 (思) 思考・判断・表現 (技) 技能 (知) 知識・理解

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価 (評価の観点) (評価方法)
導入 5分	・あいさつ、 出欠確認 ・前時の内容及び本時の目標確認	・PCへのログイン。 ・本時の内容を確認する。		
展開 I 10分	・アンケートに答えさせる。	・google フォームを用いてアンケートに回答する。 ・回答後に、アンケート作成者からの調査項目の背景等の説明を聞く。	・google フォームでのアンケート回答補助を行う。	
展開 II 25分	・アンケート結果を分析させる。	・データの分析を行う。 ・図表を作成してデータの様子を観察する。 ・仮説を設定して、検定結果から有意差を判定する。	・データ加工が困難な学習者の援助を行う。 ・作成した図表について発問をするなどして、学習者の考えを高めることに努める。	図表が作成できるか(技)。 仮説を立てることができるか(思)。 検定ができるか(技)。 図表を用いて考察できるか(思)。
まとめ 10分	分析結果を共有する。	・簡単な発表活動を行う。 ・発表者の意見をレビューする。	・小さな気づきでもよいので、意見を出し合うことができるよう留意する。	分析したことを人に分かりやすく伝えようと発表しているか(思)〈観察〉。 新たな気づきをみつけようとしているか(関)(思)〈観察・記録用紙〉。

ウ 発表準備と発表

2学期中頃から Power Point の使い方を学習した後、「イノベーション探究 I」と教科横断的に授業を展開し、課題研究の成果をまとめた発表資料の作成や発表練習を行った。

令和2年1月11日(土)・12日(日)にSGU立命館大学と連携し、びわこ・くさつキャンパスにおいて課題研究宿泊研修を実施し、大学生TAから助言を受けた(写真2・3)。その後、校内で発表練習を行い、学習者間でフィードバックしながら、スライドや原稿の作り直しを行った。

2月13日(木)には情報科の学年発表会においてクラス代表が発表、2月22日(土)の「イノベーション探究 I」において、鳥羽の学びネットワーク関係者を招き、全班が発表した。



写真1 SGH事業研究発表会



写真2 課題研究宿泊研修



写真3 課題研究宿泊研修

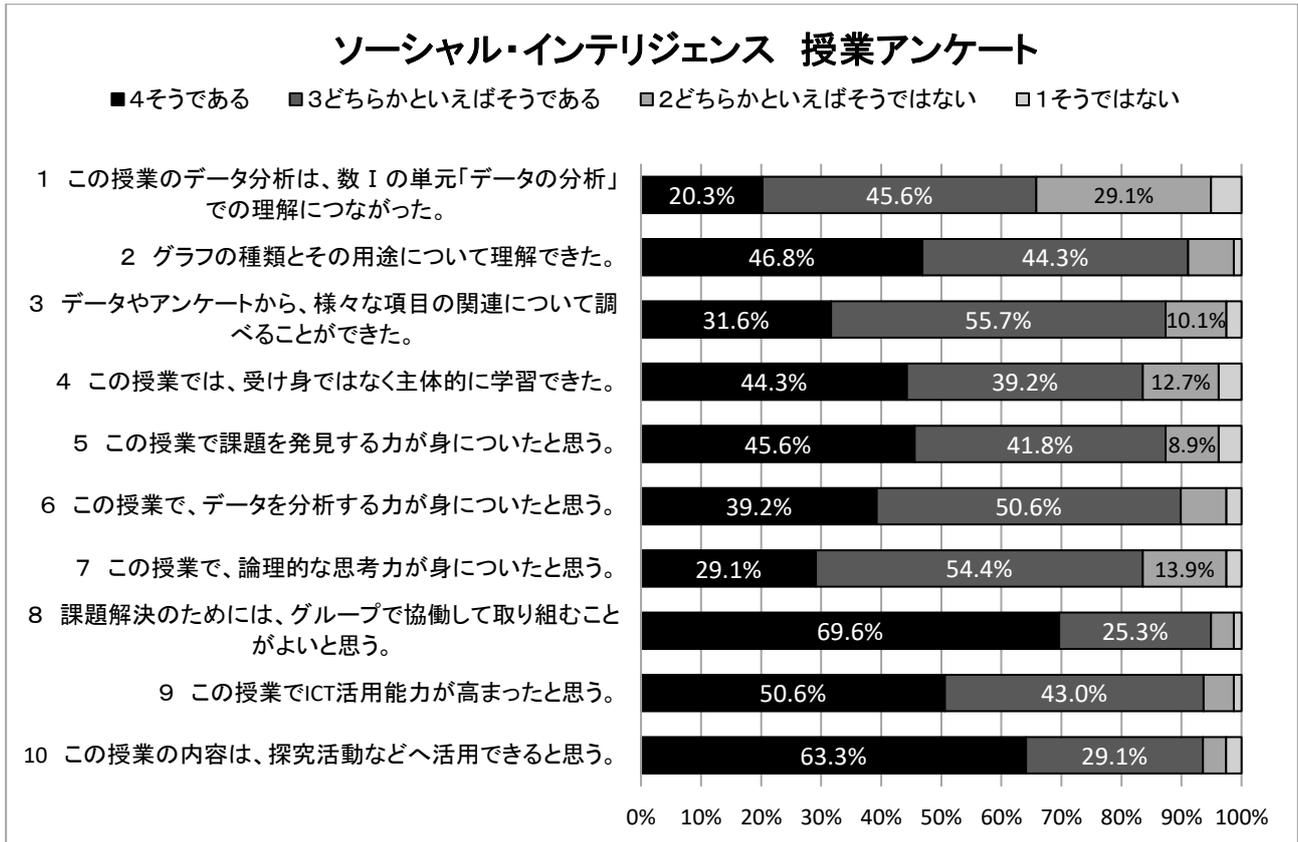
(3) 評価の方法

1 学期は、定期考査及び実習授業における実習記録簿の提出状況を評価した。2 学期は、「文化祭ポスター」の作品、表計算ソフトを利用し、グラフの作成に関するテスト、実習記録簿の提出を評価した。3 学期は、課題研究発表を評価するとともに、1 年間の取組全体についての評価を行った。

4 成果

(1) アンケート結果

校内課題研究発表後に実施した「ソーシャル・インテリジェンス」授業アンケートの結果は次のとおりである。(回答数 79) この結果から、科目の目標について概ね達成できたと考える。



(2) 学習者の感想

- ・この授業をとおして、グラフの書き方や Excel での計算など「イノベーション探究 I」で活かされたものが沢山あった。これからもっと詳しくデータを分析出来るようになりたい。
- ・一人だけでは固まった意見しか出ず、提案などが同じような意見になってしまうけれども、グループで話し合うと気づかなかったことに気づき、新しい視野が広がった。
- ・調べたデータをグラフにまとめ、聞き手にわかりやすいように工夫できた。

5 課題

学習者は、発表スライドのアニメーションを自分たちの発話に連動させる傾向がある。学習者達の前向きな発表スライドの工夫が、不必要なアニメーションとなることに留意することが次年度の課題の一つである。また、今年度は「数学 I」のデータの分析の分野を、Excel を用いて実習させた。各統計量を求めるだけでなく、データを分析して主張をすることまで実践できたことが成果である。さらに、1 年生に仮説検定の指導を行ったところ、授業アンケートから約 50%の学習者が、仮説検定の概念理解について有効な反応を示したことがわかった。過去 5 年間の授業実践の知見を活用して、データから図表を作成し、発表資料を作成することに加えて、仮説検定等の統計的手法を用いて、PPDAC モデルのような循環型の学習プログラムの検討が考えられる。

オ 「京都の風土・世界の風土」(学校設定科目・2年・2単位)

1 ねらい

身近な地域と世界の風土を探究することにより、相互の関係性を具体的かつ、グローバルな視点から理解する力を養う。世界の諸課題(グローバル・イシュー)について自分ごととしてとらえ、考察やグループワークなどを行いながら、まとめる力を身につける。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の課題としてあげていた「京都の風土・世界の風土」の教材化という点については、担当者間で年度当初に各単元のねらいや到達目標を確認し、デジタル資料にまとめたことで、今年度、持続可能な指導體制をより一層整備することができた。また、鳥羽の学びネットワークと密に連携し、高大社の接続を意識したカリキュラム設計ができた。2学期の難民問題の学習で、グローバル・イシューを自分ごととしてとらえ考察する姿勢を養い、3学期に株式会社岡墨光堂の岡岩太郎代表取締役によるワークショップを開き、実際に自分ごととしてグローバル・イシューに取り組まれている方のお話を聴くことで、授業での学びをキャリア教育的視点へと繋げることができた。また、同じく3学期に、大阪大学副理事・言語文化研究科の進藤修一教授に「人間の移動と多文化共生を考える」と題してワークショップをしていただき、授業での学習内容をとおして学術的な研究手法の理解にも繋げることができた。

3 概要(実践)

(1) 年間計画

学期	月	学習内容	評価の観点
1	4	ガイダンス「風土とは」	京都や世界の歴史には、地域の地理的条件や気候、宗教などが大きく影響していることを理解し、その基本的な知識を習得している。 基本的な資(史)料や情報などを収集する能力を身につけ、それらを適切に選択することにより、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」の活動につなげることができる。
		テーマ①京都の地形と気候	
		テーマ②「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか?」～Sustainable City Kyoto～	
	5	テーマ③世界の民族と宗教	
	6	テーマ④日本の宗教「神仏習合って?」	
		テーマ⑤民族問題「みんなちがって、大変だ!」 国立民族学博物館フィールドワーク	
	7	風土的差異を踏まえた異文化協働学習 (鳥羽グローバル・サミットに向けて)	
2	8	夏季休業中 アカデミック・ライティング講座 ※「イノベーション探究Ⅱ」との共催	
	9 10	テーマ⑥難民問題「難民問題から考える」	世界の具体的な事象について探究する活動をとおして、グローバル・イシューを自分ごととしてとらえることができる。
	11 12	テーマ⑦「東南アジアの風土を知ろう」 (シンガポール研修旅行に向けて)	海外研修における課題を明確にし、仮説を立てて現地で探究活動をおこなうことができる。
3	1	株式会社岡墨光堂ワークショップ 「絵画の修理～未来に何を残し、何を伝えるのか～」	グローバル・イシューに取り組んでいる方のお話を聴き、グローバル・リーダーの資質について考察している。
	2 3	大阪大学ワークショップ 「人間の移動と多文化共生を考える」	難民問題での学びを応用させ、より深い次元で人間の移動について考察している。

(2) 具体的な活動内容

4月から5月にかけては、京都の風土を中心に学習した。「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか？」というテーマのもと、講義やグループワークをとおして、昨年度実施した「イノベーション探究Ⅰ」で再発見した「京の智」をさらに深化させた。5月末からは、世界の風土について考察し、幅広い視野の獲得を図った。世界の宗教や民族問題について理解を深めるとともに、「イノベーション探究Ⅱ」とも連携を図りながら、本科目で習得した広い視野や文化の多様性への理解を課題研究活動に取り入れた。また、寛容力、教養力の育成を目的とした国立民族学博物館フィールドワークを昨年度に引き続き実施した。今年度は、7月の鳥羽グローバル・サミットにおいて中国とシンガポールの大学生と、10月にフランスの高校生と、英語を活用しながら協働学習をおこなった。海外高校生・大学生の出身国の風土について、既習の京都の風土と比較しながら考察した。2学期は主として、「難民問題から考える」をテーマとして取り上げ、グループワークをとおしてグローバル・イシューを自分ごととしてとらえさせる取組を行った。3学期には、鳥羽の学びネットワークと連携し、2学期までの学びを深めるワークショップを行った。



国立民族学博物館におけるフィールドワーク



鳥羽グローバル・サミットにおいて海外大学生と英語で協働学習



ホワイトボードを利用した難民問題に関する協働学習

(3) 評価の方法

ワークシートやクラス発表に加えて、定期考査による基本的な知識の定着度合について評価した。また、単元によっては、ルーブリック評価票を用いた評価を行った。

例)「京都はなぜ千年以上都市であり続けられるのか?～山背遷都から考える～」の評価票

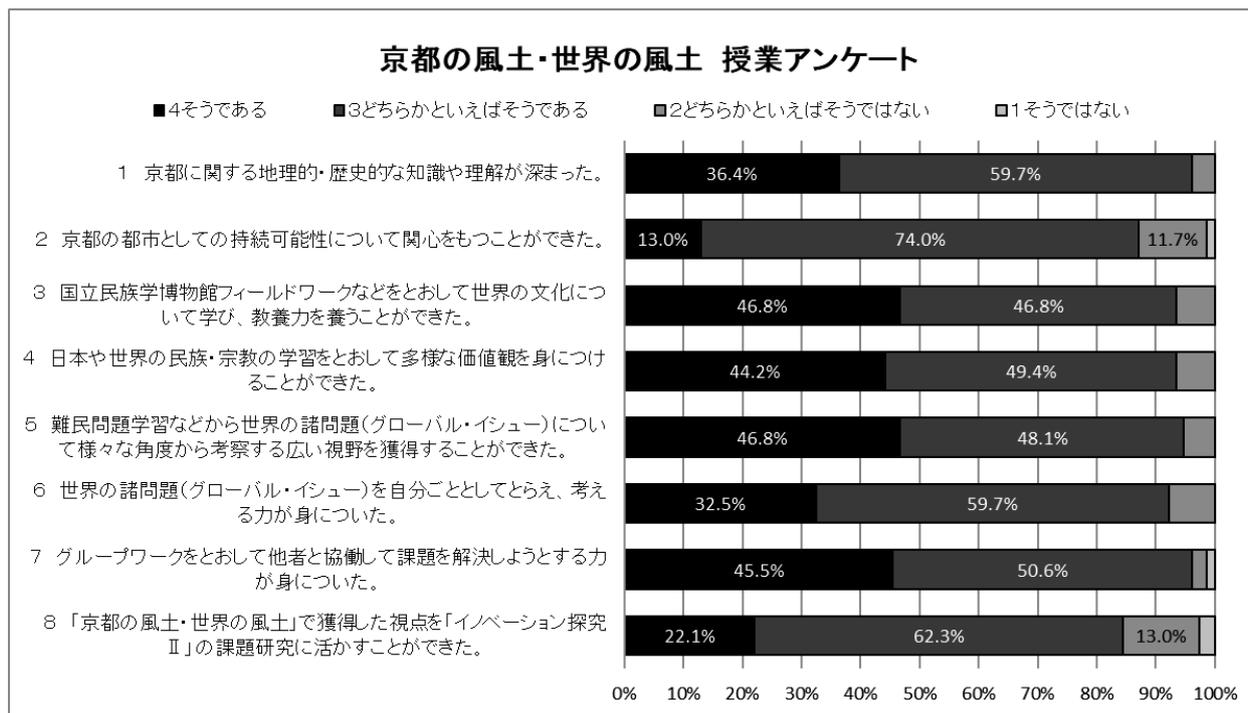
令和元年度 京都の風土・世界の風土 山背遷都から考える 自己評価票

令和元年5月

評価規準	基本的な歴史的知識・理解	地理的・歴史的な思考力・分析力・表現力		探究のための協働力・主体性	
	知識・理解	思考・判断・表現 資料活用技能		関心・意欲・態度	
評価項目	基礎的知識の確認	個人考察	グループの結論	グループワーク	
評価基準	A: 完璧 (Great)	山背遷都の経過を、仏教の影響の強さと関連付けて理解できている。	山背遷都の地理的理由を根拠をもって考察できている。	山背遷都の地理的理由をグループとして根拠をもってまとめられている。	グループ内で自己の役割を果たし、意見を表現することができ、他者の意見を聞くことができた。
	B: 合格 (Good)	山背遷都の経過を概ね理解できている。	山背遷都の地理的理由を自分なりに考察できている。	山背遷都の地理的理由をグループとしてまとめられている。	グループ内で意見を表現することができ、他者の意見を聞くことができた。
	C: がんばろう (Needs Work)	山背遷都の経過を理解できていない。	山背遷都の地理的理由を考察できていない。	山背遷都の地理的理由をグループとしてまとめられていない。	グループ内で自己の意見を述べることや、他者の意見に耳を傾けることができなかった。
評価記入欄 A~C					
学びをとおした自己変容記入欄					

4 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・ 1つのことに対して多方面から考えることが少しできるようになった。この授業で身につけた多方面から物事を見る力を「イノベーション探究Ⅱ」に応用して、探究内容を深めることができた。
- ・ 気候や地理的要因である風土が人間にどのような影響を与えたのか、また、どのような歴史的要因があって現在どのような問題が起きているのか、という過去と現在の繋がりや世界との繋がりを学び、視野が広がった。
- ・ グローバルに活躍されている方々の話をもっと聴いてみたい。
- ・ 今後、何気ない日常や日々のニュースに対し自分なりの問題意識を持てるように、常にアンテナを張っておきたい。
- ・ 授業中に考察していく上で、自分の知識不足を痛感した。これからは授業外でもさらに様々なことに関心を持っていきたい。
- ・ 難民問題について、学習する前は自分とは全く関係ないという認識だったが、考えれば考えるほど、自分たちと密接しているということに気づいた。
- ・ 難民問題は、自分にはあまり関係ないと思っている人が多いからこそグローバル・「イシュー」になってしまうのだと感じ、国際貢献についてのあり方について考えさせられ、自分の進路選択にも影響した。
- ・ グループでの意見交換をおして、自分では気づかなかった視点に気づいたり、自分の意見に対して助言をしてもらったりできたので、様々な視点から物事を考えることができた。

(3) 分析できる成果

昨年度の課題として、年度当初に京都の風土を学ぶ際に、グローバル・イシューを探究するという科目のねらいとどれだけ繋げることができるかという点があった。これについて今年度は、例えば京都の都市を学ぶ際に、世界の都市と比較することで、計画的に都市を整備することは古今東西共通の課題であることを理解させた。アンケートの質問2「京都の都市としての持続可能性について関心をもつことができた」について、肯定的な評価をした生徒の割合が昨年度より上昇していることから、授業担当者の意図が伝わったと考える。

質問6「世界の諸問題(グローバル・イシュー)を自分ごととしてとらえ、考える力が身についた」について、「4そうである」と回答した生徒の割合は昨年度より減少したものの、肯定的評価

をした生徒の割合は昨年度に引き続き9割を超えたので、科目のねらいを十分に伝えることができたと考える。

一方で、質問項目3「国立民族学博物館フィールドワークなどとおして世界の文化について学び、教養力を養うことができた」については、回答の内訳が昨年度とほぼ同じであった。国立民族学博物館フィールドワークは、毎年実施している大変意義ある取組だが、アンケート結果を踏まえると、来年度はさらにカリキュラムとの接続を図り、質的向上を図りたい。

5 課題

SGH指定5年次を終え、次年度以降は、自走に向けた取組を推進していかなければならない。教材はデジタルで整備できているので、授業担当者を年度ごとに替えながら、教科として持続可能な体制を整えていきたい。また、「京都の風土・世界の風土」の趣旨である、地理・日本史・世界史の融合という点を次年度以降も絶えず考え続け、次期学習指導要領にある「地理総合」や「歴史総合」への円滑な接続を図りたい。

幸いなことに、SGH指定以降、「京都の風土・世界の風土」の授業は、鳥羽の学びネットワークと連携したワークショップを多く実施し、社会に開かれた教育を推進することができている。生徒の感想にも「グローバルに活躍されている方々のお話をもっと聴いてみたい」という声がある。今年度から遠隔教育システムを活用した国内外の大学・高校との遠隔授業も行っているので、次年度以降についてはICTも活用しつつ、グローバル社会に開かれたカリキュラムの研究開発を継続していきたい。

(3) 研究開発単位Ⅲ：新しい視座と高い言語能力を確立する戦略群

ア 京都府海外サテライト校留学

1 ねらい

平成 28 年度から京都府が英語圏の中等教育機関をサテライト校として設置し、2～4ヶ月間程度の中期留学を通じ、海外で生活しながら行う多様な学びを通じて多文化対話力や多面的・多角的な課題分析能力・解決能力を養い、グローバル・リーダーとしての資質を向上させる。

2 概要（実践）

(1) 平成 30 年度冬期オーストラリア中期留学

日 程 平成 31 年 1 月 26 日（土）～4 月 8 日（月）

場 所 クイーンズランド州 Benowa State High School

参加者 1 年生女子生徒 1 名

(2) 平成 31 年度冬期オーストラリア中期留学

日 程 令和 2 年 1 月 25 日（土）～4 月 5 日（日）

場 所 クイーンズランド州 Keebra Park State High School

Southport State High School

Mountain Creek State High School

参加者 1 年女子生徒 2 名、2 年女子生徒 1 名

(3) 留学内容

留学先で現地の生徒とともに、英語で行われる授業を受ける。また、現地の歴史・文化のうち、自ら設定した内容について日本との違いを研究し、理解を深める取組を行い、帰国後レポートを提出する。

(4) 事前研修

留学内定後、約 5 ヶ月間で研究課題を明確にし、研究成果活用の展望について具体的に目標を持たせる。

3 成果

概要(1)に参加した生徒は、1 年次 11 月時点で進研模試の英語偏差値が 72.7 とすでに高かったが、留学後、2 年次の 11 月時点で同模試の英語偏差値が 73.6 とさらに上昇する結果となった。また数値以上に、英語を使って自らの考えを述べたり、書いたりする表現力に長足の進歩の跡が見えた。

概要(2)の生徒たちについては、1 年女子生徒 2 名とともに鳥羽グローバル・サミットにおける海外大学生のホストファミリーを務めたり、フランス・ヌヴェール高校からの留学生のホストファミリーも務めたりするなど、積極的に国際交流に関わる姿勢を見せてきた。2 年生女子生徒は、令和元年 12 月 22 日（日）に開催された全国高校生フォーラム（文部科学省及び国立大学法人筑波大学共催）のポスターセッションに学校代表として参加するなど課題研究を充実させてきた。こうしたことから、この生徒たちが留学を終えて帰国した際には、校内における国際交流や課題研究においてさらなるリーダーシップを発揮してくれるものと大いに期待ができる。また、語学力についても、留学前後の偏差値や GTEC スコアなどを比較し、その成績の変化を検証していく。

4 課題

留学生徒が留学中に達成する成果については、現在のところ、本校HPを利用した留学生通信や留学希望者を対象とした場での成果発表という形でおこなっている。さらに、広く普及を図るためにも、留学生徒にスピーチコンテストやディベート大会等への積極的な参加を促していくことが必要だと考えられる。

イ 海外インターンシップ (7) 韓国

1 ねらい

海外において、グローバル企業で海外の現地職員等とともに働く経験をとおして、将来的に国際的なビジネスで活躍できるグローバル・リーダーとしての資質を向上させる。また、課題研究に関するフィールドワークを外国人職員とともにやり、多文化協働による主体的な課題解決能力を高める。

総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における伝統・文化領域等の課題研究を深化させ、新たな価値を創造する力や情報発信の技能を身につけるため、日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所でワークショップを実施する。さらに、多様な価値観を受け入れる寛容力と幅広い教養力を身につけるために、韓国・ソウルの歴史的遺産や施設を訪れ、多角的な視座に立ってフィールドワークを行う。また、ハンヨン高校の生徒とのフィールドワーク・課題研究においては、カフェ文化・教育・食文化等のテーマに沿って日韓両国の観点から課題を発見し、その解決に向けた継続的な協働による取組の可能性を探る。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度の課題の一つであった質問1「外国語（英語・韓国語）によるコミュニケーション能力が向上した」の肯定的回答がやや少なかったという点を改善するために、今年度はハンヨン高校との交流時にできるだけ英語でコミュニケーションをとるように指導した。ただし、ハンヨン高校生は日本語を使いたい、本校生は英語と韓国語を使いたいという双方の生徒の気持ちがあるため、最終的にはどの言語を使うかよりも、コミュニケーションを楽しむことを優先するようにさせた。

3 概要（実践）

(1) 日程 令和元年9月18日（水）～9月21日（土）（4日間）

(2) 場所 韓国・ソウル

- ①日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所
- ②株式会社韓国片岡 ③韓国A S T電子 ④景福宮 ⑤ハンヨン高校
- ⑥韓国国立中央博物館 ⑦北村韓屋村

(3) 参加者 1年生2名、2年生8名

(4) 参加者選考方法

志望理由書、英語によるディスカッション、日本語による現地で行う課題研究に関する調査計画についての面接を実施した。

18名が応募し、10名を参加者に決定した。

(5) 引率 教諭2名

(6) 現地プログラム

9月18日	J R 京都駅集合、関西国際空港から仁川国際空港へ 午後：日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所訪問 ブリーフィングとして韓国の現状を学習した後、各グループの研究テーマに係る課題研究の進め方についてアドバイスをいただいた。また研究内容の発信方法について議論し、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」の課題研究内容を深化させた。
9月19日	韓国国立中央博物館を訪れ、韓国の歴史・文化についての包括的な認識を深めることで、課題研究を進めるための基盤を定着させた。 午後からは、株式会社韓国片岡の社員の方々とともに、韓国における事業展開・労働環境の現状について学習した。ターミナルを製作している現地企業の一つである韓国A S T電子株式会社を訪問し、現地の製造工程に実際に入ることにより、「ものづくり」に必要とされる考え方を体得した。また、同社社員にインタビュー等を行い、海外で事業を展開するのに必要とされることや、外国人労働者の採用条件などについて、課題研究内容を深化させた。

9月20日	ソウル市内フィールドワーク 朝鮮王朝の王宮景福宮を訪れた。古来の日本と韓国の歴史を正しく認識することで、日韓の未来に向けた関係構築について考察した。 また、韓国の伝統的な家屋が残る北村韓屋村を訪れ、持続可能な町づくりや、伝統的な文化財等の保存に関する課題について考察した。
9月21日	ハンヨン高校訪問 カフェ文化・教育・食文化等各グループのテーマについて、ハンヨン高校生とともに協働で課題研究を進めた。また韓国の伝統的な遊びなどを体験することで異文化理解を深めた。 午後：金浦国際空港から関西国際空港に向けて帰国



日本貿易振興機構(JETRO)ソウル事務所でのブリーフィング



韓国AST電子株式会社にてインターンシップを行う



ハンヨン高校生と課題研究についての協働学習

(7) 事前・事後研修等

ア 事前研修（令和元年7月19日～9月13日までの昼休み、放課後等9回実施）

- ・ソウルでの課題研究に向けた準備(京都フィールドワーク等)
- ・一般財団法人自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル）との遠隔学習
- ・インターネットを介したハンヨン高校との遠隔学習

イ 令和元年9月27日（金）校内において、海外研修における課題研究成果をプレゼンテーションし、成果の普及を図った。

4 成果

帰国後に韓国・ソウル海外研修に関するアンケートを実施したところ、質問4「異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力（多文化協働力）が向上した」、質問7「日本や韓国などの文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」について全ての参加生徒が「4そうである」と回答した。また、現地での取組については、日本貿易振興機構（JETRO）ソウル事務所を訪れた際のブリーフィングと、ハンヨン高校を訪問した際の協働学習について参加生徒全員が「4意義のあるものだった」と回答をした。訪問先でのワークショップ等が、グローバル・リーダーに必要な資質の向上に効果的であったことが生徒アンケート結果から伺える。

5 課題

昨年度と同様、今年度も質問1「外国語（英語・韓国語）によるコミュニケーション能力が向上した」について否定的意見が少数あった。一方、質問2「外国語を学ぶ必要性を感じ、外国語を学ぶ意欲が高まった」についてはこれも同様にほぼ全員の生徒が「4そうである」と回答した。ハンヨン高校生が日本語をよく学んでいることも背景にはあるが、あくまで言語はコミュニケーションの手段としてとらえ、相互理解を深めつつ、日本と韓国の架け橋となる人材育成ができる研修としたい。



景福宮フィールドワーク



北村韓屋村フィールドワーク

(イ) 上海

1 ねらい

総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究をグローバルな視点から深化させるために、日本と歴史的・文化的、そして経済的に深いつながりのある中国・上海において、海外インターンシップ・学校訪問・フィールドワーク等を行う。

日本貿易振興機構（JETRO）では「中国の経済概況と日系企業の動向」のブリーフィングを受け、ディスカッションを行う。

上海市嘉定一中を訪問し、英語で京都及び本校の紹介や「イノベーション探究Ⅱ」の取組についてのプレゼンテーション、ディスカッションを行う。また、上海市嘉定一中生徒との交流や互いの文化の違いや課題研究に関わるインタビューを実施する。

将来的にグローバル社会で活躍するために必要な資質を向上させるために、京都に本社をおく株式会社片岡製作所の海外事業所である上海片岡貿易有限公司や、上海石田電子衡器有限公司において海外インターンシップを行い、日本の企業が海外事業を展開する上の留意点についてのレクチャーを受け、現地職員とのディスカッションを実施する。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度、質問8「海外の大学で学ぶことについて関心が高まった」について「4そうである」と回答した生徒が50%とやや低かったことが課題であった。

今年度は研修の事前学習に遠隔教育システムを活用した復旦大学の学生へのインタビューを行うとともに、最終日の上海フィールドワークを昨年度に引き続き復旦大学の学生と一緒にするなど、海外の大学生と接する機会を増やし、海外大学への関心を高める活動を積極的に取り入れた。

3 概要（実践）

(1) 日程：令和元年10月30日(水)～11月2日(土)(4日間)

(2) 場所：中国・上海

- ①日本貿易振興機構（JETRO）
- ②上海市嘉定一中
- ③上海片岡貿易有限公司、上海石田電子衡器有限公司
- ④南京路、南翔老街、孔子廟、外灘、新天地、豫園

(3) 参加者：1年生6名・2年生4名

(4) 参加者選考方法：

志望理由書、英語によるディスカッション、現地で行う課題研究に関する調査についての日本語による面接を実施した。16名が応募し、10名を参加者に決定した。

(5) 引率：教諭2名

(6) 現地プログラム

10月30日	JR京都駅集合、関西国際空港から上海浦東国際空港へ到着後、日本貿易振興機構（JETRO）上海事務所訪問 「急速に変化する中国 その現場では何が起きているのか？日本企業はその巨大市場とどう取り組むべきか？」をテーマにブリーフィングを受け、ディスカッションをした。
10月31日	午前：上海市郊外の南翔老街、孔子廟フィールドワーク 午後：上海市嘉定一中訪問、外灘フィールドワーク 上海市嘉定一中生徒による日本語でのプレゼンテーション、本校生徒による京都と本校の紹介及び「イノベーション探究Ⅱ」の取組について英語でのプレゼンテーションを行った。終了後、生徒間で交流し、課題研究に関する質疑応答を実施した。
11月1日	午前：上海片岡貿易有限公司インターンシップ

	<p>上海片崗貿易有限公司の中国での事業展開について職員からレクチャーを受けた後、本校生の課題研究内容について現地職員と意見交換をした。</p> <p>午後：上海石田電子衡器有限公司インターンシップ</p> <p>上海石田電子衡器有限公司の事業概要について学んだ後に、工場見学とおして海外展開する際に求められる企業としての工夫と、グローバル社会で活躍するために必要な能力についてレクチャーを受けた。</p>
11月2日	<p>午前：新天地、豫園をフィールドワーク</p> <p>復旦大学の学生とともにフィールドワークを実施し、各自の課題研究についてのインタビューを行った。</p> <p>午後：上海浦東国際空港から関西国際空港に向けて帰国</p>



南翔老街にてフィールドワーク



上海片崗貿易有限公司で日本企業の中国進出について学ぶ



上海石田電子衡器有限公司にて海外における事業展開の留意点を学ぶ

(7) 事前・事後研修等

ア 事前研修（令和元年6月27日～10月29日までの期間に、昼休みと放課後等13回実施）

- ・英語でのプレゼンテーション準備、中国の基本情報についてレクチャー
- ・令和元年7月5日（金）株式会社片岡製作所京都本社インターンシップ
- ・令和元年7月19日（金）・7月22日（月）

高校生ビジネスプラン・グランプリ ビジネスプラン作成サポート授業

イ 事後研修

- ・令和元年11月26日（火）1年生の学年集会にて成果報告会

4 成果

(1) 生徒の感想

- ・日本の価値観が全てではないことを実感した。これからは世界の様々な事象に対し、批判から入るのではなく、まずは受け入れ、広い視野で世界を見ることができたい人になりたいと思った。
- ・研修をおして、様々なことにまずは挑戦してみて、つまずいたとしてもそれを乗り越え、また挑戦する強い意志がグローバル・リーダーには必要であると感じた。

(2) 分析できる成果

帰国後に行ったアンケート調査の結果、質問2「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった」、質問7「日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった（教養力）」について全員が「4そうである」と回答し、経済成長の著しく、グローバル企業が集まる上海で海外インターンシップを行うことが生徒のグローバルなキャリア観の形成に大きな影響を与えていることが分かった。今後も継続的に海外インターンシップや現地職員とディスカッションする機会を設けていきたい。

5 課題

中国のトップレベルの大学・高校生と議論できるレベルの英語力を身につけさせたい。遠隔教育システムを活用した現地高校生や大学生との事前学習を早い段階で経験させることで刺激を受け、現地での貴重な協働学習の機会をより活かすことができるようにさせたい。また、第2外国語として中国語を学ぶ生徒については、中国語での発表練習についても力を入れていきたい。

(ウ) 台湾

1 ねらい

将来的に国際的なビジネスでグローバル・リーダーとして活躍するための資質向上を目的とし、京都に本社をおく株式会社片岡製作所の海外事業所である台湾片岡股份有限公司等において海外インターンシップを行う。

また、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究を深化させるために、歴史・文化的に深いつながりのある台湾を訪れ、台北・台中市内のフィールドワークを実施する。台中市立台中工業高級中等学校や国立台湾大学において課題研究に関して英語によるプレゼンテーションやインタビュー調査を実施し、研究内容を深める。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

昨年度は、フィールドワークをさらに充実させ、インタビュー調査の内容等について映像等も用いながら成果普及することが課題であった。今年度は、海外研修のプログラムの中でも特にフィールドワークを充実させることに取り組んだ。課題研究のテーマに合わせてフィールドワーク先を生徒たちで考えさせ、現地調査の結果を踏まえて自分たちで映像を作りつつプレゼンテーションを行うなど、帰国後にわかりやすく研究成果を伝えることができるように発表方法を工夫した。

3 概要（実践）

(1) 日 程 令和元年12月23日(月)～12月27日(金)(5日間)

(2) 場 所 台湾

- ① 台北市内フィールドワーク
- ② 台中市内フィールドワーク
- ③ 台中市立台中工業高級中等学校
- ④ 台湾片岡股份有限公司
- ⑤ 般若科技股份有限公司
- ⑥ 国立台湾大学

(3) 参加者 1年生3名・2年生7名

(4) 参加者選考方法

志望理由書、英語によるディスカッション、日本語による現地で行う課題研究に関する調査についての面接を実施した。22名が応募し、10名を参加者に決定した。

(5) 引 率 教諭2名

(6) 現地プログラム

12月23日	JR京都駅集合 関西国際空港から、台湾桃園国際空港へ 台北市内をフィールドワーク（台北駅周辺、総統府）
12月24日	午前：台北市内をフィールドワーク（迪化街、四平陽光商圈等） 午後：国立台湾大学にて課題研究について英語によるインタビュー調査
12月25日	海外インターンシップ 午前：台湾片岡股份有限公司の概要説明、事業内容や課題研究について質疑応答 午後：般若科技股份有限公司訪問。会社概要説明、事業内容や課題研究について質疑応答
12月26日	午前：台中市内をフィールドワーク（萬春宮周辺） 午後：台中市立台中工業高級中等学校訪問。課題研究内容に関する英語によるプレゼンテーションとインタビュー調査、学校施設・授業見学
12月27日	午後：台湾桃園国際空港から関西国際空港に向けて帰国



台北市内でフィールドワーク



台中の高校生に、課題研究に関して英語でプレゼンテーション



般若科技股份有限公司でのインターンシップ

(7) 事前・事後研修等

ア 事前研修（令和元年9月25日～12月11日まで、放課後9回実施）

- ・課題研究、英語プレゼンテーション準備
- ・令和元年12月6日（金）株式会社片岡製作所京都本社インターンシップ

イ 事後研修（令和2年1月8日～1月31日、放課後）

- ・令和2年2月1日（土）京都府教育委員会グローバルネットワーク京都交流会において、課題研究成果を英語でプレゼンテーション

4 成果

この海外研修の最も大きなねらいである課題研究の現地調査を核として、海外研修のプログラム内容及び事前・事後学習の改善に取り組んだ。具体的には、事前学習として先行研究の論文の輪読会を行い、先行研究を踏まえつつ自分たちの研究テーマを設定し、課題研究を進めさせた。また、課題研究の成果について、自分たちで動画を作成しつつプレゼンテーションを行うなど、昨年度からの改善点について着実に実施することができた。その結果、質問5「疑問点を自分で調べるなどして、主体的に課題を解決する力（突破力）が上昇した」については全員が肯定的に回答をし、質問7「日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに視野が広がった（教養力）」については90%が「4そうである」と回答するなど、本研修をとおしてグローバル・リーダーに求められる資質・能力の向上させることができた。

またSGH台湾海外研修は、他のSGH海外研修（韓国・上海）と比べて英語を使う機会が多いのが特徴であるが、質問1「英語によるコミュニケーション能力が向上した」について90%が肯定的に回答し、質問2「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった」について全員が「4そうである」と回答するなど、外国語学習と海外研修を関連づけつつ語学力を高める取組を実施することができた。

5 課題

先行研究を論文などの文献から学び、先行研究を超えた課題研究を自分たちで行い、そしてオリジナル動画等を作って課題研究の成果を発信するという、これまで本校にはなかった課題研究の型を作ることができた。この型を総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」における課題研究及び国内外のフィールドワークにおいても普及させ、自分たちで考えたアクションを起こすことで社会とつながり、課題研究を締めくくれるような形に取組を発展させていきたい。



台湾片岡股份有限公司インターンシップにて事業内容に関して質疑応答



国立台湾大学キャンパス内にてインタビュー調査

(I) 海外研修アンケート

■実施期間、参加者、研修先

- (1) 韓国研修 令和元年9月18日(水)～9月21日(土)、10名(1年生2名・2年生8名)
 ①日本貿易振興機構(JETRO) ソウル事務所 ②株式会社韓国片岡 ③韓国A S T 電子
 ④景福宮 ⑤ハンヨン高校 ⑥韓国国立中央博物館 ⑦北村韓屋村
- (2) 上海研修 令和元年10月30日(水)～11月2日(土)、10名(1年生6名・2年生4名)
 ①日本貿易振興機構(JETRO) ②上海市嘉定一中 ③上海片崗貿易有限公司
 ④上海石田電子衡器有限公司 ⑤南京路、南翔老街、孔子廟、外灘、新天地、豫園
- (3) 台湾研修 令和元年12月23日(月)～12月27日(金)、10名(1年生3名・2年生7名)
 ①台北市内フィールドワーク ②台湾片岡股份有限公司 ③般若科技股份有限公司
 ④台中市内フィールドワーク ⑤台中市立台中工業高級中等學校 ⑥國立台湾大学

■回答方法：4 そうである 3 どちらかといえばそうである 2 どちらかといえばそうでない
 1 そうではない

1 共通	研修先	4	3	2	1
Q1 英語によるコミュニケーション能力が向上した。	韓国	6	2	2	
	上海	4	5	1	
	台湾	5	4		1
Q2 英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった。	韓国	9	1		
	上海	10			
	台湾	10			
Q3 現状分析を踏まえた上で、新しい提案をする力(価値創造力)が向上した。	韓国	8	2		
	上海	4	6		
	台湾	3	6	1	
Q4 異なる文化の人々と協力して課題に取り組む力(多文化協働力)が向上した。	韓国	10			
	上海	7	3		
	台湾	7	3		
Q5 疑問点を自分で調べるなどして、主体的に課題を解決する力(突破力)が向上した。	韓国	6	4		
	上海	8	2		
	台湾	6	4		
Q6 自分とは異なる価値観を尊重する力(寛容力)が向上した。	韓国	8	2		
	上海	10			
	台湾	8	2		
Q7 日本や世界の文化について学ぶことで、様々な知識を得るとともに、視野が広がった(教養力)。	韓国	10			
	上海	10			
	台湾	9	1		
Q8 海外の大学で学ぶことについて関心が高まった。	韓国	6	4		
	上海	4	5	1	
	台湾	5	4	1	
Q9 海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった。	韓国	7	3		
	上海	7	3		
	台湾	5	5		
Q10 S G H海外研修に参加してよかった。	韓国	10			
	上海	10			
	台湾	10			

2 韓国研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 遠隔を使ったクレアソウルとの事前学習は、今回の研修に役立った。	9	1		
Q2 遠隔を使ったハンヨン高校との事前学習は、今回の研修に役立った。	9			
Q3 放課後に行ったグループごとの事前学習は今回の研修に役立った。	8	2		
Q4 片岡製作所でのインターンシップに向けた事前学習は今回の研修に役立った。	9	1		

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 1日目のJETROソウルでのブリーフィング・ワークショップは意義のあるものだった。	10			
Q6 2日目午前のソウル市内フィールドワークは意義のあるものだった。	9	1		
Q7 2日目午後のソウル市内フィールドワークは意義のあるものだった。	10			
Q8 3日目の韓国片岡とのインターンシップは意義のあるものだった。	9	1		
Q9 4日目のハンヨン高校との交流は意義のあるものだった。	10			

3 上海研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 事前学習として実施したプレゼンテーション準備は、今回の研修に役立った。	7	2	1	
Q2 事前学習として実施した中国の地理・歴史についての学習は、今回の研修に役立った。	2	6	2	
Q3 事前学習として中国や訪問企業等について調査するという課題は、今回の研修に役立った。	6	4		
Q4 片岡製作所京都本社インターンシップは、課題研究や今回の研修に役立った。	10			

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 1日目の日本貿易振興機構(JETRO)でのブリーフィングは意義のあるものだった。	9	1		
Q6 2日目午前の上海フィールドワークⅠは意義のあるものだった。	8	2		
Q7 2日目午後の上海市嘉定一中訪問は意義のあるものだった。	9	1		
Q8 3日目午前の上海片岡貿易有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	10			
Q9 3日目午後の上海石田電子衡器有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	8	2		
Q10 4日目午前の上海フィールドワークⅡ(新天地)は意義のあるものだった。	7	3		
Q11 4日目午前の上海フィールドワークⅢ(豫園)は意義のあるものだった。	7	3		

4 台湾研修

<事前学習>

	4	3	2	1
Q1 事前学習で取り組んだ台湾の観光に関わる課題研究で、新たな価値を発見することができた。	9	1		
Q2 台湾の地理・歴史についての事前配布プリントは今回の研修に役立った。	6	4		
Q3 英語によるプレゼンテーションの資料作成・発表練習は今回の研修に役立った。	9		1	
Q4 株式会社片岡製作所京都本社インターンシップは意義のある取組であった。	8	1	1	

<研修中>

	4	3	2	1
Q5 2日目午前の台北フィールドワーク（迪化街、四平陽光商園）は意義のあるものであった。	9	1		
Q6 2日目午後の国立台湾大学訪問は意義のあるものであった。	4	5	1	
Q7 3日目午前の上海片岡股份有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	8	2		
Q8 3日目午後の般若科技股份有限公司でのインターンシップは意義のあるものだった。	9	1		
Q9 4日目午前の台中フィールドワーク（萬春宮）は意義のあるものだった。	10			
Q10 4日目午後の台中市立台中工業高級中等学校での交流は意義のあるものだった。	10			

5 成果

SGH研究開発1年次から実施してきた「海外インターンシップ」を、研究開発4年次から教育課程内に位置づけ、本年度も単位認定を行った。SGH海外研修参加者30名の変容について検証したところ、共通質問9「海外で働くこと、国際的な仕事について関心が高まった」の肯定的評価については全3年生が46.7%、全2年生が36.7%、全1年生が41.7%に対して、海外インターンシップ参加者は100%となるなど、実際に海外に出てグローバル企業において就業体験を行うことが将来的にグローバル社会で活躍する上での具体的なイメージを持たせる上で効果的であることが本年度についても検証できた。

また、共通質問8「海外大学で学ぶことについて関心が高まった」の肯定的評価については、全3年生が21.1%、全2年生が12.8%、全1年生が15.0%と低く、研究開発上の課題であったのに対し、SGH海外研修参加者は93.3%と大幅に高かった。海外の大学において課題研究内容を英語で発表したり、海外の大学生とともに課題研究についてフィールドワーク等を行うことにより、海外の大学を身近に感じ、海外大学への進学意欲を高めることを検証できた。

6 課題

以前と比べると、SGH校に限らず、より多くの高校が海外研修を行うようになってきたが、そうした高校に対してSGH研究開発内容の成果普及を積極的に行うことを課題とする。例えば、海外研修の実施先にある各校の地元企業の海外事業所や取引先と連携して海外インターンシップを実施するなど、地域社会・グローバル社会に開かれた人材育成モデルを普及させたい。中長期に渡る海外インターンシップを行うことが理想的ではあるが、海外研修中における短期間の海外インターンシップであっても教育効果は高いため、各校の現行における海外研修プログラムの中に無理なく取り入れられる取組をSGH校として提案していきたい。

また、本年度はICT機器や遠隔教育システムを活用した海外研修の事前学習・事後学習を推進してきたが、SGH指定期間終了後に自走するための1つの形として、遠隔授業を応用したグローバル企業によるオンライン研修を研究開発するなど、より多くの生徒がICT機器を活用することによりグローバル社会で働く意欲や海外大学への進学意欲を高められるプログラムを研究開発したい。

ウ 海外の高校とのワークショップ (7) 韓国・ハンヨン高校

1 ねらい

同世代の海外の高校生との交流を通じて、様々な価値観や考え方を学び、多文化協働力や寛容力を養う。また、交流の中で「京の智」を再確認するとともに、課題研究内容をグローバルな視点から深化させ、世界における様々な課題を発見し、解決する力を培う。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和元年9月21日（土）
- (2) 場 所 ソウル特別市ハンヨン高校
- (3) 参加者 1年生2名・2年生8名、ハンヨン高校生徒23名
- (4) 講 師 ハンヨン高校キム教諭
- (5) 引 率 教諭2名
- (6) 現地プログラム
 - ア 10:30-11:00 ハンヨン高校着、歓迎会・自己紹介
 - イ 11:00-11:30 ハンヨン高校生によるプレゼンテーション
 - ウ 11:30-12:30 ハンヨン高校の生徒と韓国伝統遊戯を体験
 - エ 12:30-14:00 ハンヨン高校の生徒とランチ交流
- (7) 事前・事後研修等
 - ア 事前研修（7月19日～9月13日までの昼休み、放課後等9回実施）
 - ・ソウルでの課題研究に向けた準備（課題研究テーマに基づいた探究計画の立案、調査内容の検討）
 - ・事前交流と予備調査を目的として、ハンヨン高校生と Web ミーティングを行った。
 - イ 事後研修
 - ・学年集会において1年生全員を対象としたプレゼンテーションを行った。

3 成果

参加者全員が、ハンヨン高校との交流についての研修レポートで、会話やジェスチャーに関する事項を記入していた。また、8名の参加者がハンヨン高校生との交流によって、2国間の文化の類似点や相違点に関する事項を記入した。これは、参加者が意思疎通の困難な状況下でも、各自の課題を解決するために主体的に行動できたことを示唆しており、本活動が参加者の主体性を促進し、対話を通して実体験に基づいた知識を提供するプログラムであったと考えられる。

4 課題

今回は韓国の伝統遊戯を話題に、少ない時間ではあるが自由に交流することができた。その中で、参加者は各自の課題に基づいたインタビューを自然な会話の中で行っていた。今年度は訪韓前に遠隔教育システムを用いた事前学習を行うことができた実績を鑑み、参加者の探究課題の調査がより豊かなものになるために、事前・事後の学習プログラムを再設計することを課題としたい。



ハンヨン高校生との交流会



投壺（トゥホ）を体験



ハンヨン高校生とランチ交流

(イ) 上海・上海市嘉定一中

1 ねらい

同時代を生きる海外の高校生との交流を通じて、様々な価値観や考え方を学び、多文化対話力を身につける。また、「イノベーション探究Ⅱ」における課題研究に関して英語で発表し、インタビュー調査や意見交流を行う。将来的に国際的な舞台で自信を持って発表ができる実践的英語力も育成する。

2 概要(実践)

(1) 日 程 令和元年10月31日(木)

(2) 場 所 上海市嘉定一中

(3) 参加者 SGH上海海外研修参加者1年生6名・2年生4名、上海市嘉定一中生徒10名

(4) 引 率 教諭2名

(5) 現地プログラム

ア 14:00-16:00 上海市嘉定一中到着、歓迎会

① 本校生徒による日本・学校紹介(英語)

② 上海市嘉定一中生徒による嘉定区・中国文化・学校紹介(日本語)

③ 本校生徒による「イノベーション探究Ⅱ」の取組に関するプレゼンテーション(英語)

④ 意見交流 本校生徒の課題研究テーマに関するインタビュー調査

イ 16:00-16:30 校内見学(サイエンスルーム、図書館等)



「イノベーション探究Ⅱ」課題
研究プレゼンテーション



意見交流の様子

(6) 事前・事後研修等

ア 事前研修(6月27日～10月29日まで、昼休みと放課後等13回実施)

・英語でのプレゼンテーション準備、中国基本情報レクチャー、訪問先に関する課題研究等

イ 事後研修

・学年集会において1年生全員を対象としたプレゼンテーションを行った。

3 成果

事後アンケートでは、多くの生徒が「上海市嘉定一中の生徒の日本語でのプレゼンテーションに感動した」「わずか数ヶ月でここまで日本語が話せることに驚いた」などと答えた。外国語学習への熱意に影響を受け、自らも英語や第2外国語の習得にさらに力を注ぎたいと考えた生徒が多かった。同世代の学生の高い目標意識や勤勉さに触れたことは、生徒が日頃の学習を振り返り、学習意欲を向上させるよいきっかけとなった。さらに、探究活動について英語で紹介し、インタビュー調査を行ったことで、単なる文化紹介に留まらず、課題研究の質を高めることができた。

4 課題

上海市嘉定一中では今年度から日本語クラスを創設し、週7～8時間の日本語の時間を設けている。生徒の司会、プレゼンテーションなどもすべて日本語で行われた。上海市嘉定一中が今後も継続的な関係の構築を希望されていることから、来年度は本校生徒も中国語によるスピーチ、プレゼンテーションなどを取り入れていきたい。

(ウ) 台湾・台中市立台中工業高級中等學校

1 ねらい

同時代を生きる海外の高校生との交流をとおして、様々な価値観や考え方を学び、多文化対話力を身につける。また、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」での課題研究に関して英語で発表し、インタビュー調査や意見交流を行う。将来的に国際会議等で自信を持って研究発表ができる実践的英語力も育成する。

2 概要（実践）

- (1) 日 程 令和元年12月26日（木）
- (2) 場 所 台中市立台中工業高級中等學校
- (3) 参加者 S G H台湾海外研修参加者1年生3名・2年生7名
台中市立台中工業高級中等學校生徒
- (4) 引 率 教諭2名
- (5) 現地プログラム
ア 13:00-14:30 歓迎会、課題研究に関して英語によるプレゼンテーション
イ 14:30-16:00 授業参加、施設見学、交流会
ウ 16:00-16:30 課題研究内容に関する英語によるインタビュー及びディスカッション
- (6) 事前・事後研修等
ア 事前研修（令和元年9月25日～12月11日まで、放課後9回実施）
 - ・先行研究の輪読会、課題研究内容についてのプレゼンテーション資料の作成、英語による発表練習を行った。
イ 事後研修
 - ・2月1日（土）京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」において、S G H台湾海外研修における課題研究内容について英語でプレゼンテーションを行った。

3 成果

- (1) 生徒の感想
 - ・パソコンでの設計などに取り組むなど、日本では大学で学ぶような高度な技術について勉強している高校生を見て驚き、自分自身も勉強を頑張ろうという気持ちになった。
 - ・交流会のプログラム運営を全て生徒が行っていると聞き、台湾の高校生は主体性や協調性が日本の高校生よりもあると感じた。グローバル社会で働く上ではこうした力が必要だと思うので、自分も身につけていきたい。
- (2) 分析できる成果
S G Hアソシエイトの指定を受けてから6年間相互訪問をしつつ、グローバル・リーダーに必要な資質・能力を向上させられる仕組みを構築できた。また、互いに母国語ではない英語を用いて発表やディスカッションを行うことにより、双方が刺激を受けつつ学習意欲を高めることができた。

4 課題

S G H指定期間終了後についても、本年度から導入した遠隔教育システム等のICT機器を用いた事前・事後学習をとおして、継続的に課題研究の内容を深化できる体制を構築する。



課題研究プレゼンテーション



先端科学技術の設備を見学



課題研究のインタビュー調査

(I) その他

1 ねらい

同世代を生きる海外の高校生との交流をとおして、様々な価値観や考え方を学び、多文化協働力・異文化理解を深めるとともに、日本の伝統・文化を海外の高校生に広める。

2 概要（実践）

(1) セントオーガスティンズカレッジ（オーストラリア）

ア 日 時 平成 31 年 4 月 15 日（月）

イ 場 所 鳥羽高校

ウ 参加者 2 年生スポーツ総合専攻 40 名、2 年生文科スポーツコース 30 名、
2 年生グローバル科 80 名、セントオーガスティンズカレッジ 24 名

エ 実施内容

学校見学、歓迎式、交流会（スポーツ交流含む）、全学年希望者とのランチ交流

(2) ヌヴェール高校（フランス）

ア 日 時 令和元年 10 月 15 日（火）～10 月 20 日（日）

イ 場 所 鳥羽高校

ウ 参加者 1・2 年生全生徒、ヌヴェール高校 14 名

エ 実施内容

歓迎式、授業参加、茶道体験、部活動見学・体験、ホームステイ、送迎会

(3) 西安交通大学附属高校（中国）

ア 日 時 令和元年 10 月 28 日（月）

イ 場 所 鳥羽高校

ウ 参加者 昨年度・今年度陝西省訪問プログラム参加生徒 1・2 年生 17 名、
西安交通大学附属高校 5 名

エ 実施内容

歓迎式、授業体験（音楽）、陝西省訪問プログラム参加者と交流会、部活動見学・体験（相撲部）

3 成果

今年度は昨年度よりも海外の高校の受入回数を増やし、より多くの生徒が外国語を用いながら海外の高校生と学び合う機会を得ることができた。異なる文化・言語を持つ人々とのコミュニケーションについてそれぞれの生徒が工夫することで、多文化対話力や異文化理解力を深めることができた。

4 課題

通常の授業において海外の高校生と協働学習ができるプログラム内容を研究開発する。全教員が協力的に受け入れを行ったが、教科・科目によっては協働学習が難しいものもあった。日本にしながらグローバルな体験ができる環境の創出に向けてどの授業でも協働学習ができるようにしたい。



セントオーガスティンズカレッジ生とスポーツ交流



ヌヴェール高校生と書道学習



西安交通大学附属高校生と日本の伝統・文化を体験

エ 鳥羽グローバル・サミット

1 ねらい

3年生については、総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」における課題研究について海外の大学生とディスカッションを行い、地域・言語や世代を超えた新たな価値を協働で提言し、価値創造力を高める。1・2年生については、海外の大学生とのワークショップ等をとおして課題研究内容をグローバルな視点から深化させるとともに、多文化協働による課題発見能力・課題解決能力を高める。また、海外大学生との KYOTO フィールドワークや協働授業をとおして、「京の智」の再発見を促すとともに、文化や価値観の違いを理解し、共生するための多角的な視点を身につけさせる。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和元年7月10日（水）～7月14日（日）
- (2) 場 所 本校、京都市内
- (3) 参加者 1年生全員322名、2年生全員315名、3年生全員317名
- (4) T A N U S（シンガポール国立大学）4名、復旦大学（上海）2名、きょうと留学生ハウス・京都府名誉友好大使等13名（京都大学、京都工芸繊維大学、京都府立大学）
- (5) プログラム
 - ア 7月10日（水）

15：30～17：00 開会式、ホームステイ先との対面式
 - イ 7月11日（木）・12日（金）
 - (ア) 「グローバル・コミュニケーションⅠ」（1年生グローバル科79名）

内容：総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」との教科横断的な取組として、地元の人しか知らない京都の情報についてICT機器を用いながら英語でプレゼンテーション
 - (イ) 「総合数学」（1年生グローバル科79名）

内容：海外のトップ大学の学生とグループ活動をとおして、とらえどころのない値を推定したり、問題解決学習を実施
 - (ウ) 「グローバル・コミュニケーションⅡ」（2年生グローバル科80名）

内容：総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」との教科横断的な取組として、国ごとに価値観が異なるグローバル・イシューについて英語ディベートを実施
 - (エ) 「京都の風土・世界の風土」（2年生グローバル科80名）

内容：シンガポール及び上海の英語地図と日本で作成されている地図を比較しながら、両都市の特色を示す説明文を海外大学生と協働して考察し発表
 - (オ) 「イノベーション探究Ⅲ」（3年生グローバル科78名）

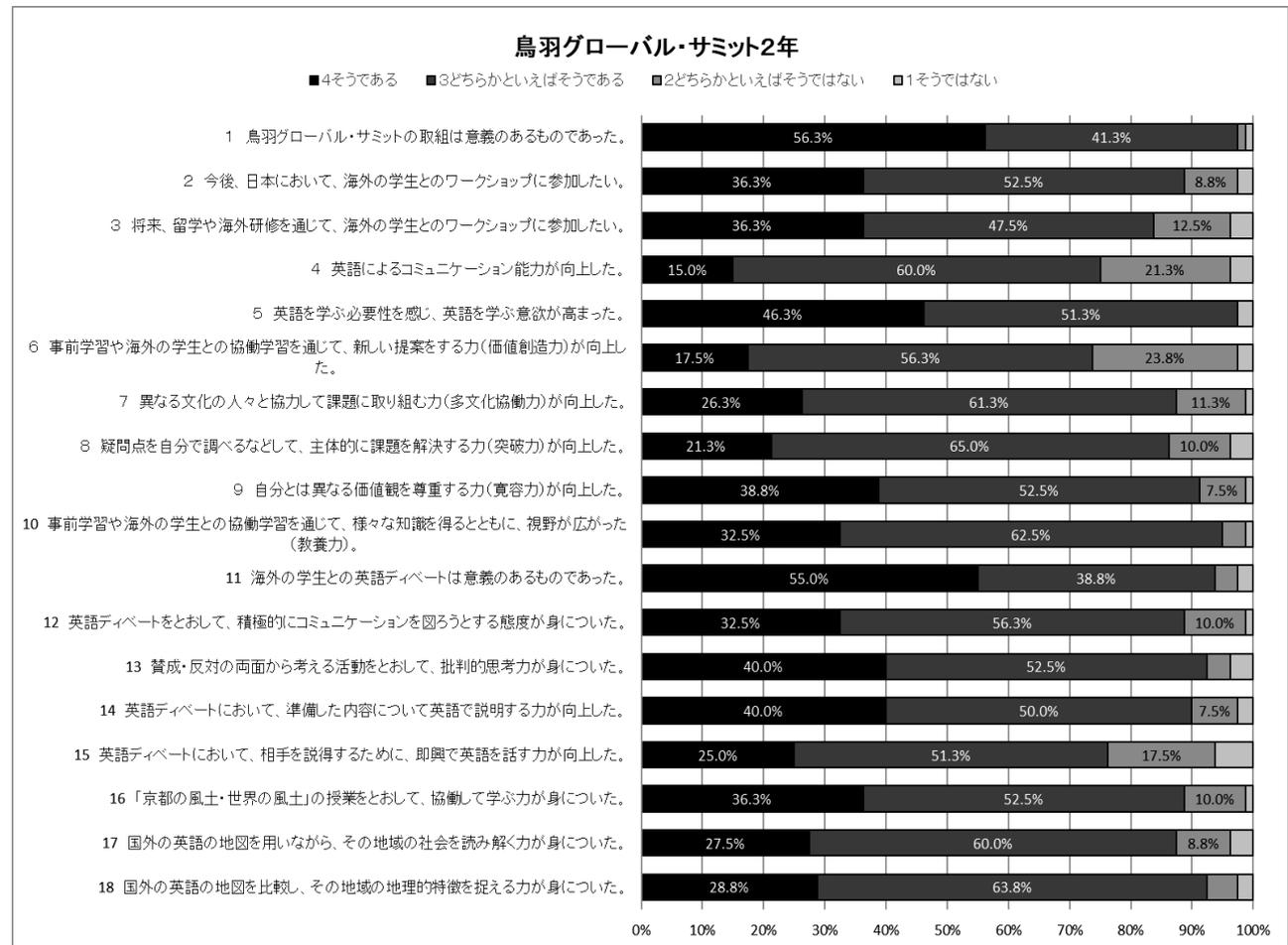
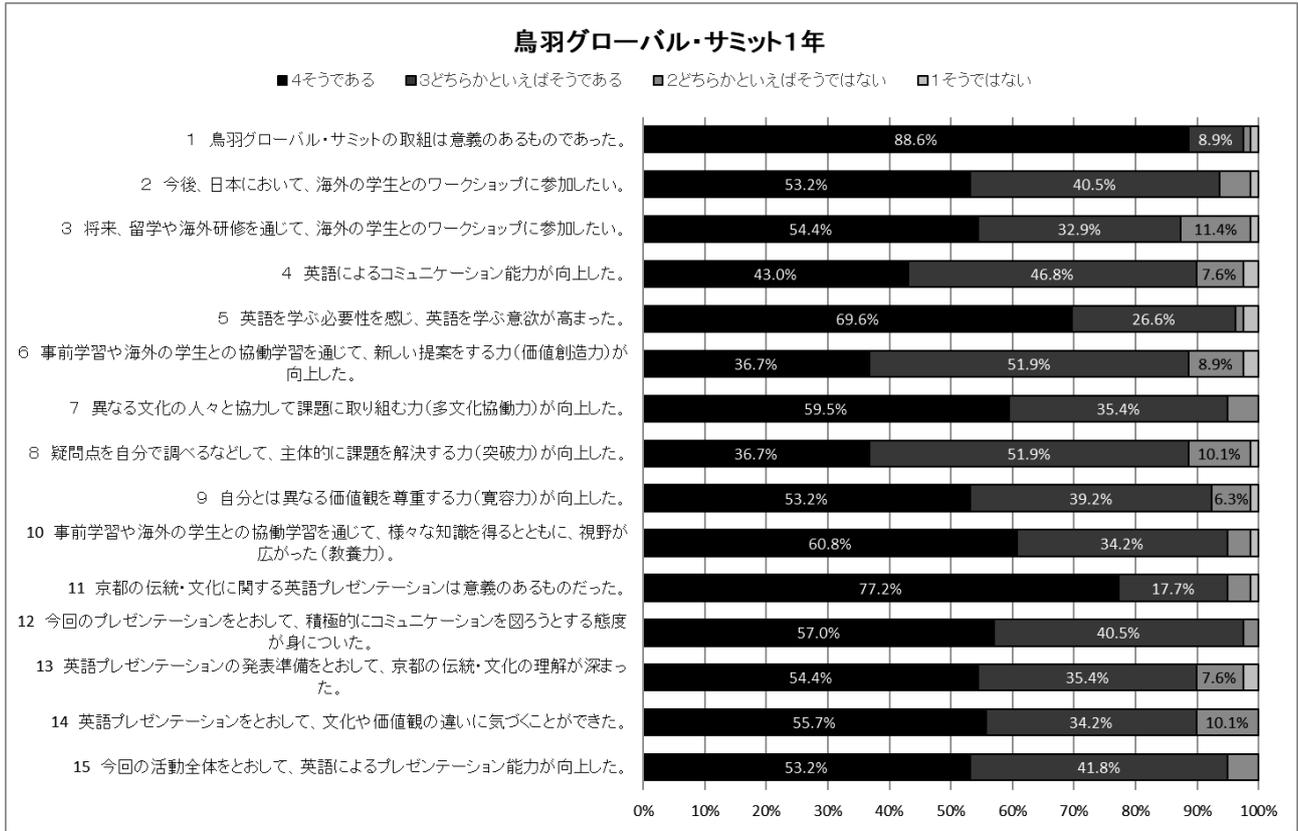
内容：総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅲ」の課題研究内容について英語でディスカッションを行い、海外の大学生とともに作成した提言を英語で発表
 - (カ) グローバル・ランチ、グローバル・カフェ、1年生ワークショップ
内容：昼休みと放課後に全生徒と全教職員を対象に、異文化理解や課題研究内容に関するインタビュー調査に取り組む機会を設けた。また、1年生対象に Show&Tell 等を英語を用いて行うワークショップを実施
 - ウ 7月13日（土）

「グローバルまちづくり高校生サミット」（1年生13名・2年生11名参加）
内容：国連サミットで採択された17の持続可能な開発目標（SDGs）のうち、目標11の「住み続けられるまちづくりを」について、グローバルな視点から具体的な課題設定・課題分析を行い、海外からの留学生とともに課題解決に向けた提言を作成・発表
 - エ 7月14日（日）

「KYOTO フィールドワーク」（1年生7名・2年生2名参加）
内容：海外の大学生とともに、グループごとの課題研究テーマに基づき、「京の智」を象徴する写真を撮影するフィールドワークを京都市内にて実施
場所：養源院、三十三間堂、伏見稲荷大社

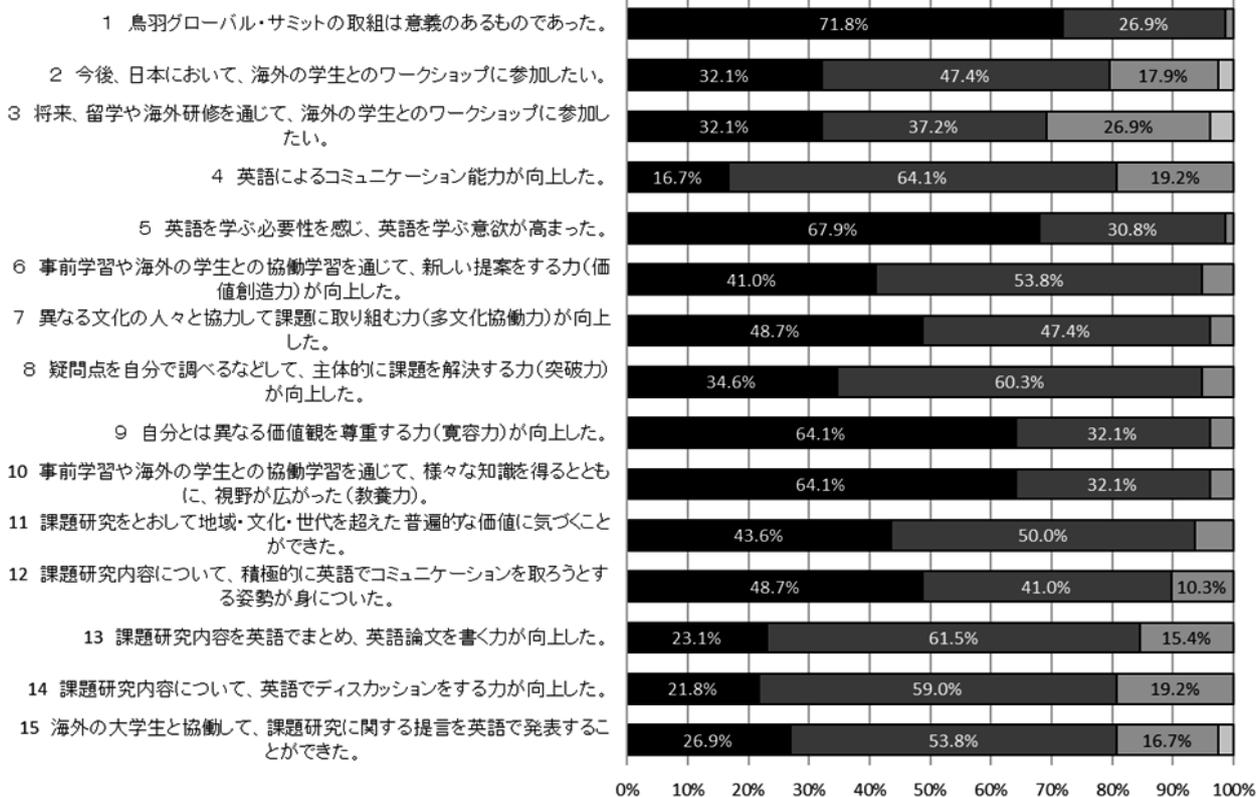
3 成果

(1) 生徒へのアンケート調査（3年については「イノベーション探究Ⅲ」の資料を再掲）



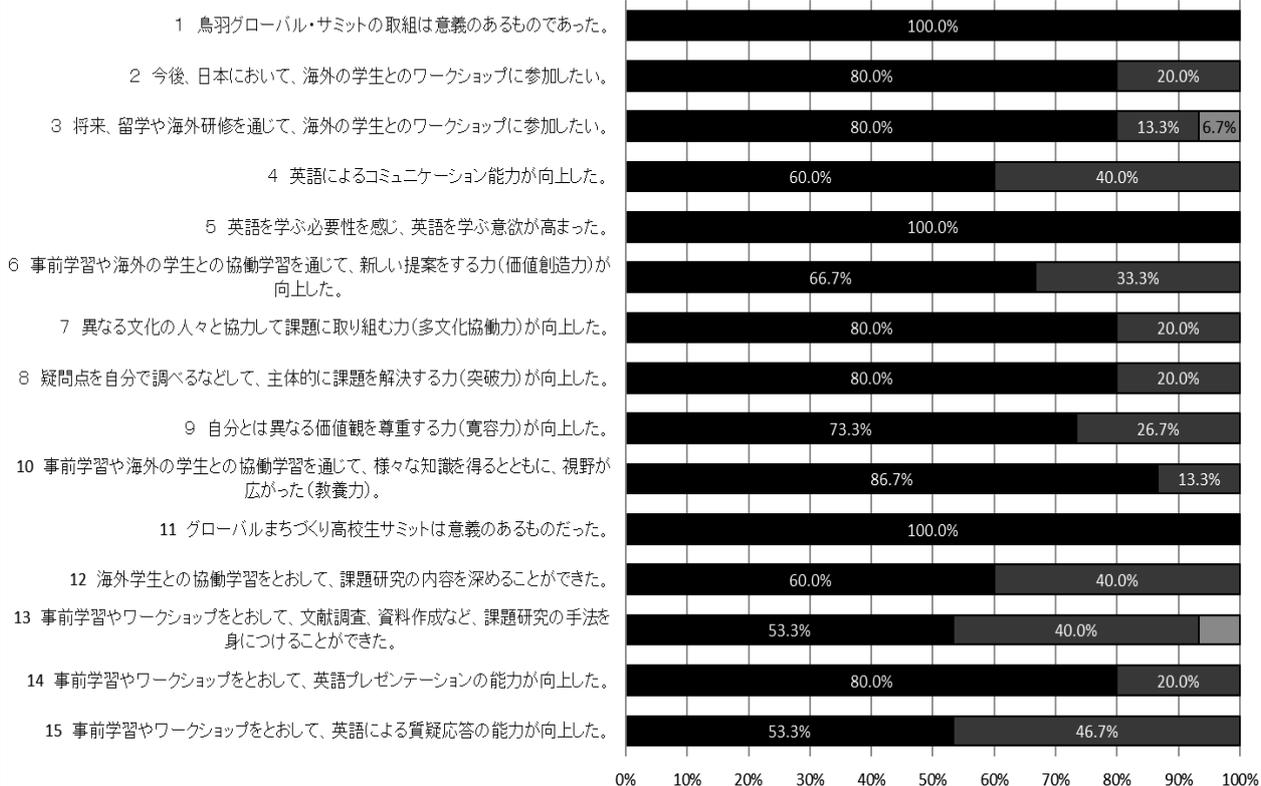
鳥羽グローバル・サミット3年

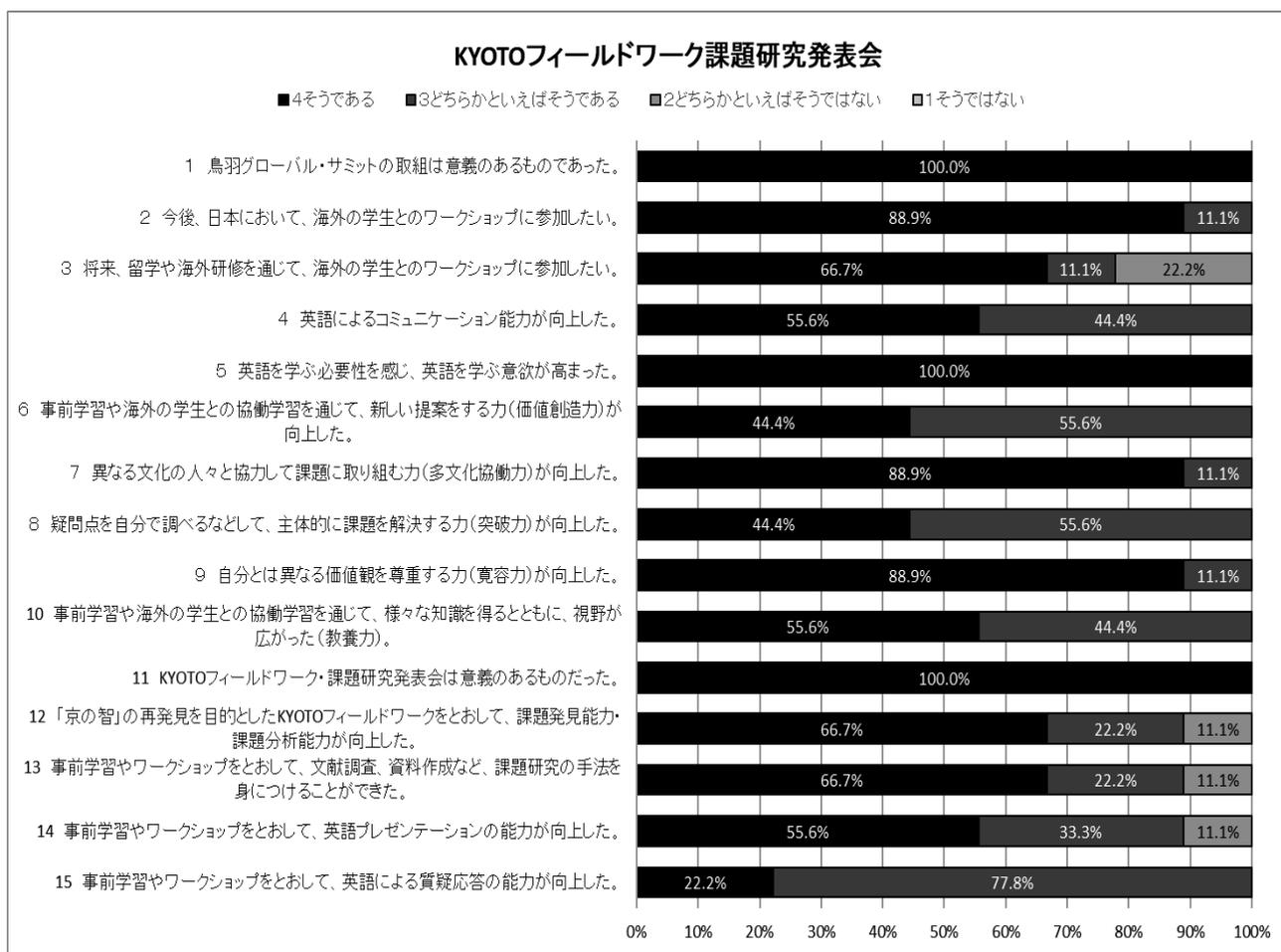
■4そうである ■3どちらかといえばそうである ■2どちらかといえばそうではない ■1そうではない



グローバルまちづくり高校生サミット

■4そうである ■3どちらかといえばそうである ■2どちらかといえばそうではない ■1そうではない





(2) 生徒の感想

- ・開会式に参加した時、海外大学生の話す英語の意味が分かり、プレゼンテーションや挨拶を楽しむことができた。1年生の時は全く分からなかった記憶があったが、3年生になって英語のリスニング力が上がっているのを感じることができて、とても嬉しかった。また、海外大学生とのディスカッションをした際に以前より上手にコミュニケーションを取ることができ、3年間でリズムよく英語でのやりとりができるようになってきたことがわかった。鳥羽グローバル・サミットは自分自身の成長が感じられるよい機会となった。
- ・事前学習や KYOTO フィールドワークをとおして、地元の京都について深く知ることができた。また、海外大学生の方々と交流することで他の国のことにも興味を持つことができた。一緒にSDGsについて考えたときは、新たな考えや解決方法が見つかった。
- ・KYOTO フィールドワークをとおして英語で説明することの難しさが分かった。しかし、自分の英語が伝わった時は嬉しかったし、もっと話したいと思えるようになった。語彙力不足を実感したのでもっと英語を勉強したいと思った。京都の魅力を伝えるために話すことでコミュニケーション力も向上したし、自分の住んでいる京都の魅力も知ることができた。

(3) 分析できる成果

SGH指定1年次から続けてた鳥羽グローバル・サミットを5年次まで継続し、海外のトップ大学生と日本の高校生が英語で協働研究等を行う仕組みを構築することができた。3年間の課題研究の集大成として課題研究内容を海外の大学生と英語で議論し、一緒に提言を発表する活動をとおり、グローバル・リーダーとしての資質・能力を向上させるという本サミットのねらいを達成することができた。

3年生のアンケートを分析すると、質問9「自分とは異なる価値観を尊重する力(寛容力)が向上した」と質問10「事前学習や海外の学生との協働学習を通じて、様々な知識を得るとともに、視野が広がった(教養力)」の肯定的評価が共に96.2%と全学年をとおして最も高かった。また、自由記載欄の内容からも海外の大学生とのコミュニケーションをとおして、新たな視点や多角的

なものの方が身についたという意見が多く見られた。

2年生については、「京都の風土・世界の風土」についての質問 16、17、18 において肯定的な回答が昨年度に比べて全て上昇した。海外の大学生と英語でコミュニケーションを取りながら課題に取り組むことで、多文化協働力と英語力を同時に育成することができた。

1年生については、質問 12「今回のプレゼンテーションをとおして、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が身についた」の肯定的評価が 97.5%と特に高く、入学当初から英語を用いて発表することを意識した学習を行うことで、英語によるプレゼンテーションに対して多くの生徒が自信を持たせることができた。

SDGs 領域 11 の達成に向けて今年度初めて開催した「グローバルまちづくり高校生サミット」については、全般的に生徒の評価がとても高い取組となり、質問 3「将来、留学や海外研修を通じて、海外の学生とのワークショップに参加したい」について全員が「4そうである」と回答した。また、事前学習を複数回実施した結果、質問 13「事前学習やワークショップをとおして、文献調査、資料作成など、課題研究の手法を身につけることができた」においても全員が「4そうである」と回答するなど、総合的な探究・学習の時間において身につけてきた課題研究の手法についてさらに深く学ばせることができた。

「KYOTO フィールドワーク」では、「京の智」の象徴を海外の大学生とともに発見して写真を撮影し、一緒に英語でプレゼンテーションを行う活動をとおして、参加生徒は京都の伝統・文化の新たな魅力を発見する経験ができた。短期間の取組ではあったが、少人数のグループで海外の大学生と密なコミュニケーションを取れたことから、質問 4「英語によるコミュニケーション能力が向上した」について、55.6%が「4そうである」と回答し、また全員が肯定的に回答するなど、英語によるコミュニケーションについて自信を持たせることができた。

4 課題

SGH指定期間終了後の自走に向けて、2つの取組を行う。第1に、京都市内の大学で学びようと留学生ハウスに滞在する留学生やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生など、日本国内の留学生とのネットワークを維持・発展させ、海外から大学生を招待せずとも多文化協働学習が行える教育環境を整備する。第2に、ICT機器や遠隔教育システムを活用し、オンラインによる海外の大学生・高校生との協働学習を推進する。本年度、文部科学省「学校ICT環境整備促進実証研究事業」（遠隔教育システム導入実証研究事業）及び京都府教育委員会「府立高校スマートスクール推進事業」をとおして蓄積した遠隔教育の実績を活用し、時間的・地理的・経済的な制約を超えて、多くの生徒にグローバルな学びの場を提供できる仕組みを構築していきたい。



グローバル・コミュニケーション I



イノベーション探究Ⅲ



グローバルまちづくり高校生サミット

(4) 研究開発単位Ⅳ：鳥羽の学びネットワークを活用した リベラルアーツ教育の研究開発 ア アクティブ・ラーニングを取り入れた公開授業・研究授業

1 ねらい

学びの質を高める手段の一つとして、主体的な活動を取り入れたアクティブ・ラーニングがますます重視されるようになってきている。令和元年度についても「アクティブ・ラーニングの研究・実践～主体的・対話的な深い学び」をテーマとし、研究授業・公開授業を実践することで学びの質の向上を図る。

2 昨年度の課題と今年度の改善点

4年次までに行ってきた自分の教科以外の他教科との取組の共有を継続する。昨年度の課題であったICTを活用したアクティブ・ラーニングの推進については、本年度から「府立高校スマートスクール推進事業」の指定を受け、iPadなどのタブレットを活用したアクティブ・ラーニングを研究開発する。

3 概要（実践）

(1) 公開授業

実施期間 令和元年6月5日（水）～6月25日（火）

実施人数 16名（国語科4名 地理歴史・公民科1名 数学科1名 理科3名 英語科4名、保健体育科3名）

(2) 研究授業・公開授業

実施期間 令和元年10月30日（水）～11月22日（金）

実施人数 研究授業4名（地理歴史・公民科1名、英語2名、情報科1名）

公開授業4名（国語科1名、理科1名、英語科1名、保健体育科1名）

(3) 「府立高校スマートスクール推進事業」公開授業

実施日 令和2年2月10日（月）

実施人数 4名（数学1名、理科1名、英語2名）

4 成果

(1) 各教科から

- ・ICTを活用することで、生徒がグラフ作成や数値計算などを自分のペースで行いつつ、授業内に他の生徒と効果的に共有できていた。生徒が前向きに取り組んでいると感じた。
- ・iPadを用いて実験を行う試みはとて興味深かった。個別に実験の様子を撮影した写真や班別に検討した内容を、ICTを活用して共有することにより、効果的なアクティブ・ラーニングが行われていた。

(2) 分析できる成果

これまでの研究開発内容を踏まえつつ、新たにICTを活用したアクティブ・ラーニングの研究開発を進めることができた。また、公開授業・研究授業以外の場面でも、自由に互いに授業参観を行う教員が増えたことも今年度の成果である。

5 課題

ICTを活用したアクティブ・ラーニングの研究開発はまだ始まったばかりで、教科ごと、授業内の場面ごとなど、活動の目的に応じた整理が今後必要となる。府立高校スマートスクールの指定を受けたことで、電子黒板や教員・生徒用タブレット等のICT環境整備が大幅に進んだので、より多くの教員による実践事例の蓄積及び成果普及を今後も取り組んでいきたい。

イ 伝統・文化学習

1 冷泉家時雨亭文庫による和歌講習・歌会

(1) ねらい

平安の王朝文化を今に伝える冷泉家時雨亭文庫常務理事の冷泉貴実子氏を講師に迎え、日本の伝統的美意識を和歌及び披講をととして学ぶ体験的学習を行うことで、伝統・文化への関心を高める。また、生徒自らが和歌を英訳することで、自国の文化を海外へ発信する姿勢を学ぶ。

(2) 概要

- ア 日 時 春の歌会 令和元年5月28日(火)
1年生160名、2年生150名、披講研究部8名
秋の歌会 令和元年10月29日(火)
1年生160名、2年生165名、披講研究部8名

イ 内 容

公益財団法人冷泉家時雨亭文庫の冷泉貴実子常務理事と清水大史氏による講演・作歌指導を受け、1人1首作歌した。春の歌会・秋の歌会において、田中タカ子氏の指導を受け、生徒が代表歌の披講を行い、冷泉貴実子常務理事から講評をいただいた。

2 京都府高校生伝統文化事業(茶道)

(1) ねらい

京都府の産業としてのお茶、茶の歴史及び伝統・文化「茶道」の果たす役割と意義を理解する。

(2) 概要

- ア 日 時 令和元年10月17日(木)・10月21日(月) 2年3・6組82名
令和元年10月18日(金)・10月25日(金) 2年4・5組83名
イ 内 容 裏千家師範 山本宗成氏を招き、「茶道」の作法を体験する。

3 未生流笹岡による花手前(いけばなパフォーマンス)と講演及びディスカッション

(1) ねらい

京都府にゆかりの深い華道を取り上げ、専門的立場の方を講師に迎えて体験的学習を行うことで、伝統・文化への関心を高めるとともに、豊かに生きる力を育てる。また海外の方との文化交流をととして、様々な文化や価値観を理解し、日本の伝統・文化を海外へ発信することの重要性を学ぶ。

(2) 概要

- ア 日 時 令和2年1月30日(木) 2年生315名
イ 内 容 「未生流笹岡」三代家元笹岡隆甫氏による花手前と講演をととして、日本の代表的な文化である「華道」に秘められた日本固有の美意識と深い精神性を学んだ。また、京都府名誉友好大使と本校生徒を交えて、2020年東京オリンピック・パラリンピックと日本の伝統・文化の継承と海外への発信についてディスカッションを行った。



春の歌会



京都府高校生伝統文化事業(茶道)



いけばなパフォーマンス

ウ グローバル思考力コンテスト

1 ねらい

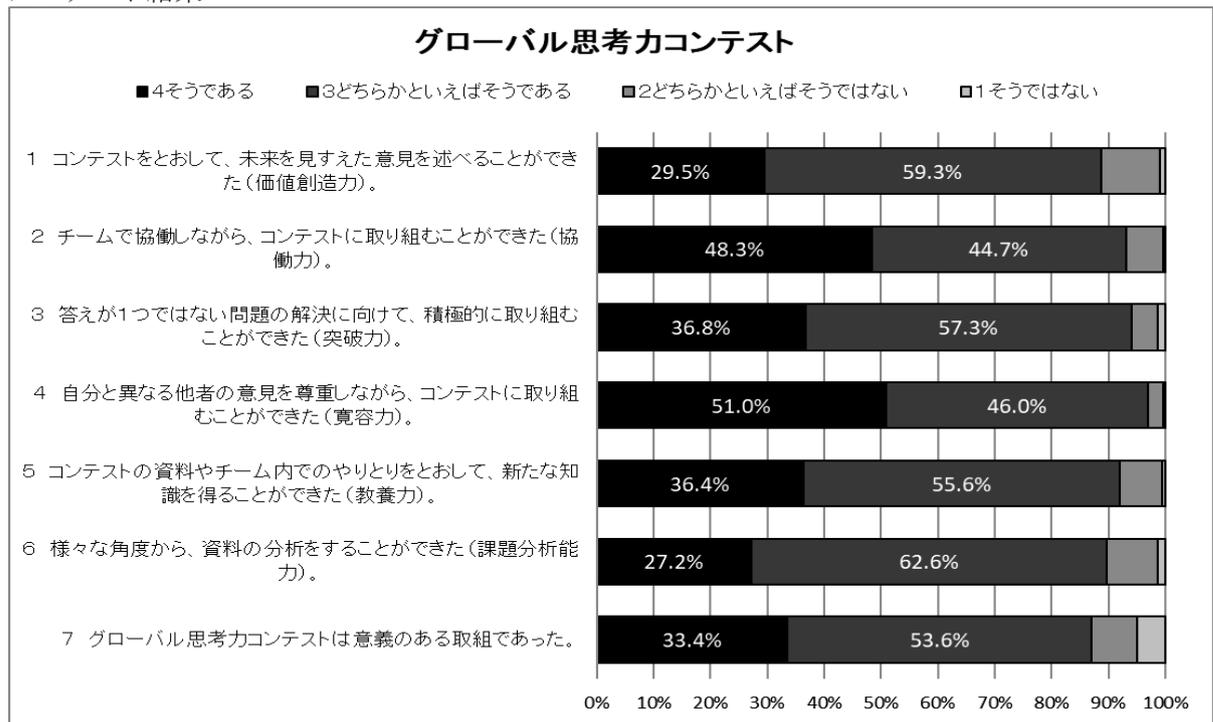
グローバル課題に関する資料を分析し、これまでの経験や知識を活用しつつ、課題解決へとつながる思考力を、各クラス内のグループ活動による協働型コンテストをとおして養う。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和2年1月23日（木）6限LHR
- (2) 対 象 1・2年生全員
- (3) 形 態 4～5名によるグループ活動、各HR教室において担任が監督
- (4) 内 容 近年、京都を訪れる観光客の数が著しく増加しているが、一方で暮らしに負の影響をもたらして住民との分断を生んでいる。次の5つのうち、どの問題に起因する課題が最も優先的にまず取り組むべき課題であるかを考えさせた。
 ①民泊に関わる問題 ②交通に関わる問題 ③治安やマナーに関わる問題
 ④景観に関わる問題 ⑤宿泊税（観光税）に関わる問題
- (5) 問題作成担当 SGHリベラルアーツ研究グループ内のグローバル思考力コンテスト担当
- (6) 評 価 担当で全グループの解答をそれぞれ、分析力、論理力、想像力、表現力の4つの観点で評価し、最優秀賞1グループ、優秀賞2グループを選出した。

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

質問4「自分と異なる他者の意見を尊重しながら、コンテストに取り組む事ができた」に「4そうである」と51.0%が、肯定的に97.0%が回答した。総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」等におけるチーム協働による課題研究や、アクティブ・ラーニングを推進する授業改善を行ってきた結果、互いの意見を尊重しながら課題解決に取り組む姿勢を育むことができた。

4 課題

質問6のとおり、資料の分析等の課題分析能力にやや課題が見られる。特定の授業に限らず、日頃の授業の中で多角的な分析能力、資料読解能力を育成できるように授業内容を改善したい。

エ S G U連携・大阪大学ワークショップ

1 課題研究ワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」

(1) ねらい

総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」において課題研究を進めるにあたり、よい研究発表の条件を理解する。

(2) 概要（実践）

ア 日 時 令和元年6月8日（土） 10：40～12：30
イ 参加者 2年生グローバル科（7・8組）80名
ウ 場 所 本校1棟多目的教室及び7棟多目的教室
エ 講 師 大阪大学 進藤修一教授、柿澤寿信講師
オ 内 容 講義及びワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか？」

(3) 成果

ア 生徒の感想

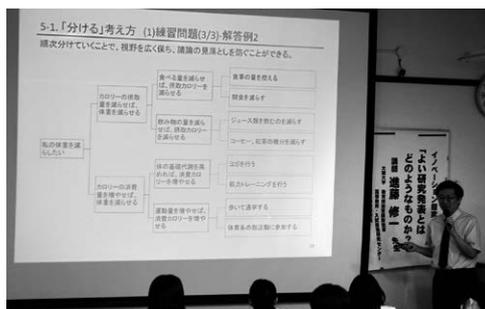
- ・講義を受けて、どのように研究を進めていけばよいのか学ぶことができた。そして、具体的に自分のグループの研究の場合、どう進めていけばよいのかも分かった。情報を調べる前に論点を明らかにしておけば、より必要な情報を集めることができるのではないかと思った。
- ・1年生の時に発表した内容がいかに大まかで具体性に欠けていて新しさがなかったのかを感じた。これまで自分たちの興味・関心を中心に探究していたが、探究はそれだけではよいものにならないと改めて感じた。「自身の力量で扱いきれるか」というリサーチクエスションの条件を満たすことはとても難しいと思った。
- ・今回の講義をとおして、自分たちの調査は難しくくてできるかと不安であったが、課題研究の仕方を具体的に知ることで、自信をつけることができた。今回学んだことをしっかりと実践してよい研究にしたい。
- ・ただ仮説を立てるだけでなく、どのようにして仮説が立ったのか、その論理的思考が必要だと学んだ。プロセスを踏むことで、より論理的な仮説ができるので、ぜひ実践してみたい。

イ 分析できる成果

本格的な課題研究を行う初期の段階において研究目的を明確にし、研究テーマを絞り込むことの必要性を理解できた。よい研究発表の要件を理解し、課題研究を進める指針を学ばせることができた。

(4) 課題

大阪大学の先生方による講義及びワークショップをとおして、「研究目的が明確であること」、「思考に分析と論理が含まれていること」、「的をしぼった調査ができていること」の3点がよい研究発表の条件であることを理解させることができたが、トピックの5要件の1つである「内容の新しさ」について、サイエンス系のテーマを設定した場合に高校生の段階で新しさをどこまで追究させるのか検討が必要である。



進藤修一教授による講義



「よい研究発表」について考察

2 アカデミック・ライティング講座

(1) ねらい

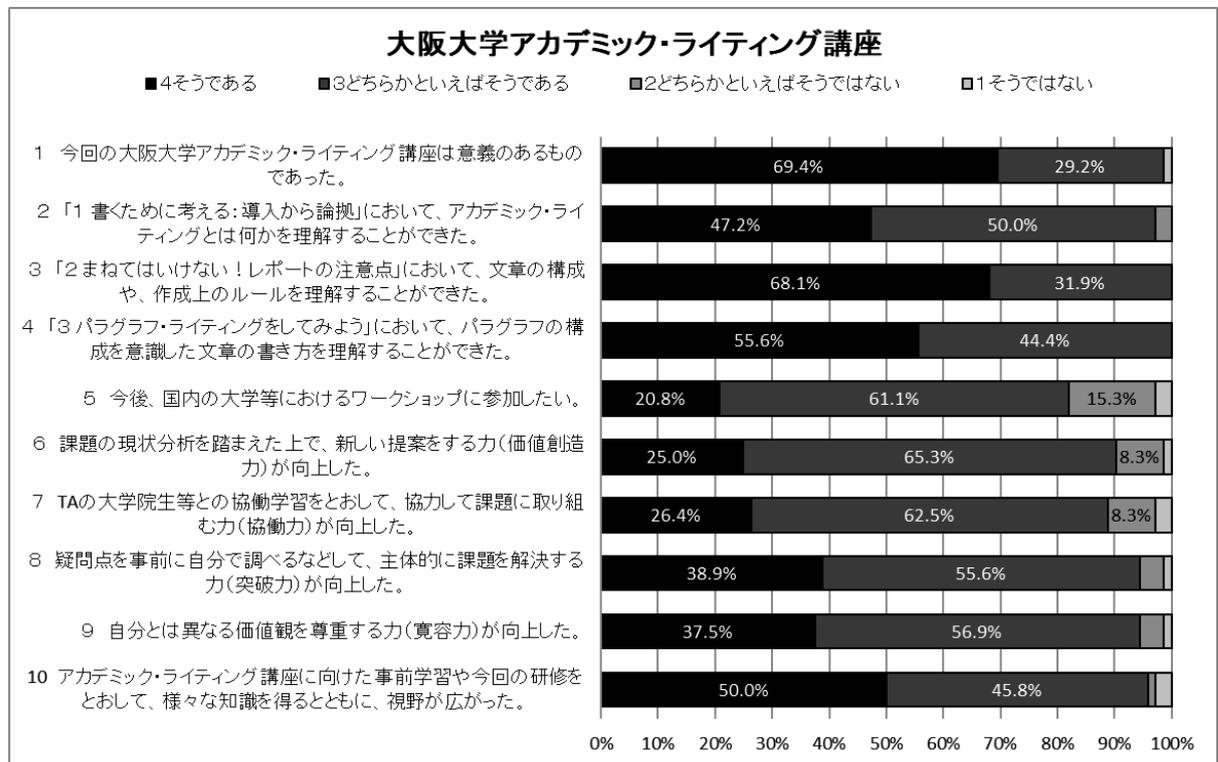
総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」において、論文を作成する際に必要な技能であるアカデミック・ライティングについて学習し、根拠情報の見つけ方や情報の整理方法、レポートの組み立て方などに関する手法を身につける。

(2) 概要（実践）

- ア 日時 令和元年8月20日（火） 13：15～16：15
 イ 参加者 2年生グローバル科（7・8組）80名
 ウ 場所 大阪大学豊中キャンパス
 エ 講師 大阪大学 堀一成准教授、坂尻彰宏准教授、進藤修一教授
 大学院生（TA）6名
 オ 内容 講義及びワークショップ「アカデミック・ライティング講座」

(3) 成果

ア アンケート結果



イ 生徒の感想

- ・今まで自分が書いてきた文章には推測や自分の思い込み、根拠のない主張が多かったということに気づいた。今回の講義で、読者に分かりやすい文章は戦略的に自分の意見を伝えられるということ学んだので、客観的に見ながら分かりやすい文章が書けるようになりたい。
- ・主張を整理し、問いと答えを分けることで主張を具体的にすることができることを学んだ。また、文章を長く書いてしまうことが多かったので、主語と述語を明確にして文章を簡潔に書けるようになりたい。
- ・アカデミック・ライティングをしていくには、文章内に構造や問いとそれに対する答えがあるかに注意する必要があることを学んだ。
- ・これからの活動において原稿を書いたり、まとめたりするときに自分の書いた文章に対して5W1Hでどんどんツッコミを入れて、よい意味で批判的に客観的に見直すことにより、よりよい文章を書けるように頑張りたい。

ウ 分析できる成果

アカデミック・ライティングについての基礎的な考え方を理解させることができた。また、生徒は演習をとおしてアカデミック・ライティングの必要性や難しさを十分に体感できた様子が見える。

生徒アンケート結果を昨年度と比較すると、質問4『3パラグラフ・ライティングをしてみよう』において、パラグラフの構成を意識した文章の書き方を理解することができた」に対しての否定的な回答がなくなった。また、質問8「疑問点を事前に自分で調べるなどして、主体的に課題を解決する力（突破力）が向上した。」の肯定的な回答が上昇し、94.5%に達した。これは今年度のアカデミック・ライティング講座を実施する以前から大阪大学と連携し、その連携をとおして蓄積してきたノウハウを事前指導に活かした結果であると考えられる。

(4) 課題

事前に大阪大学の先生方と本校の担当者が十分な打合せをして、アカデミック・ライティング講座に向けた課題研究に関する「調査シート」を昨年度から一部更新した。1学期に生徒がしっかりと事前学習に取り組み、夏季休業の期間を利用して「調査シート」を完成させた状態で講座に参加したことにより、深い学びとなった。また、本講座終了後に生徒のワークシートに丁寧な添削をしていただき、生徒の課題研究内容の深化に大変役立った。様々な分野において研究を行っている大学院生にTAとなつていただいたことにより、様々な視点から高度なアドバイスを受けることができ、大変充実した講座となった。

今後も高大の担当者間で生徒の研究状況を共有し、事前学習をしっかりと行つたうえで主体的に参加できるように促し、限られた時間を有効に使うことで深い学びを実現していきたい。この講座にさらに多くの本校教員が参加することにより、アカデミック・ライティングの指導法を高校段階でも浸透させていきたい。



書くために考える
：導入～論拠の検証



まねてはいけない！
：レポートの注意点



パラグラフ・ライティングを
してみよう

オ SGU連携・立命館大学宿泊研修

1 ねらい

総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」において取り組んできた課題研究のプレゼンテーションに向けた準備を、立命館大学の整備された環境の中で集中的に行う。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和2年1月11日（土）・12日（日）
- (2) 参加者 1年生7・8組グローバル科 79名
- (3) 場 所 立命館大学びわこ・くさつキャンパス セミナーハウス「エポック立命21」
（「鳥羽の学びネットワーク」で連携しているSGU立命館大学の充実した施設を利用）
- (4) 講 師 TA（立命館大学生及び大学院生5名）
- (5) 引率指導 「イノベーション探究Ⅰ」「ソーシャル・インテリジェンス」の各担当教員
- (6) 内 容 宿泊を伴う2日間で、教員やTAの指導・助言を得ながら研究チームごとに協働し、校内発表のためのプレゼンテーション構成をまとめ、効果的なパワーポイントの作成に当たる。可能なチームは中間発表を行い、明らかになった課題をもとにさらに完成度を高める。



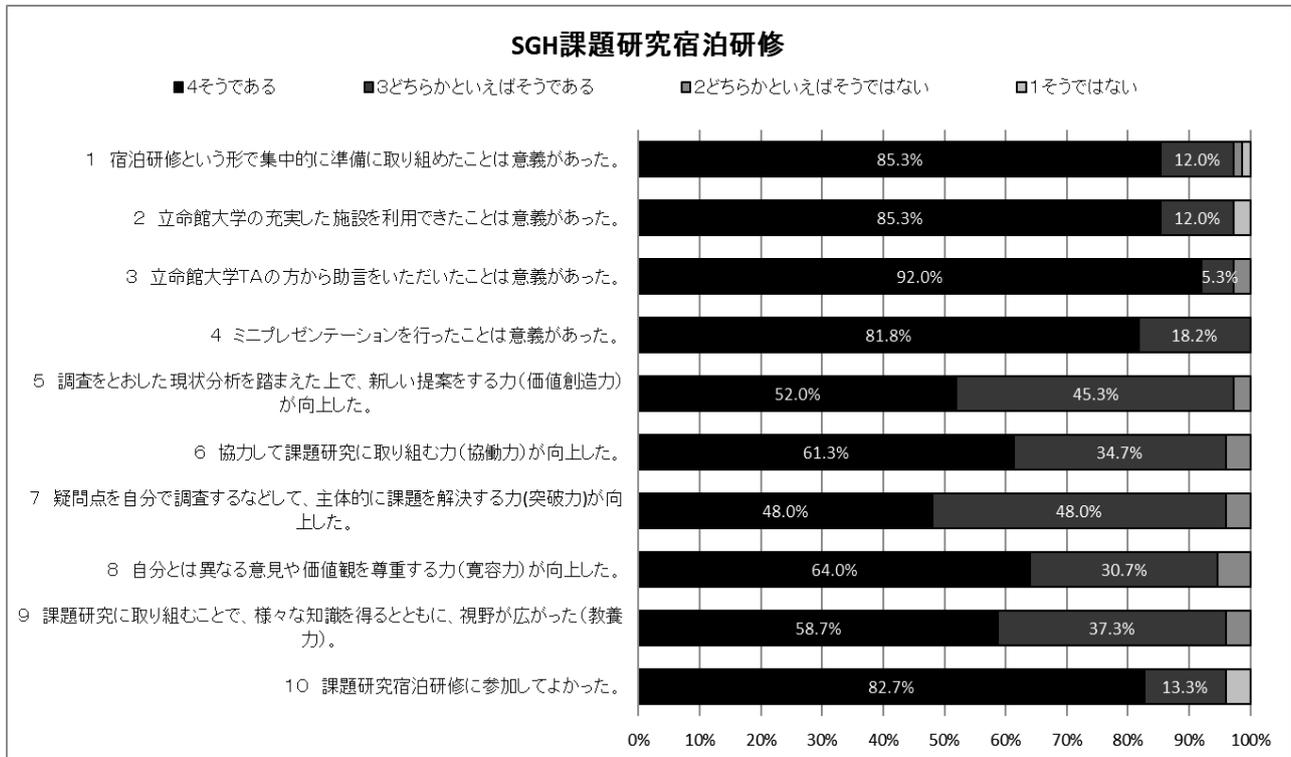
プレゼンテーションの内容・構成についてTAから助言を受ける



閉講式でTAの方々から今後の高校生活へのアドバイスを受ける

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・既存の選択肢から1つに絞るのではなく他の可能性もよく検討することと、チーム内でたくさん意見を出し合って、議論することが大切だということをTAの方から教わった。
- ・TAの方の研究内容や数学の学習方法などオープンキャンパスでは話しきれないような聞くことができた。
- ・プレゼンテーションは多くの人に意味を伝えるコミュニケーション手段なので、スライドの文字の大きさ、色、バランスなど伝える工夫が必要だとわかった。
- ・チーム内で意見が食い違うことがあったが、お互いの考えを出し合うことで、よりよいアイデアを出すことができた。
- ・調査内容とリサーチクエストが合っていないことをTAの方に指摘され、改めて自分のスライドや研究内容を見直そうと思った。
- ・自分たちの研究内容を深く考えなおし、それぞれの研究内容が1つにつながったときがすごく楽しいし、おもしろかった。
- ・インターネットの情報だけを用いた調べ学習になってしまっていた。もう一度フィールドワークに行き、研究し直そうという気持ちになった。
- ・TAの方にアドバイスをいただき、自分たちのプレゼンがかなりよいものになった。また大学生活に興味をわき、講義の内容も知りたいと思った。
- ・自分たちだけでは進まなかったことが、TAの方からアドバイスをもらって自分たちで考えられるようになった。チーム内でお互いの意見を尊重できるようになった。

(3) 分析できる成果

質問1から質問3において「4そうである」と回答した割合は昨年と同じく高かった。宿泊研修という形でまとまった時間を確保でき、プレゼンテーション準備がはかどったことを多くの生徒が高く評価した。特に質問3「立命館大学TAの方から助言をいただいたことは意義があった。」について「4そうである」と回答した生徒は92%にのぼる。客観的なアドバイスをいただいたことで研究内容が整理でき、各自の研究を見直すことができた。さらに、自由時間を利用して学生生活についての話を聞いたことは、大学での学びを考えるよいきっかけとなった。また、質問8「自分とは異なる意見や価値観を尊重する力(寛容力)が向上した。」について「4そうである」と回答した生徒は昨年度より21%上昇した。これまでの指導の中で、単なるグループ研究ではなく同じ目的を共有するチーム研究であるということ意識させてきた。意見の食い違いはあっても議論を通して、各自の意見をまとめていく力が身についてきたと思われる。

4 課題

授業時間内では設けることが難しいまとまった時間を確保し、研究のノウハウを持ったTAの指導・助言を受けながら、プレゼンテーションの準備を集中して進めることが本年度もできた。本年度は「研究計画書」を作成し、その内容を「研究スライド」に反映させるという様式を整えて課題研究を進めた。その結果、研究チーム内での役割分担は明確になり、作業がスムーズに進んだ一方で、チーム内での対話が不足し、研究内容の共有が不十分でストーリーの筋がとおらないケースもあった。このことはTAからも指摘していただいた。チームの研究をマネジメントできるようなリーダーの育成や対話場面の設定が今後の課題である。5年間の取組を振り返ると、このような連携は非常に有意義なものであり、今後も実施できることが望ましい。

カ JICA関西ワークショップ

1 ねらい

JICA職員との協働学習をとおして専門的見地から指導・助言を受けることにより、各自が取り組むSGH課題研究内容を深化させる。

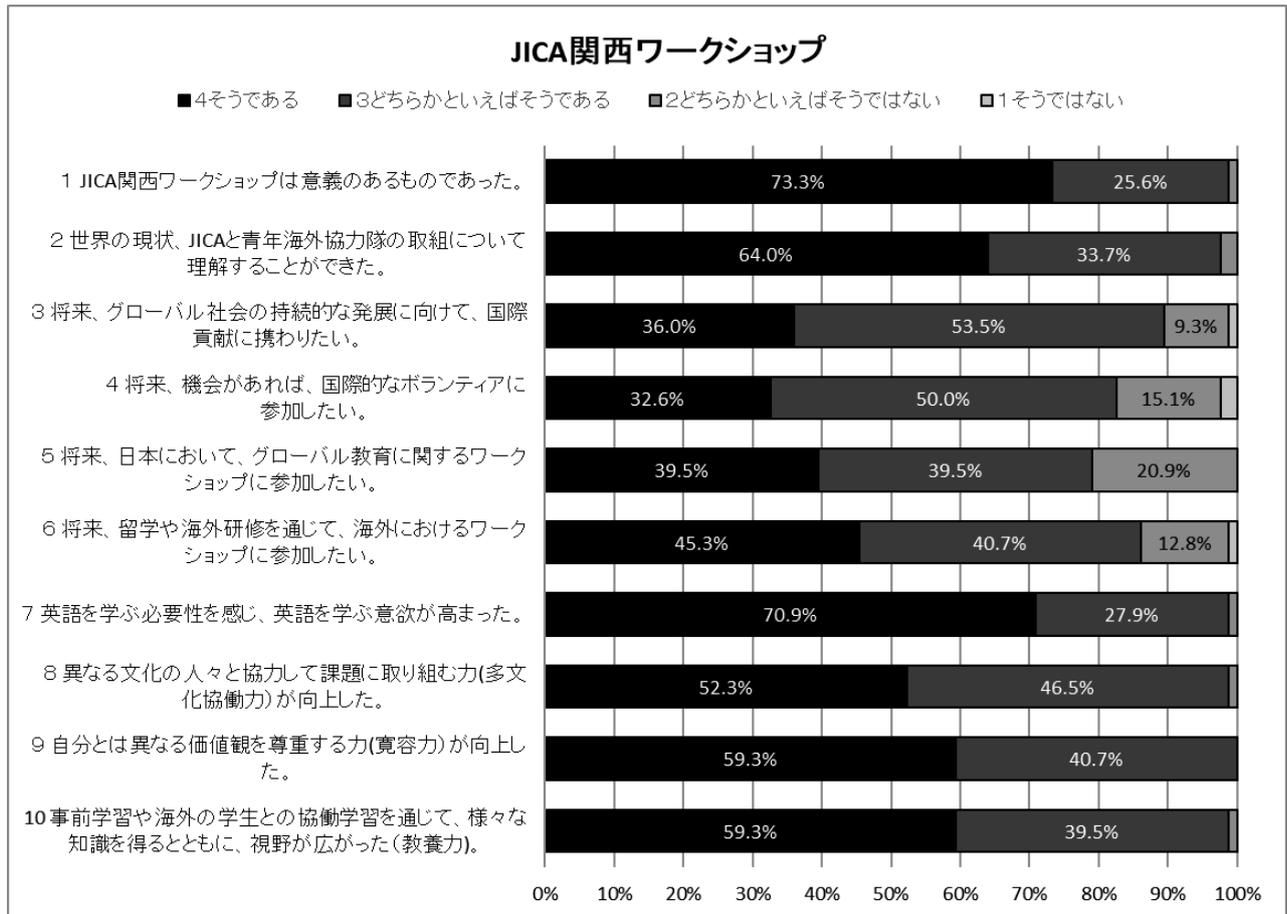
地球規模の課題や多様な文化、世界と日本のつながりを学び、異文化を理解し、多文化協働のための方策を考える。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和元年7月24日（水）11:20～14:20
- (2) 参加者 1年生グローバル科80名、1年生普通科9名
- (3) 場 所 京都府立鳥羽校等学校
- (4) 講 師 河合 憲太氏（公益社団法人青年海外協力協会JOCA大阪代表）
吉田 悦子氏（公益社団法人青年海外協力協会JOCA大阪）
- (5) 内 容 JICA・青年海外協力隊の取組と日本の国際貢献に関する講義、グローバルな視点からのキャリア教育、「多国籍住民の町内会」ワークショップ

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 生徒の感想

- ・言葉や文化が違うとトラブルもたくさん起きてしまうが、それをどのようにして解決していくのかを考えることが多文化共生につながっていくと分かった。将来、外国の方と接する機会が増えていくと思うので問題解決能力を身につけたいと思った。
- ・外国の人と協力して課題解決していくことは、外国に行った時だけでなく、日本でもありえることなのだと言ったワークショップをとおして分かった。日本人同士でも解決しきれないことがあるので、

課題解決能力を向上させていきたい。

- ・国際協力といえば、自分たちでは関わるのが難しいと今まで思い込んでいたけれど、自分自身の特技、特徴を生かして貢献できるのだと分かった。また、自分たちとは異なる文化を尊重することは大事なので、これからもっと J I C A の活動について学びたい。

(3) 分析できる成果

日本の国際貢献の在り方について、河合氏からはインドネシア、吉田氏からはベトナムにおける青年海外協力隊への参加経験を踏まえてお話いただき、生徒の理解を深めることができた。また、ワークショップにおいては、町内において多文化共生が求められる場面を設定したロールプレイを行うことにより、質問9「自分とは異なる価値観を尊重する力（寛容力）が向上した。」について59.3%の生徒が「4そうである」と回答し、全員が肯定的に回答するなど、異文化理解と多角的視座の獲得を促すことができた。また、英語を用いないワークショップであったにも関わらず、質問7「英語を学ぶ必要性を感じ、英語を学ぶ意欲が高まった。」について70.9%の生徒が「4そうである」と回答し、98.8%の生徒が肯定的に回答するなど、外国語を用いたコミュニケーションの重要性についての講師による体験談から刺激を受けるとともに、多文化共生社会の実現に向けたワークショップをとおして外国語を学ぶ必要性を生徒自らが感じる事ができた。

4 課題

S G H 指定期間終了後についても J I C A 関西と連携し、多角的視座を獲得するための指導方法について研究開発を継続するとともに、海外留学や海外勤務をした卒業生から経験談を聞く機会を引き続き設ける。

また、グローバルイシューを扱う2年生の「イノベーション探究Ⅱ」や「総合的な探究の時間」等の担当者へ参観を促し、課題研究との関連をより深めることを課題とする。



青年海外協力隊の取組について



ベトナムにおける教育支援について



「多国籍住民の町内会」ワークショップ

キ 高大社連携事業

1 ねらい

大学、グローバル企業や国際機関等の鳥羽の学びネットワークと個々に連携して行ってきた教育活動をさらに発展させ、高校・大学・地域企業が一体となって取り組む高大社連携を推進し、社会に開かれた教育課程の研究開発を進める。

2 概要（実践）

- (1) 令和元年度京都南ロータリークラブ×鳥羽高校キャリアガイダンス
ア 日時・会場 令和元年9月14日（土）・京都府立鳥羽高等学校
イ 連携先 京都南ロータリークラブ、京都南ローターアクトクラブ
ウ 内容 パネルディスカッション「働くとはどういうことか」をうけ、各教室に分かれグループディスカッションを行い、その後全体報告
- (2) 高大社連携フューチャーセッション
ア 日時・会場 令和元年9月22日（日）・キャンパスプラザ京都
イ 主催 京都高大連携研究協議会
ウ 内容 「これから社会で必要とされる仕事とは？」をテーマに、ロールモデルトークの後、大学生と高校生が学ぶことと働くことをいかにつなげるかについて議論
- (3) 京都中小企業家同友会 2019年度高大社連携研修事業
ア 日時・会場 令和元年11月2日（土）・京都経済センター
イ 主催 京都中小企業家同友会
(共催：福知山公立大学杉岡ゼミ・本校、協力：公益財団法人大学コンソーシアム京都)
ウ 内容 「学生が考えた！会社が魅力的に見える心惹かれる求人情報とは!？」をテーマに、中小企業の経営者、福知山公立大学の大学生、本校生徒がグループディスカッションし、その後全体報告
- (4) 第17回高大連携教育フォーラム
ア 日時・会場 令和元年12月7日（土）・キャンパスプラザ京都
イ 主催 京都高大連携研究協議会、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、公益財団法人大学コンソーシアム京都、
ウ 内容 高大社連携キャリア教育の特別分科会において、「2019年高大社連携フューチャーセッション公開振り返り会」において本校生徒が成果発表及びパネルディスカッションに参加

3 成果と課題

昨年度と同様に、大学・地域企業との連携を推進することができ、社会に開かれた教育課程を研究開発することができた。普段は高校生間で行っている課題研究内容について、大学生・社会人から高校生とは異なる視点からの助言をいただくことにより、各チームの研究を深化させることができた。

SGH指定期間終了後については、こうした地域の大学・企業に引き続き御協力いただき、高大社連携をこれまで以上に充実させ、社会で一体となって人材育成に取り組む仕組みを構築していきたい。



「働くとはどういうことか」を企業経営者と議論



「会社が魅力的に見える心惹かれる求人情報」についてプレゼンテーション

(5) その他の取組

ア 各種コンテスト参加

(7) 日本政策金融公庫「高校生ビジネスプラン・グランプリ」

1 ねらい

グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高いコンテストへの参加をとおして課題分析能力・課題解決能力を高めるとともに、総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」やSGH海外研修で取り組んでいる課題研究内容をビジネスの観点から深める機会とする。

2 概要（実践）

(1) 年間計画・実施内容

令和元年6月13日（木）日本政策金融公庫ビジネスプランサポート授業 基礎編

令和元年7月22日（月）日本政策金融公庫ビジネスプランサポート授業 実践編

令和元年9月25日（水）ビジネスプランエントリー及びビジネスプランシート提出

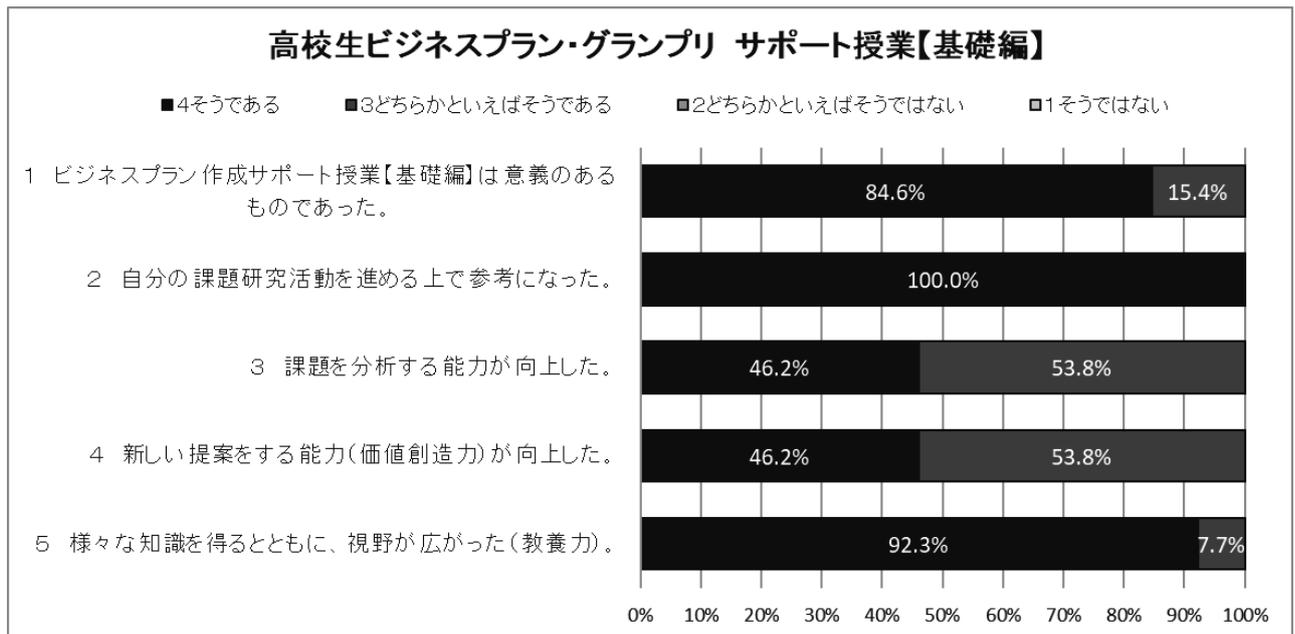
(2) 参加生徒 1年生10名・2年生13名

(3) テーマ 「廃校となった校舎の再生プロジェクト」、「高齢者向け自転車運転アシスト」等

(4) 講師 村上 尚史氏（株式会社日本政策金融公庫京都創業支援センター）

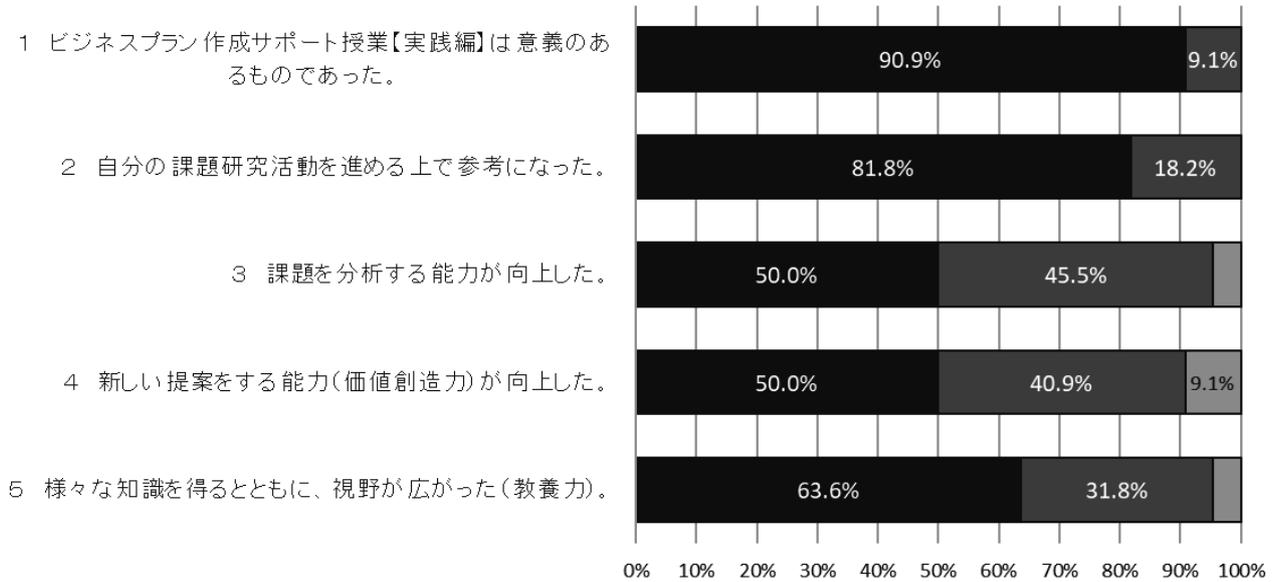
3 成果

(1) アンケート結果



高校生ビジネスプラン・グランプリ サポート授業【実践編】

■4そうである ■3どちらかといえばそうである ■2どちらかといえばそうではない □1そうではない



(2) 生徒の感想

- ・同じチームの人たちとたくさん議論することによって、自分では思いつかなかった考え方や問題点に気づくことができ、チームで協働する大切さを実感した。
- ・サービスがどのような動機、経緯で提供されることになったのかを考えてみたりすることは自分の学びに繋がり、また、アイデアを出す機会に役立つのではないかと考えた。

(3) 分析できる成果

SGHの目標設定シートにある「グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会」として取組を始めた本コンテストであるが、日本政策金融公庫と連携しつつ、SGH海外研修や課題研究と関連づけて行うことができた。質問2「自分の課題研究活動を進める上で参考になった」について「4そうである」と回答した生徒が基礎編では100%、実践編では81.8%に達するなど、課題研究を行う上で効果的な取組となった。

4 課題

公益性の高いコンテストへ自ら応募する生徒が少ないことが課題である。本取組をとおして、日本政策金融公庫から直接指導を受けることにより、生徒は探究内容を深められた。同様に、他のコンテストに総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡ」において取り組んでいる課題研究を用いてエントリーすることにより、校外の方々から助言を受けて課題研究内容を深化させることも可能である。校外で研究成果を発表する生徒が増えるよう、生徒への情報提供を今後も継続していく。



ビジネスプランサポート授業
(基礎編)



ビジネスプランサポート授業
(実践編)



講師によるビジネスプラン
作成指導

(イ) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」

1 ねらい

社会参画意識を醸成するとともに、国際社会に貢献できるリーダーを育成するため、課題分析力・思考力・判断力・表現力を培う。また、SGH事業の取組を他の府立高校に紹介し、グローバルネットワーク京都の幹事校として他校と連携しながら、課題研究の指導手法等を共有・深化させる。

2 概要（実践）

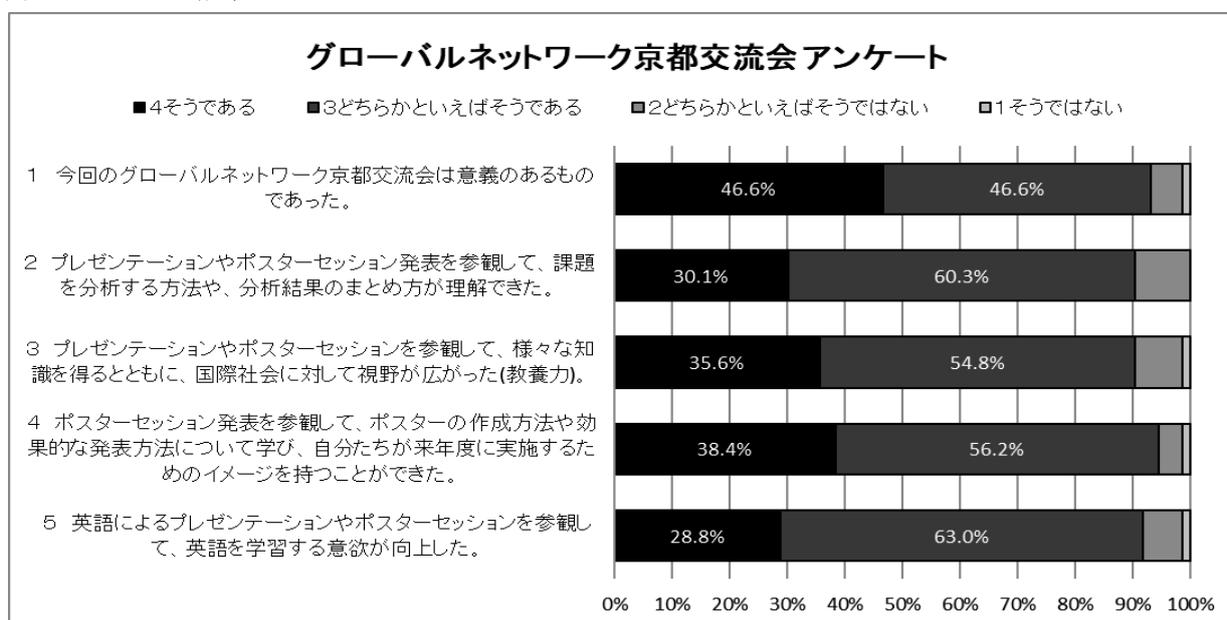
- (1) 日 時 令和2年2月1日（土）
- (2) 会 場 京都工芸繊維大学
- (3) 主 催 京都府教育委員会
- (4) 対 象 京都府教育委員会グローバルネットワーク9校
幹事校：鳥羽高校
山城高校、洛西高校、東宇治高校、菟道高校、城南菱創高校、西城陽高校、園部高校、峰山高校

(5) 主な実施内容

- ア 「グローバルネットワーク京都論文コンテスト」
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、1年生169名が取り組み、代表3点を応募
- イ 提言発表Ⅰ（英語によるプレゼンテーション）
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、2年生5名
SGH台湾海外研修参加者が、台湾政府が推奨するメディア誘発型観光に焦点を当てた現地調査を行い、PR動画を活用した観光業の発展の可能性について英語で発表
- ウ 提言発表Ⅱ（ポスターセッション）
テーマ「持続可能な国際社会への展望」、2年生11名
「イノベーション探究Ⅱ」で取り組んでいる次の課題研究内容を日本語で発表
 - ・インドの水不足をUNICEF等の団体と協力し、ナノテクノロジーの分野から解決するには
 - ・手回し発電機を義務教育までの学習範囲内で作り、災害時の電力不足は軽減できるのか
 - ・高校教員の長時間労働はICTで解決できるのか。また公立高校にICTを導入できるのか

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

京都府委員会がグローバル教育を推進するために定めた「グローバルネットワーク京都」校にSGH研究開発の成果を普及させるとともに、英語によるプレゼンテーションや日本語によるポスター発表及び生徒間や他校の教員との質疑応答をとおして、課題研究内容を深化させることができた。本校からは1年生グローバル科80名及び2年生グローバル科・普通科16名が参加したが、質問4「ポスターセッション発表を参観して、ポスターの作成方法や効果的な発表方法について学び、自分たちが来年度に実施するためのイメージを持つことができた。」について「4そうである」と38.4%の生徒が、肯定的な回答を94.6%の生徒がするなど、様々な学校間・異なる学年間における主体的・対話的な学びをとおして、今後の課題研究の方向性について考えさせることができた。

4 課題

初めてプレゼンテーションやポスターセッションに参加される方にもわかりやすく説明できるよう、発表方法について工夫を行うことを課題とする。

SGH指定期間中は指定校を対象とした課題研究発表の機会が多くあったが、SGH指定期間終了後についても発表の機会を生徒へ提供することが課題である。管理機関が主催する発表や交流の場を効果的に活用し、生徒間で課題研究内容を深めさせる。また、こうした機会をとおして、教員間でも指導方法を共有し、質の高い探究型学習のプログラムを今後も協働開発する。



グローバルネットワーク京都全体会



提言発表Ⅱ「ポスターセッション」

イ 外国語教育
(7) 実用英語技能検定（英検）

1 令和元年度英検取得状況（第2回まで）

		在籍者数	準2級		2級		準1級	
			取得者数	取得率(%)	取得者数	取得率(%)	取得者数	取得率(%)
合計	全体	949	283	29.8%	125	13.2%	3	0.3%
	グローバル科	236	128	54.2%	59	25.0%	3	1.3%
	普通科	713	155	21.7%	66	9.3%	0	0.0%
1年生	全体	320	65	20.3%	3	0.9%	0	0.0%
	グローバル科	79	45	57.0%	2	2.5%	0	0.0%
	普通科	241	20	8.3%	1	0.4%	0	0.0%
2年生	全体	314	120	38.2%	44	14.0%	1	0.3%
	グローバル科	80	46	57.5%	16	20.0%	1	1.3%
	普通科	234	74	31.6%	28	12.0%	0	0.0%
3年生	全体	315	98	31.1%	78	24.8%	2	0.6%
	グローバル科	77	37	48.1%	41	53.2%	2	2.6%
	普通科	238	61	25.6%	37	15.5%	0	0.0%

2 級別受験者推移

	H27		H28		H29		H30		R1	
	受験者	割合	受験者	割合	受験者	割合	受験者	割合	受験者	割合
準1級	9	0.8%	8	0.8%	18	1.8%	39	4.1%	37	3.9%
2級	94	8.7%	118	11.4%	178	17.8%	257	26.8%	188	19.8%
準2級	176	16.3%	148	14.3%	168	16.8%	206	21.5%	242	25.5%
在籍者数	1080		1037		1000		960		949	

3 級別取得者推移（令和元年度は第2回まで）

	H27		H28		H29		H30		R1①②	
	取得者	割合	取得者	割合	取得者	割合	取得者	割合	取得者	割合
準1級	0	0.0%	1	1.1%	2	0.7%	3	0.3%	3	0.3%
2級	17	1.6%	40	3.9%	58	5.8%	120	12.5%	125	13.2%
準2級	92	8.5%	89	8.6%	279	27.9%	333	34.7%	283	29.8%
在籍者数	1080		1037		1000		960		949	

4 成果と課題

研究開発1年次の平成27年度末と5年次の令和元年度の第2回終了時を比べると、CEFRのA2レベルの英検準2級取得者が3.1倍である283名、CEFRのB1レベルの英検2級取得者が7.4倍である125名に達するなど、SGH指定の5年間で大幅に取得者割合を伸ばすことができた。また、CEFRのB2レベルの英検準1級の受験者が4.1倍である37名に達するとともに英検1級を受ける生徒も出てきた。授業等において受験者を増やすための声かけをしつつ、4技能をバランスよく育成する授業改善を進めることができた。

一方、3年間で英検を未受験の生徒が半数近くいる。授業等での声かけを継続し、受験者を増やしつつ授業改善により取得率を上げる。また、教科担当から生徒へのフィードバックを充実させていく。

(イ) GTEC

1 トータルスコア分析

1年生

CEFR-J	スコア	トータル	R	L	W	S
B2	1190～	0	0	0	0	0
B1.2	1060～	0	1	4	7	0
B1.1	960～	6	1	8	134	2
A2.2	810～	112	64	56	46	192
A2.1	690～	147	163	118	84	81
A1.3	520～	39	77	94	34	34
A1.2	370～	10	9	30	8	5
A1.1	270～	0	0	4	1	0
Pre-A1	0～	1	0	1	1	1

2年生

CEFR-J	スコア	トータル	R	L	W	S
B2	1190～	0	0	2	0	4
B1.2	1060～	4	4	6	3	5
B1.1	960～	10	11	22	79	9
A2.2	810～	120	105	71	42	189
A2.1	690～	126	129	112	129	68
A1.3	520～	38	54	58	40	29
A1.2	370～	10	9	30	15	8
A1.1	270～	4	2	5	0	0
Pre-A1	0～	0	0	2	6	0

2 成果

1・2年生全員を対象にGTECを授業内実施し、客観的な指標を活用しながら生徒の英語力を測定し、授業改善を行った。

1年生については、ライティングにおいて文と文の意味のつながりを意識してある程度長い文章を書く力、スピーキングにおいて質疑応答を行う力が向上した。

2年生については、リーディングにおいて具体的に情報のつながりを読み取る力、スピーキングにおいて映画や本のあらすじや知っている出来事についての質疑応答の力が向上した。

4技能を比較すると、1・2年生ともにスピーキングのスコアが他の3技能より高く、「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」等において課題研究内容を英語でアウトプットする取組を充実させた成果と考えられる。

3 課題

1・2年生ともにリスニングにおいて内容の展開や発展についていきながら会話や話を聞いていく力に課題が見られた。また、1年生についてはリーディングにおいて段落間の論理構成や因果関係について意識して読む力、2年生についてはライティングにおいて自分の考えを整理して書く力にやや課題が見られた。次年度については課題研究の英語文献を扱いながら論理的に英文を読み書する能力を育成する。

(6) 成果の普及・広報

ア 成果の普及・広報の実施状況

1 実施状況

- (1) 「イノベーション探究」実践報告書（成果物）
各授業における課題研究の成果物として、成果発表会における年間概要・発表資料等を記載した実践報告書を作成した。校外へ課題研究の成果を普及させるとともに、翌年に課題研究を行う生徒へ配布し、課題研究内容を継続的に深化させる。
- (2) 研究発表会等
 - ア 令和元年 11 月 22 日（金）
SGH事業研究発表会・「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション
 - イ 令和2年 1 月 25 日（土）1 年生「総合的な探究の時間」課題研究発表会
 - ウ 令和2年 2 月 1 日（土）京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都交流会」
 - エ 令和2年 2 月 22 日（土）「イノベーション探究Ⅰ」研究発表会
- (3) 専門学科「グローバル科」説明会・学校説明会
6 月には総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」等の取組を主に紹介するパンフレットを、8 月にはSGH事業の概要を紹介するパンフレットを作成し、各説明会で配布した。
 - ア 令和元年 6 月 23 日（日）公立高校合同説明会 597 名（350 世帯）
 - イ 令和元年 8 月 21 日（水）専門学科「グローバル科」説明会 306 名（162 世帯）
 - ウ 令和元年 9 月 28 日（土）学校説明会Ⅰ 937 名（539 世帯）
 - エ 令和元年 10 月 27 日（日）公立高校合同相談会 115 名（71 世帯）
 - オ 令和元年 11 月 9 日（土）学校説明会Ⅱ 469 名（256 世帯）
 - カ 令和元年 12 月 14 日（土）学校説明会Ⅲ 240 名（132 世帯）
- (4) 中学生に対するSGH課題研究ワークショップ
11 月 9 日（土）の学校説明会Ⅱ及び 12 月 14 日（土）の学校説明会Ⅲにおいて、本校生徒・教員が当日来校した中学生に対して、「イノベーション探究」の課題研究手法についてのワークショップを開催した。
- (5) ホームページ
日本語によるホームページ更新回数 69 回、英語によるホームページ更新回数 66 回
- (6) TOBA SGH NEWS
学期ごとに 1 回、年 3 回発行 [Vol. 13（8 月）、Vol. 14（12 月）、Vol. 15（3 月）]、HP に掲載
全校生徒、各研究発表会、学校説明会、学校評議委員会、運営指導委員会等において配布
- (7) 新聞による広報
京都新聞 1 回
- (8) 鳥羽高校PTA会報
学期ごとに年 3 回発行するPTA広報紙にSGHの取組状況を掲載し、保護者に紹介した。

2 成果と課題

昨年度から始めた中学生対象のSGH課題研究ワークショップが本校の取組として定着した。高校生が自分たちで課題研究の手法を教えることで理解を深められるとともに、中学生にとっても探究的な学びを体験できるよい機会となっている。

運営指導委員の御意見にもあったが、継続的に成果普及に取り組んできた結果、グローバル教育の地域拠点としての特色ある取組を多くの方々に知っていただくことができた。

また、「イノベーション探究」実践報告書を、全国のSGH校、SGHアソシエイト、全京都府立高校へ配布するとともに、HP上に公開することにより、5年間の総合的な学習・探究の時間に係る研究開発内容を広く普及させた。

次年度以降についても自走しつつ、課題研究の指導方法を深化させ、成果普及に取り組んでいく。

イ SGH事業研究発表会

1 ねらい

SGH校としての取組や生徒の課題研究等の成果の普及を行うとともに、校外からSGH事業への意見や批評をいただくことにより、グローバル・リーダー育成のための教育課程等の研究開発を進める。

2 概要（実践）

- (1) 日 時 令和元年11月22日（金）9:50～16:00
 (2) 会 場 京都府立鳥羽高等学校
 (3) 参加者 京都府教育委員会（管理機関）4名、本校学術顧問2名、京都府名誉友好大使5名、大阪大学5名、京都大学1名、京都工芸繊維大学1名、京都光華女子大学1名、小川珈琲株式会社1名、株式会社松栄堂1名、自衛隊京都地方協力本部2名、京都留学生ハウス2名、WWL事業拠点校・SGH校・京都府立高校・京都府外の高校11名

(4) 日 程

ア 10:20～10:40 校長挨拶、全体連絡・諸注意（1棟2階多目的教室）

イ 10:50～11:40 研究授業・公開授業

研究授業（学校設定教科・科目、各1クラス）	授業者	公開授業
グローバル・コミュニケーションⅠ	ミューリ	同時間帯に行われている1・2年生の全授業
ソーシャル・インテリジェンス	中村、井平、田村	
京都の風土・世界の風土	青木、田中誠、宮崎	
グローバル・コミュニケーションⅡ	桂	

ウ 11:50～12:40 研究協議

エ 13:25～14:15 SGH事業報告会（1棟2階多目的教室）

(ア) SGH事業について

(イ) 総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」について

(ウ) SGH海外研修について

(エ) 質疑応答

オ 14:25～15:15 総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション

(ア) 発表生徒 2年生グローバル科 80名

(イ) 参加生徒 1年生グローバル科 80名

(ウ) 形 式 1セット15分×3（6分発表、6分質疑応答、3分評価・移動）

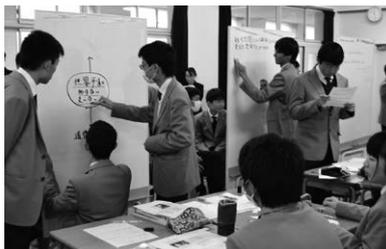
(エ) 遠隔発表 2年生グローバル科のうち2班が、SINET回線とxSyncを活用し、タイに滞在している京都大学の神吉紀世子教授及び京都府立峰山高等学校と接続し、遠隔でのポスター発表を実施

カ 15:25～16:00 講評、閉会式

(5) 評価の方法

ア 1年生による2年生ポスター発表の評価

イ 校外からの参加者によるアンケート、自由記述形式の評価



京都の風土・世界の風土



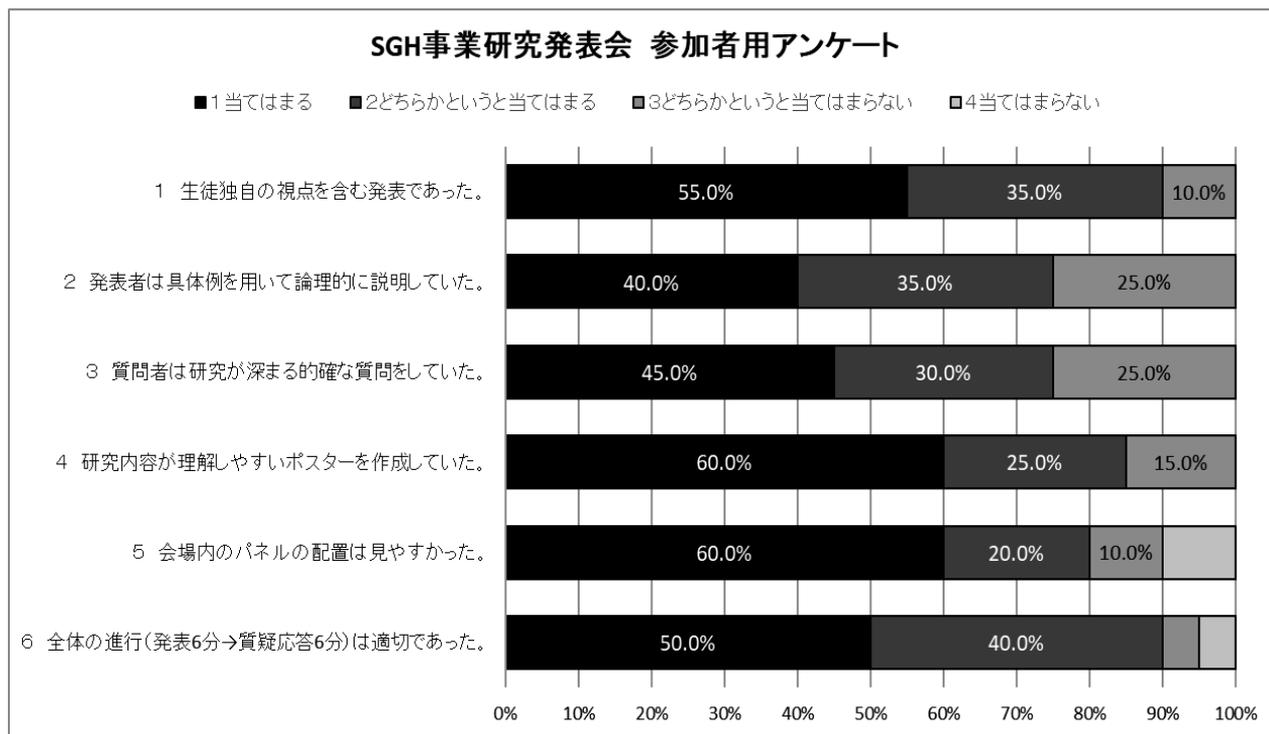
グローバル・コミュニケーションⅡ



イノベーション探究Ⅱ
遠隔ポスターセッション

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

5年間のSGH研究内容を他校へ普及させるとともに、参加者から多くの助言をいただき、取組を改善させることができた。また、課題研究の中間発表である総合的な学習の時間「イノベーション探究Ⅱ」のポスターセッションにおいても質疑応答をとおして多くの意見をいただき、3学期以降の日本語論文作成につなげることができた。質問4「研究内容が理解しやすいポスターを作成していた。」について「4そうである」と60%の参加者が回答するなど、中間発表ではあるが、課題研究内容をわかりやすくポスターにまとめることができた。

本年度初めての取組として、NTT西日本と連携し、SINET回線とxSyncを活用して国内外の遠隔地と接続したポスターセッションを実施した。自走に向けて、これまでは1つの場所に集まる必要のあったポスターセッションを、ICT機器の活用により遠隔地間で実施できるモデルを研究開発することができた。

4 課題

質問2「発表者は具体例を用いて論理的に説明していた。」における「4そうである」の回答が40%、質問3「質問者は研究が深まる的確な質問をしていた。」における「4そうである」の回答が45%にとどまるなど、論理的な説明や質疑応答に課題が見られた。「イノベーション探究Ⅱ」は1単位であり授業時間数が限られるため、中間発表会の直前はポスター作成が活動の中心となっているが、説明や質疑応答のリハーサルに時間をより多く取れるように授業時間の配分や指導方法を工夫する。

SGH指定期間終了後においても課題研究ポスターセッションを継続し、地域の大学・企業・学術機関と連携しつつ、課題研究内容を深化させていきたい。また、移動についての予算を使わずに、遠隔教育システムを活用することで遠隔地間での協働学習を行う授業モデルを引き続き研究開発する。

ウ SGH教職員研修

1 ねらい

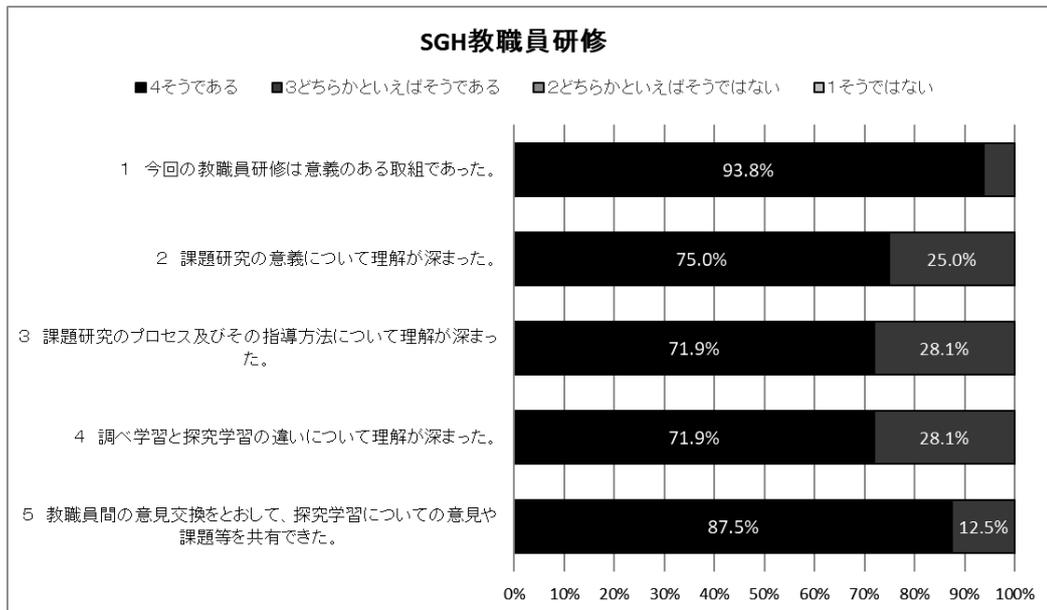
- (1) 専門的見地からの指導を受けることにより、総合的な探究・学習の時間における教職員の課題研究の指導力を向上させる。
- (2) 京都府教育委員会「グローバルネットワーク京都」幹事校として課題研究に関する取組等を公開することにより、SGH事業における成果の普及を図る。

2 概要

- (1) 日 時 令和元年7月3日(水) 15:30~17:00
- (2) 場 所 本校1棟多目的教室
- (3) 講 師 京都光華女子大学 乾明紀准教授
- (4) 内 容 「探究学習のさらなる普及に向けて～SGHの研究開発から見てきたこと～」
- (5) 参加者 本校教職員、グローバルネットワーク京都校2名(山城高校2名)、京都府立高校8名(朱雀高校1名、洛北高校2名、網野高校2名、宮津高校1名、西舞鶴高校2名)

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 分析できる成果

講義の後、課題研究の指導方法について教員間で意見交換を多く実施した結果、質問5「教職員間の意見交換をとおして、探究学習についての意見や課題等を共有できた。」に「4そうである」と回答した教員の割合が、昨年度の31.7%から今年度は87.5%に上昇した。5年間一緒にSGHの研究開発に取り組んできた講師とともに振り返りをしながら、成果普及をしつつ、今後の研究開発の方向性についても議論・共有することができた。

4 課題

教職員研修の開催時期を4月又は5月に変更し、年度初めに教職員が課題研究の方針や指導方法を共有できる体制を整備する。他校への公開を継続し、SGH研究開発内容の成果普及を引き続き行う。



専門学科「グローバル科」・学校設定教科「グローバル」

ア 専門学科「グローバル科」における取組

1 ねらい

課題解決型学習、第2外国語を含めた言語教育、専門教科「英語」および学校設定教科「グローバル」など特色ある教育活動をとおして、幅広い視野と深い専門性を身につけ、将来国際社会で活躍できるグローバル・リーダーの育成を目指す。

2 概要（実践）

(1) 「イノベーション探究ⅠⅡ」（1・2年次1単位）

探究活動をとおして課題解決型学習を身につけた。1年次は「地域再発見プログラム」として、地元京都がもつ歴史的価値の再発見に取り組んだ。2年次は「グローバル・ジャスティスプログラム」として、価値観の対立するグローバルな課題について、探究活動を行った。

(2) 「第2外国語」（1・2年次1単位）

各言語1・2年とも週1時間の授業を1年間行った。1年生については各言語の音声・文字の習得から始めて、ペアワークやグループワークなどをとおして、基礎的なコミュニケーション能力の育成に取り組んだ。2年生については1年次に身につけたコミュニケーション能力をさらに高める活動を行った。

(3) 学校設定教科「英語」

4技能を総合的に高める「総合英語」（1年次）、「英語理解」（2年次）及び自らの考えを英語で表現する能力を伸ばす「グローバル・コミュニケーションⅠⅡ」（1・2年次）を行った。特に「グローバル・コミュニケーションⅠ」ではプレゼンテーションやディスカッションを取り入れ、「グローバル・コミュニケーションⅡ」ではディベートを取り入れるなど、英語による発信能力を育成した。

(4) 海外研修

本校主催（SGH海外研修、グローバル・セミナー）、京都府主催（グローバルチャレンジ・海外サテライト校事業、陝西省訪問プログラム）、文部科学省主催（日韓高校生交流（派遣）事業）などの海外研修にグローバル科生徒計43名が参加した。

3 成果と課題

言語教育については、特に第2外国語において英語圏以外の言語、文化に触れることで幅広い教養を身につける一助となった。特に韓国語履修生徒の中で、文部科学省主催日韓高校生交流（派遣）事業に11名応募（参加2名）するなど、第2外国語に対する生徒の関心も年々高くなってきている。一方で、授業が週1回となるため、前時の内容の継続性をいかに確保するかが課題となっている。

イ 学校設定教科「グローバル」における「グローバル・キャリアパス・プログラム」

1 ねらい

グローバル科の専門科目等において、民間企業等のグローバルな視座と知見に触れることによって、グローバル人材として求められる幅広い教養と深い専門性を身につける一助とする。

2 概要（実践）

(1) 協力企業 株式会社松栄堂

ア 実施日 令和2年1月30日（木）

イ 対象科目 古典G・古典B

ウ 講師 畑 正高 氏（代表取締役社長）

エ 内容 古典文学作品とその中に出てくる「香」の意味を考えることによって、日本における「香文化」について学習をした。さらにグローバル・リーダーに必要な視点について

て考察を行った。

(2) 協力企業 株式会社岡墨光堂

ア 実施日 令和2年1月11日(土)

イ 対象科目 京都の風土・世界の風土

ウ 講師 岡 岩太郎 氏(代表取締役)

エ 内容 日本の文化財を守り伝える装飾師(そうこうし)の役割を知るとともに、文化財の修理は文系・理系を問わず様々な学問分野の知を集わせておこなわれることを学んだ。また、歴史的に継承されてきた文化財の価値が損なわれないよう配慮して修理をおこなうことが大切で、装飾師には高い倫理観が要求されることを学び、選定保存技術を継承する職人としてのあり方にも触れることができた。

(3) 協力企業 株式会社片岡製作所

ア 実施日 令和2年2月6日(木)

イ 対象科目 物理G

ウ 講師 豆野 和延 氏(開発部 部長)及び林 佳佑 氏(開発部)

エ 内容 日本におけるものづくりの技術的な変遷に関する講義を受けた。具体的に精巧な製品を観察することで、科学技術の進化やレーザー加工技術など、ものづくりに対する知識とこれからの物理の授業に関する視野を広げる機会を得た。

3 成果と課題

専門的見地を有する企業の方々と連携した授業をとおして、普段の授業ではとらえきれない深い学びを行うことができた。年間事業計画における単元とのつながりをより明確にしつつ、計画的・効果的に事前学習・事後学習に取り組ませる。

遠隔教育の推進

1 ねらい

遠隔教育システムを活用することにより、SGHの取組を時間的・空間的・経済的制約を超えて今後も自走しつつ研究開発できる形へと発展させる。

2 概要（実践）

(1) 令和元年8月22日（木）

SGH韓国ソウル海外研修参加生徒10名が、Skypeを用いて自治体国際化協会ソウル事務所（クレアソウル）現地職員と事前学習を実施

(2) 令和元年9月11日（水）

SGH韓国ソウル海外研修参加生徒10名が、Skypeを用いてハンヨン高校生と事前学習を実施

(3) 令和元年10月24日（木）

SGH上海海外研修参加生徒10名が、Skypeを用いて復旦大学生と事前学習を実施

(4) 令和元年11月22日（金）

2年生グローバル科生徒8名が、タイに滞在中の京都大学の神吉紀世子教授、京都府立峰山高等学校の生徒と「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッションをSINET回線及びxSyncを用いて実施

(5) 令和元年12月7日（土）

1年生グローバル科4名が、京都市下京区の修徳学区にてフィールドワークを行い、京都大学の神吉紀世子教授及び鳥羽高校会場の1年生普通科4名へ現地調査内容をxSyncを用いて実況中継

(6) 令和元年12月13日（金）

2年生グローバル科・普通科10名が、京都工芸繊維大学ショウジョウバエ遺伝資源センターにて都丸雅敏助教と実験を行い、SINET回線及びxSyncを用いて鳥羽高校会場の生徒と実験結果を共有しつつ考察を行う遠隔授業を実施

(7) 令和2年1月15日（水）

1・2年生グローバル科・普通科20名を対象に、オーストラリアのクイーンズランド工科大学によるSINET回線及びxSyncを用いた異文化理解についての遠隔授業を実施

(8) 令和2年2月1日（土）

2年生グローバル科80名を対象に、大阪大学の進藤修一教授によるSINET回線及びxSyncを用いた「京都の風土・世界の風土」の遠隔授業を実施

3 成果

SGH指定期間終了後の自走に向けて、NTT西日本と連携し、これまでのSGHの取組をiPad等のICT機器や遠隔教育システムを活用することで、時間的・空間的・経済的な制約を受けずに多くの生徒が参加できるモデル構築に取り組んだ。校内にいながら国内外の大学・高校と接続しつつ課題研究内容を深化させることができ、参加生徒の評価も非常に高かった。また、各高校が所有する一般的なICT機器で実施できる取組も多いことが実証できたので、今後は他校への普及を図る。

4 課題

教育実践を蓄積するとともに各実践の教育効果を測定し、実際に現地にて行うべき教育活動と遠隔にて行えるものを整理し、それぞれの長所を組み合わせた教育プログラムを研究開発する。



復旦大学生へのインタビュー



京都工芸繊維大学遠隔授業



修徳学区フィールドワーク実況中継

令和元年度 京都府立鳥羽高等学校 第1回SGH運営指導委員会

1 日時 令和元年9月27日(金)午後1時30分～午後3時15分

2 場所 鳥羽高等学校1棟多目的教室

3 出席者

(1) 運営指導委員 三谷宏治氏、北尾哲郎氏、Steven Herder氏、内藤義弘氏

(2) 府教育委員会 遠山秀史(高校教育課首席総括指導主事)、松岡正己(高校教育課副課長)、
星野詠志(高校教育課指導主事)、森山亜依子(高校教育課主事)

(3) 鳥羽高等学校 山埜茂彦(校長)、橋長正樹(副校長)、長谷川泰三(副校長)、佐藤政史(教諭)、
片山哲也(教諭)、田中誠樹(教諭)、大泉幸寛(教諭)、宮崎雄史郎(教諭)、花
山正子(事務員)

4 内容

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶 遠山首席総括指導主事

(3) 校長挨拶 山埜校長

(4) 運営指導委員長選出

運営指導委員互選により、三谷宏治運営指導委員(K. I. T. 虎ノ門大学院)を運営指導委員長に選
出した。

(5) 運営指導委員長挨拶 三谷運営指導委員長

(6) 上半期の実施内容、成果と課題について 佐藤教諭

(7) 下半期の事業計画、実施方法について 佐藤教諭

(8) 生徒発表と質疑応答

ア S G H韓国ソウル海外研修の成果発表(日本語)

イ 1年生7・8組 グローバル・コミュニケーションIの取組(Deep Kyoto)の発表(英語)

(北尾委員)

- ・発表の内容にカフェ文化やラーメンが含まれており、最初はどのようにしてそのテーマを選んだのか
と思ったが、発表を聞くにつれて、韓国の若い世代や海外の人々を理解しようという気持ちが
伝わった。政治については様々な課題があるが、若い世代の人たちの間ではそのような違和感
がなく、文化や思いを共有しようとしていることも実感できた。自分たちが考える日本料理と
は異なり、ラーメンなどを日本料理と考える外国人も増え、食文化もインターナショナルにな
ってきた。こうした時代の変化の中で職業についても選択肢の自由度が高まっていると感じる。

(内藤委員)

- ・カフェ文化については日本と韓国の比較について3Sというキーワードを自分たちで上手に設
定できていた。インタビューを基にした考察をした点も非常に鋭かった。3Sというキーワ
ードのさらに深いところを探究するとよりよくなる。
- ・Deep Kyotoについては、舞妓のかんざしだけでなく舞妓の持つ道具など全般をターゲットにし
て掘り下げるとより深く理解できる。ラーメンについては、特殊な例ではなく、一般的な京都
のものを併せて示すと比較できてよい。

(三谷委員長)

- ・私はずっと経営コンサルタントをしてきたので、前半のカフェ文化の発表には本気で突っ込む
が、話がきちんと構成されていてよかった。特に、手法として目的を示し、次に方法を示し、
やってみたらこんなことがわかったという流れを繰り返していたことがとてもよかった。残念
なところは3つある。1つ目は途中でコミュニティという話が出て、カフェの意義、晩婚化等
の様々な話が出ていたが、最後の考察でコミュニティという言葉がどこかに行ってしまうと残
念だった。残念な理由は、カフェというものがまさにコミュニティとして発祥しているから。
最初はエジプトのカイロくらいから発祥して、ロンドンでコーヒーハウスとして流行し、パリ
でカフェとしてとても流行した。その当時、その人がどこのカフェに通っているかで政治的な

思想や印象派の所属グループがわかるくらいカフェというのは職業別、興味・関心別の場所であり、知らない者同士が議論して仲良くなれるコミュニティであった。なので、カフェ文化の考察でコミュニティという言葉が出たときにとっても面白いと思った。

我々が知るカフェは決してそういう場所ではないが、韓国にはそういう場所がある、知らない人々同士でつながれるという考察を期待していたら出てこなかった。だから、カフェそのものについても韓国はどうか、歴史的にはどうかというところから調べるともっとよかったし、せっかく出てきたコミュニティという話が途中でどこかに行ってしまう、もったいなかった。

- 2つ目は調べ方。比べることが大切と私はよく言う。例えば韓国はカフェや飲み物と距離が近いと言ったが、日本はそれほど離れているのか。確かにカフェは韓国より少ないかもしれないが、飲料の自動販売機は日本にどれくらいあるか。コンビニエンスストアは日本に4～5万店ある。自動販売機はおそらくその100倍近くある。300数十万台日本には存在する。いまは多くは建物の中にあり、オフィスにはフロアごとに1台ずつ必要なものでそれだけ多い。コーヒーを無料で飲める設備もある。本当に日本ではカフェがそれほど離れているのか。何が言いたいかということ、何か1つ面白いものを見つけたら、他はどうかと比べてみるのが大切。別にすごいことではなくても、日本のオフィスで働く人、自分の周囲にいる人ときちんと比べてみる。コミュニティという言葉を用いて、考察を線でつなげてみるとよかった。
- 3つ目はターゲットの明確化。Deep Kyotoについては、誰に対して伝えたいのかをもっと明確にする。日本人、京都にいる人、日本に来る外国人など。特殊なラーメンにしても、なぜそれが外国人にうけるのか、なぜ日本人は知らないが外国人は多く知っているのか、その理由は何かなど。舞妓のかんざしの話にしてもそう。自分たちは誰に何をいったい伝えたいのだろうかをもう一度考えてみるとよい。

(Herder 委員)

- 5年前の発表と比べるととても上達している。コンテンツ・内容やデリバリーなど。自分で教えている大学生は発表資料作成に80～90%の労力を使い、残り発表練習している。それはもったいないので、資料作成と発表練習を半分ずつくらいにするのがいい。発音がきちんとできた生徒も増えた。もっと自信を持って英語で話してよい。
- 話の聞き手とのつながりを持つとするのは発表の際に大切。この点は発表者によって異なった。聞き手全員を見回してから話してつながろうとした人もいたし、一切見なかった人もいた。アイコンタクトをするとよい。
- カフェ文化は面白いテーマだった。約30年前に日本に来たとき、どこを見ても自動販売機で驚いた。海外では治安上からありえない状況。海外の人々にとって興味深いテーマだった。
- Deep Kyoto の発表が“Have you ever seen a maiko?”という質問から始まったが、みんなが知っているようなことではなく、知らないようなことを質問するのがよい。例えば、「舞妓は毎日どれくらいの時間を準備に使いますか」などを聞くと興味を持ってもらえる。
- 5年間SGHを続けてきたので、もっと先輩に話を聞くとよい。先輩に相談する、先輩に発表を見てもらうなどすれば、身近にアドバイスを受けられる。運営指導委員はみなさんの先輩に様々なアドバイスをしてきたので、ぜひそれを先輩から聞いて共有して欲しい。
- (その他、発表者各人について、そのコミュニケーションへの個別指導・アドバイスをいただいた)

(9) 研究協議

(三谷委員長)

- SGH指定期間終了後にどの方向に進んで行くのかを明らかにしたほうがよい。その方向に向けてこれからの半年間何をして次につなげていくのかを考えるべきだ。文部科学省のどの新規事業に申請するにせよ、これまでのように海外研修の金銭的支援はできなくなることを踏まえた今後の準備が必要である。
- 英語については、英検2級と準2級についての年度ごとの目標値があるが、今年度達成できるかはともかく、究極どこまで達成したいのか。

(Herder 委員)

- ・英語が出来る生徒と苦手な生徒の違いは何かについて、私もよく考えている。大学で教えていても、文法力の有無ではなく、学生が本気で努力するかどうかが大切と感じている。実際に本気で努力して大きく英語力を伸ばした学生を大学で見えてきた。佐藤教諭が目標と考える鳥羽高校生全員に CEFR の B1 レベルに当たる英検 2 級を取得させるという目標も実現可能な目標だと思う。ただし、努力とはどういうものかについて生徒へ話す必要はある。私は学生に出来る、出来ないという話はせずに“Not yet (まだ出来ていない)”という言い方をしている。学生によっては小学生のときなど子供のころから自信を失っている場合もある。英語の学び方については、英文法が得意かどうかは人によって異なるが、英検 2 級は生徒たちが本気を出したら達成できる目標だと思う。努力が結果に結びつくことを教えて欲しい。

(三谷委員長)

- ・先程 Herder 委員がコメントしていたが、先生との上下関係ではなく、先輩からなど斜め上からの関係も大切。鳥羽高校を卒業した大学生と一緒に高校時代の話をするなど。少し斜め上からのアドバイスや実体験を聞く場面をもっと上手に作ったらよい。
- ・女子生徒の方が海外研修への参加に積極的との話があったが、午前中の特別講義でも女子生徒が積極的に発言していたし、他校でも同様な傾向がある。そういう「人前で物怖じせずに話せる」力が大切だが、これは慣れの問題でもある。学校としても、もっと自分から発言する生徒が増えるような工夫が必要である。

(Herder 委員)

- ・今後さらに S G H プログラムに取り入れてほしいのがディベート教育。関西でも積極的に取り組む先生が増えてきた。ディベートは 4 技能、批判的思考力、説明能力の全てを使う必要がある。英語の先生にディベートの勉強会に研修として参加してもらうのもいい。市販のディベート教育の本も出版されている。

(北尾委員)

- ・あまり数値目標は気にしなくてもいいのではないかと。外国語大学に進学したら国際人になる訳ではない。経済学部、法学部、理学部、芸術学部などの他の学部で様々なことを学び、それをさらに探究するために語学を学んで海外に出ていくのもよい。現在、日本からの留学生がかなり減っている。アメリカの有名な大学については中国からの留学生が増えており、なぜ日本からの留学生が来なくなったのかという声をよく聞く。やはりこれが将来的に日本の力が落ちる大きな原因になると思う。中国は国費の補助も多額なのだろうが、海外で学んだり勤めたりして学んだノウハウは留学生の頭の中に入っており、中国に戻ってそれをを用いて企業活動を行っている。外国語大学に限らず、一般の大学で様々な興味を持って学ぶ人が国際人だと思う。
- ・Herder 委員のお話にもあったが、語学力は努力の結果なので、グローバル科の取組など鳥羽高校の 3 年間である程度基礎を身につけさえすれば、大学で大きく伸びる。外部からの評価もあると思うが、学校は生徒が人間として高校生としてどれだけ広く大きく成長したかを評価したらいいと思う。

(内藤委員)

- ・外部検定のスコアは評価する上であまり関係ないと思う。語学については、最低限は必要だと思うが、もっと内なるものとなるコンテンツ、特に文化的な背景にある歴史を認識することが大切である。外国人と話すときに歴史的背景がわからず対等に話せない経験を個人的には経験してきた。受験科目との関係があるが、もう少し高校教育の中で文化や歴史を学ばせて欲しいし、教材化をするのもよい。
- ・S G H プログラムを経験した卒業生との交流があれば、S G H で蓄積されたものが次の世代に継承されていく。S G H の予算がなくとも工夫できることは多々あると思うので、先生方も大変だが、今後を期待したい。

(三谷委員長)

- ・東北の震災の後、OECD に勤めていた日本人が復興に寄与したいと東北の震災地区の子供たち対象に立ち上げたプロジェクトがあった。そこで手伝っていたのだが、中学・高校生が 3 年

後パリに行ってプレゼンテーションしようという目標を立て、地元の企業などを回って発表したい内容を広報して寄付を募り、自分たちで渡航費用を稼いだ取組はとても面白かった。次年度以降については、高校生が自分たちでOB・OGからクラウドファンディングで寄付を募る、企業を訪問して資金調達することもできる。本当の世界を知る上でこうした取組もいい。

- ・ピア・エデュケーションも大切である。出身の福井県について調べたことがあるが、驚くほど多くの学校で取り組んでいる。学校祭の企画・運営を完全に生徒の自治に任せる高校や、自分たちでディベート大会を開き、先輩が後輩を指導し、ジャッジを育てる研修を3年生が行う高校もあった。文化部に部室を与えることも、生徒の居場所づくり、生徒間での相談や協力の場所となり、ピア・エデュケーションとして有効であろう。
- ・運営指導委員から様々な意見を出しているが、どれを取り入れるかは高校で検討し決めればよい。ぜひ次のステージに向けて、頑張ってください。

(10) 閉会

令和元年度 京都府立鳥羽高等学校 第2回SGH運営指導委員会

1 日時 令和2年1月28日(火)午後1時30分～午後3時15分

2 場所 鳥羽高等学校1棟多目的教室

3 出席者

(1) 運営指導委員 三谷宏治氏、北尾哲郎氏、Steven Herder氏、内藤義弘氏

(2) 府教育委員会 遠山秀史(高校教育課首席総括指導主事)、松岡正己(高校教育課副課長)、
星野詠志(高校教育課指導主事)、森山亜依子(高校教育課主事)

(3) 鳥羽高等学校 山埜茂彦(校長)、橋長正樹(副校長)、長谷川泰三(副校長)、佐藤政史(教諭)、
片山哲也(教諭)、大泉幸寛(教諭)、宮崎雄史郎(教諭)、花山正子(事務員)

4 内容

(1) 開会

(2) 教育委員会挨拶 遠山首席総括指導主事

(3) 校長挨拶 山埜校長

(4) 今年度の実施内容、成果と課題について 佐藤教諭

(5) 5年間の研究開発の成果と課題について 佐藤教諭

(6) 生徒発表と質疑応答

ア 2年生イノベーション探究Ⅱのポスター発表(日本語)

(三谷委員長)

- ・皆さんの発表内容は仮説検証に向けた展望があり、今後も研究を進められるものだと思う。
- ・物事を決めるには手順(ステップ)がある。まずは選択肢をちゃんと挙げて、その中から評価基準に照らし合わせて1つに絞っていくことである。ただ今回の発表では、選択肢をきちんと挙げることで、評価基準を明確にすることが欠けていた。前半でいくつかのリサーチクエスチョンを挙げたのはよかったが、その評価基準が曖昧で後半とのつながりが見えなかった。また、リサーチクエスチョンそのものも、テーマに関して批判的な団体によるものが中心で偏っていた。自分の意見に合わせて選択肢を挙げるのではなく、自分とは異なる意見もバランスよく選択肢として挙げるのが大切である。
- ・動物虐待や動物実験は最近課題になっているテーマである。日本とドイツを比較するのはよいが、両国の違いを明らかにしつつ、日本や京都ならではの独自性を持った解決方法を示すことができればさらによくなる。

(北尾委員)

- ・最初に提示した日本における動物実験や殺処分のテーマを最後まで深められればさらによかったが、高校生がこのテーマに取り組んだのは驚きであった。私たちの会社は薬の開発を行っている。人間の幸せや健康のために薬を作るが、そのために多くの動物が犠牲になっている。これらのバランスをどのように考えるのが難しい。免疫を抑制して病気を治す高価な薬のように、動物実験ではあまり効かなかったが人間にはとても効いた例もある。人間の体は神秘的で、まだまだ薬には開発の余地がある。ただし、国の基準ではまずは動物実験で副作用を確かめてからでないと薬は認可されないで、現時点では動物実験をやめるわけにはいかない。国の基準自体を変えるのかIPS細胞を用いるなど異なる方法で安全性を確かめていくのか。それを深めていくことはとても難しいことだ。
- ・素晴らしい点は、こうした難しくて手に負えないようなテーマをやってみようという気持ちである。発表の中身も大切だが、この挑戦する気持ちを大切に、向上心を持って頑張りたい。大変頼もしく思えた。

(Herder委員)

- ・自信を持っていいプレゼンテーションができていた。
- ・論文との違いは audience がいること。聴衆とつながるために、日本語・英語に関わらず、自分の言葉で語りかけて欲しい。また、緊張しないでプレゼンテーションをするには練習が大切。

何度も繰り返して練習をすること。

- ・全員の power が見えて素晴らしかった。感動しました。

(内藤委員)

- ・まず、非常に難しい内容をわかりやすく説明していただいてよかった。
- ・ドイツやヨーロッパの取組を調べた際に、現地の歴史的な背景、住民の考え方、法制度などについて日本との違いを掘り下げていけば比較する意義がより深まるのではないか。また、おそらく法律を変えたとしてもドイツ、ヨーロッパと同じように日本はならない。国、地方自治体、住民、NPO等が様々なことをしながら1つのことに向かって一緒に取り組むことが必要になる。どのように連携していけばいいかという観点から深めれば、目指す方向に近づく解決策がより示せるのではないか。

イ 2年生SGH台湾海外研修の発表（英語）

(北尾委員)

- ・2つ目は明るく快活に発表ができ、発音が滑らかで驚いた。5年前のたどたどしい発表よりも堂々としていた。メディアを使って日本人の旅行者を台湾へ呼び込むという非常にわかりやすいテーマであったが、生徒の皆さんの語学力の高さ、先輩から受け継がれてきた堂々と発表する姿勢により、完成度の高い発表となった。5年前、鳥羽高校が最初に目指したことが達成できていた。

(Herder 委員)

- ・発表のトピックがとても面白く、発音もとてもよかった。イントネーションの強弱をつければより聞きやすくなる。緊張したときは、まずは聴衆の中で話しやすい人に向かって話すことと安心できる。
- ・また、台湾観光協会大阪事務所へ自分たちの提案を伝えることが素晴らしい。学校の中だけでなく、自分たちで発見したことを京都や大阪など校外に発信できればいい。

(内藤委員)

- ・発表をする際の発音や態度に加えて、自分たちが実地調査で感じたことを動画にして発信するという手法もよかった。ただし、warm atmosphere というキーワードを用いて台中の萬春宮の魅力を発信していたが、これは萬春宮の比較対象である台北の九份にも当てはまるので、キーワードとしてはやや弱い。キーワードが出てきた理由や過程が伝わるようにするとよい。また、2つの観光地を比べるときは、その違いを際立たせると伝わりやすい。

(三谷委員長)

- ・動物虐待についてのポスター発表ではロジカルさが大切だと述べたが、この台湾海外研修のプレゼンテーションではロジカルさを超えたストーリーそのものが素晴らしいと思った。「日本から台湾、特に台中への訪問者数が相対的に少ないから増やしたい」「調べてみたら Media-based Tourism が台北の九份では成功しているので、それが台中の萬春宮では適用できないのか」「実際に萬春宮で調べたらコアな価値が感じられる」「しかしそれは言葉では伝わりにくいので、自分たちでメディア（動画）を活用して萬春宮の価値を発信する」という流れだったが、特に萬春宮について伝えるべき warm atmosphere について、「メディア以外では伝わりにくいことだ」と位置づけたのが素晴らしい。だから話がつながる。
- ・メディアでしか伝わらないから、自分たちで実際に動画を作ったみたという点は、もっと強調してもいい。プレゼンテーションだけでは伝わらないので自分たちの動画を見てくれという流れにできる。とてもパワフルなストーリーだった。

(7) 研究協議

(三谷委員長)

- ・この5年間としては最後の会議となる。だから目的に対してどこまで到達したのかをはっきりさせたい。その上で、これからやっていくことを整理していくのがいい。目的としては「探究力」と「Global 力」であり後者は「英語力」「Global Exposure」「ICT」など3つに分かれるが、

その各々で到達レベルやその浸透度を評価して欲しい。またそれらはおそらく、グローバル科と普通科で異なるのであろう。

- ・探究力については、どこでも使えるような探究学習の枠組みができてきた。また、1～3年生が同じ枠組みを使うことも取り組んできた。基礎的な探究はできたきたので、今後は質的にもうひとつ高いレベルを目指すといい。
- ・英語力については、多くの予算がないと育成できないものではない。Herder さんが言われるようにモチベーションの持たせ方が大切である。
- ・Global Exposure については、2年生の海外研修を本当に意義や価値があるものにしていくことが求められる。探究力や英語力など他の観点等とのかけ算となる。
- ・ICT を活用した取組も始まっているが、現在の形式では参加できる人数に限られるため、全員に広げていくのは難しい。普通科には運動に燃えている生徒も多いと思うので、コーチを英語圏の方をお願いするなど面白い。

(内藤委員)

- ・日本に住んでいる外国人の子供たちが、日本の高校に入るハードルが非常に高い。高校入試において様々な優遇措置はあるが、日本語を用いて受験するのは難しい。これからの鳥羽高校の展開として、日本語は不自由かもしれないが、あえてこうした生徒を受け入れていくやり方があるのではないか。
- ・これまでの取組を振り返ると、様々な国内外の学校や企業等との横のつながりはとてもよくできている。中学生や卒業生などとの縦のつながりをさらに広げていく余地がある。英語教育が小学生から始まっているので、小学生と高校生が触れる機会を設けることも方法論としてある。
- ・SGH終了後の新規事業については、鳥羽高校だけではなく、他の府立高校への展開が大きなテーマとなる。明確な方法を持って戦略的に行う必要があると思う。期待しています。

(北尾委員)

- ・SGH事業をとおして鳥羽高校は、海外研修等により海外に目を向けられる、大学や企業等との連携がある、京都だけでなく他の地域の同世代の生徒ともつながりができるといった特色化を行ってきた。本日発表した生徒たちは、こうした魅力を感じて鳥羽高校を受検してきたのではないかと感じた。海外を目指す、海外へ出て仕事がしたい、海外を見たい知りたいという生徒がどんどん入ってくる学校の先例として、メディアに取材を受けたり、自ら情報発信をしながら特色化を継続すれば、さらに素晴らしい学校になると思う。

(Herder 委員)

- ・私は授業を行う際に、生徒が自分自身でいかに燃える気持ちになれるのが大切だと思う。英語では self-grading というが、生徒が自分で自分の点数をつけるのもよい。自分に期待していることを自分で話させる。生徒同士で互いに面接させてもいい。
- ・検定試験のスコアを評価する方法もあるが、英語で日誌を書く努力、毎日自分で英単語を覚える努力など、生徒の努力自体を評価してはどうか。先生は英語の4技能に英文法と英単語を加えた6つを育成する学習プログラムを考え、生徒は自分で活動を選んで努力する。努力自体が点数化されるので、生徒もやってみようと思うのではないか。
- ・SGH 5年次の取組に遠隔授業の話があったが、Zoom を使って外国の先生や生徒と学ぶことを取り入れてもよい。時間を区切って、様々なグループとプレゼンテーションやディスカッションもできる。

(三谷委員長)

- ・一部の生徒をリードするために様々な取組を行うのはいいが、同じことを全員に取り組みさせることも大切だ。そのためには取組を絞ってもいい。そうでないと全体に広がらないから。私は女子栄養大学でも食文化栄養学科の学生に教えている。この学科の学生は栄養士の資格を取るわけではなく、将来的に就く職種は多様である。こうした学生たちに普遍的な力をつけるために、2年生対象の「基礎経営学入門」という科目を開発・担当することとなった。何がすごいかといえば、この授業は必修科目なので、全員がこの授業を受けなければならないこと。なのでさまざまな工夫をしているが、そのひとつが動画作成による反転授業である。講義では教科

書的なものを用いず、「マンガ経営戦略全史」の内容について担当の班が5分間の動画を作成して発表することになっている。もちろん私は講評をするが、授業内容のほとんどは学生が作った動画を全員に見せるだけである。しかし、その動画は学生に大きなインパクトを与える。ものすごく手をかけた人たちの努力、手をかけただけ分かりやすくできることが理解できる。互いに刺激を受けつつ、全員が2回発表するので、必然的にスキルが向上し、モチベーションも上がる。これもピア・エデュケーションの1つである。このように面白そうだから全員でやってみるという取組は、探究の授業だけでなく他の授業でも行うことができる。別に鳥羽高校で5分間の動画作成をやれというのではない。新たなスキルを全員に経験させる取組を、普通科目の授業においても実施して欲しい。

- ・先週、東京・板橋区の板橋アカデミー（教育長と全区立小中学校の校長が出席）に参加したが、教育全体を変えていくのはとても大変だと感じた。鳥羽高校が5年間かけてここまで到達したのは素晴らしい。ただし、生徒の視点からすれば、高校は3年間しかいない場所である。だから、高校が求められる変化のスピードはかなり速い。1年次から課題であった普通科目へ探究的視点等の取り入れについては、まだまだ解決策が見えていない気がする。こうした点やカリキュラム開発も含めて、鳥羽高校には教育委員会とともに今後もぜひ踏み込んでもらいたい。最後は皆さんへのお願いごとでした。ありがとうございました。

(8) 閉会

A：令和元年度鳥羽高校SGH イノベーション探究研究グループ 業務名・業務内容・担当者一覧

目的：総合的な探究・学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」の研究開発

■ 主任1名（宮崎）、副主任1名（田中誠）

項目	学年	組	領域・内容	主担当	副担当	授業担当者	実施内容
A	1年	1組（スポーツ総合専攻） 2組（文科スポーツ）	健康・スポーツ領域	三浦	山名	三浦、水谷、矢野、山名	課題研究発表会（3学期）等
			伝統・文化領域	福井	中藤、橋谷	大泉、金子、高田、中藤、橋谷、福井、藤田、三嶋	別紙参照
		7・8組（グローバル科）	イノベーション探究Ⅰ	田中誠	竹林、中村	竹林、田中誠、中村、三ツユーリ	別紙参照
	2年	1組（スポーツ総合専攻） 2組（文科スポーツ）	健康・スポーツ領域	柏木	東中	青木、柏木、東中、藤田	課題研究発表会（3学期）等
			地域研究領域	奥村	笹井、高田	奥村、笹井、高田、藤田、三嶋、村田愛、矢野	別紙参照
		7・8組（グローバル科）	イノベーション探究Ⅱ	宮崎	大泉、渡邊徹	大泉、桂、宮崎、渡邊徹	別紙参照
	3年	1組（スポーツ総合専攻） 2組（文科スポーツ）	健康・スポーツ領域	松下	櫻井	櫻井、松下、三嶋、山田	課題研究発表会（3学期）等
			地域研究領域	長谷川	松本、矢野	宇川、坂部、高田、長谷川、松本、三嶋、安福、矢野	別紙参照
		7・8組（グローバル科）	イノベーション探究Ⅲ	渋谷	片山、北尾	片山、北尾、渋谷、三ツユーリ	別紙参照

■ 共通業務

各取組内容に応じて、下記の業務を行う。

- ①連携先・訪問先との日程調整・参加申込等、②事前準備・生徒への事前指導、③当日の運営・引率、④ICT活用、⑤実施記録（HP原稿・写真）、⑥実施後の生徒アンケートのまとめ、⑦SGH事業研究発表会等の発表指導、⑧研究開発実施報告書の作成、⑨生徒の成果物集の作成

■ 教科担当の中から、主担当・副担当を決定する。

■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

B：令和元年度鳥羽高校SGH グローバル・コンピテンシー育成研究グループ 科目名・業務内容・担当者一覧

目的：グローバル教育に向けた新たな教科横断的科目に関する研究開発（学校設定科目の研究開発、教育効果の検証・評価等）

■ 主任1名（桂）、副主任1名（中村）

項目	科目名	業務内容	主担当	授業担当者
B	① 「グローバル・コミュニケーションⅠ」	<ul style="list-style-type: none"> ・特色ある教育活動の実施 ・評価、学力分析 ・実施記録（HP原稿、写真） ・授業等におけるTAの依頼、活用 ・研究開発実施報告書の作成 	ミューリ	ミューリ
	② 「グローバル・コミュニケーションⅡ」		桂	桂
	③ 「グローバル・コミュニケーションⅢ」		ミューリ	ミューリ
	④ 「ソーシャル・インテリジェンス」		中村	井平、岩本、田村、中村、矢野
	⑤ 「京都の風土・世界の風土」		青木	青木、宮崎、田中誠

■ 教科担当の中から、主担当を決定する。

■ 主任・副主任を中心に、他のグループと連携しながら事業を実施する。

C：令和元年度鳥羽高校SGH 鳥羽の学びネットワーク研究グループ 業務内容・担当者一覧

目的：「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」、学校設定科目（「グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ」、「ソーシャル・インテリジェンス」、「京都の風土・世界の風土」）の実施に向けた鳥羽の学びネットワークとの効果的な連携方法について研究開発

■ 主任1名 [C-1担当]（ ミュージ ） 、 副主任1名 [C-2担当]（ 金子 ）

項目	時期	業務名	対象	業務内容	担当者	担当教科・分掌
C-1	① 7月	鳥羽グローバル・サミット	全学年	授業参加、KYOTOフィードバック、ホームステイ、ワークショップ等の実施に向けた補助及びTAの募集業務等	井平、阪下、鈴木、中澤、高瀬、林、ミュージー	英語科1名
	② 通年	海外外部機関との協働学習・交流会準備運営	全学年	海外の外部機関・高校生等が来校する際の受入準備・運営	小泉結、三嶋	
	③ 7月	JICA関西ワークショップ	1・2年	JICA関西と連絡・調整の上、ワークショップを実施	福嶋、山口	
	④ 6～10月	高校生ビジネスプラン・グランプリ	1・2年	日本政策金融公庫主催のコンテスト。申込、事前学習会2回、エントリーの補助	宇川、増田、安福	

項目	時期	業務名	業務内容	担当者	担当教科・分掌
C-2	① 通年	各種コンテスト	英語スピーチコンテストなど校外の各種コンテストの広報、参加申込補助、参加状況・入賞状況の集計、研究開発実施報告書の作成	和田	
	② 通年	海外研修参加者への健康調査	海外研修参加者への出発前の健康調査及び健康指導	川本彩、中井、鷺尾	養護教諭等2名
	③ 通年	冷泉家時雨亭文庫による作歌指導・歌会	作歌指導、春の歌会・秋の歌会の企画・運営	金子、越野、村田愛	国語科2名
	④ 通年	伝統・文化事業	茶道・華道等の伝統・文化事業の企画・運営	田中喜、山田、渡邊も	企画推進部1名
	⑤ 通年	SGHの取組の進路指導への活用	4技能型英語検定の取得状況・コンテストや校外課題研究発表会の参加状況等のSGH事業の取組をデータベース化、進路指導への活用	坂部	進路指導部1名

■ 共通業務

各取組内容に応じて、下記の業務を行う。

- ① 連携先・訪問先との日程調整・参加申込、② 事前準備・生徒への事前指導、③ 当日の運営・引率、④ 実施記録（HP原稿・写真）、⑤ 実施後の生徒アンケートのまとめ、⑥ 成果発表会準備、⑦ 研究開発実施報告書の作成（A4各1枚程度）

■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

D：令和元年度鳥羽高校SGH リベラルアーツ教育研究グループ 業務内容・担当者一覧

目的：アクティブ・ラーニング等による既存の教育活動における学びの質や深まりを強化

■ 主任1名 [D-1担当] (竹林)、副主任1名 [D-2担当] (西垣淳)

項目	業務名		業務内容	担当者	担当教科・分掌
	7月	11月			
D-1	公開授業の企画・調整	公開・研究授業の企画・調整、アンケートの実施、研究開発実施報告書の作成（公開授業当日の運営については、教務部と連携する）	齋藤、南條		
		研究授業の企画・調整			
	ICT活用した授業の研究	SGH事業に関する教職員研修の企画・立案、準備、実施、アンケートの実施、研究開発実施報告書の作成	明田、川合		
		ICTを用いた授業実践、ポートフォリオ等によるデータ活用を研究開発	戸田、二澤、西垣智		

項目	業務名		業務内容	担当者	担当教科・分掌		
	①	②					
D-2	実用英語技能検定(英検)・GTEC・TEAPの案内、実施準備、運営、集計	英検・GTEC・TEAPの受検案内、実施準備、運営、受検・取得状況の集計、研究開発実施報告書の作成	実施要項・問題作成、印刷、採点、講評、研究開発実施報告書の作成	秋山、三谷	英語科1名		
	1月 グローバル思考カコンテスト					岩本、沖、金本、富山、西垣淳、藤田	
	SGH事業に関連した図書の整備・管理	「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等の課題研究や教養力向上を目的とした図書(日本語・英語)の整備・管理				小泉真	図書部1名
	特別時間割の作成・時間割変更	SGH事業実施に必要とされる特別時間割の作成・時間割変更				水谷	教務部1名

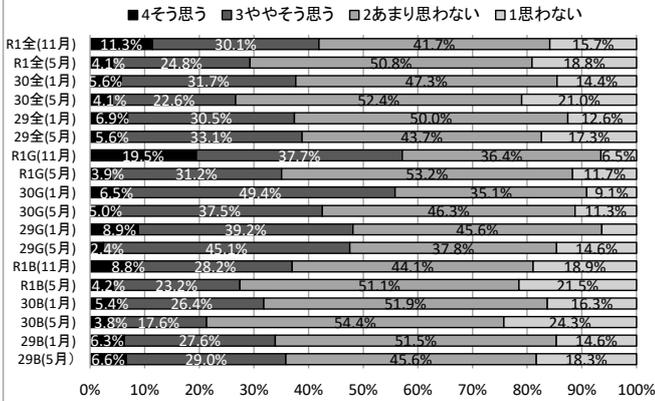
■ 主任・副主任が調整を行い、事業ごとに担当から主担当を定めて各事業を実施する。

平成29年度入学生（現3年生）SGH事業に関するアンケート結果

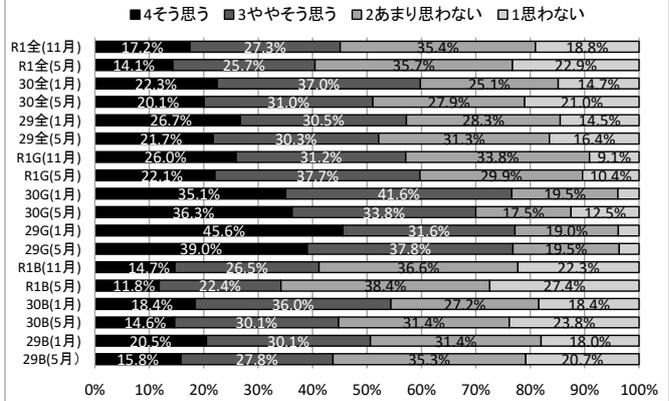
■実施時期 平成29年度5月 平成29年度1月 平成30年度5月 平成30年度1月 令和元年度5月 令和元年度11月
 ■対象 1年次全員（324名） 2年次全員（320名） 3年次全員（317名）
 29年度5月 回答数（323名） 29年度1月 回答数（318名）
 30年度5月 回答数（320名） 30年度1月 回答数（316名）
 令和元年度5月 回答数（314名） 令和元年度11月 回答数（315名）
 ■方式 質問紙法（マークシート方式）

全:全体
 G:グローバル科
 B:普通科

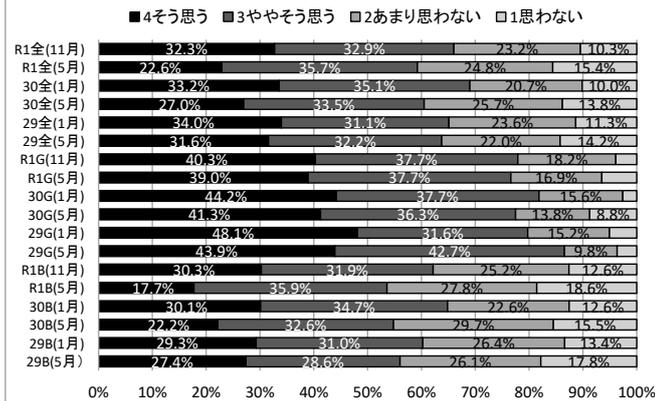
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。



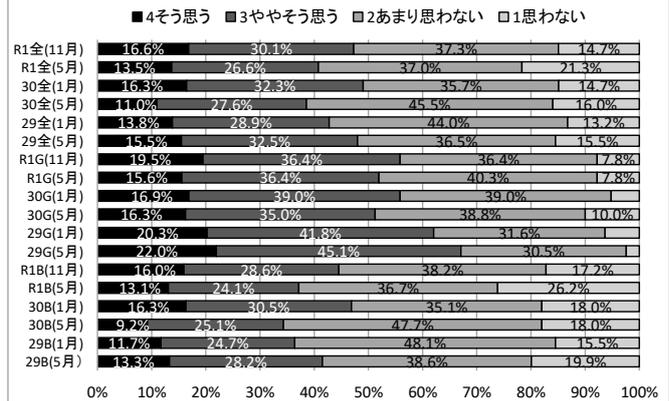
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。



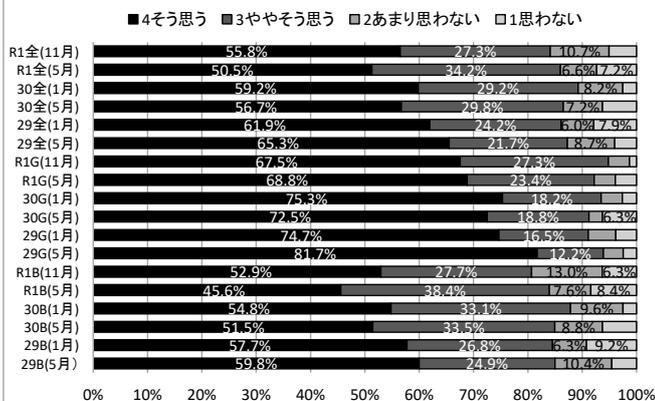
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。



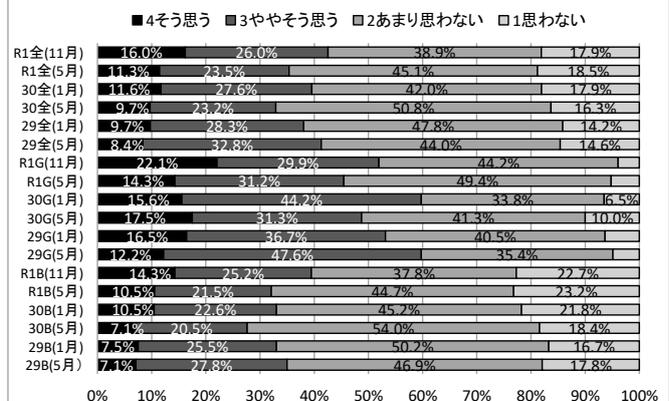
4 高校・大学卒業後に海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。



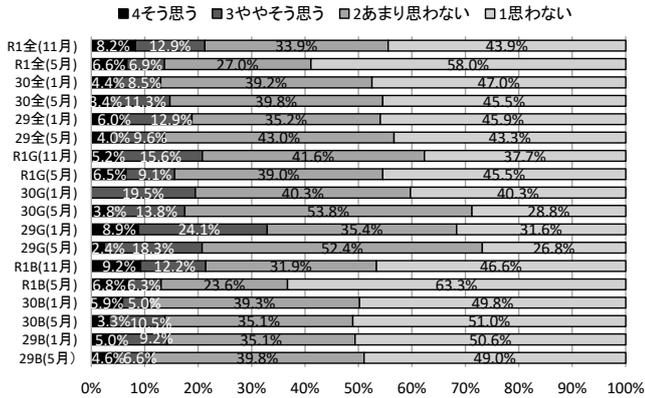
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。



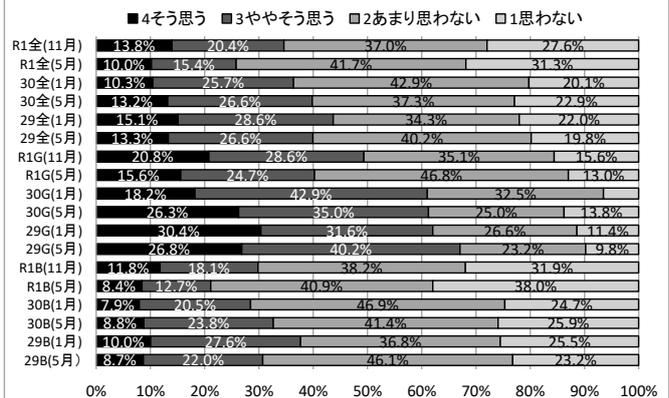
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。



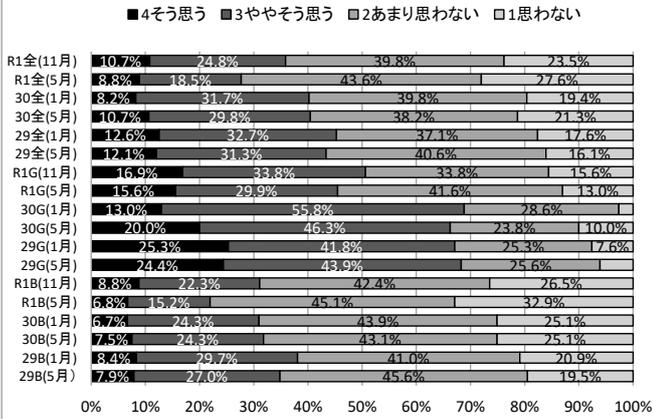
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。



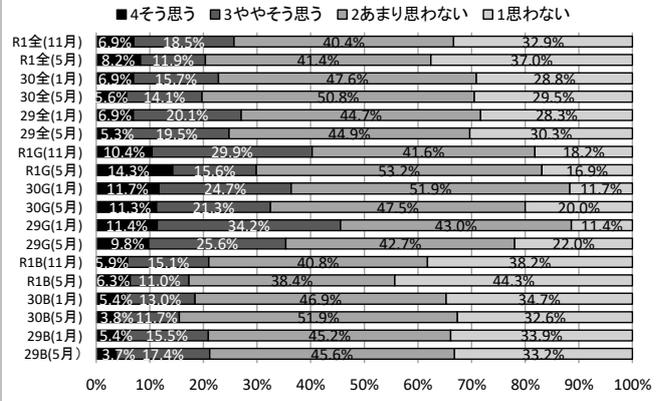
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。



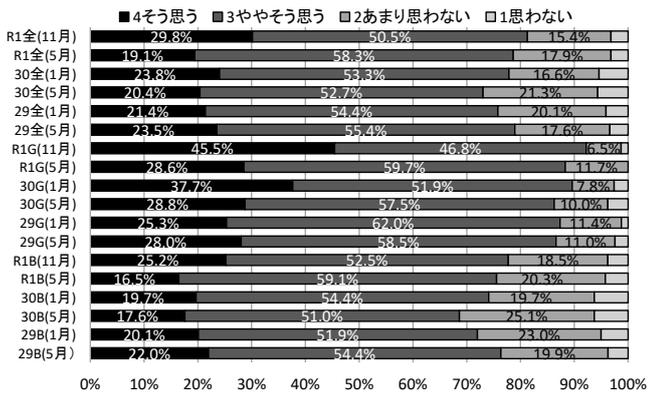
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。



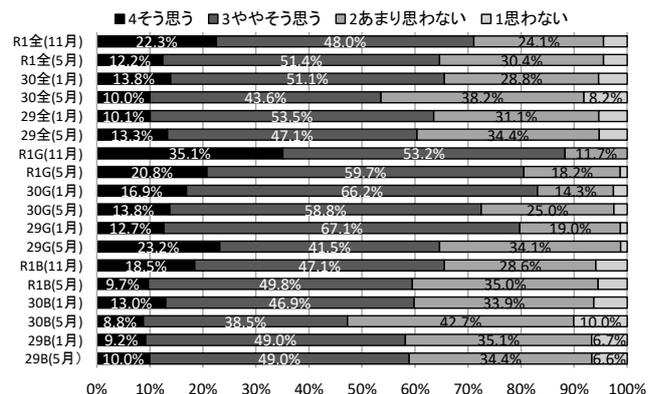
10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。



11 京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる。

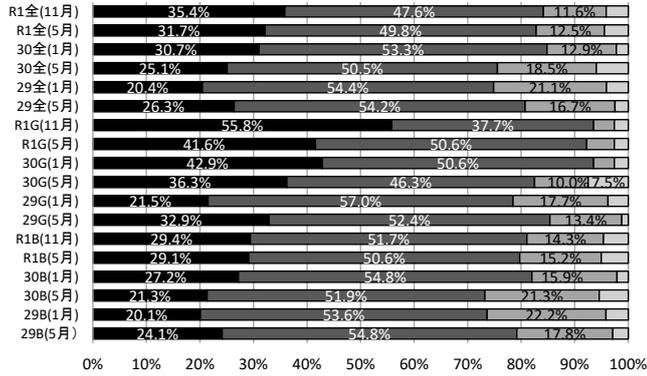


12 京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。



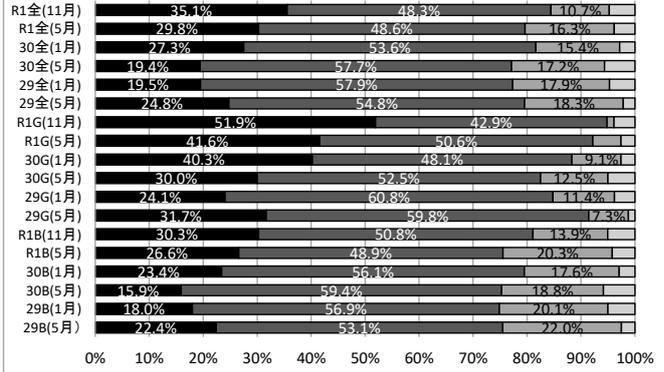
13 異なる価値観を持つ人とコミュニケーションをとることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



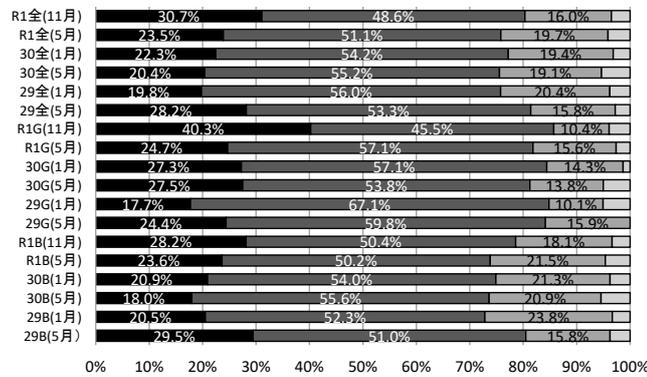
14 異なる価値観を持つ人と協働して課題に取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



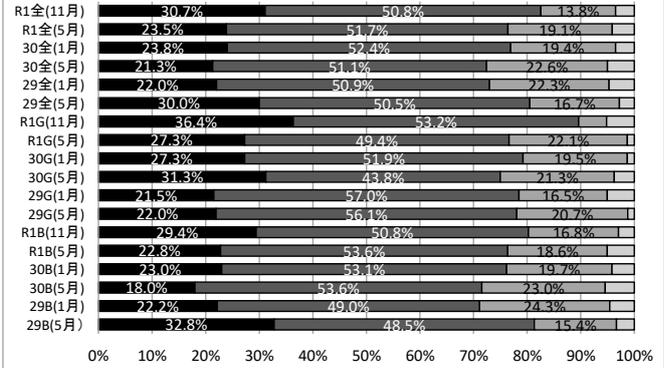
15 困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



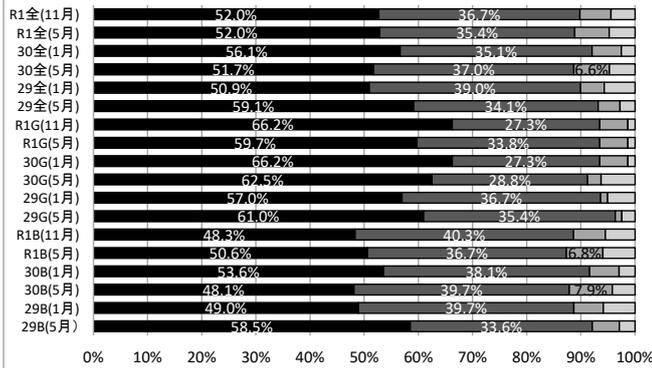
16 困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



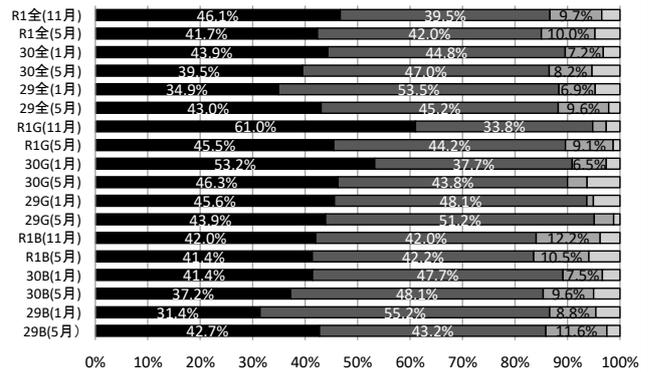
17 自分とは異なる価値観を持つ人が存在することを理解できる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



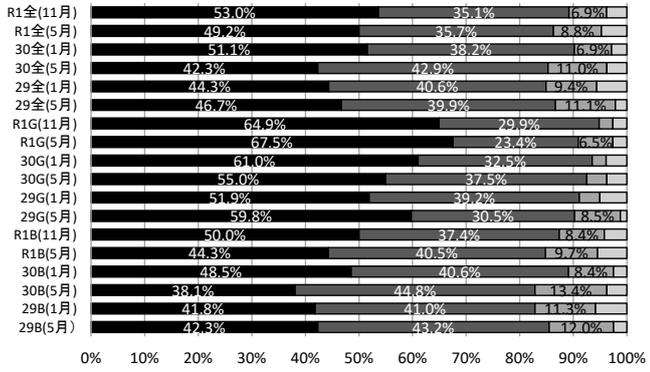
18 自分とは異なる価値観を受け入れることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



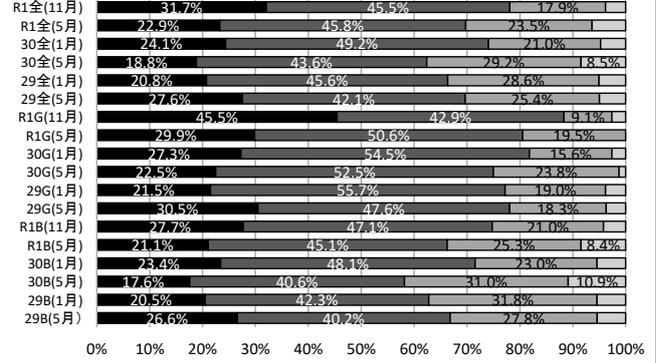
19 国際社会において、様々な分野に関する幅広い教養が必要だと思う。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



20 読書や様々な体験を通して、幅広い教養を身につけようとしている。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



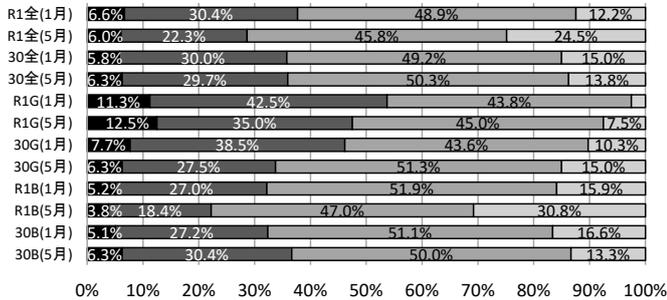
平成30年度入学生（現2年生）SGH事業に関するアンケート結果

■実施時期 平成30年度5月 平成30年度1月 令和元年度5月 令和元年度1月
 ■対象 1年次全員（320名） 2年次全員（315名）
 30年度5月 回答数（320名） 30年度1月 回答数（313名）
 令和元年度5月 回答数（314名） 令和元年度1月 回答数（313名）
 ■方式 質問紙法（マークシート方式）

全：全体
 G：グローバル科
 B：普通科

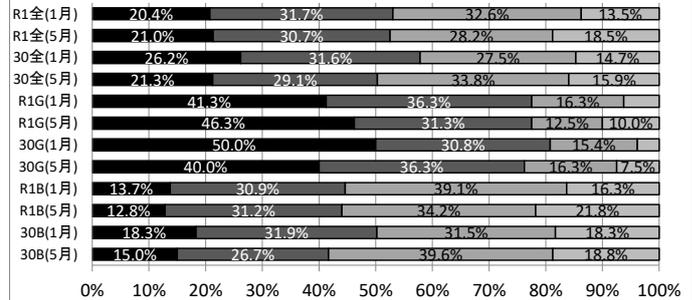
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



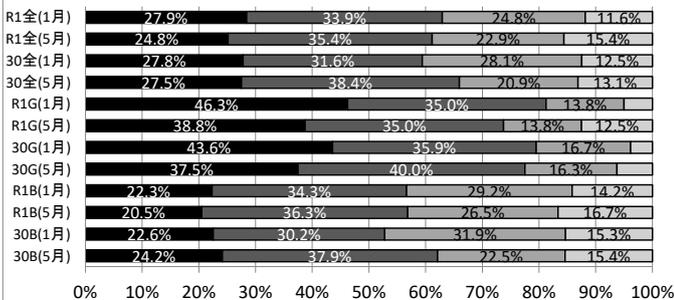
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



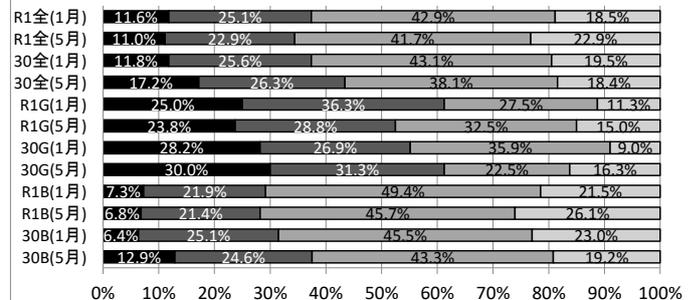
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



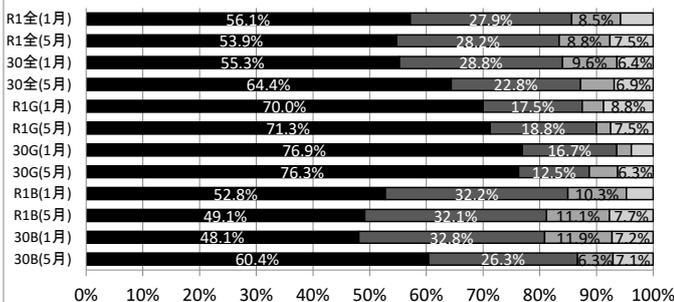
4 高校・大学卒業後に、海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



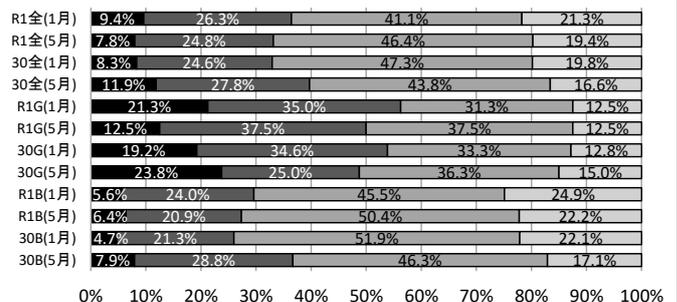
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



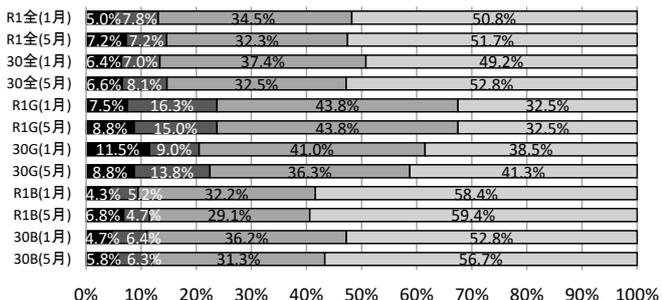
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



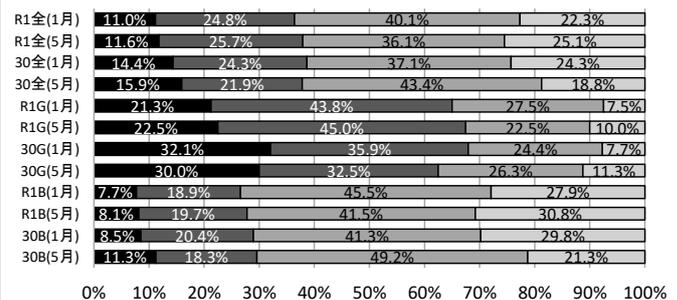
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



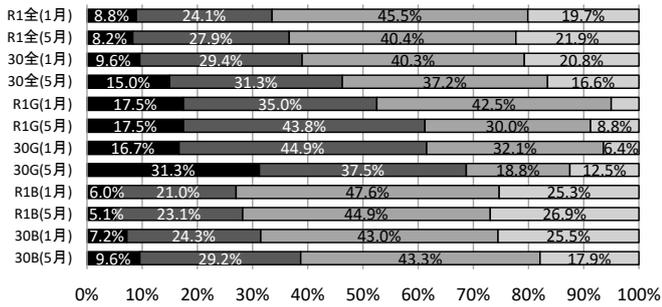
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない ■1思わない



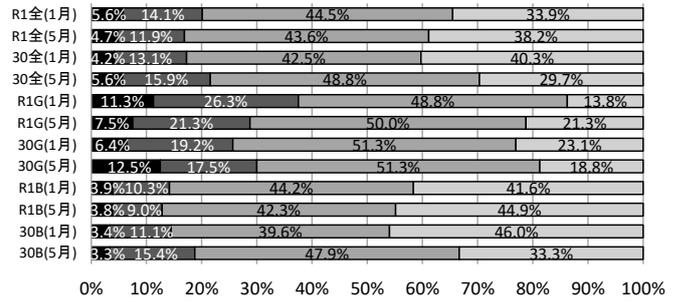
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



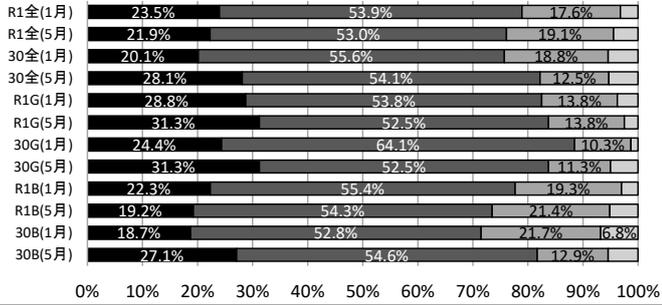
10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



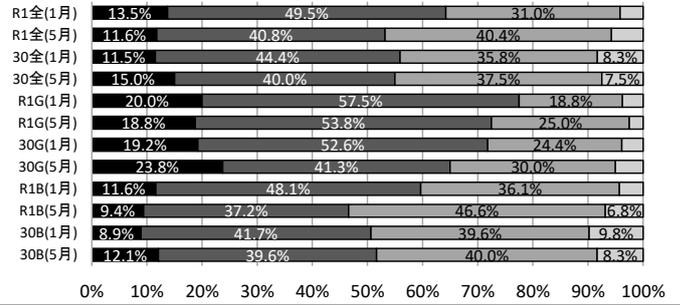
11 京都や世界に関するニュースについて興味・関心を持つことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



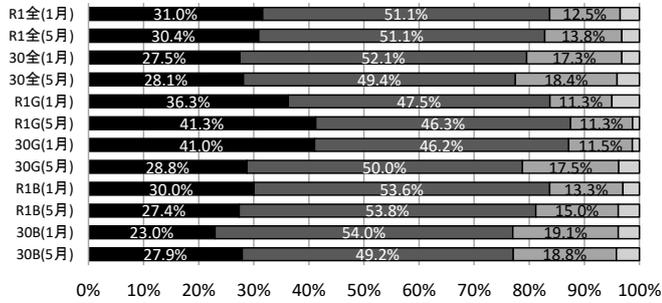
12 京都や世界の事柄について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



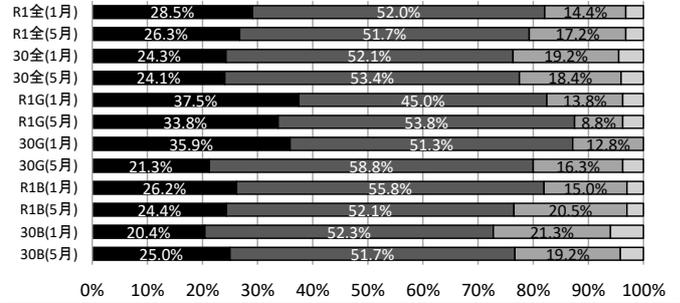
13 異なる価値観を持つ人とコミュニケーションをとることができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



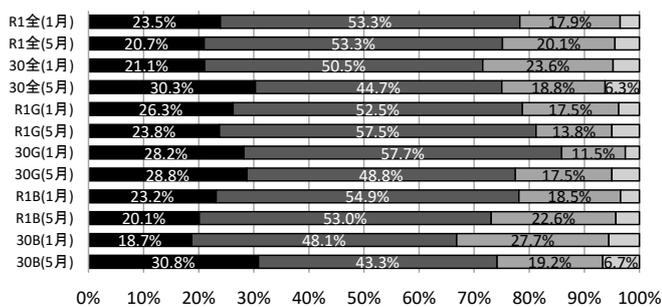
14 異なる価値観を持つ人と協働して課題に取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



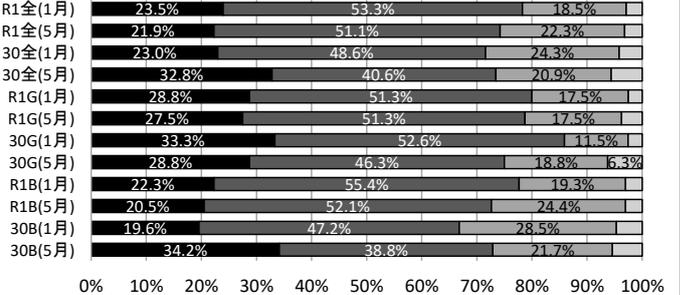
15 困難な課題に対して、積極的に挑戦することができる。

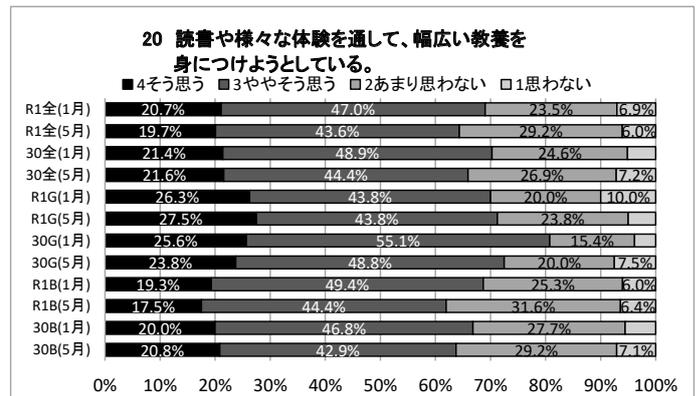
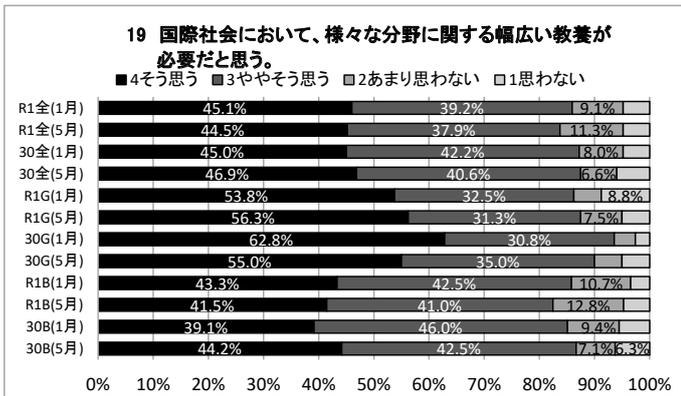
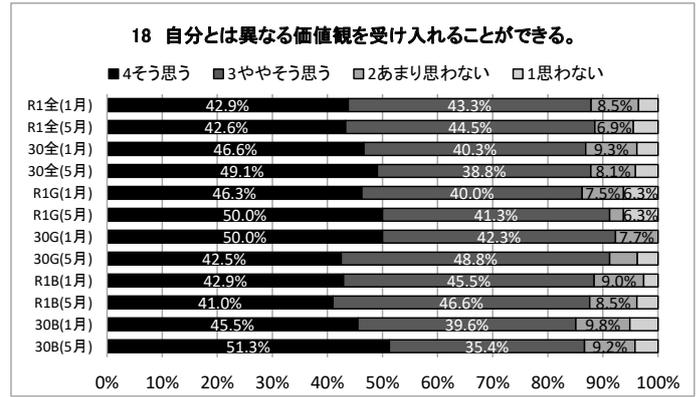
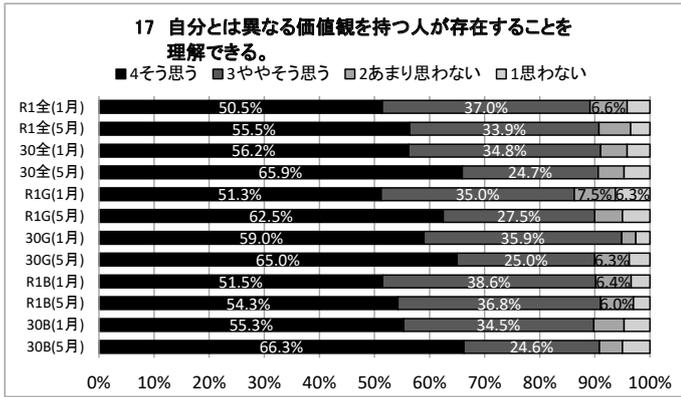
■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



16 困難な課題に対して、あきらめずに粘り強く取り組むことができる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない





令和元年度入学生（現1年生）SGH事業に関するアンケート結果

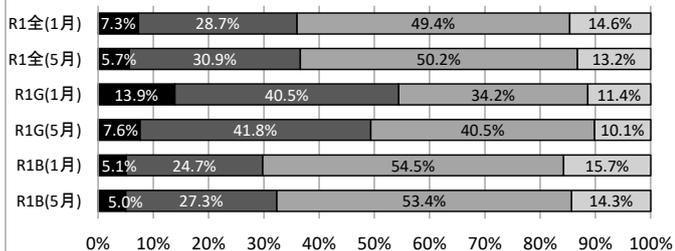
■実施時期 令和元年度5月 令和元年度1月
 ■対象 1年次全員（322名）
 令和元年度5月 回答数（317名）
 ■方式 質問紙法（マークシート方式）

令和元年度5月 回答数（315名）

全：全体
 G：グローバル科
 B：普通科

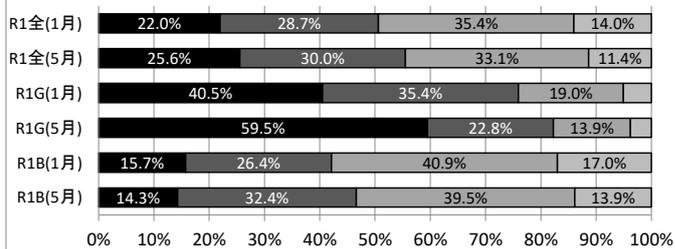
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組んでいる。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



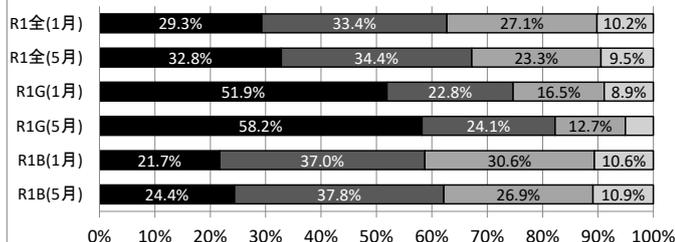
2 高校生として、自主的に留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



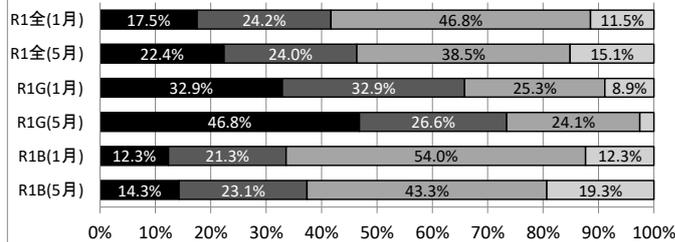
3 大学在学中に、留学又は海外研修に行きたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



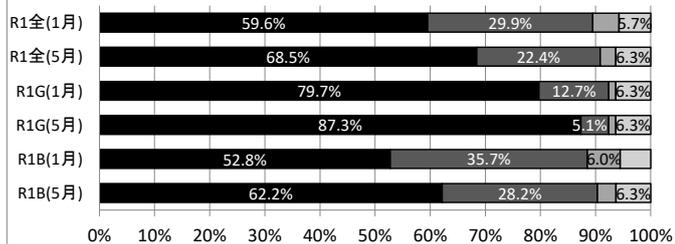
4 高校・大学卒業後に、海外で仕事をしたり、国際的に活躍したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



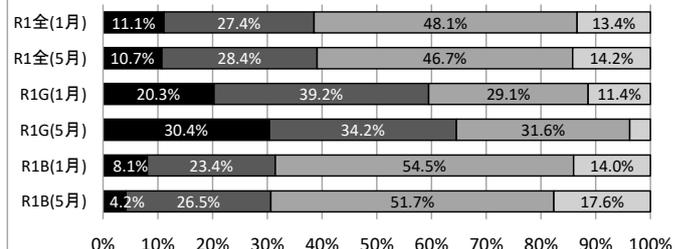
5 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



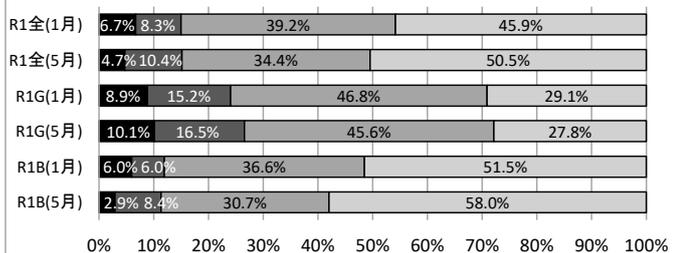
6 将来、国際化に重点を置く大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



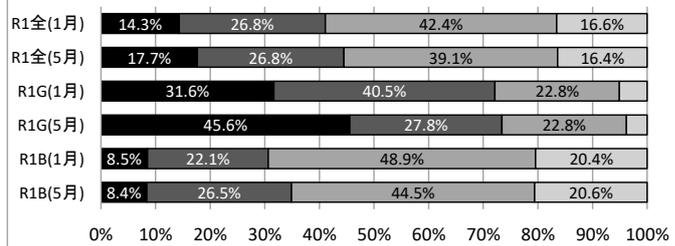
7 将来、できれば海外の大学へ進学したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



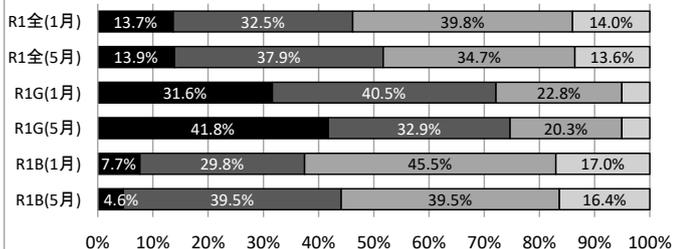
8 高校在学中に、課題研究に関する海外研修に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



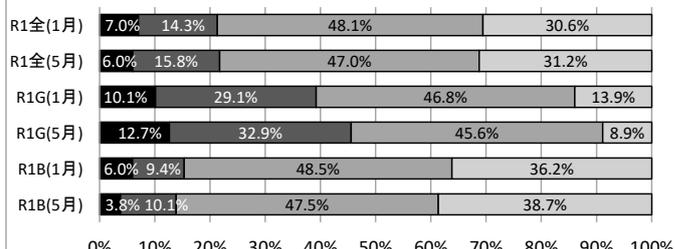
9 高校在学中に、課題研究に関する国内研修に参加したい。

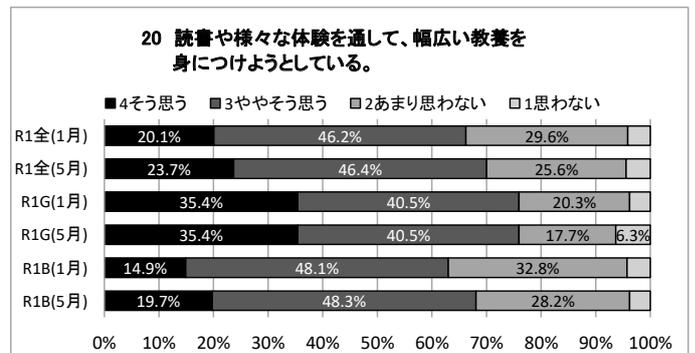
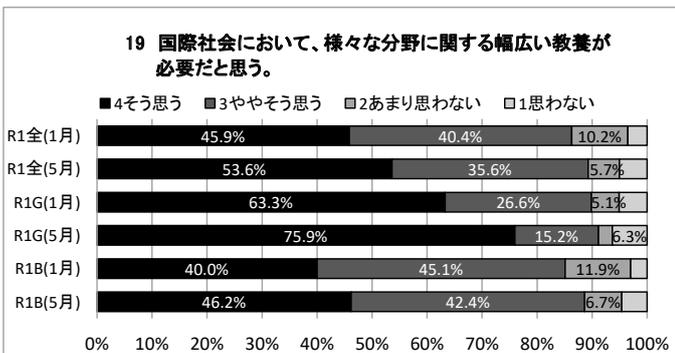
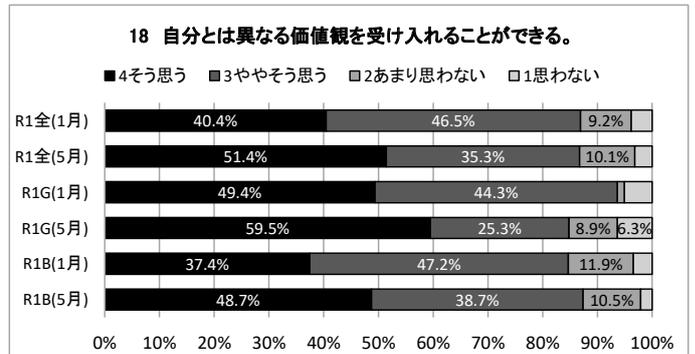
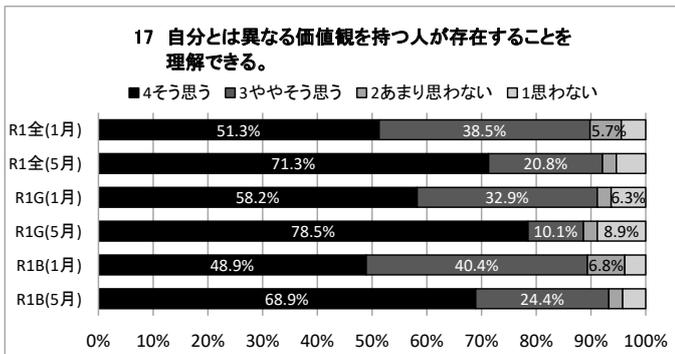
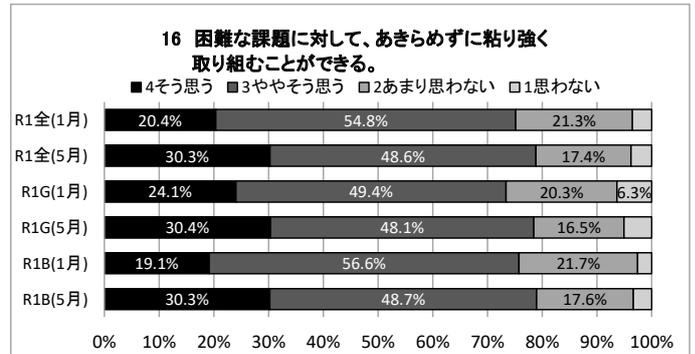
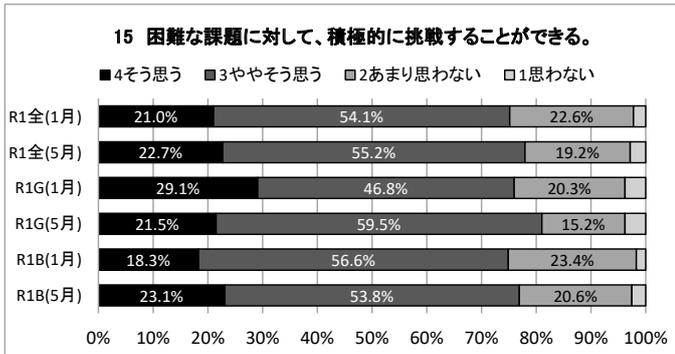
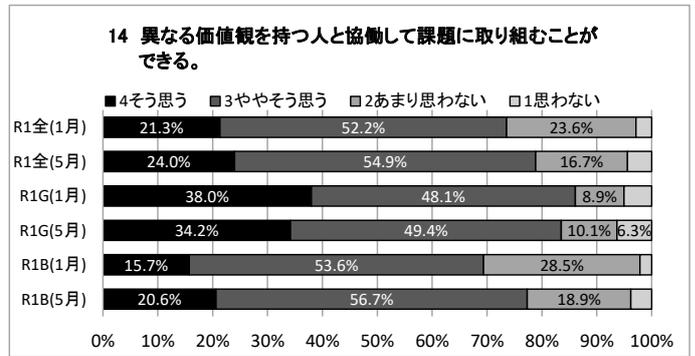
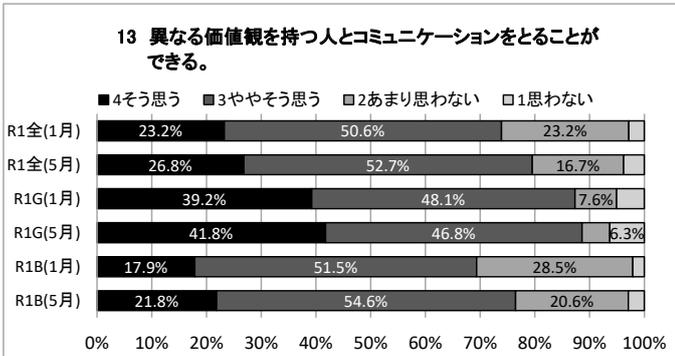
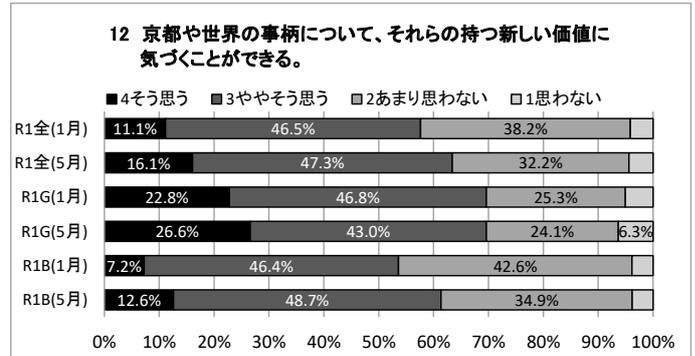
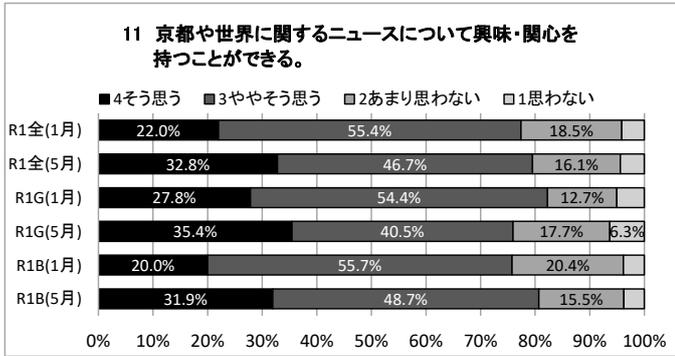
■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない



10 高校在学中に、グローバルな社会やビジネス課題に関する国内外の大会に参加したい。

■4そう思う ■3ややそう思う ■2あまり思わない □1思わない





令和元年度第1学年(8学級)教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準単位数	グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	合計	
							科目数	教科
外国語	国語総合	4	5	5	5	5	5	5
	国語表現	3						
	現代文A	2						
	現代文B	4						
地理	古典	2						
	古典B	4						
	世界史A	2						
	世界史B	4						
歴史	日本史A	2						
	日本史B	4						
	地理A	4						
	地理B	4						
公民	歴史探究							
	現代社会	2	2	2	2	2	2	2
	倫理	2						
	政治・経済	2						
数学	数学I	3	4	4	3	3	0.3・4	1~7
	数学II	4	1	1			0.1	
	数学III	5						
	数学A	2		2	2	2	0.2	
	数学B	2						
	数学探究I							
	数学探究II							
数学探究III								
理科	科学・人間関係							
	物理基礎	2						2~4
	物理	2						
	物理解	4						
	化学基礎	2	2	2	2	2	0.2	
	化学	4						
	生物基礎	4						
生物	4							
地学	地学基礎	2						
	地学	4						
	理科探究							
	理科探究							
保健体育	体育	7~8	3	3	3	3	3	4
	保健	2	1	1	1	1	1	
	音楽I	2						0.2
	音楽II	2						
芸術	美術I	2						
	美術II	2						
	芸術I	2						0.2
	芸術II	2						
書道	書道I	2						
	書道II	2						
	書道							
	書道							

高等学校名	鳥羽高等学校	課程	全日制	学科	グローバル科 普通科	学校番号	8
-------	--------	----	-----	----	---------------	------	---

教科	科目	標準単位数	グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	合計	
							科目数	教科
外国語	英語総合	3		4	4	4	0.4	6
	英語表現I	4						
	英語表現II	2		2	2	2	0.2	
	英語表現III	4						
家庭情報	家庭基礎	2	2	2			0.2	2
	家庭情報	2		2	2	2	0.2	2
	総合的な学習の時間	3~6	1	1	1	1	1	1
	総合的な学習の時間(グローバル科はイノベーション探究I)							

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準単位数	1年				合計	
			グローバル科	普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポートコース	科目数	教科
体育	スポーツI						0.3	3
	スポーツII						0.3	
	スポーツIII						0.3	
英語	総合英語		3				0.3	6
	英語理解							
	グローバル英語I		3				0.3	
	グローバル英語II							
グローバル	現代文G							9
	古典G							
	読書の風土・運動風土							
	総合数学		6				0.6	
	物理G							
	化学G							
	生物G							
	音楽G							
	美術G							
	書道G							
グローバル	家庭G							
	中国語I						0.1	
	韓国語I						0.1	
	フランス語I						0.1	
	海外文化探究		2				0.2	

共通教科・科目単位数合計	1.8	3.2	2.6	3.0
専門教科・科目単位数合計	1.5	0	3	0
教科全履修科目単位数合計	3.0	3.0	2.4	2.8
選択履修科目単位数合計	3	2	5	2
科目履修単位数合計	3.3	3.2	2.9	3.0
総合的な探究の時間	1	1	1	1
特別活動Iホールドーム活動	1	1	1	1
週当たりの授業時数	3.5	3.4	3.1	3.2

(別紙) 高等学校用 令和元年度第2学年(8学級) 教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準単位数	グローバル科		普通科 理数 人文 コース	普通科 スポート 総合専攻	普通科 文科 スポート コース	合計	
			G	文				科目	教科
国語	国語総合	4							4~6
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4	2		2	2	2	0・2・3	
歴史	古典	2							0・2・3
	古典B	4	2		2	3	3	0・2・3	
	世界史A	2							4~6
	世界史B	4	2		2	2	2	0・2・3	
地理	日本史A	2							
	日本史B	4	2		2	2	2	0・2・3	
	地理A	4							0・2
	地理B	4							
公民	歴史探究								
	現代社会	2							
	倫理	2							
	政治・経済	2							
数学	数学I	3							4~7
	数学II	4	3		3	3	4	3・4	
	数学III	5	2		2	2	2	0・2	
	数学A	2							
	数学B	2	2		2	2	2	0・2・3	
	数学探究I								
理科	数学探究II								
	数学探究III								
	科学人間関係	2							2~9
	物理基礎	2	0・2		0・2			0・2	
	物理	4						0・2	
	化学基礎	2							
体育	化学	4							
	生物基礎	2	0・2		2	2	2	0・3	
	生物	4							0・2
	地学基礎	2	0・2		2	2	2	0・2	
	地学	4							
	理科探究								
保健体育	体育	7~8	2		2	2	2	2・3	3~4
	保健	2	1		1	1	1	1	
	音楽I	2							
	音楽II	2							
芸術	美術I	2							
	美術II	2							
	書道I	2							
	書道II	2							

高等学校名	鳥羽高等学校	課程	全日制	学科	グローバル科 普通科	学校番号	8
-------	--------	----	-----	----	---------------	------	---

教科	科目	標準単位数	グローバル科		普通科 理数 人文 コース	普通科 スポート 総合専攻	普通科 文科 スポート コース	合計	
			G	文				科目	教科
外国語	英語I	3							5~7
	英語II	4							
	英語III	4							
	英語表現I	2							
家庭情報	英語表現II	4			2	2	2	0・2	
	家庭基礎	2							2
	家庭情報	2							
	総合的な学習の時間(グローバル科はイノベーション探究II)	3~6	1		1	1	1	1	1

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準単位数	グローバル科		普通科 理数 人文 コース	普通科 スポート 総合専攻	普通科 文科 スポート コース	合計	
			G	文				科目	教科
体育	スポートI							0・3	3
	スポートII							0・3	
	スポートIII							0・3	
英語	総合英語								
	英語理解		3	3				0・3	
	グローバルI								
	グローバルII		3	3				0・3	
グローバル	現代文G			3				0・3	
	古典G			3				0・3	
	読者の視点・批判的読解			2				0・2	
	総合数学							0・2	
	物理G							0・3	
	化学G							0・2	
	生物G							0・1	
	音楽G							0・1	
	美術G							0・1	
	書道G							0・1	
保健体育	家庭G							0・1	
	中国語II							0・1	
	韓国語II							0・1	
	フランス語II							0・1	
芸術	海外文化探究							(1)	(1)
			(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)

共通教科・科目単位数合計	18	17	32	32	26	27
専門教科・科目単位数合計	15	16	0	0	3	3
教科全履修科目単位数合計	25	31	26	32	26	27
選択履修科目単位数合計	8	2	6	0	3	3
科目履修単位数合計	33	33	32	32	29	30
総合的な学習の時間	1	1	1	1	1	1
特別活動Iボームルーム活動	1	1	1	1	1	1
週当たりの授業時数	3.5	3.5	3.4	3.4	3.1	3.2

令和元年度第3学年(8学級)教育課程

(各学科に共通する教科・科目等)

教科	科目	標準 単位数	グローバル科		普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	合計	
			G	理				科目	教科
国語	国語総合	4							4~8
	国語表現	3				△ 2		0・2	
	現代文A	2							0・2・3
	現代文B	4	2		2	3			0・2・3
歴史	古典A	2							0・2・3
	古典B	4	2		2	3			0・2・3
	世界史A	2							0・2
	世界史B	4	2		2	2			0・2
地理	日本史A	2							0・2
	日本史B	4	2		2	4			0・2・3・4
	地理A	2							0・3・5
	地理B	4	5		2	3			0・2
公民	歴史探究								
	現代社会	2							2~4
	倫理	2							0・2
	政治・経済	2	2		2	2			0・2
数学	数学I	3							2~6
	数学II	4							
	数学III	5	3		3				0・3
	数学A	2							0・2
	数学B	2							0・2
	数学探究I								0・2
理科	数学探究II								0・3
	数学探究III								0・3
	科学の探究								
	物理基礎	2							0・2
	物理基礎	2							0・2
	化学基礎	4							0・4
体育	化学基礎	2							0・3
	生物学基礎	4							0・4
	生物学基礎	2							0・4
	地学基礎	4							0・4
	理科探究	4							0・3
	理科探究	4							0・3
保健	体育	7~8	2		2	3			2・3
	健康	2							2~5
	保健	2							2~3
	保健	2							0・2
芸術	音楽I	2							0・2
	音楽II	2							
	美術I	2							
	美術II	2							
書道	書道I	2							
	書道II	2							
	書道	2							
	書道	2							

高等学校名	鳥羽高等学校	課程	全日制	学科	グローバル科 普通科	学校番号	8
-------	--------	----	-----	----	---------------	------	---

教科	科目	標準 単位数	グローバル科		普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	合計	
			G	理				科目	教科
外国語	英語表現I	3							6~8
	英語表現II	4							
	英語表現III	4							0・4
	英語表現IV	2							0・2
家庭	英語表現I	4							0・2
	英語表現II	4							0・2
	英語表現III	2							0・2
	英語表現IV	2							0・2
情報	家庭基礎	2							0~2
	家庭基礎	2							0・2
	社会と情報	2							0・2
	社会と情報	2							0・2
総合的な学習の時間 (グローバル科は イノベーション探究II)	総合的な学習の時間	3~6	1		1	1			1
	総合的な学習の時間								

(主として専門学科において開設される教科・科目)

教科	科目	標準 単位数	グローバル科		普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	合計	
			G	理				科目	教科
体育	スポーツI								0・3
	スポーツII								0・3
	スポーツIII								0・3
英語	総合英語								6
	英語理解								
	英語表現I		4						0・4
	英語表現II								
	英語表現III								
	英語表現IV								
グローバル	現代文I		2						0・2
	現代文II								0・2
	現代文III								0・2
	現代文G								0・3
	古典G								0・3
	歴史探究								0・2
	数学探究I								0・3
	数学探究II								0・3
	数学探究III								0・3
	物理G		3						0・4
グローバル	物理G								0・4
	化学G		3						0・3
	生物G								0・4
	理科探究								0・3

共通教科・科目	標準 単位数	グローバル科		普通科 理数人文 コース	普通科 スポーツ 総合専攻	普通科 文科 スポーツコース	合計	
		G	理				科目	教科
共通教科・科目	14	10	30	30	26	30		30
専門教科・科目	16	20	0	0	3	0		0
教員	26	30	26	30	22	24		24
科目	4	0	4	0	7	6		6
科目履修単位数	30	30	30	30	29	30		30
総合的な学習の時間	1	1	1	1	1	1		1
特別活動	1	1	1	1	1	1		1
週当たりの授業時数	32	32	32	32	31	32		32

平成 27 年度指定

スーパーグローバルハイスクール研究報告書<第 5 年次>

令和 2 年 3 月発行

京都府立鳥羽高等学校

〒601-8449

京都市南区西九条大国町 1

TEL 075-672-6788

FAX 075-691-7448

<http://www.kyoto-be.ne.jp/toba-hs/>

E-mail toba-hs@kyoto-be.ne.jp